

枚方市

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群

京阪本線(寝屋川市・枚方市)連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年6月

公益財団法人 大阪府文化財センター

枚方市

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群

京阪本線(寝屋川市・枚方市)連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1. 2区 第5-1層下面 北半部 調査区全景 (南西から)



2. 2区 第5-1層下面 掘立柱建物1 全景 (南西から)

序 文

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群は、大阪府の北東部、枚方市に所在する遺跡です。淀川左岸の沖積平野から枚方丘陵の北西麓にかけて、東西約 600 m、南北約 1,000 m の範囲に広がり、これまでの調査により弥生時代後期から室町時代にかけての大規模な集落や古墳の存在などが明らかにされています。

今回の発掘調査は、東部大阪都市計画都市高速鉄道京阪電気鉄道京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴うものです。これまでに行われた伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の発掘調査では、ひらかたパークが位置する京阪本線より東側の比較的標高の高い地点を中心に遺構・遺物が検出されていましたが、今回の発掘調査によって、京阪本線より西側の低地部においても、古墳時代から中世にかけての遺構・遺物を確認することができました。

とくに古墳時代の鉄滓や轆の羽口など鍛冶に関わる遺物や、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物、中世の耕作に伴う畦畔や溝といった遺構など、各時代における人々の様々な営みを確認することができたことは、貴重な成果といえるでしょう。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたって大阪府枚方土木事務所、大阪府教育庁、枚方市観光にぎわい部文化財課、枚方市都市整備部連続立体交差推進室をはじめとする関係各位より多大なご協力とご配慮を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和 4 年 6 月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 坂 井 秀 弥

例 言

1. 本書は大阪府枚方市伊加賀寿町・伊加賀栄町に所在する伊加賀遺跡・伊加賀古墳群（調査名：伊加賀遺跡・伊加賀古墳群他 20 - 1）の発掘調査報告書である。
2. 現地調査および整理作業は、大阪府枚方土木事務所から委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査・整理作業に関する受託事業名・受託期間および調査・整理体制は以下の通りである。
 - 【 現地調査 】
受託事業名：京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2）
受託契約期間：令和2年11月2日～令和3年9月24日
現地調査期間：令和2年11月2日～令和3年8月31日
 - 【 整理作業 】
受託事業名：京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理業務委託
受託契約期間：令和3年9月1日～令和4年6月30日
整理作業期間：令和3年9月1日～令和4年3月31日
印刷製本期間：令和4年4月1日～令和4年6月30日
 - 【 調査・整理体制 】
令和2年度：事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、
調査課長補佐 佐伯博光、副主査 河本純一
令和3年度：調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 佐伯博光、副主査 河本純一
令和4年度：調査課長 佐伯博光、調査課長補佐 後藤信義
4. 遺構・遺物写真撮影は河本が行った。
5. 本書の執筆・編集は河本が行った。
6. 本書に関わる写真・実測図などの記録類、出土遺物は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 標高は東京湾平均海面（T.P.）値を使用している。単位はmである。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2011）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はmである。
3. 全体図および遺構図に付した方位は、平面直角座標系に基づく座標北を示す。
4. 現地調査および整理作業については、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010の内容に準拠して行った。
5. 土色表記は、小山正忠・竹原秀雄編（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版 標準土色帖』2009年度版に準拠し、記号・土色・土質の順に記載した。
6. 遺構番号は遺構の種類や調査区に関わらず1からの通し番号を付与し、遺構名は遺構番号－遺構種類として表記した（例：1土坑、2溝）。ただし、掘立柱建物など複数の遺構が集合したものに関しては、単独の遺構とは別の通し番号を付与し、遺構種類－遺構番号として表記した（例：掘立柱建物1）。
7. 全体図および遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図面に付したスケールバーを参照されたい。写真図版に関しては、縮尺は任意である。
8. 遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・写真図版いずれにも同一の番号を付与している。
9. 遺物実測図の断面について、須恵器を黒塗、瓦器・瓦質土器を灰色、瓦・石製品・鉄製品・鉄滓を斜線、その他の遺物を白抜きとした。
10. 引用文献・参考文献は各節の末尾に記した。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6

第3章 調査の方法

第1節 現地調査	15
第2節 整理作業	15

第4章 調査成果

第1節 基本層序	18
第2節 2区の調査成果	27
第3節 3区の調査成果	56
第4節 4区の調査成果	67
第5節 5区の調査成果	68
第6節 6区の調査成果	74

第5章 総括

第1節 遺構の変遷	80
第2節 伊加賀遺跡・伊加賀古墳群 各時期の様相	84

写真図版

抄 録

奥 付

挿 図 目 次

図 1	遺跡位置図	1	図29	2区 第5-2層下面 遺構断面図	48
図 2	調査区位置図	3	図30	2区 89・95溝、91土坑 出土遺物	48
図 3	地形分類図	4	図31	2区 117溝 出土遺物	49
図 4	遺跡分布図	7	図32	2区 第5-1層 出土遺物	50
図 5	既往の調査地点	11	図33	2区 第6-1層下面・第6-2層下面 遺構平面図	51
図 6	地区割図	16	図34	2区 120土坑 遺物出土状況図	52
図 7	基本層序	19	図35	2区 第6-1層下面 遺構断面図	53
図 8	2区 東壁 地層断面図	21・22	図36	2区 第6-2層下面 遺構断面図	54
図 9	3区 東壁 地層断面図	23・24	図37	2区 120土坑、124落ち込み 出土遺物	55
図10	4区 東壁 地層断面模式図	25	図38	2区 第6-1層・第6-2層 出土遺物	55
図11	5区 西壁・北壁 地層断面図	25	図39	3区 第3-1層下面・第3-3-1層下面 遺構平面図	57
図12	6区 東壁 地層断面図	26	図40	3区 第3-1層下面・第3-3-1層下面 遺構断面図	58
図13	2区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構平面図	28	図41	3区 第3-3-2層下面 遺構平面図	59
図14	2区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構断面図	29	図42	3区 第3-2層～第3-3-2層 出土遺物	59
図15	2区 第3-3層下面 遺構平面図	31	図43	3区 第4-2層下面 遺構平面図	60
図16	2区 第3-3層下面 遺構断面図	33	図44	3区 第4-2層下面 遺構断面図	61
図17	2区 第3-4層下面 遺構平面図	35	図45	3区 第4-2層 出土遺物	61
図18	2区 第3-4層下面 遺構断面図	36	図46	3区 第5-1層下面 遺構平面図	62
図19	2区 23・35溝、31落ち込み 出土遺物	36	図47	3区 第5-1層下面 遺構断面図	63
図20	2区 第2層～第3-4層 出土遺物	37	図48	3区 第5-2層下面 遺構平面図	64
図21	2区 第4-1層下面・第4-2層下面 遺構平面図	39	図49	3区 第5-2層下面 遺構断面図	64
図22	2区 第4-1層下面・第4-2層下面 遺構断面図	40	図50	3区 第5-1層～第5-3層 出土遺物	65
図23	2区 84炭溜まり 出土遺物	40	図51	3区 第6-2層下面 遺構平面図	66
図24	2区 第4-1層・第4-2層 出土遺物	41	図52	3区 第6-1層・第6-2層・廃土 出土遺物	66
図25	2区 第5-1層下面・第5-2層下面 遺構平面図	43	図53	4区 調査区平面図	67
図26	2区 掘立柱建物1 平・断面図	44	図54	5区 第2-1層下面 遺構平面図	69
図27	2区 117溝 埴輪出土状況図	45	図55	5区 第2-1層下面 遺構断面図	69
図28	2区 第5-1層下面 遺構断面図	47	図56	5区 第3-2層下面 遺構平面図	70

図57	5区 第3-2層下面 遺構断面図	……	70	図67	6区 第3-3-1層下面・第3-3-2層下面 遺構断面図	……	77
図58	5区 161・163溝、162土坑、 164落ち込み 出土遺物	……	71	図68	6区 第3-1層～第3-4層等 出土遺物	……	78
図59	5区 第3-2層・第3-3層 出土遺物	…	71	図69	6区 第5層下面・第6-1層下面 遺構平面図	……	79
図60	5区 第4-2層下面 遺構平面図	……	72	図70	6区 第6-1層 出土遺物	……	79
図61	5区 第4-2層下面 遺構断面図	……	72	図71	古墳～奈良時代の遺構の変遷	……	81
図62	5区 第4-2層・第5層 出土遺物	…	72	図72	平安時代～中世の遺構の変遷	……	83
図63	5区 第6-2層下面 遺構平面図	……	73	図73	古墳時代の様相	……	85
図64	6区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構平面図	……	75	図74	飛鳥時代～中世の様相	……	87
図65	6区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構断面図	……	75				
図66	6区 第3-3-1層下面・第3-3-2層下面 遺構平面図	……	77				

表 目 次

表1	淀川の治水と洪水に関わる年表	……	5	表4	伊加賀遺跡・伊加賀古墳群・姫塚古墳 既往の調査一覧(3)	……	14
表2	伊加賀遺跡・伊加賀古墳群・姫塚古墳 既往の調査一覧(1)	……	12	表5	掲載遺物一覧表(1)	……	89
表3	伊加賀遺跡・伊加賀古墳群・姫塚古墳 既往の調査一覧(2)	……	13	表6	掲載遺物一覧表(2)	……	90

写 真 目 次

写真1	現地調査および整理作業風景	……	17	写真2	調査地周辺の地割	……	88
-----	---------------	----	----	-----	----------	----	----

写真図版目次

巻頭図版

1. 2区 第5-1層下面 北半部 調査区全景
(南西から)
2. 2区 第5-1層下面 掘立柱建物1 全景
(南西から)

図版 扉

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群
発掘調査 作業風景 (北西から)

図版1 2～6区 調査区 調査前遠景

1. 2区 調査区 調査前遠景 (南西から)
2. 3・4区 調査区 調査前遠景 (北東から)
3. 5・6区 調査区 調査前遠景 (南西から)

図版2 2区 調査区地層断面

1. 東壁 北端部 地層断面 (北西から)
2. 東壁 北半部 地層断面 (北西から)
3. 東壁 北半部 地層断面 (西から)

図版3 2区 調査区地層断面

1. 東壁 南半部 地層断面 (南西から)
2. 東壁 南端部 地層断面 (北西から)
3. 東壁 南半部 地層断面 (西から)

図版4 3区 調査区地層断面

1. 東壁 北側 地層断面 (北西から)
2. 東壁 中央部 地層断面 (北西から)
3. 東壁 南側 地層断面 (北西から)

図版5 5区 調査区地層断面

1. 北壁 地層断面 第1層～第3層 (南から)
2. 北壁 地層断面 第3層～第6層 (南から)
3. 西壁 地層断面 (東から)

図版6 2区 第3-3層下面遺構

1. 第3-3層下面 北半部 全景 (南から)
2. 第3-3層下面 南半部 全景 (北から)
3. 10畦畔 断面 (西から)

図版7 2区 第3-3層下面・第3-4層下面遺構

1. 22溝 断面 (西から)
2. 第3-4層下面 北半部 全景 (南から)
3. 第3-4層下面 南半部 全景 (南から)

図版8 2区 第4-1層下面遺構

1. 第4-1層下面 北半部 全景 (南西から)
2. 66畦畔 検出状況 (西から)
3. 66畦畔 断面 (北から)

図版9 2区 第5-1層下面遺構

1. 第5-1層下面 北半部 全景 (南西から)
2. 掘立柱建物1 全景 (西から)
3. 117溝 全景 (南西から)

図版10 2区 第5-1層下面遺構

1. 掘立柱建物1 101柱穴 断面 (南西から)
2. 掘立柱建物1 103柱穴 断面 (北西から)
3. 掘立柱建物1 104柱穴 断面 (北西から)
4. 掘立柱建物1 106柱穴 断面 (北西から)
5. 掘立柱建物1 108柱穴 断面 (南西から)
6. 83炭溜まり 断面 (南から)
7. 89溝 (左)、91土坑 (右) 断面 (南西から)
8. 90溝 断面 (北西から)

図版11 2区 第5-1層下面遺構

1. 117溝 断面 (北西から)
2. 117溝 埴輪 出土状況 (西から)
3. 107柱穴 断面 (北西から)
4. 112柱穴 断面 (西から)

5. 113柱穴 断面（北西から）
6. 115柱穴 断面（北西から）
7. 111ピット 断面（北西から）
8. 114ピット 断面（東から）

図版12 2区 第5-2層下面～第6-2層下面遺構

1. 122落ち込み 断面（南から）
2. 98溝 断面（北西から）
3. 98溝、120土坑、151ピット 断面（北西から）
4. 120土坑、121・133ピット、134落ち込み
断面（西から）
5. 120土坑 土器出土状況（南から）
6. 131溝 断面（北西から）
7. 127柱穴 断面（南西から）
8. 128柱穴 断面（南から）

図版13 2区 第6-1層下面・第6-2層下面遺構

1. 120土坑 全景（南西から）
2. 第6-1層下面 北半部 全景（南西から）
3. 第6-2層下面 北半部 全景（南西から）

図版14 3区 第3-3-2層下面・第5-1層下面遺構

1. 第3-3-2層下面 北側 全景（南西から）
2. 第3-3-2層下面 中央部 全景（南西から）
3. 第5-1層下面 南側 全景（南西から）

図版15 3区 第3-1層下面～第5-1層下面遺構

1. 172溝 断面（東から）
2. 174段差 断面（東から）
3. 167耕作溝群 検出状況（南西から）
4. 177溝 断面（西から）
5. 178ピット 断面（南から）
6. 179高まり 断面（南東から）
7. 180溝 断面（南東から）
8. 169ピット 断面（南西から）

図版16 3区 第5-1層下面～第6-2層下面遺構
（1～6）・4区 調査状況（7・8）

1. 第6-2層下面 北側 全景（北東から）
2. 第6-2層下面 中央部 全景（南西から）
3. 158ピット 断面（北西から）
4. 170変形構造 検出状況（北東から）
5. 4区 作業風景（南西から）
6. 4区 最終掘削状況（南西から）

図版17 5区 第2-1層下面～第6-2層下面遺構

1. 第2-1層下面 全景（東から）
2. 第4-2層下面 全景（北東から）
3. 第6-2層下面 全景（東から）

図版18 5区 第2-1層下面～第6-2層下面遺構

1. 161溝 検出状況（北東から）
2. 161溝 断面（東から）
3. 162土坑 断面（南から）
4. 163溝 断面（東から）
5. 164落ち込み 断面（南東から）
6. 第3-2層下面 全景（北東から）
7. 165段差 断面（北東から）
8. 171変形構造 検出状況（東から）

図版19 6区 第3-1層下面～第5層下面遺構

1. 第3-1層下面 全景（南西から）
2. 第3-3-1層下面 全景（南西から）
3. 第5層下面 全景（南西から）

図版20 6区 第3-1層下面～第6-2層下面遺構

1. 187足跡群 検出状況（西から）
2. 188足跡群 検出状況（南東から）
3. 188足跡群 細部拡大（南から）
4. 第3-2層下面 全景（南西から）
5. 189段差 断面（西から）

6. 192落ち込み 断面 (南西から)

7. 第4-1層下面 全景 (南東から)

8. 第6-1層下面 全景 (南西から)

図版21 2区 出土遺物 (1)

図版22 2区 出土遺物 (2)

図版23 2区 出土遺物 (3)

図版24 2区 出土遺物 (4) ・ 3区 出土遺物

図版25 5区 出土遺物

図版26 6区 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

大阪府・寝屋川市・枚方市ならびに京阪電気鉄道株式会社は、京阪本線の香里園駅付近から枚方公園駅付近の約5.5kmの範囲にかけて「東部大阪都市計画都市高速鉄道京阪電気鉄道京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業」（以下、京阪連立事業）を進めている。今回の調査はこの事業に伴う、伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の発掘調査である。伊加賀遺跡・伊加賀古墳群は大阪府の北東部に位置する枚方市の南西部に所在し、東西約0.6km、南北約1.0kmの範囲を擁する弥生時代から中世にかけての遺跡である（図1）。

京阪連立事業では、鉄道の高架化と21か所の踏切除去が計画されている。交通渋滞や事故を解消することにより都市内交通の円滑化を図るとともに、分断された市街地の一体化により都市の活性化を図る事業である。当事業は、平成25年12月13日に国土交通省近畿地方整備局より事業認可を受けた。

事業計画地には、枚方宿遺跡・伊加賀遺跡・伊加賀古墳群・茨田郡条里遺跡など周知の埋蔵文化財包蔵地が存在している。そのため、大阪府教育委員会・大阪府・京阪電気鉄道株式会社および公益財団法人大阪府文化財センター（以下、当センター）は、令和元年5月17日付けで協定書を締結し、同年11月1日から同年12月9日にかけて、事業の実施に先立ち、埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施した。

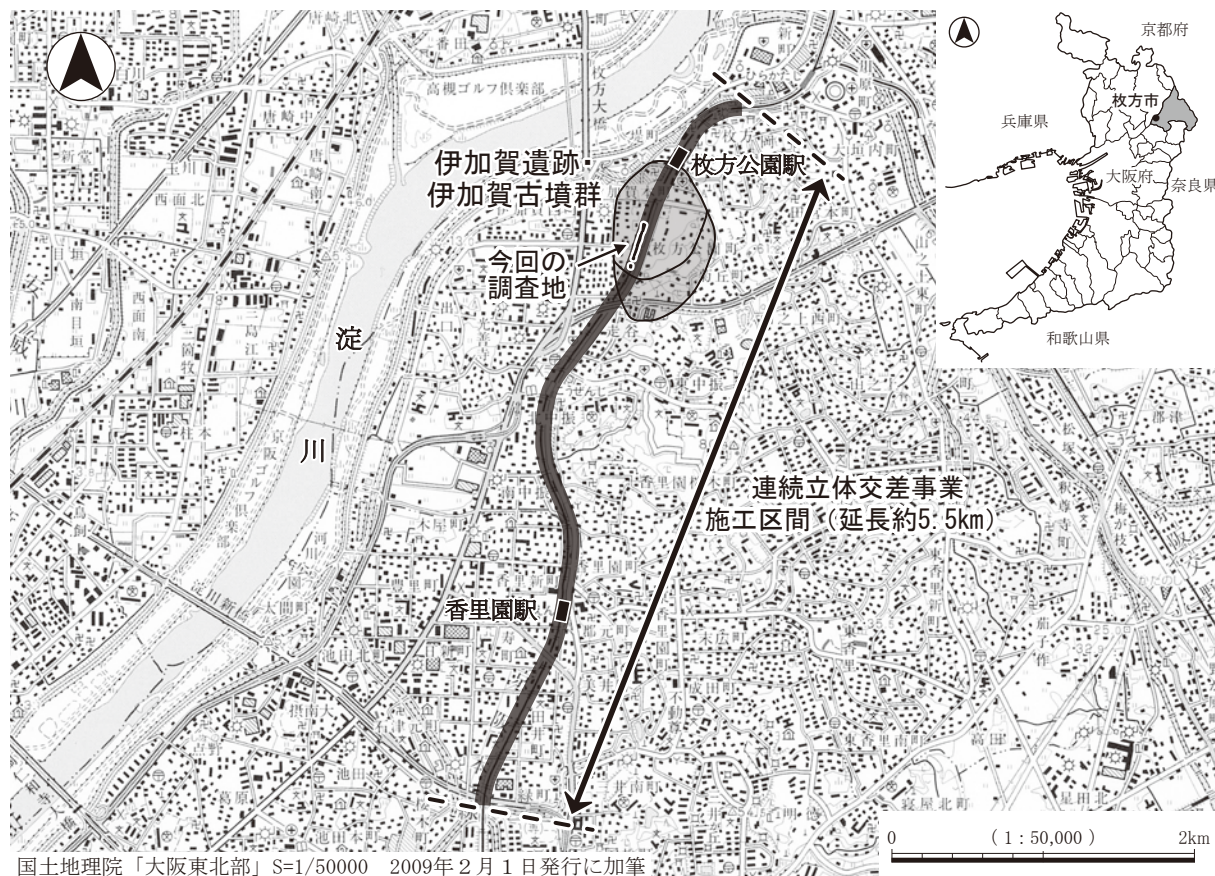


図1 遺跡位置図

この試掘・確認調査は、大阪府枚方土木事務所より委託を受けた当センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもとに実施した。埋蔵文化財の有無、および遺跡が確認された場合のその広がりや深さなど、当該文化財の保存を図るために必要な情報を取得することを目的として、対象事業地内の19地点22か所で調査を行った。

調査の結果、伊加賀遺跡・伊加賀古墳群内に設けた調査区では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物包含層を検出した。また、これまで遺跡の範囲外とされていた地点においても、遺構や遺物包含層を検出し、枚方市北中振3に中振北遺跡、寝屋川市香里本通町1・2・5に梨木元遺跡が新規発見の遺跡として追加された。

今回の伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の発掘調査は、京阪連立事業に係る既設の水路付替に伴うものであり、現地調査を令和2年11月2日から令和3年8月31日の間で実施した。調査名は「伊加賀遺跡・伊加賀古墳群他20-1」である。

第2節 調査の経過

調査地は枚方市伊加賀寿町2、伊加賀栄町2・3に所在し、事業地内の計6か所に調査区を設定した(図2)。1区については当初調査予定であったが、調査原因である水路付替工事の詳細が判明した結果、当範囲には工事が及ばないことが分かり、今回の調査からは除外された。

各調査区の面積は、2区661㎡、3区208㎡、4区5㎡、5区45㎡、6区29㎡であり、最終的な総調査面積は948㎡である。なお、掘削残土処置の都合上、2区については調査区を南北2分割、3区については調査区を南側-中央部-北側と3分割して調査を行った。

現地調査は令和2年11月2日、2区南半部より開始した。令和元年度に行った確認調査の結果を元に、当初は現地表面より1.8~2.2m下の中世遺構面までを調査対象としていたが、2区南半部の調査終了後に下層確認を行ったところ、この中世遺構面よりさらに下の地層で古墳時代の遺物を確認した。これを受け、大阪府教育庁文化財保護課および大阪府枚方土木事務所と協議を行った結果、2区南半部については、狭隘な部分があることや湧水で調査区壁面崩落の恐れがあったため、中世遺構面にて調査を終了することとなった。一方、以後着手する2区北半部および3~6区については、安全を確保できる範囲で基盤層まで調査することとなった。伊加賀遺跡・伊加賀古墳群における現地調査は令和3年8月31日に終了した。

同年9月1日からは当センター中部調査事務所(東大阪市長田東1丁目9-16所在)に移り、整理作業を実施した。現地で作成した遺構図面の整理・トレース、特徴的な遺物の抽出・接合・復元ならびに実測・トレースを行い、それぞれの版下を作成した。このほか、遺物の写真撮影と遺構・遺物写真図版版下の作成、各台帳類の作成・整理と遺物の収納を実施し、令和4年6月30日に本書の刊行をもって一連の業務を終了した。

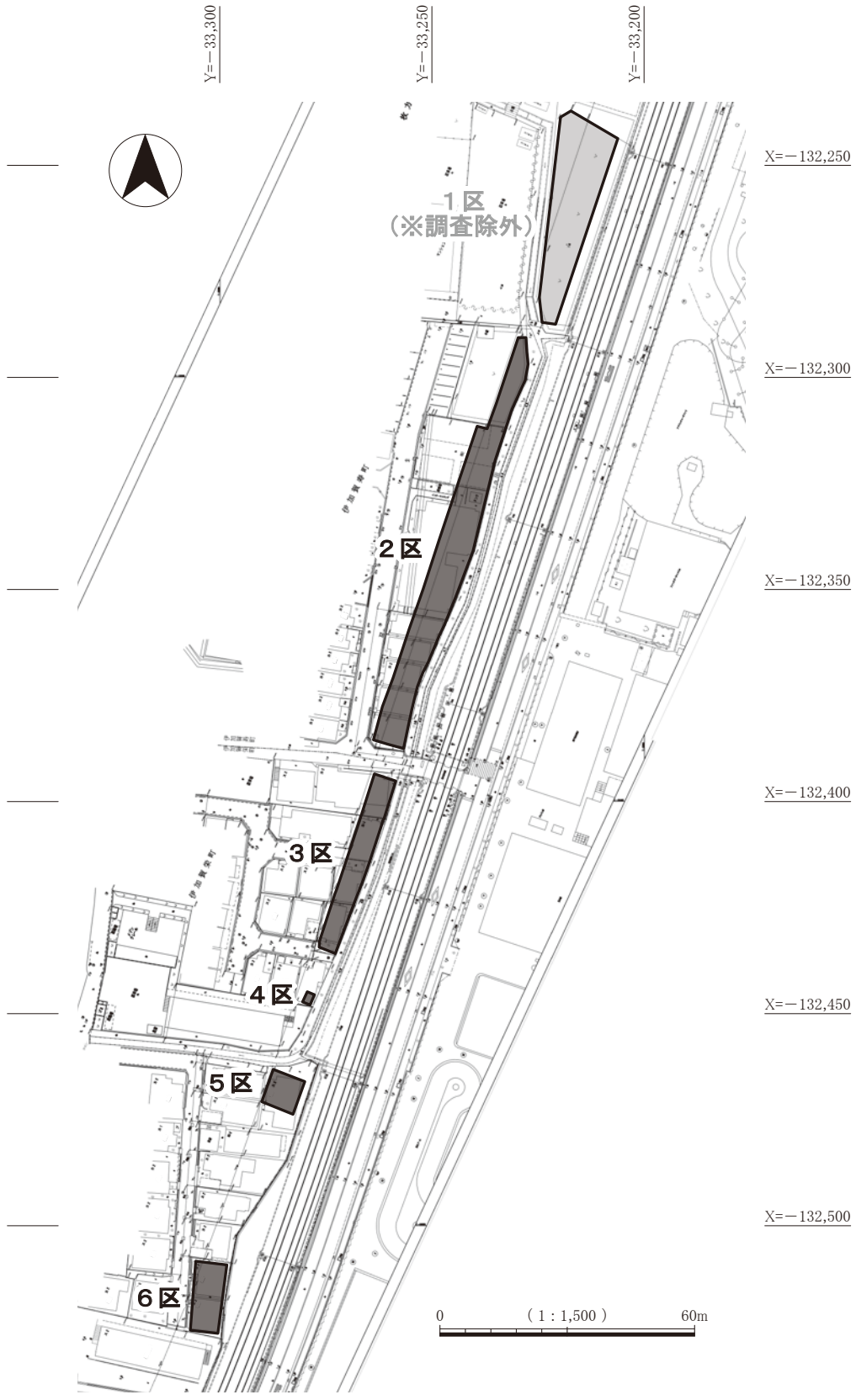


図2 調査区位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の所在する枚方市南西部には、生駒山地北部から伸びる枚方丘陵と、淀川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がっている（図3）。

枚方丘陵は、主として大阪層群から構成される標高40～80mの丘陵地である。南東側の周囲には段丘面が形成されており、東西両斜面には幾筋もの谷が入り込んでいる。当丘陵の東側には天野川を挟んで標高20～50mの交野丘陵が広がっている。次節に記すように、この二つの丘陵上には数多くの遺跡が存在し、旧石器時代以来の各時代における人々の様々な営みが確認されている。また、枚方丘陵の西縁部には生駒断層系の一部である枚方撓曲が存在しており、およそこれを境にしてその西側には沖積平野が広がっている。

この沖積平野を形成する淀川は、琵琶湖より流れ出て、枚方市の北西縁を北東から南西方向へと流れる。大阪湾と京都盆地を結ぶ重要な水上交通路だったと考えられ、伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の位置する付近にて、生駒山地に源流をもち交野平野を流れてくる天野川および北摂山地に源流をもち高槻市内

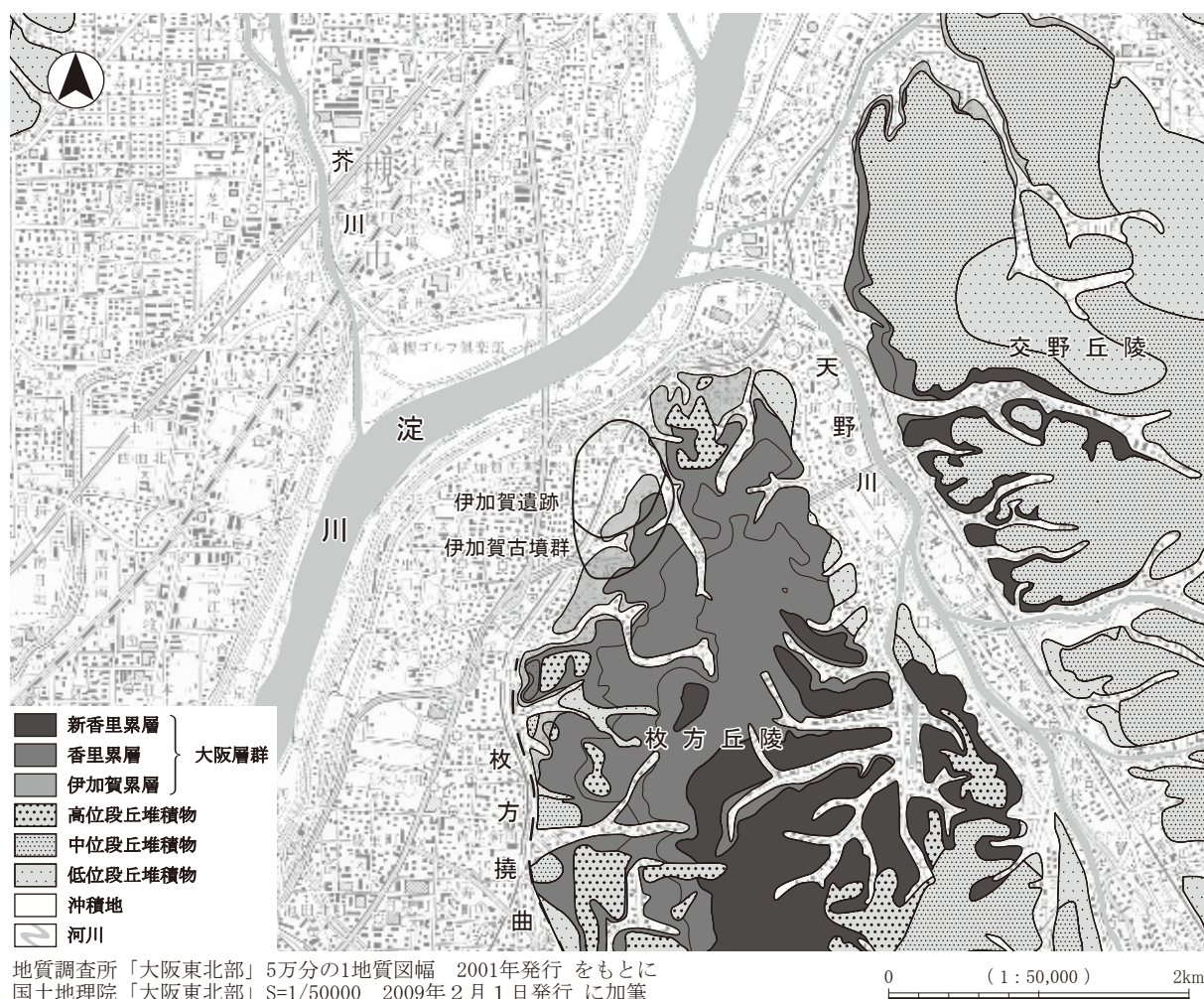


図3 地形分類図

表1 淀川の治水と洪水に関わる年表

年	内容
(323)	『日本書紀』仁徳天皇11年 夏四月 難波堀江開鑿の工を起し冬十月 功成り河内に茨田堤を築き給ふ
天平勝宝2年(750)	5月24日 京都驟雨ふって水潦汎溢せり伎人茨田等の堤往々決壊す(続日本紀)
宝龜1年(770)	7月22日 河内國志紀、澁川、茨田等の堤を修築す、單功三萬餘人(続日本紀)
宝龜3年(771)	8月 朔日より大風雨あり茨田堤六ヶ所澁川堤十一ヶ所志紀郡五ヶ所並決せり(続日本紀)
延暦3年(784)	閏9月5日 京中大雨あり百姓蘆舎を壊す河内國茨田堤を決すること十五ヶ所(続日本紀)
嘉祥1年(848)	8月5日 洪水浩々として人畜流損す、茨田堤往々にして決絶す(続日本後紀)
	9月 左中辯從四位下藤原朝臣嗣宗、治部少輔從五位下藤原朝臣眞世の外從五位下山代宿祢氏益、六位判官四人主典等を遣はして茨田堤を修築せしむ(続日本後紀)
文禄5年(1596)	豊臣秀吉により文禄堤が築造される。
延宝2年(1674)	6月14日 畿内大雨淀川洪水河内國茨田郡仁和寺堤防決潰す(大阪府誌など)
享保20年(1735)	6月21日 淀川洪水河内國茨田郡三矢村堤防決潰、攝河一面其害を被る(大阪府誌淀川沿革誌)
元文1年(1736)	6月 淀川洪水河内國茨田郡三矢村及出口村堤防を決潰す(大阪府誌・淀川改修運動ノ来歴)
延享5年(1748)	交野郡渚村及ヒ上島村外三ヶ村ニ係ル澁川堤防長五十間決潰ス(淀川改修運動ノ来歴)
寛延1年(1748)	5月 淀川洪水南岸北河内郡牧野村大字上島渚等の堤防延長五十間決潰(西成郡誌)
宝暦6年(1756)	9月 京都及畿内諸國大風雨水同月十七日淀川暴漲し、南岸北河内郡牧野村大字上島其他の堤防延長五十二間を決潰す(大阪府誌・西成郡誌)
安永4年(1775)	5月5日 大雨のため諸方洪水、天野川決壊
天明6年(1786)	6月18日 夜、河内枚方の北、天の川・穂谷川・舟橋川等洪水、田畑大に損壊せり(續王代一覽)
寛政3年(1791)	5月18日 淀川洪水、天野川決壊 6月19日 大雨、所々破損し、天野川2カ所決壊
享和2年(1802)	7月1日 淀川洪水河内國交野郡樟葉村、上島村、茨田郡仁和寺村堤防決潰損害大なり(大阪府誌)
文化4年(1807)	5月25日 茨田郡大庭八番村堤防決潰被害の範圍多し(大阪府誌)
嘉永1年(1848)	8月10日 交野郡渚村澁川堤防決壊ス(淀川改修運動ノ来歴)
嘉永4年(1851)	交野郡渚村澁川堤防決壊ス(淀川改修運動ノ来歴)
万延1年(1860)	淀川堤防切れ、枚方宿へ悪水進入
明治1年(1868)	5月 交野郡樟葉村ニ於テニヶ所、渚村ニ於テ一ヶ所澁川堤防決壊ス(淀川改修運動ノ来歴)
明治3年(1870)	9月 交野郡渚村堤防決潰ス(淀川改修運動ノ来歴)
明治17年(1884)	交野郡渚村澁川堤防決潰ス、大害アリ(淀川改修運動ノ来歴)
明治18年(1885)	6月17日 茨田郡伊加賀村等ノ堤防決壊(淀川改修運動ノ来歴)

枚方市内における明治18年までの主な淀川の治水と洪水に関連する出来事を、大阪府淀川左岸水害豫防組合 1929『淀川左岸水害豫防組合誌』中編 および枚方市教育委員会 1987『旧枚方宿の町家』(枚方市建造物調査報告書Ⅰ) 11頁掲載の「近世以降枚方の災害一覽表」、服部敏 2000「享和二年の洪水と淀川改修運動」『市史紀要』寝屋川市教育委員会 から抜粋して作成。

中心部を流れてくる芥川と合流する。このような河川の合流点という交通の要衝となる地理的背景を有しており、古くから人々の往来が活発であった地域と考えられる。

その一方で、表1に示したように、しばしば洪水に見舞われた地域でもある。古事記・日本書紀には仁徳天皇による茨田堤築造の記事がみえ、文禄5年(1596)には豊臣秀吉により文禄堤が築造されたように、洪水と戦ってきた様子が窺える。享和2年(1802)と明治18年(1885)の洪水が、特に甚大な被害を及ぼしたものとして知られており、明治18年の洪水については、大規模な堤防決壊が旧枚方宿西側の伊加賀村付近で発生したことから、「伊加賀切れ」と呼ばれている。

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群は、枚方丘陵の北西麓から標高20m以下の淀川左岸沖積平野にかけて位置している。今回の調査地点の周辺は、江戸時代の絵図や明治期の測量図、国土地理院の航空写真からすると、戦後に宅地開発が進む以前は主として水田が広がっていた。

【参考文献】

市原実 編著 1993 『大阪層群』創元社

宮地良典・田結庄良昭・寒川旭 2001 『大阪東北部地域の地質』地質調査所

第2節 歴史的環境

第1項 周辺の遺跡

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の位置する枚方市南西部周辺には、旧石器時代から近・現代にかけての遺跡が数多く存在している（図4）。

旧石器時代

枚方丘陵上では藤田土井山遺跡や茄子作遺跡・布懸遺跡、交野丘陵上では小倉東遺跡や交北城の山遺跡・星丘西遺跡・星丘遺跡においてナイフ形石器や尖頭器などの旧石器時代の遺物が出土している。ただし、そのほとんどが後世の堆積層中からの出土であり、遺構は検出されていない。一方、淀川右岸の低位段丘上に位置する郡家今城遺跡や津之江南遺跡では、ナイフ形石器が比較的まとまって出土し、石器製作跡と推定される石器集中地点や調理に関わると考えられる礫群などの遺構も検出されている。

縄文時代

草創期から前期に帰属する遺構・遺物は極めて少ない。中期に入ると、淀川左岸沖積平野に位置する讚良郡条里遺跡において比較的まとまった量の土器が出土ようになる。後期には各地に遺跡が出現し、枚方丘陵南側の上の山遺跡や坊領遺跡などで土器が出土している。淀川右岸沖積平野の芥川遺跡では土坑墓・土器棺墓などの遺構も検出された。

晩期には枚方丘陵北側や交野丘陵東側にも遺跡が出現する。特に交北城の山遺跡では3基の埋甕が検出されたほか、石剣や石棒など祭祀に関わる遺物も出土した。東北地方の文様が施された大洞式系土器も出土しており、広域にわたる交流の様子が窺える。また、枚方丘陵北側の岡東遺跡でも晩期中葉の土器が出土している。なお、集落を営んだとは考えられないが、淀川河川敷内に立地する大塚遺跡や柱本遺跡・淀川河床遺跡（その2）では、早期から晩期の各時期の土器が出土している。

弥生時代

前期の遺跡は少ないが、淀川左岸の讚良郡条里遺跡・高宮八丁遺跡、右岸の安満遺跡などで遺構・遺物が確認されている。特に安満遺跡は、環濠に囲まれた居住域と水田が営まれた生産域、方形周溝墓からなる墓域といった、各種の遺構が確認されており、当時の集落の姿を知る上で重要な遺跡である。

中期になると遺跡が増加し、枚方丘陵上には、枚方上之町遺跡や太秦遺跡・上の山遺跡・坊領遺跡などが出現する。太秦遺跡は高地性集落として早くから知られている。上の山遺跡では中期前半の大型掘立柱建物が検出された。交野丘陵上には、交北城の山遺跡や星丘西遺跡・村野遺跡などが存在する。交北城の山遺跡では42基もの方形周溝墓が検出され、星丘西遺跡では鳥の羽の冠をつけた人物が描かれた土器も出土した。中期末頃には、沖積平野部にも池田西遺跡や池田下村遺跡などの遺跡が出現する。

後期には、枚方丘陵北東側における遺跡の増加が顕著である。このうち鷹塚山遺跡は祭祀的・軍事的性格をもつ高地性集落であり、分銅形土製品や小型重圏文鏡など特異な遺物も出土した。山之上天堂遺跡では平面六角形の竪穴建物が検出された。交野丘陵上には、渚遺跡・中宮ドンバ遺跡・星丘遺跡・星丘西遺跡などが存在する。渚遺跡は古墳時代前期まで続く集落であり、近江系の土器も出土した。中宮ドンバ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の墳丘墓が2基検出され、鉄剣や鉄鏃などの副葬も確認された。星丘西遺跡でも柳葉形鉄鏃を副葬する大型木棺墓が検出されている。星丘遺跡では砥石や鉄器・鉄片が出土した鍛冶場と思われる竪穴建物が確認された。また、沖積平野に位置する楠遺跡では、土製鋳型外枠や高坏状土製品が出土し、青銅器の鋳造を行っていたことが判明している。

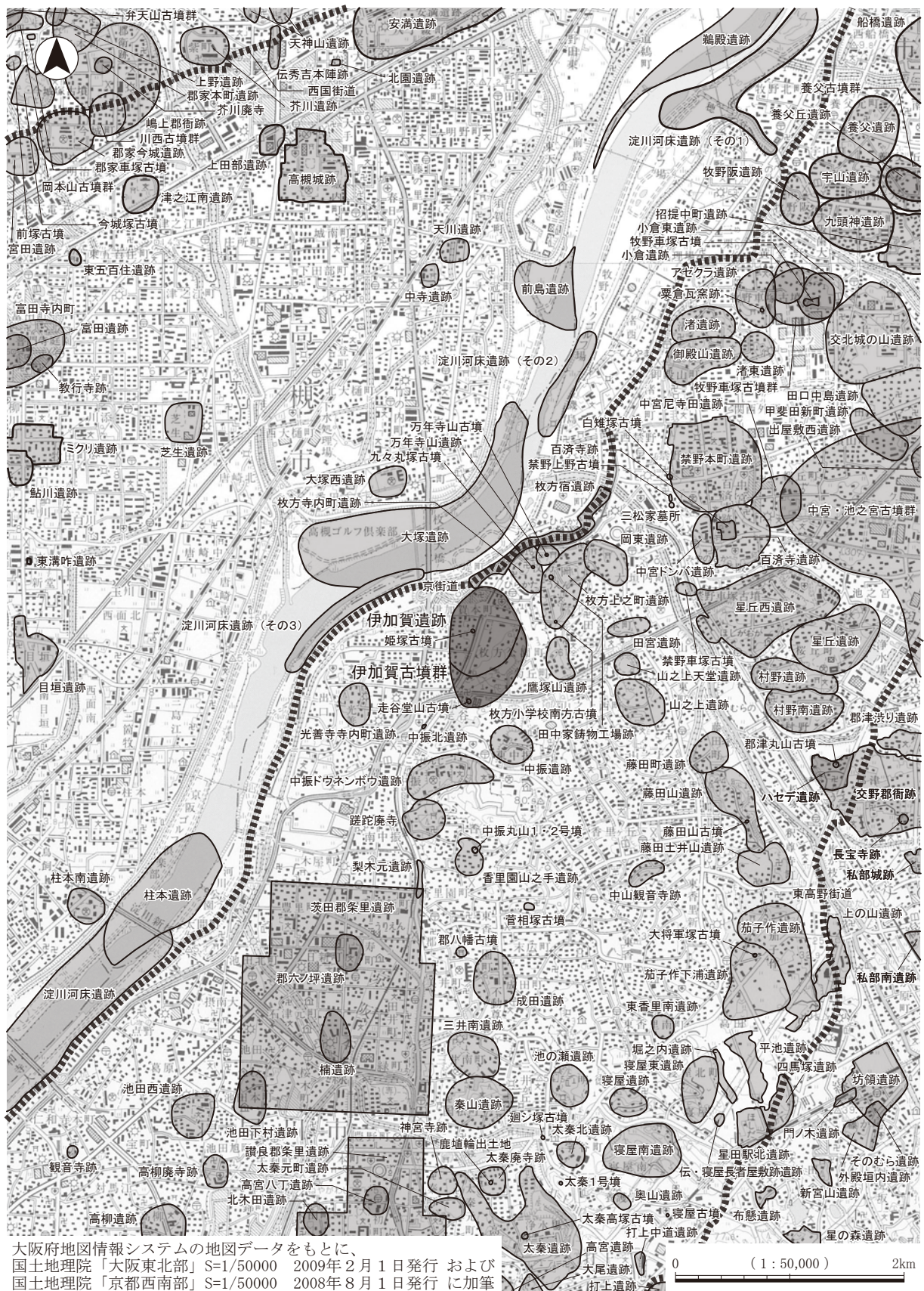


図4 遺跡分布図

古墳時代

前期の集落遺跡には、交北城の山遺跡や星丘遺跡・村野遺跡・茄子作遺跡などが知られており、各遺跡において竪穴建物や掘立柱建物などの遺構が検出されている。

前期古墳としては、枚方丘陵上に万年寺山古墳・藤田山古墳が、交野丘陵上に牧野車塚古墳・禁野車塚古墳が造られた。万年寺山古墳は墳形や埋葬施設は不明だが、三角縁神獣鏡を含む8面の青銅鏡が出土した。そのため、被葬者は淀川の水上交通を掌握するような有力な首長であったことが想定されている。藤田山古墳も正確な墳形は不明だが、3基の粘土槨が検出され、画文帯神獣鏡や鍬形石が出土している。牧野車塚古墳は全長107.5mの前方後円墳で、二重の濠をもつ。禁野車塚古墳は全長120mの前方後円墳で、天野川水系最大の古墳である。

中期の集落遺跡には、交北城の山遺跡や茄子作遺跡などが知られる。この両遺跡からは、朝鮮半島の影響を強く残した初期須恵器や韓式系土器が出土しており、渡来系集団との関わりが注目される。茄子作遺跡および隣接する上の山遺跡からは、焼け歪みの著しい初期須恵器や窯体片が出土しており、この地で初期段階の須恵器生産が行われたことが想定されている。坊領遺跡では椀形滓など鍛冶関連の遺物が出土した。また、淀川左岸沖積平野では楠遺跡・池田下村遺跡・池田西遺跡にて集落が営まれた。

中期古墳は淀川左岸では小型の古墳だけが造られるようになる。交野丘陵上に位置する小倉東遺跡では4基の方墳が検出されている。枚方丘陵上では、香里園山之手遺跡の範囲内に中振丸山1号墳が、伊加賀遺跡の範囲内に姫塚古墳が造られた。中振丸山1号墳は全長約16mの小型前方後円墳で、その周溝からは円筒埴輪以外にも、家形や鶏形・人物埴輪などの形象埴輪も出土した。姫塚古墳は直径40mの円墳または前方後円墳と推定され、周溝から円筒埴輪のほか、朝顔形・蓋形埴輪が出土した。

後期の集落遺跡には、九頭神遺跡・星丘遺跡・藤田町遺跡・中振ドウネンボウ遺跡などが知られ、掘立柱建物などの遺構が検出されている。

後期古墳としては、淀川左岸の交野丘陵上には白雉塚古墳・禁野上野古墳、枚方丘陵上には走谷堂山古墳・中振丸山2号墳などが存在する。白雉塚古墳は直径約30mの円墳。石室内部が朱彩されており、銀製空玉や琥珀製棗玉・銅釧・銅鈴・馬具類・鹿角製刀子・須恵質の鱗付埴輪などが出土している。禁野上野古墳は全長約40mの前方後円墳。走谷堂山古墳は伊加賀古墳群の南端部に位置し、江戸時代に石棺が掘り出されたことが伝えられている。現在、枚方市出口にある光善寺の境内には、その石棺とされるものが手水鉢として置かれている。中振丸山2号墳は直径15～18mの円墳で、朝顔形埴輪・蓋形埴輪が出土した。なお、淀川右岸には継体天皇の陵墓とされる全長約190mの今城塚古墳が造られている。

古代

古代の集落遺跡としては、交野丘陵上にアゼクラ遺跡・田口中島遺跡・甲斐田新町遺跡・禁野本町遺跡・百済寺遺跡・中宮尼寺田遺跡・村野南遺跡、枚方丘陵上に万年寺山遺跡・枚方上之町遺跡・伊加賀遺跡・藤田町遺跡などが存在する。禁野本町遺跡では、その南にある百済寺の伽藍中軸線と一致する南北基幹道路と、これに交差する東西基幹道路が検出されており、奈良時代から平安時代にかけて計画的な街区が形成されていた様子が窺える。その北東街区では、大型掘立柱建物の検出や「大領」と記された木簡の出土から、官衙や郡司級有力氏族の邸宅の存在が想定されている。また、南西街区では金属加工関連遺物が多く出土した。万年寺山遺跡では、平安時代初頭の土師器・須恵器とともに二彩陶器が出土した。伊加賀遺跡では、奈良時代の掘立柱建物や井戸・焼土坑が検出された。藤田町遺跡では平安時代前期の掘立柱建物が検出され、緑釉陶器や灰釉陶器が出土した。

古代寺院としては、九頭神廃寺・百済寺跡・蹉跎廃寺・中山観音寺跡などが知られる。九頭神遺跡の範囲内に位置する九頭神廃寺は、創建が飛鳥時代後期に遡ると考えられ、塔基壇のほか倉庫群や大型掘立柱建物などが検出されている。百済寺は奈良時代に百済王氏の氏寺として建立された。寺院地は一辺約141m四方で、四面が築地塼で囲まれた二塔一金堂式の中央官寺の流れを汲む伽藍配置である。蹉跎廃寺は飛鳥時代後期もしくは奈良時代前半の創建と考えられている。現在社務所のある平坦面には、九頭神廃寺と同範の軒丸瓦などの散布がみられる。中山観音寺跡は飛鳥時代後期もしくは奈良時代の創建と考えられている。創建当初のものではないが、東西に並ぶ基壇や塔心礎が検出されている。また、穂谷川右岸に位置する牧野阪遺跡には、平安京の西寺に瓦を供給した牧野阪瓦窯跡があり、平安時代前期の瓦が多量に出土した。

なお、淀川左岸の沖積平野には、古代の土地区画である条里の痕跡が良好に残っており、茨田郡条里遺跡および讃良郡条里遺跡として遺跡範囲に指定されている。

中世

淀川左岸にある交北城の山遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物群や区画溝が検出され、居館の存在が想定されている。アゼクラ遺跡には、鎌倉時代の瓦窯跡である粟倉瓦窯跡が存在している。万年寺山遺跡や枚方上之町遺跡・藤田山遺跡では、火葬土坑や蔵骨器など、墓に関わる遺構・遺物が確認された。枚方寺内町遺跡は、室町時代末以降に浄土真宗の順興寺を中心として商工業者が集った中世都市の遺跡であり、油屋の甕倉などが検出されている。伊加賀遺跡では、掘立柱建物や井戸のほか、耕作溝なども検出されている。光善寺寺内町遺跡では、京都系の土師器や漆器碗の出土から、京と繋がりのある富裕層の邸宅や寺院に関連する施設の存在が想定されている。また、令和元年度の試掘調査により新規発見された中振北遺跡や梨木元遺跡からも中世の遺物が出土している。

淀川右岸にある高槻城跡は室町時代に入江氏が築城したもので、後にキリシタン大名の高山右近も城主となった。江戸時代以降には永井氏などの譜代大名が置かれ、明治7年（1874）に鉄道建設に伴う資材調達により破却されるまで存続した。

近世

近世の遺跡としては、枚方宿遺跡が知られる。枚方丘陵先端の崖下に広がる天野川・淀川合流点の南側砂堆上に位置し、文禄5年（1596）、豊臣秀吉は伏見～大坂間の水陸交通路整備のためこの地に文禄堤を築いた。江戸時代になると、京都と大坂を結ぶ京街道上に設けられた重要な宿場の一つとして、大いに賑わったと伝えられる。これまでの調査によって、当時の町並みの様相とともに、幾度となく火災や水害を被ってきた状況も明らかにされつつある。現在でも当時の町屋が点在しており、船宿「鍵屋」の主屋は、19世紀初頭に建てられた貴重な建築遺構として、枚方市の指定文化財となっている。

近・現代

枚方市禁野本町一帯には、明治29年（1896）に大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠（禁野火薬庫）、昭和13年（1938）に大阪陸軍造兵廠枚方製造所といった軍事施設が開設された。禁野本町遺跡では、これらの施設に関わる火薬庫や土塁・水濠などの遺構が検出され、弾丸や薬莢などの遺物も出土した。禁野火薬庫は明治42年（1909）および昭和14年（1939）に爆発事故を起こしており、これに伴う爆発土坑も検出されている。また、枚方市香里ヶ丘の地には、昭和14年に宇治火薬製造所香里工場（昭和17年（1942）に東京第二陸軍造兵廠香里製造所として独立）が開設された。令和2年の香里小学校増築工事の際に、この施設に関わる貯蔵庫と目されるコンクリート製構造物が発見されている。

第2項 伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の既往の調査

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群は、これまでに100次を超える調査が行われている（図5、表2～4）。ほとんどの調査が個人住宅や水道管敷設に伴う小規模なものであり、掘削深度が遺構・遺物の存在する地層まで達していないことも多いようである。そのため、量的にまとまった遺構・遺物が確認された調査は少ないが、第6次・第38次・第52次・第76次調査においては、弥生時代後期から中世にかけての遺構・遺物が多く検出された。

第6次調査は、ひらかたパークリニューアル工事に伴うものであり、弥生時代後期から中世にかけての集落跡が発見された。弥生時代後期から古墳時代の大溝、古墳時代の掘立柱建物、奈良時代の掘立柱建物・焼土坑・井戸、中世の井戸・溝・土坑・ピットなど多数の遺構が検出された。

第38次調査は、姫塚古墳より40～50m西側の地点で行われた。古墳時代中期から中世にかけての遺物が出土した。古墳時代中期のピットが多数検出されており、掘立柱建物の存在も想定されている。第52次調査では、古墳時代から中世にかけての4時期の遺構面が確認され、各面で柱穴や溝・土器溜まりなどの遺構が検出されている。第76次調査は、第6次調査地点の北西側で行われた。古墳時代前期・後期の溝や柱穴、飛鳥時代の溝、奈良時代の井戸、中世の溝・柱穴などが検出された。

また、伊加賀遺跡の範囲内には、『河内名所図会』や『河内志』の記載によって、数基の古墳の存在が知られている。加えて、周辺の丘陵部で古墳時代後期の須恵器が散布する状況が認められることから、伊加賀遺跡の一部重複する形で伊加賀古墳群が遺跡範囲として指定されている。

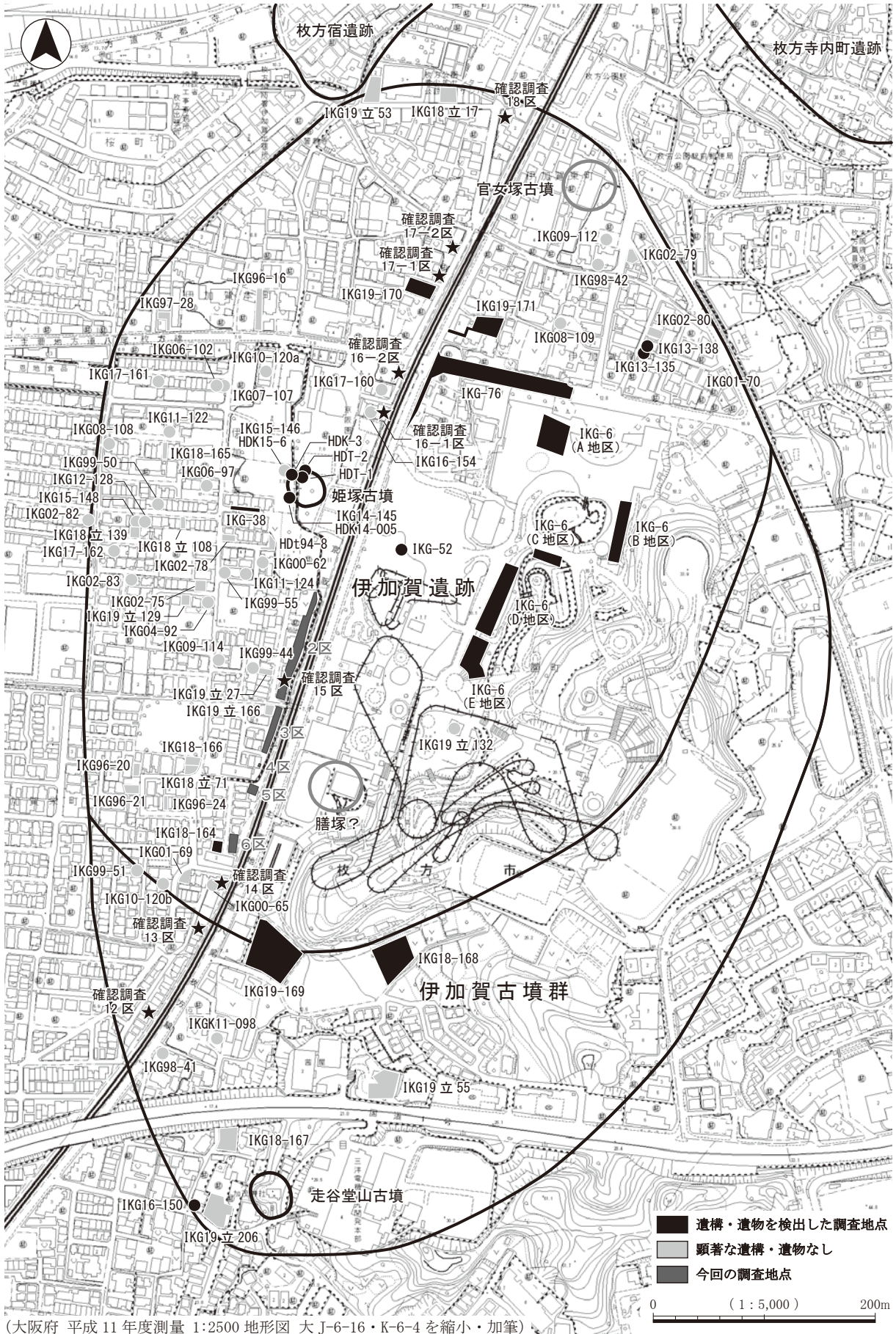
伊加賀古墳群に存在する古墳のうち走谷堂山古墳は、前項に記したとおり現在光善寺に置かれている石棺から、古墳時代後期の古墳と推定されている。『河内名所図会』に記される官女塚・膳塚については、いずれも詳細不明であるが、官女塚については、枚方公園駅の南東側にあたる畠の中の小墳丘がそれと伝えられている。

姫塚古墳は、伊加賀古墳群内で唯一発掘調査された古墳であり、これまでに6次の調査が実施されてきた。これまでの調査によって北側・西側・南側の周濠が検出されており、直径40m程度の円墳と推定されている。ただし、南東部に前方部をもつ前方後円墳の可能性も残している。また、周濠からは大量の円筒埴輪片をはじめとして、朝顔形埴輪・蓋形埴輪・須恵器・韓式系土器・滑石製双孔円板・滑石製勾玉など様々な遺物が出土している。

以上のように、伊加賀遺跡・伊加賀古墳群では、遺跡範囲の東側、現在のひらかたパークが位置する比較的標高の高い地点を中心に、弥生時代後期から中世にかけての遺構・遺物が数多く確認されている。また、遺跡範囲内には古墳が散在する様子も窺える。これらの遺構・遺物については、古代の建立とされる行基49院の「救方院」・「薦田尼院」や、中世に地頭として伊加賀の地を支配した土屋氏の居住域と関連する可能性も考えられ、注意を要する。

【参考文献】

- 財団法人 枚方市文化財研究調査会 2009 『図録 考古資料でみる枚方の歴史』
西田敏秀 1998 「河内国交野郡素描―奈良時代～平安時代前期の遺跡群を中心として―」 『網干善教先生古稀記念考古学論集』 網干善教先生古稀記念考古学論文集刊行会
枚方市史編纂委員会 1977 『枚方市史 第一巻』 枚方市役所
枚方市史編纂委員会 1986 『枚方市史 第十二巻』 枚方市
吉田知史 2017 「交野の古墳時代集落動態」 『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』 同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集 同志社大学歴史資料館



(大阪府 平成 11 年度測量 1:2500 地形図 大 J-6-16・K-6-4 を縮小・加筆)

図 5 既往の調査地点

表2 伊加賀遺跡・伊加賀古墳群・姫塚古墳 既往の調査一覧(1)

■ 伊加賀遺跡の既往の調査(1)

調査名	調査地点	調査日	面積	概要	報告書
枚方公園遺跡 立会調査	枚方公園町578外	1986/ 09/29	(5,602.29)	工事概要: 観覧席築造	調査会 年報Ⅶ
IKG-1 (試掘・立会)	伊加賀寿町2-21	1993/ 03/19	(964.41)	調査原因: 共同住宅建設 遺構・遺物確認されず。	調査会 年報14
IKG-6 (確認・立会)	枚方公園町1-1	1995/ 05/25～ 06/30	(969)	工事原因: 枚方パークリニューアル工事 古墳時代～中世の遺構を検出。発掘調査実施。	調査会 年報17
IKG-6	枚方公園町1-1	1995/ 04/03 ～ 1996/ 03/08	2,400	調査原因: 枚方パークリニューアル工事 古墳時代中期・奈良時代・中世の建物跡や、井戸・溝状遺構などを検出。 【A地区】近世以降に大規模な客土。中世にも客土あり。弥生時代後期の落ち込み状遺構、古墳時代(5世紀末～6世紀)の柱穴、奈良時代の井戸・柱穴、中世の落ち込み状遺構・溝状遺構・柱穴などを検出。 【B地区】北端部・南端部以外は攪乱。南端部ではG.L.-1.0mで奈良時代・中世～近世の溝・ピット・井戸など検出。北端部ではG.L.-0.6mと-1.2mで遺構面を検出。上の面は中世～近世。土坑・ピット・溝状遺構を検出。下の面は奈良時代。掘立柱建物・柱穴を検出。 【C地区】G.L.-1.6mで遺構面検出。奈良時代を中心に、古墳時代後期・中世の遺構も確認された。溝・ピットなど検出。 【D地区】落ち込み状遺構・焼土坑・井戸・溝・柱穴を検出。落ち込み・溝・掘立柱建物は古墳時代。焼土坑は奈良時代。井戸および耕作溝は中世。 【E地区】弥生時代後期～古墳時代の大溝、古墳時代・奈良時代の落ち込み・掘立柱建物、中世の井戸を検出。	調査会 年報17
IKG96-16	伊加賀本町653-1	1996/ 07/10	2.9	—	市教委 第31集
IKG96-20	伊加賀栄町706-17, -19	1996/ 11/18	2.6	—	市教委 第31集
IKG96-21	伊加賀栄町706-15	1996/ 12/24	2.8	—	市教委 第31集
IKG96-24	伊加賀栄町705	1997/ 03/03	2.0	遺構・遺物なし。	市教委 第33集
IKG97-28	伊加賀本町769-1, 751-5	1997/ 07/14	3.1	遺構・遺物なし。	市教委 第33集
IKG-35 (確認・立会)	枚方公園町1-1	1998/ 07/08	(241.12)	調査原因: 休憩所建設 G.L.-0.55mで遺物包含層(中世・古代)を検出。盛土をして保護。	調査会 年報20
IKG98-42	伊加賀東町44-8	1998/ 10/20	8.06	—	市教委 第34集
IKG-38	伊加賀寿町663-3 番地,663-1,-5, 664-1番地の各々 一部	1998/ 11/30～ 12/03	37.4	調査原因: 宅地造成・専用住宅 ピット・柱穴を検出。土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・円筒埴輪破片・土師器高杯脚部・平瓦・陶磁器などが出土。	調査会 年報20
IKG99-44	伊加賀寿町677-12	1999/ 04/06	1.8	—	市教委 第35集
IKG99-50	伊加賀寿町736-4	1999/ 11/04	1.8	—	市教委 第35集
IKG-52	枚方公園町1-1 (枚方パーク)	2000/ 01/24～ 02/02	17	調査原因: ウォーターライド駅舎建設 6世紀後半?、8世紀後半～9世紀前半、10世紀、12世紀後半の4面の遺構面を確認。各面で柱穴や溝・土器溜まりなどを検出。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・白磁・瓦などが出土。	調査会 年報21
IKG99-55	伊加賀寿町674-1	2000/ 02/21	2.0	—	市教委 第37集
IKG00-62	伊加賀寿町131-4	2000/ 07/04	2.7	—	市教委 第37集
IKG00-65	伊加賀栄町136-6	2000/ 10/06	2.0	—	市教委 第37集
IKG01-69	伊加賀栄町136-3	2001/ 07/02	1.8	—	市教委 第38集
IKG01-70	伊加賀南町150-19	2001/ 10/18	0.7	—	市教委 第38集
IKG02-75	伊加賀寿町732-4	2002/ 05/07	1.1	—	市教委 第41集
IKG-76 (確認・立会)	伊加賀南町450-8 外	2002/ 07/25～ 09/20	(約2,350)	調査原因: 都市計画道路整備 ピットなどの遺構と弥生時代後期の土器、古墳時代前期～後期、奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の土師質土器や瓦器などが出土。	調査会 年報24
IKG-76	伊加賀南町450-8 外	2003/ 04/01～ 09/10	2,400	調査原因: 都市計画道路整備 古墳時代前期・後期の溝、古墳時代後期の柱穴、飛鳥時代の溝、奈良時代の井戸、鎌倉時代の溝・柱穴などを検出。	調査会 年報25
IKG02-78	伊加賀寿町674-3	2002/ 08/12	3.8	—	市教委 第41集
IKG02-79	伊加賀東町68-2	2002/ 08/22	2.4	—	市教委 第41集
IKG02-80	伊加賀南町149-12, -13	2002/ 10/15	0.9	—	市教委 第41集
IKG02-82	伊加賀緑町794-48	2003/ 02/26	3.2	—	市教委 第42集
IKG03-83	伊加賀寿町732-15	2003/ 08/11	1.5	—	市教委 第42集

表3 伊加賀遺跡・伊加賀古墳群・姫塚古墳 既往の調査一覧(2)

■ 伊加賀遺跡の既往の調査(2)

調査名	調査地点	調査日	面積	概要	報告書
IKG-87 (確認・立会)	堤町・伊加賀東町	2004/ 08/18~ 08/20	(7)	調査原因：駅前広場整備 G.L.-1.5mまで掘削したが地山は検出されず。遺構は検出されなかったが、磁器鉢破片が出土。	調査会 年報26
IKG-89 (確認・立会)	伊加賀南町441番 外	2004/ 12/14	(4)	調査原因：都市計画道路整備 G.L.-1.0mまで掘削をしたが、コンクリートガラなどが混ざる攪乱盛土で地山まで掘削することができなかった。遺物検出されず。	調査会 年報26
IKG04-92	伊加賀寿町732-9	2005/ 02/22	0.7	盛土地。遺構・遺物なし。	市教委 第50集
IKG06-97	伊加賀寿町737-12, 740-4	2006/ 05/18	2.8	G.L.-1.7mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第53集
IKG06-102	伊加賀寿町748-14	2007/ 02/09	4.1	G.L.-1.3mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第56集
IKG-103	伊加賀寿町733-1	2007/ 05/23	(478.31) 3	調査原因：共同住宅 G.L.-1.0mで砂層になる。遺構・遺物は検出されず。	調査会 年報29
IKG07-107	伊加賀寿町748-4	2007/ 12/04	2.0	G.L.-1.25mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第56集
IKG08-108	伊加賀寿町742-14	2008/ 05/27	2.9	G.L.-1.0mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第58集
IKG08-109	伊加賀南町 443,455,456-3の 各一部	2009/ 01/07	7.9	G.L.-0.9mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第58集
IKG09-112	伊加賀東町46-3, 66-6	2009/ 05/14	3.8	G.L.-0.5mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第62集
IKG09-114	伊加賀寿町677-14	2009/ 06/16	2.4	G.L.-1.2mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第62集
IKG10-120a	伊加賀寿町660-13	2011/ 03/03	1.3	G.L.-0.6mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第69集
IKG10-120b	伊加賀栄町683-49	2010/ 12/22	4.3	G.L.-0.8mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第66集
IKG11-122	伊加賀寿町745-4, -10,742-25	2011/ 06/10	2.2	G.L.-1.8mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第69集
IKG11-124	伊加賀寿町674-13	2011/ 12/08	2.3	G.L.-0.8mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第69集
IKG12-128	伊加賀寿町736-19	2012/ 10/30	2.2	G.L.-1.3mで河川由来の砂層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第73集
IKG13-135	伊加賀南町149-7	2013/ 08/02	4.3	G.L.-1.0mで地山層ならびに遺構(溝など)検出。瓦器・土師器片が出土。盛土保存。	市教委 第77集
IKG13-138	伊加賀南町149-10, -11の各一部	2013/ 12/16	9.8	G.L.-0.9mで地山層検出。土師器片が出土。遺構なし。	市教委 第77集
IKG14-145	伊加賀寿町663-24	2015/ 01/16	3.5	G.L.-1.5mで姫塚古墳の墳丘土と考えられる淡褐色粘質シルトを検出。遺物なし。	市教委 第79集
IKG15-146	伊加賀寿町663-31	2015/ 04/24	4.1	G.L.-1.5mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委 第82集
IKG15-148	伊加賀寿町736-20	2015/ 08/18	3.9	G.L.-1.6mで中世以前のベース層検出。G.L.-1.7mで重機による掘削限界のため掘削中止。遺構・遺物なし。	市教委 第82集
IKG16-154	伊加賀寿町636-11, -16	2016/ 10/21	2.4	G.L.-1.7mで灰黄褐色粘質シルトからなる地山層上面を確認。遺構・遺物なし。	市教委 第83集
IKG17-160	伊加賀寿町636-7	2017/ 10/25	3.2	G.L.-1.5mで灰色粘土からなる谷埋土層を確認。G.L.-1.7mで重機の掘削限界のため、地山層確認できず。遺構・遺物なし。	市教委 第87集
IKG17-161	伊加賀寿町748-21	2018/ 01/24	2.9	G.L.-1.0mで暗灰色粘質土からなる地山層上面を確認。遺構・遺物なし。	市教委 第87集
IKG17-162	伊加賀寿町734-10	2018/ 01/30	5.7	G.L.-1.5mで灰色シルトの流路もしくは谷の埋土層を確認。G.L.-1.6mで重機の掘削限界のため、地山層確認できず。遺構・遺物なし。	市教委 第87集
IKG18-164	伊加賀栄町625-6 の一部	2018/ 04/03	3	G.L.(≒道路面)-1.7mまで調査。G.L.-0.7m以下、耕作土、下に水成堆積の粘土・粗砂を確認。耕作土から近世の染付碗、古墳時代以降の土師器出土。洪水層下に遺構面を想定。改良立会：遺物なし	市教委 第90集
IKG18 立17	伊加賀東町12-11 ~-13,48-7	2018/ 05/24	—	調査原因：店舗併用住宅 砂層、遺物なし。	市教委 第90集
IKG18-165	伊加賀寿町742-30	2018/ 06/01	3.00	G.L.-1.7mで暗青灰色砂質土、G.L.-2.0mで青灰色砂質土からなる地山層上面を確認。遺構・遺物なし。	市教委 第88集
IKG18 立24	枚方公園町128他 102筆 枚方パーク	2018/ 06/05	—	調査原因：店舗2棟 物販店舗基礎立会：敷地内でインフラ整備があり、配水管等の工事状況(G.L.-1.6mまで)を確認。G.L.-0.6mとG.L.-1.0m付近で旧配水管。G.L.-1.4m付近まで盛土、以下、灰色粘質土層。遺構・遺物なし。 飲食店舗立会：着工済み	市教委 第90集
IKG18-166	伊加賀栄町706-3	2018/ 07/31	6.21	G.L.-1.2mで暗灰色砂質土、G.L.-1.4mで灰色砂質土を確認したが、湧水による壁面崩落が大きいため、掘削中止。遺物なし。	市教委 第88集
IKG18 立62	枚方公園町128他 102筆 枚方パーク	2018/ 09/27	—	調査原因：遊園地施設(ポンプ室) プール側はG.L.-1.1mまで掘削。前身建物等の基礎による攪乱内。斜面地はG.L.-1.2mまで掘削。G.L.-0.5mまで前身建物の盛土・基礎による攪乱、G.L.-0.6mまで暗褐色中〜粗砂、G.L.-0.8mまで暗褐色粘質中〜粗砂、以下明黄褐色粘土(地山)。遺構・遺物なし。地山上面は削平済みか。	市教委 第90集
IKG18 立71	伊加賀栄町706-23 の一部	2018/ 10/29	—	調査原因：分譲住宅 G.L.-0.3~0.65mまで掘削。G.L.-0.1mまで表土、以下、盛土。遺物なし。	市教委 第90集
IKG18 立108	伊加賀寿町736-33	2019/ 02/08	—	調査原因：個人住宅 G.L.-0.5mまで掘削。盛土内。	市教委 第90集
IKG18 立139	伊加賀寿町734-17	2019/ 03/14	—	調査原因：個人住宅 G.L.-0.4mまで掘削。盛土内。	市教委 第90集

表 4 伊加賀遺跡・伊加賀古墳群・姫塚古墳 既往の調査一覧（3）

■ 伊加賀遺跡の既往の調査（3）

調査名	調査地点	調査日	面積	概要	報告書
IKG19-169	走谷 1 丁目139-2, 枚方公園町611-3 保育所	2019/06/24	47	調査原因：校舎 G.L. -0.8mで灰褐色砂質土層上面を確認、土坑2基検出。土坑から土師器出土。G.L. -0.9mで灰褐・褐色粘質土層上面を確認、ピット3基・溝状遺構1条検出。ピットから土師器出土。G.L. -1.05mで暗黄灰・灰黄色中～粗砂混砂質シルトの地山層上面を確認、土坑3基・ピット5基検出。土坑から須恵器出土。各遺構の時期は、概ね古墳時代～古代と推定。	市教委第92集
IKG19-170	伊加賀本町644-2 他	2019/08/19	3	調査原因：個人住宅 G.L. -0.8mで黄褐色粘質土の地山層上面を確認。瓦器出土。	市教委第92集
IKG19-171	伊加賀南町448-1 の一部	2020/02/19～02/21	25	調査原因：個人住宅 G.L. -0.5～0.6mで灰黄色粘質土の地山層上面を確認。古墳時代前半の溝・土坑・ピットを検出。	市教委第92集
IKG19 立27	伊加賀寿町676-9	2019/05/17	—	調査原因：分譲住宅 G.L. -0.25mで耕作土。	市教委第92集
IKG19 立53	伊加賀東町3-1, -5	2019/06/21	—	調査原因：共同住宅 G.L. -1.8mまで掘削。G.L. -0.7mで河川堆積層。	市教委第92集
IKG19 立129	伊加賀寿町732-22	2019/10/31	—	調査原因：分譲住宅 G.L. -0.3mまで確認、盛土内。	市教委第92集
IKG19 立132	枚方公園町128他 枚方パーク	2019/11/07	—	調査原因：遊具 G.L. -0.8mで黄褐色粗砂、G.L. -0.9mで褐色灰色砂混粘質土、G.L. -1.1mで灰褐色砂混粘質土。	市教委第92集
IKG19 立166	伊加賀東町630-3	2020/01/15	—	調査原因：個人住宅 G.L. -0.7mまで掘削、盛土内。	市教委第92集

■ 伊加賀古墳群の既往の調査

調査名	調査地点	調査日	面積	概要	報告書
IKG98-41	走谷 1 丁目15-2, -6, -7	1998/10/12	4.05	—	市教委第34集
IKG99-51	伊加賀栄町702-7	1999/11/26	3.0	—	市教委第35集
— (確認・立会)	走谷2-109-3	2007/02/06	(68)	調査原因：個人住宅 遺構・遺物は検出されず。	調査会年報27・28
— (確認・立会)	菊丘町397-40, -41の各一部	2007/03/14	(132)	調査原因：個人住宅 遺構・遺物は検出されず。	調査会年報27・28
IKGK11-098	走谷 1 丁目1015の一部	2011/08/10	2.6	G.L. -1.7mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委第69集
IKG16-150	走谷 1 丁目74	2016/05/13	13.8	G.L. -0.2～0.55mで灰白色シルトおよび灰褐色と黄褐色の粘質シルトからなる地山層上面を確認。地山層上面で自然河川を検出。自然河川から古墳時代後期の須恵器、平安時代の土師器や黒色土器などが出土。盛土保存。	市教委第83集
IKG18-167	走谷 1 丁目36-1, 37, 38-1	2019/01/28	10	調査原因：共同住宅 G.L. -0.85mまで掘削。G.L. -0.85mで青灰色粘質シルト混中～粗砂もしくは粘質シルトの地山層。上面で上層から切り込む、東西方向に走る近現代の溝を検出。一部G.L. -1.8mまで掘削、明灰白色の粘土層となる。	市教委第90集
IKG18-168	枚方公園町614甲の一部 走谷ちどり保育園	2019/03/04	39	調査原因：仮設保育所 トレンチを3ヵ所設定。G.L. -1.3mまで掘削。G.L. -0.3～-0.5mまで旧耕作土。G.L. -0.9～-1.2mまで砂混暗灰褐色粘質土。土器細片含む。以下で、黄灰褐色粘質土の地山層上面を検出。遺構・遺物なし。	市教委第90集
IKG19 立55	走谷 1 丁目474-3 他	2019/06/24	—	調査原因：宅地造成 G.L. -3.1mまで掘削。G.L. -3.0mまで灰色・黄灰色の砂、以下、暗灰黄色粘土。	市教委第92集
IKG19 立206	走谷 1 丁目52, 73	2020/03/26	—	調査原因：個人住宅 G.L. -1.0m以上、盛土。	市教委第92集

■ 姫塚古墳の既往の調査

調査名	調査地点	調査日	面積	概要	報告書
HDT-1	伊加賀寿町669	1992/10/27～11/12	60	調査原因：排水路整備工事 古墳周溝を検出、円筒埴輪出土	調査会年報14
姫塚古墳	伊加賀寿町669先	1992/10/22～11/12	約80	—	調査会年報14
Hdt94-8	伊加賀寿町131-5, 674-9	1995/02/17	2	—	市教委第29集
HDT-2	伊加賀寿町658	1998/10/01～10/27	約110	調査原因：温室建設 幅約2.7～4.0m、深さ0.3～1.0mの周濠を検出。北側周濠内から円筒埴輪、土師器、須恵器、滑石製勾玉などが出土。	調査会年報20
HDK-3	伊加賀寿町663-1, -5, 664-1	2014/04/24～04/29	65	調査原因：宅地造成 姫塚古墳の西側周濠（幅約4.0m）などを検出。円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）が4本分出土。	調査会年報36
HDK14-005	伊加賀寿町663-24	2015/01/16	3.5	G.L. -1.5mで姫塚古墳の埴土と考えられる淡褐色粘質シルトを検出。遺物なし。	市教委第79集
HDK15-6	伊加賀寿町663-31	2015/04/24	4.1	G.L. -1.5mで地山層検出。遺構・遺物なし。	市教委第82集

面積の単位は㎡。小数点以下の表記を統一していないが、これは各報告書によってその記載が統一されていないためである。

なお、（ ）付きの数値は調査面積ではなく、開発等の対象面積を指す。

報告書の欄について、「調査会年報●」は財団法人枚方市文化財研究調査会または公益財団法人枚方市文化財研究調査会の刊行している年報の巻号、「市教委第●集」は枚方市教育委員会が刊行している枚方市文化財調査報告のシリーズ番号を示す。

第3章 調査の方法

第1節 現地調査

調査名 調査名は「伊加賀遺跡・伊加賀古墳群他20-1」である。

地区割 世界測地系に準拠する平面直角座標系第VI系を基準とし、図6に示すI～VI段階の区画を設定している。今回の調査区の第I区画-第II区画-第III区画は、J6-16-13C～13F・14Fである。出土遺物の取り上げ作業もこの座標系に基づいており、第I～IV区画を用いて、調査区・層位・遺構ごとに取り上げた。取り上げた遺物には、当センター規定のラベルを添付し、調査名・地区割・層位/遺構面・遺構名・出土年月日・登録番号を記した。

掘削方法 表土・盛土および近世以降の堆積層を重機により掘削し（写真1-1）、それ以下の地層を人力により掘削した（写真1-2）。人力掘削では、主にスコップ・鋤簾などを用いて地層を確認しながら慎重に掘削し、出土遺物の収集と遺構の検出に努めた。

記録作業 遺構の図面は、全体図を50分の1、または100分の1、断面図は20分の1の縮尺で適宜作成した（写真1-3・4）。現地における写真撮影には、主にデジタルカメラ（NikonD5600）を用い、調査区全景や一部の遺構については6×7白黒フィルム・リバーサルフィルムを用いた中判フィルムカメラによる撮影も行った（写真1-5）。

遺構名 遺構名は通し番号を付し、「1土坑」・「23溝」といったように遺構番号-遺構種別名で表記している。

基礎整理作業 現場での作業と並行して、出土遺物の台帳登録・洗浄・注記、遺構図面と写真の整理・台帳作成などの基礎作業（写真1-6・7）も行っている。遺物への注記は「イカガ他20-1-登録番号」とした。

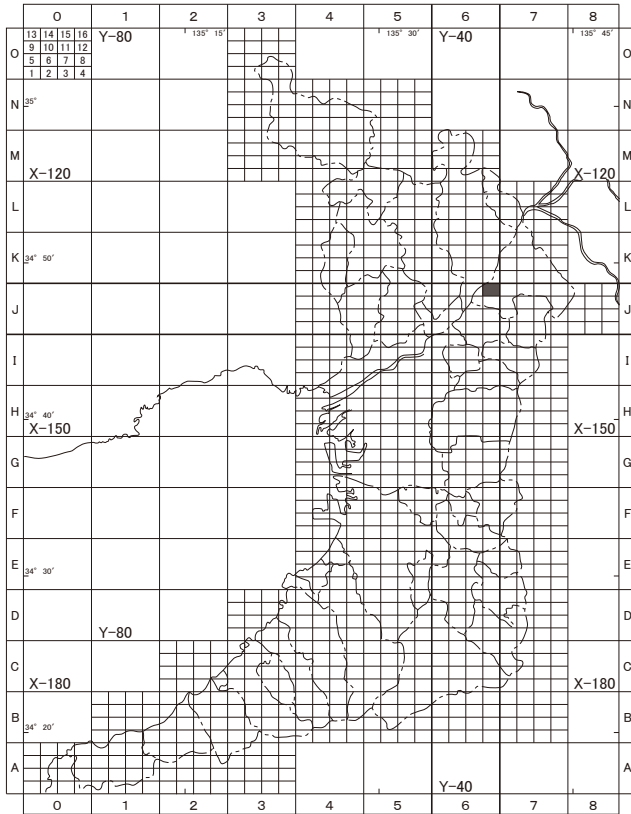
立会 各調査区の終了時には、大阪府教育庁文化財保護課による立会を実施し（写真1-8）、調査結果に関する確認と指示を仰いだ後、埋め戻した。

第2節 整理作業

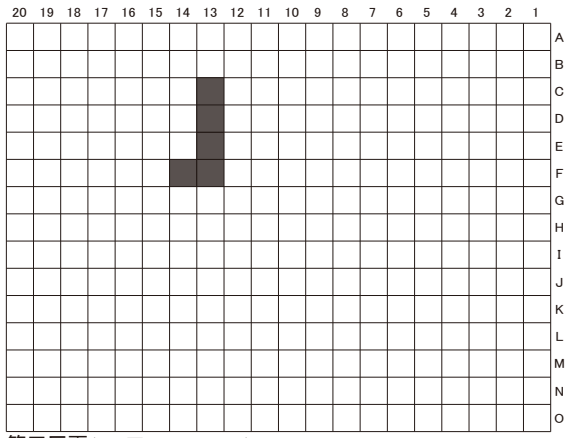
遺構図面 遺構図面については、現地で作成した実測図を整理した後に、Adobe社のPhotoshopCC・IllustratorCCを用いて作図・トレースを行った（写真1-9）。

遺物整理 遺物は内寸54.2×34.2×14.7cmのコンテナで8箱出土した。この整理作業についても、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に基づき接合・実測・写真撮影を実施した（写真1-10・11）。遺物図面のトレースにおいてもAdobe社のPhotoshopCC・IllustratorCCを使用した。

台帳作成 上記の作業と並行し、Microsoft社のExcelを用いて、出土遺物の登録台帳および遺構写真の写真台帳、遺構図面・遺物図面台帳を作成した。遺構図面・遺物図面は図面種類ごとに整理した上で図面番号を付与し、番号順に図面ケースに収納している。撮影した写真はフィルムと密着プリントをアルバムに収納し、撮影内容や撮影年月日などを記載した写真台帳を作成した。このような台帳作成により、随時その内容が把握できるように適切に保存・管理している。



第Ⅰ・Ⅱ区画(第Ⅰ区画:1区画=南北6×東西8km
第Ⅱ区画:1区画=南北1.5×東西2km)



第Ⅲ区画(1区画=100×100m)

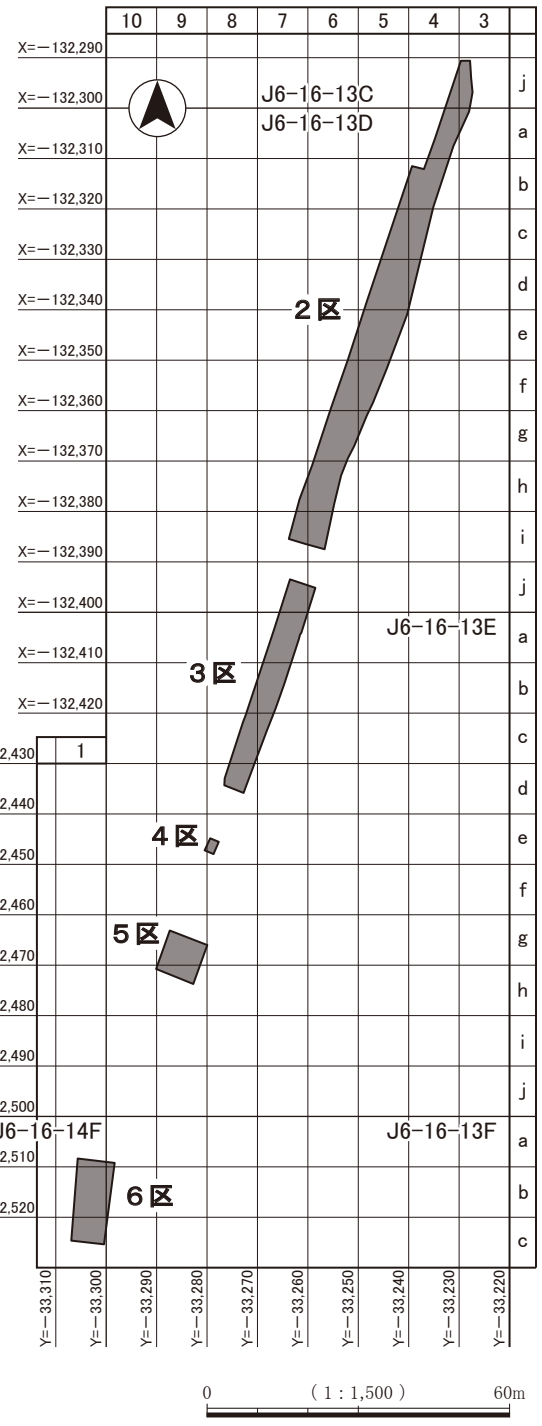
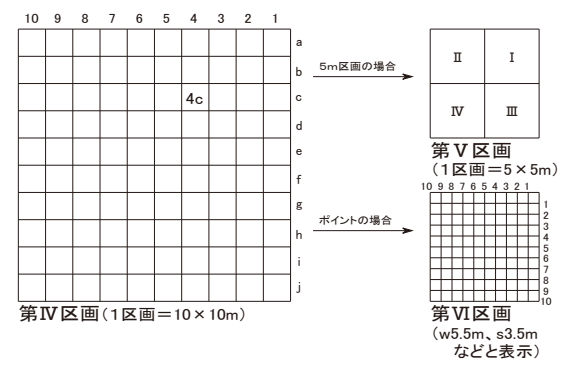


図6 地区割図



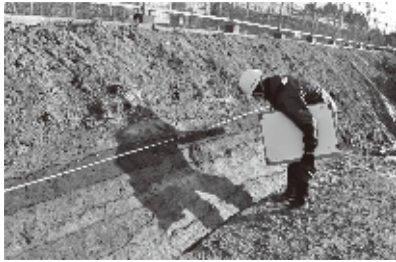
1. 機械掘削



2. 人力掘削



3. 全体図作成



4. 地層断面図作成



5. 遺構写真撮影



6. 遺物洗浄



7. 写真整理



8. 大阪府教育庁文化財保護課立会



9. 遺構図面デジタルトレース



10. 遺物接合



11. 遺物実測



12. 原稿執筆・編集

写真1 現地調査および整理作業風景

写真図版 写真図版に関しては、デジタルカメラや中判フィルムカメラにより撮影した遺構・遺物から、報告書に掲載するものを選別し、デジタルデータ化して作成した。

収納 出土遺物は、報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、掲載遺物には挿図番号や写真図版番号を記した当センター規定のラベルを添付した上で、掲載順にコンテナへ収納した。

原稿執筆・編集 上記の作業と並行して、報告書の文章を執筆し、Adobe社のInDesignCCを用いて編集し、報告書を完成させた（写真1-12）。

第4章 調査成果

第1節 基本層序

調査着手前の地盤高はT.P. +6.9～7.2m。基盤層の上面はT.P. +3.7～4.9mにて検出しており、現地表面から基盤層上面に至る2.3～3.2mの間に、古墳時代以降の各時期の地層が認められた。今回の調査対象地点では、地層の堆積は主として淀川の洪水に伴う土砂の供給により進行したものと考えられ、洪水による堆積層および、これが母材と推測される土壌層や耕作土層が確認できた。

今回の調査対象地点は、南北に約250mと広範囲に及んでいるため、必ずしも地層の堆積状況は一律ではないが、おおよそ以下のように地層を区分できる（図7～12、図版2～5）。

現代の盛土層

国土地理院の航空写真をみると、1979年までは調査対象地点のほぼ全てが耕作地であったことから、この盛土層は、1980年代以降の宅地造成に伴うものと考えられる。層厚0.7～1.2m。

第1層 近・現代の耕作土層

主として黒褐色～黄灰色を呈する細礫混じりシルト質砂～砂質シルト。層厚0.2～0.6m。

第2層 近世～近代の洪水堆積層および耕作土層

洪水堆積層である第2-1層と耕作土層である第2-2層の、上下2層に分けられる。

第2-1層は灰黄色～灰白色を呈する細～極粗砂。層厚0.2～1.0m。多くは洪水からの復旧のために一度掘り返された層である。第2-2層はさらに上下2層に分けられ、上部はオリーブ黒色～黄灰色を呈するシルト質砂～砂質シルトで、層厚0.2～0.3m。下部は灰オリーブ色～オリーブ灰色を呈するシルト質砂～砂質シルトおよびにぶい黄色を呈する砂質シルトで、層厚0.1～0.4m。

第2層からは17世紀以降の肥前磁器が出土しており、近世～近代に帰属する地層と考えられる。なお、第2-1層については、周辺の調査（IKG-38、HDK-3など）でも同様の地層が確認されている。淀川洪水の中でも特に大規模であった、明治18年の洪水によるものである可能性が考えられる。

第3層 中世の耕作土層

主として灰色を呈する砂質シルト～シルト質砂。2区北側では薄く層厚0.1m程度だが、南に行くほど厚みを増し、6区では層厚0.6m。シルトや砂の多寡、色調の違いにより第3-1層～第3-4層に細分が可能である。ただし、後世の耕作などにより失われていることも多く、必ずしも第3-1層～第3-4層の全ての地層が各調査区に揃って認められるわけではない。

第3-1層は、主として灰色を呈するシルト。層厚0.2m。上下の層と比べ、含まれる砂が極めて少ない。なお6区にのみ、このシルト層の母材となる可能性がある洪水堆積層が認められる。第3-2層は、主として灰色～オリーブ灰色を呈し、細砂が混じる砂質シルト～シルト質砂。層厚0.1～0.3m。第3-3層は、主として灰色～オリーブ灰色を呈し、細～中砂が比較的多く混じる砂質シルト～シルト質砂。層厚0.1～0.2m。第3-4層は、主として灰色を呈するシルト質細～粗砂と砂質シルト～極細砂のブロック土。層厚0.1m。

第3層からは瓦器・瓦質土器が出土しており、中世に帰属する地層と考えられる。第3-1層下面～第3-4層下面にかけては、畦畔や耕作溝・ピットなどの遺構を検出した。



图7 基本圖序

第4層 平安時代の土壌層と洪水堆積層

土壌層である第4-1層と洪水堆積層である第4-2層の、上下2層に分けられる。

第4-1層は、黄褐色を呈する細礫混じりシルト～極細砂および砂質シルト。層厚0.1～0.2m。第4-2層は、主として灰色を呈するシルト混じり細～極粗砂。層厚0.1～0.4m。上下の層に比べ砂礫が顕著で、2区北半部では中礫を伴う部分も観察される。ラミナは必ずしも明瞭でなく、若干擾乱を受けている可能性がある。

第4層からは黒色土器が出土しており、平安時代に帰属する地層と考えられる。第4-1層下面・第4-2層下面においては、畦畔・炭溜まり・溝・落ち込みなどの遺構を検出した。

第5層 飛鳥・奈良時代の土壌層

主として硬く締まった灰色～オリーブ黒色を呈する砂質シルト。層厚0.1～0.5m。シルトや砂の多寡により細分が可能であり、2区では第5-1層・第5-2層に、3区では第5-1層～第5-3層に分けられる。

第5-1層は、オリーブ黒色～オリーブ灰色を呈する粗砂～細礫混じり砂質シルト。層厚0.1～0.4m。第5-2層は、2区ではオリーブ黒色～灰色を呈する粘土～シルト、層厚0.1m。3区では灰色～オリーブ灰色を呈するシルト質砂～砂質シルト。層厚0.1～0.2m。第5-3層は、暗オリーブ灰色を呈する砂質シルト～シルト質砂。層厚0.1～0.2m。

第5層からは、主として古代の須恵器・土師器が出土している。黒色土器も出土しているが、混入程度は極めて僅かな量であるため、飛鳥・奈良時代に帰属する地層と考える。第5-1層下面～第5-3層下面にかけては、土坑・溝・ピットなどの遺構を検出した。特に2区北半部では掘立柱建物と考えられる柱穴列を確認しており、当時は集落域であったと推測される。

第6層 古墳時代の土壌層

砂礫の目立つ第6-1層と砂礫をほとんど含まない第6-2層の、上下2層に分けられる。

第6-1層は黄灰色～灰色を呈する中～粗砂混じりシルト。層厚0.1～0.2m。第6-2層は灰色～オリーブ黒色を呈するシルト。層厚0.1～0.2m。

第6層からは古墳時代の須恵器・土師器が出土している。明らかに古代と判断できる遺物は出土していないことから、古墳時代に帰属する地層と考える。第6-1層下面・第6-2層下面においては、土坑や地震による変形構造を検出した。

第7層 基盤層

主として黄褐色～オリーブ灰色を呈するシルト。検出した上面の高さは、2区でT.P. +4.9m、5区でT.P. +3.7mと、2区から5区に向かって低くなり、6区側で再び高くなる。なお6区にのみ、このシルト層の上位に層厚0.3～0.4mの厚い砂層が認められる。

第7層からは遺物が出土せず、遺構の存在も認められなかったことから、当層を基盤層と判断した。

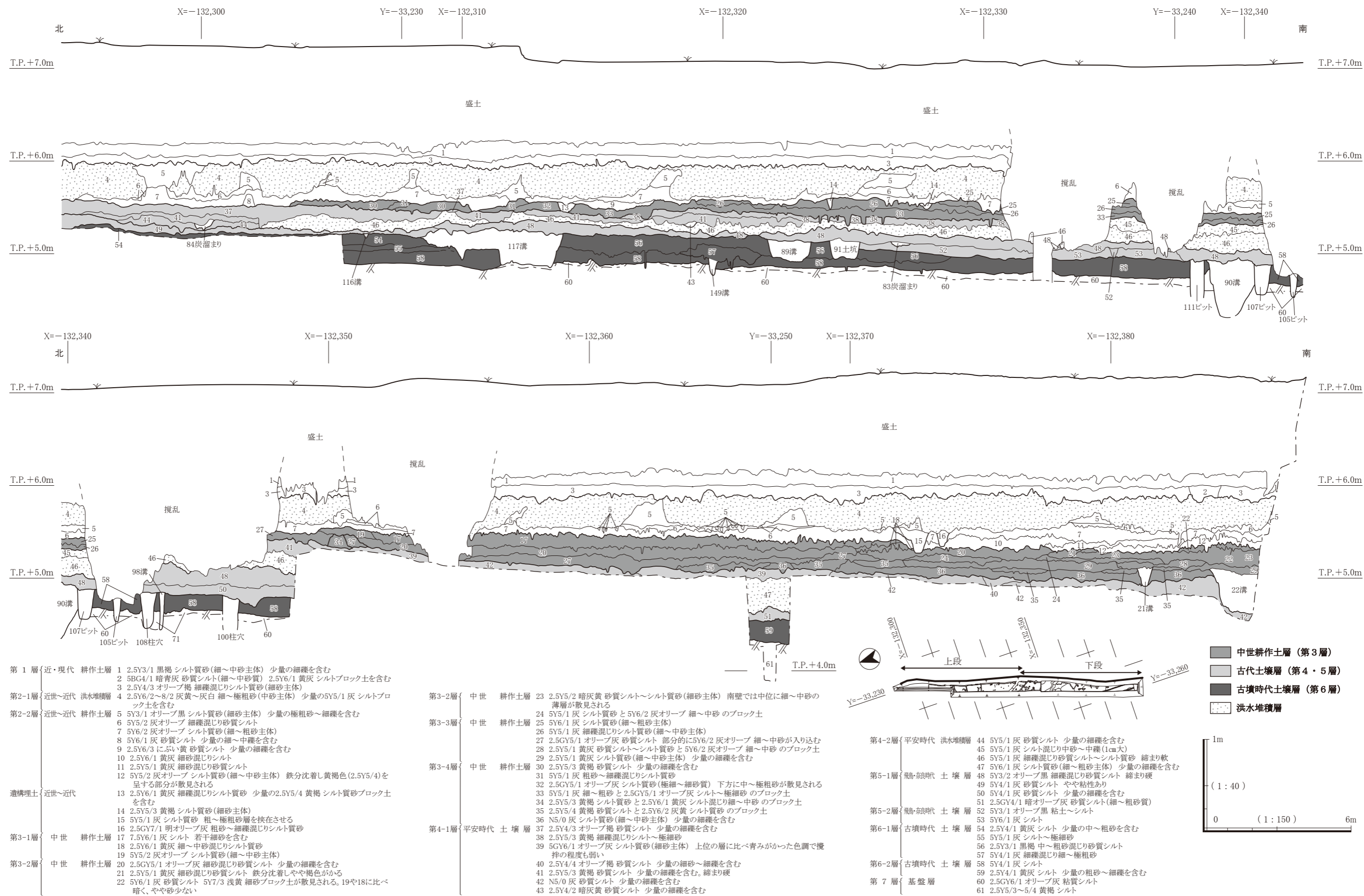
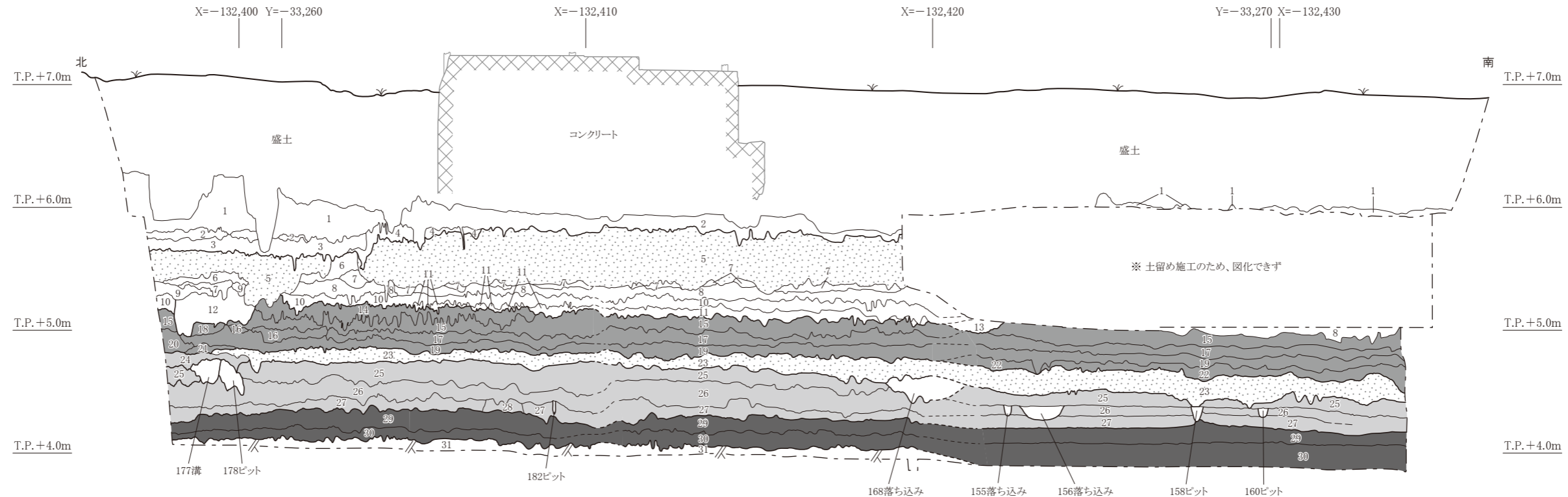
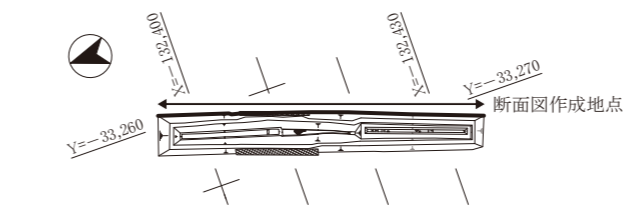


図8 2区 東壁 地層断面図



第1層	近・現代	耕作土層	1	2.5Y3/1 黒褐 砂質シルト	2.5Y5/2 暗灰黄 細～中砂層を挟みさせる
			2	2.5Y3/2 黒褐 砂質シルト	
			3	2.5Y2/1 黒 砂質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり細～中砂ブロック土を含む
第2-1層	近世～近代	洪水堆積層	4	2.5Y7/1 灰白 シルトと 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルトのブロック土	
第2-2層	近世～近代	耕作土層	5	5Y6/1 灰 細～粗砂	
			6	2.5Y4/1 黄灰 シルト質砂(細～中砂主体)	
			7	5Y4/1 灰 砂質シルト	
			8	5GY6/1 オリーブ灰 砂質シルト	やや砂気強い
			9	5Y6/1 灰 シルト混じり細～中砂	
			10	2.5GY6/1 オリーブ灰 砂質シルト	8に比べややシルト気強い
			11	7.5GY6/1 緑灰 シルトと 2.5GY6/1 オリーブ灰 砂質シルトのブロック土	
遺構埋土	近世～近代		12	7.5Y6/1 灰 細～粗砂	
			13	2.5Y6/1 黄灰 砂質シルトと 2.5Y7/1 灰白 細～粗砂のブロック土	
第3-1層	中世	耕作土層	14	2.5GY6/1 オリーブ灰 シルト～極細砂	少量の2.5GY6/1 オリーブ灰 砂質シルトブロック土を含む
第3-2層	中世	耕作土層	15	10Y5/1 灰 砂質シルト	少量の7.5GY6/1 緑灰 シルトブロック土を含む。やや砂気強い
第3-3-1層	中世	耕作土層	16	10Y5/1 灰 シルト質砂	
			17	10Y5/1 灰 砂質シルト	
第3-3-2層	中世	耕作土層	18	5Y4/1 灰 シルト質砂(細～中砂主体)	少量の粗砂～細礫を含む。19に比べやや粗い砂が目立つ
			19	5Y4/1 灰 シルト質砂(細～中砂主体)	17に比べ砂気強く、色調暗い
			20	5Y6/1 灰 シルト～極細砂と 5Y6/1 灰 シルト質砂のブロック土	
			21	10Y5/1 灰 シルト質砂(細～中砂主体)	
第3-4層	中世	耕作土層	22	N5/0 灰 シルト混じり細～中砂	
第4-2層	平安時代	洪水堆積層	23	7.5Y6/1 灰 シルト混じり細～粗砂	少量の7.5Y6/1 灰 砂質シルトブロック土を含む
		土 壤 層	24	2.5Y4/1 黄灰 シルト混じり細砂～細礫	



第5-1層	飛鳥奈良時代	土 壤 層	25	5BG5/1 青灰 砂質シルト	多量の粗砂～細礫を含む
第5-2層	飛鳥奈良時代	土 壤 層	26	5GY5/1 オリーブ灰 砂質シルト	
第5-3層	飛鳥奈良時代	土 壤 層	27	5GY4/1 暗オリーブ灰 砂質シルト	締まり硬
			28	2.5Y4/1 黄灰 シルト質砂	
第6-1層	古墳時代	土 壤 層	29	5Y4/1 灰 細砂～小礫混じりシルト	
第6-2層	古墳時代	土 壤 層	30	5Y3/1 オリーブ黒シルト	
第7層	基盤層		31	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト	

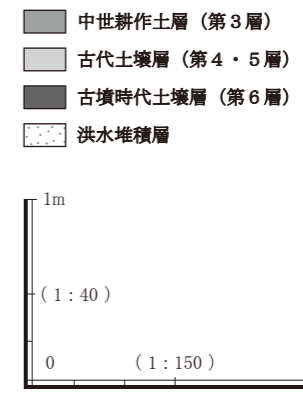


図9 3区 東壁 地層断面図

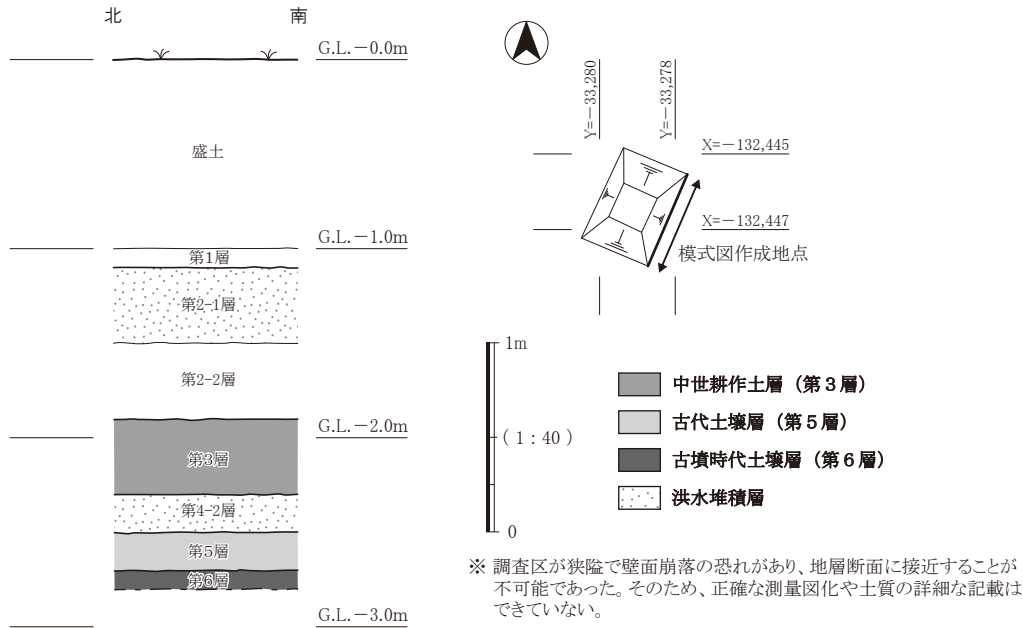


図10 4区 東壁 地層断面模式図

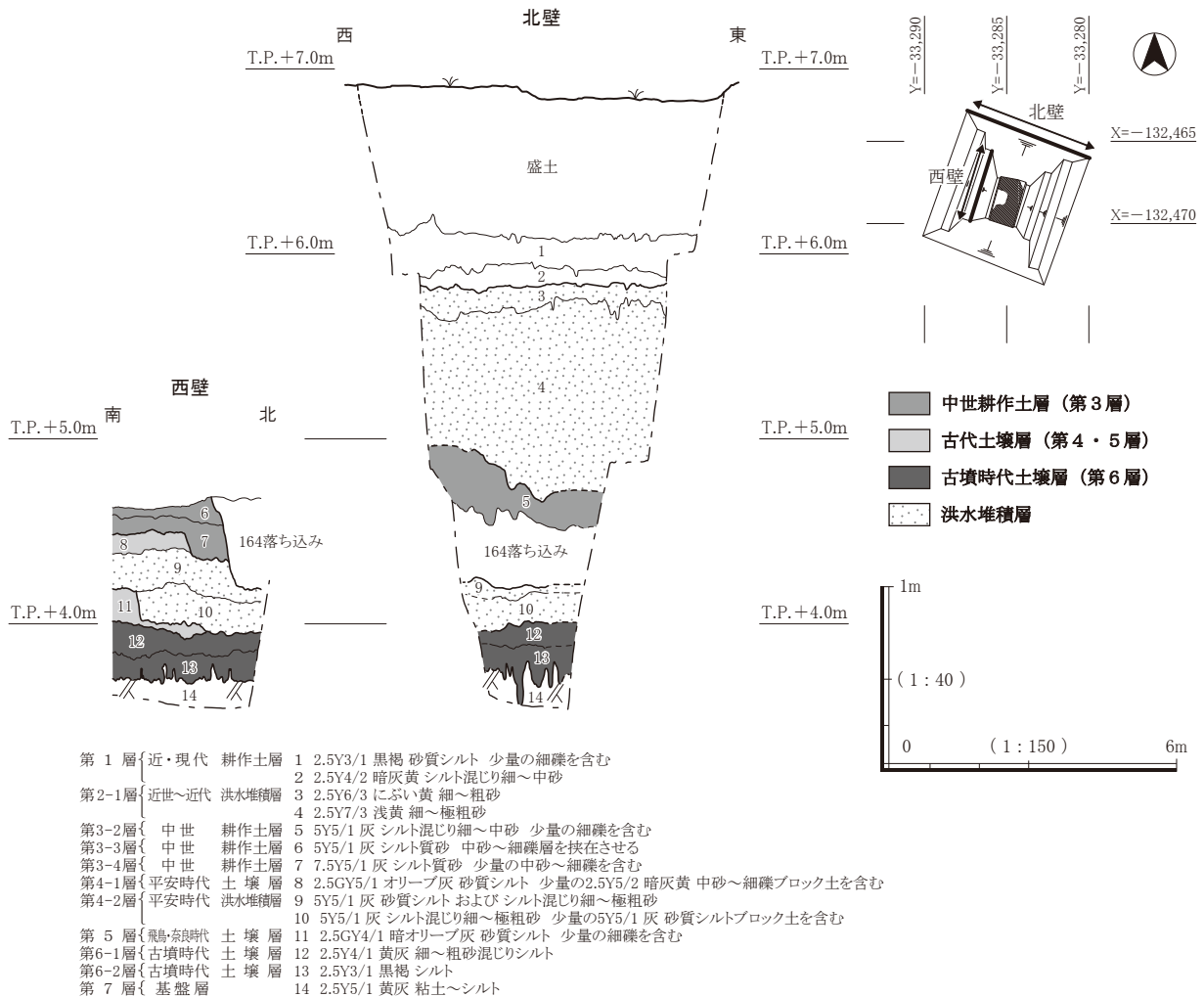


図11 5区 西壁・北壁 地層断面図

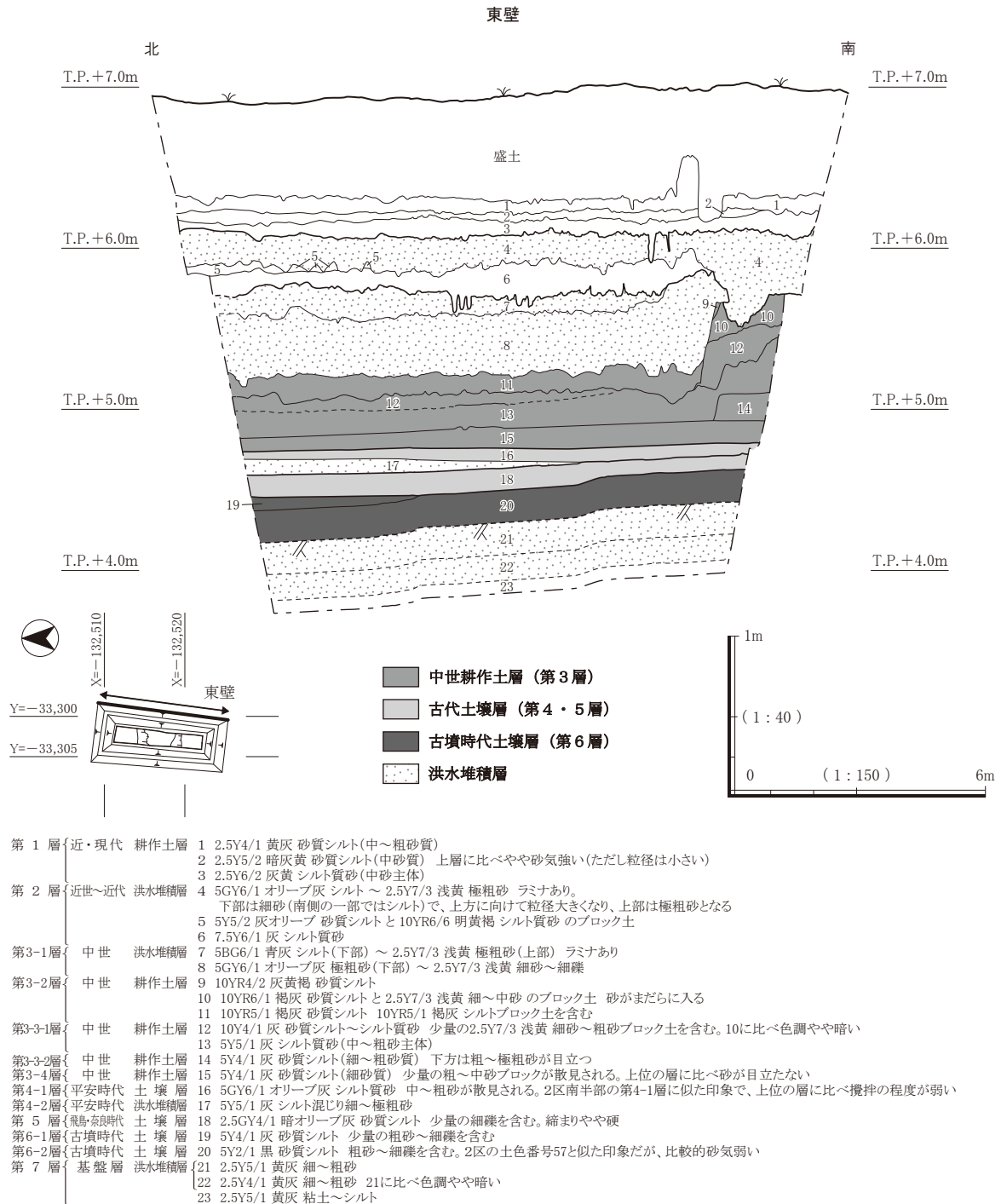


図 12 6区 東壁 地層断面図

第2節 2区の調査成果

第1項 成果の概要

2区は今回着手した調査区のうち、最も北側に位置する。蝶矢踏切の北側から南北約100mにわたって伸びる、幅4.0～8.4mの調査区である。

調査の結果、古墳時代から中世にかけての各時期の遺構が検出され、特に第3-3層下面・第4-1層下面・第5-1層下面・第6-1層下面において、顕著に遺構が確認された。

中世の遺構面である第3-3層下面と、平安時代の遺構面である第4-1層下面では、畦畔や溝など耕作に関わると考えられる遺構が検出された。飛鳥・奈良時代の遺構面である第5-1層下面では、溝や土坑・ピットだけでなく掘立柱建物も検出され、集落域となっていた可能性が高い。古墳時代の遺構面である第6-1層下面では、土坑や溝・ピットを検出した。このうち、120土坑からは比較的残りの良い古墳時代前期の土師器甕が出土している。

ひらかたパーク内で実施された伊加賀遺跡第6次調査においても、奈良時代の掘立柱建物が検出されていることから、当時は当調査区から東側の比較的標高の高い地点にかけて集落域が広がっていた可能性がある。砂礫が顕著で洪水により形成されたとみられる第4-2層の堆積後には、土地利用のあり方が変化するようであり、平安時代・中世の遺構面では、耕作に関わる遺構が確認された。耕作に関わる遺構の多くは、およそ正方位に沿って延びており、この方位に基づく地割の存在が想定される。

なお、遺物としては土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・製塩土器・埴輪・羽口・砥石・鉄滓などが出土し、極めて少数ではあるが、弥生土器や縄文土器・石鏃なども出土している。

第2項 中世の遺構と遺物

(1) 遺構

中世の遺構は第3-1層から第3-4層の各層の下面において検出した。主たる遺構は耕作に関わると考えられる畦畔や段差・溝である。これらの遺構の多くは、東西方向・南北方向とほぼ正方位に沿うように延びており、この方位に基づく地割の存在が想定される。

【第3-1層下面】 (図13)

第3-1層は中世の耕作土層であり、2区ではその南半部のみが存在している。当層を掘削した第3-1層下面の高さはT.P. +5.3～5.5mである。当面では性格不明のピットを数基検出した。

これらの遺構は2区南半部でも北側に集中して分布している。以下の面で検出されているような、畦畔や溝などの明らかに耕作に関わると考えられる遺構は確認できなかった。

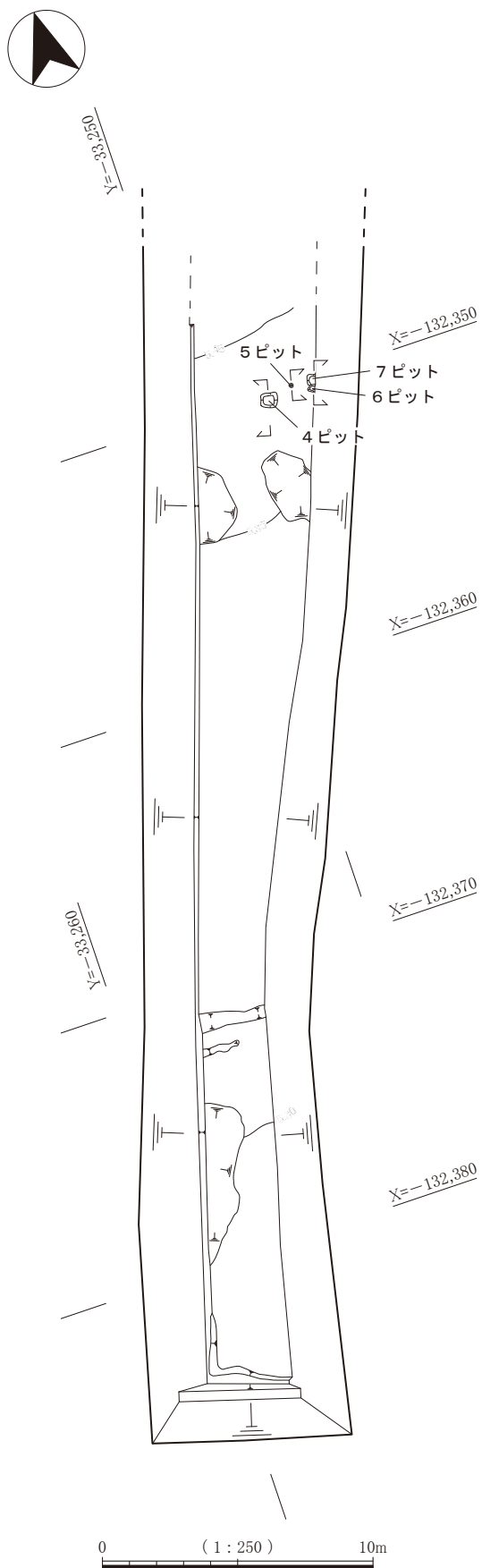
4ピット (図14)

2区南半部の北側、X = -132,350、Y = -33,247で検出した。長軸62cm、短軸55cmの隅丸方形を呈し、深さ10cm。主としてオリブ灰色シルト混じり細～粗砂が堆積している。遺物は黒色土器B類の細片が出土した。

5ピット (図14)

2区南半部の北側、X = -132,350、Y = -33,246で検出した。直径20cmの円形を呈し、深さ8cm。灰色シルト質砂(細～中砂主体)が堆積している。遺物は出土しなかった。

【 第3-1層下面 遺構平面図 】



【 第3-2層下面 遺構平面図 】

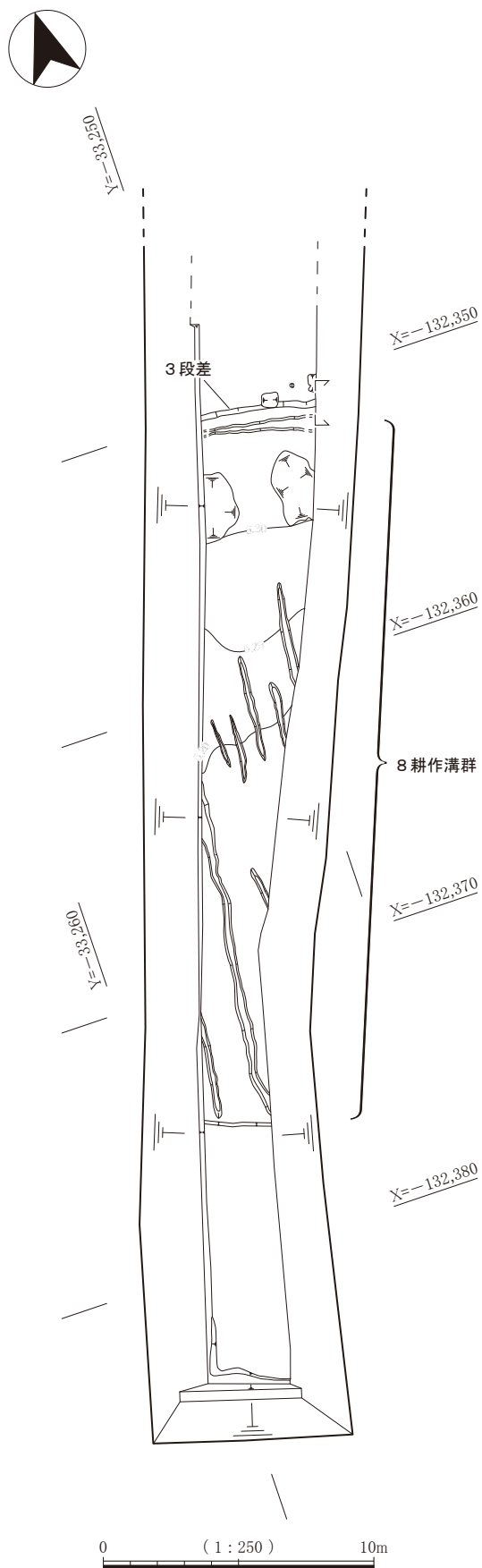


図 13 2区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構平面図

【 第3-1層下面遺構 】

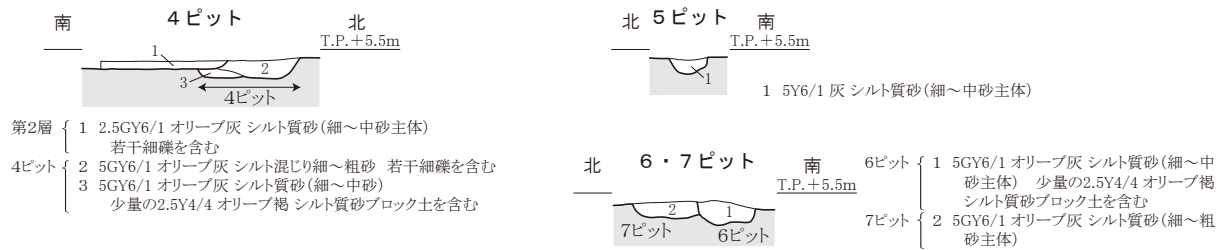


図14 2区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構断面図

6ピット (図14)

2区南半部の北側、X = -132,350、Y = -33,246で検出した。直径26cmのやや歪な円形を呈し、深さ12cm。7ピットを切っており、この遺構より新しい。オリーブ灰色シルト質砂(細～中砂主体)が堆積している。遺物は出土しなかった。

7ピット (図14)

2区南半部の北側、X = -132,350、Y = -33,246で検出した。長軸40cm、短軸32cmの隅丸方形を呈し、深さ9cm。6ピットに切られており、この遺構より古い。オリーブ灰色シルト質砂(細～粗砂主体)が堆積している。遺物は出土しなかった。

【 第3-2層下面 】 (図13)

第3-2層は中世の耕作土層であり、2区ではその南半部のみが存在している。当層を掘削した第3-2層下面の高さはT.P.+5.2～5.4mである。当面では耕作に関わると考えられる段差と溝群を検出した。

段差は2区南半部の北側、耕作溝群は2区南半部の北側から中央にかけて検出した。いずれの遺構も正方位に沿って延びており、この方位に基づく地割の存在が想定される。

3段差 (図14)

2区南半部の北側、X = -132,350付近で検出した。遺構の輪郭は、少量の細礫を含むオリーブ灰色細砂混じり砂質シルト(第3-2層)と、これと比較して砂気の弱いオリーブ灰色砂質シルト(第3-3層)との土質の違いから捉えた。南側へ8cm程度下がる段が東西方向に延びる。

第3-2層を形成した耕作に伴うものと考えられる。下位の第3-3層下面で検出した10畦畔と位置・方位をほぼ同じくしており、前段階の地割を踏襲しているものとみられる。

8耕作溝群 (図13)

2区南半部の北側から中央、X = -132,350～-132,375にかけて検出した主として南北方向に延びる多数の溝については、一括して8耕作溝群とした。幅15～45cm、深さ3～5cm。主として灰色砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

【 第3-3層下面 】 (図15、図版6)

第3-3層は中世の耕作土層であり、2区ではその北端部を除くほぼ全域に存在している。当層を掘削した第3-3層下面の高さはT.P. +5.1~5.6mである。当面では耕作に関わると考えられる畦畔や段差・溝群の他、性格不明のピットなどを検出した。

畦畔は2区南半部の北側で検出した。上位の第3-2層下面で検出した3段差と位置・方位をほぼ同じくしており、地割として後世に踏襲された可能性がある。この畦畔の約22m南側でも同じ方位に延びる段差を検出した。この段差についても耕作に関わる可能性がある。また、2区南端部で検出した22溝も同じく東西方向に延びる。この溝は幅175cm以上、深さ42cmと他の溝と比べ著しく規模が大きく、主要な水路としての機能を有していたと推定される。

これらの遺構の方位とは異なり、南北方向に延び、幅10~35cmと狭く、深さ10cm未満の浅い溝を調査区の広い範囲で検出した。このような溝の多くは、耕作の際に犁などによって掘り起こされた痕跡と考えられる。

10畦畔 (図16、図版6)

2区南半部の北側、X=-132,350付近で検出した。遺構の輪郭は、オリーブ灰色砂質シルト(第3-3層)と、これと比較して黄褐色系の色が強く砂気も強い、シルト質砂とシルト混じり細~中砂のブロック土(第3-4層)との土質の違いから捉えた。幅105~122cm、高さ13cm。東西方向に延びる。

上位の第3-2層下面で検出した3段差と位置・方位をほぼ同じくしており、地割として後世に踏襲された可能性がある。

19段差 (図16)

2区南半部の中央、X=-132,371付近で検出した。遺構の輪郭は、少量の細礫を含む黄灰色シルト質砂(第3-3層)と、これと比較して黄褐色系の色が強い砂質シルトとシルト質砂のブロック土(第3-4層)との土質の違いから捉えた。南側へ7cm程度下がる段が東西方向に延びる。

第3-3層を形成した耕作に伴うものと考えられる。

22溝 (図16、図版7)

2区南半部の南側、X=-132,384付近で検出した。南側の肩部は調査範囲外であり、検出幅175cm、深さ42cm。東西方向に延びる。埋土は3層に分かれ、下位にラミナがみられる灰色細~極粗砂、中位に灰色砂質シルト、上位に灰黄色細~中砂とオリーブ灰色シルトのブロック土が堆積している。遺物は瓦器・瓦質土器・黒色土器A類・須恵器・土師器の細片が出土した。

他の溝と比べ著しく規模が大きいため、主要な水路としての機能を有していたと推定される。一方、以下に記す耕作溝群や溝の多くは、耕作の際に犁などによって掘り起こされた痕跡と考えられる。

9耕作溝群 (図15)

2区南半部の北側、X=-132,341~-132,350にかけて検出した東西方向および南北方向に延びる多数の溝については、一括して9耕作溝群とした。幅10~25cm、深さ1~6cm。灰色砂もしくは灰色シルト質砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

17耕作溝群 (図15)

2区南半部の中央、X=-132,354~-132,365にかけて検出した南北方向に延びる多数の溝については、一括して17耕作溝群とした。幅10~20cm、深さ3~7cm。主として灰色砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

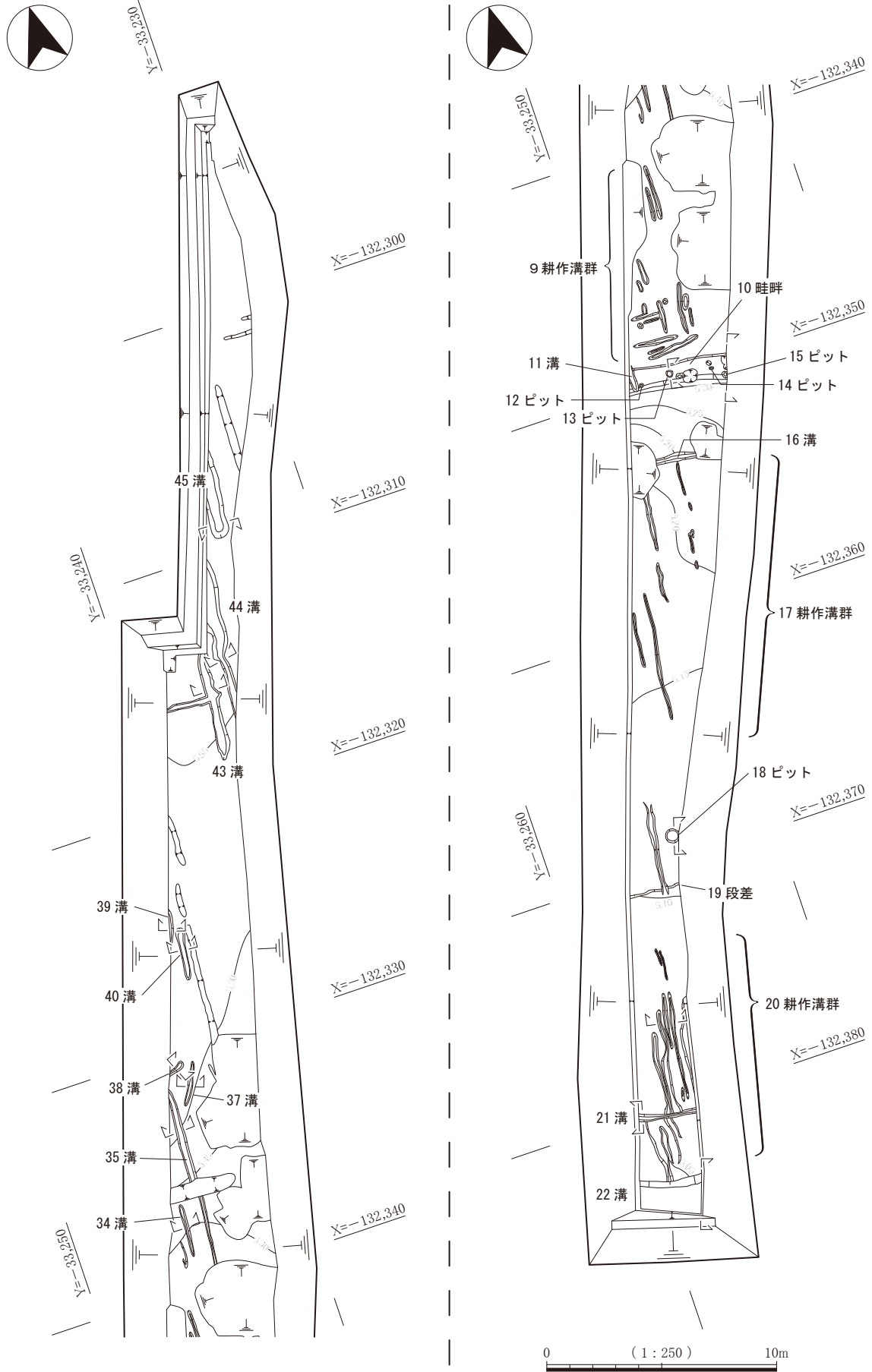


图 15 2区 第3-3層下面 遺構平面図

20耕作溝群 (図16)

2区南半部の南側、 $X = -132, 374 \sim -132, 383$ にかけて検出した南北方向に延びる多数の溝については、一括して20耕作溝群とした。幅13～35cm、深さ3～7cm。21溝に切られており、この遺構より古い。黄灰色粗砂～細礫混じりシルト質砂が堆積している。遺物は瓦器・須恵器・土師器の細片が出土した。

21溝 (図16)

2区南半部の南側、 $X = -132, 380$ 付近で検出した。幅15～30cm、深さ4～11cm。東西方向に延びる。20耕作溝群を切っており、この遺構より新しい。黄灰色細砂～細礫混じりシルト質砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

34溝 (図16)

2区北半部の南側、 $Y = -33, 245$ 付近で検出した。幅15cm、深さ3cm。南北方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

35溝 (図16)

2区北半部の南側、 $Y = -33, 244$ 付近で検出した。幅17～35cm、深さ11cm。南北方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は土師器皿(図19-1)の他、須恵器・土師器の細片が出土した。

37溝 (図16)

2区北半部の南側、 $Y = -33, 243$ 付近で検出した。幅30cm、深さ5cm。北東-南西方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

38溝 (図16)

2区北半部の南側、 $X = -132, 331$ 付近で検出した。幅20～30cm、深さ4cm。東北東-西南西方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

39溝 (図16)

2区北半部の中央、 $Y = -33, 242$ 付近で検出した。幅15～20cm、深さ6cm。北東-南西方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

40溝 (図16)

2区北半部の中央、 $Y = -33, 242$ 付近で検出した。幅22～37cm、深さ4cm。南北方向に延びる。黄灰色シルト混じり細～中砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

43溝 (図16)

2区北半部の中央、 $X = -132, 316, Y = -33, 237$ 付近で検出した。幅47cm、深さ5cmで南北方向と、幅25cm、深さ3cmで東西方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

44溝 (図16)

2区北半部の北側、 $Y = -33, 235$ 付近で検出した。幅27～76cm、深さ5cm。南北方向に延びる。黄灰色細礫混じりシルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

45溝 (図16)

2区北半部の北側、 $Y = -33, 234$ 付近で検出した。幅70cm、深さ6cm。南北方向に延びる。黄灰色シルト質砂とオリーブ褐色砂質シルトのブロック土が堆積している。遺物は出土しなかった。

12～15ピット (図16)

2区南半部の北側、 $X = -132, 350 \sim -132, 351, Y = -33, 246 \sim -33, 249$ にかけて検出した。いずれ

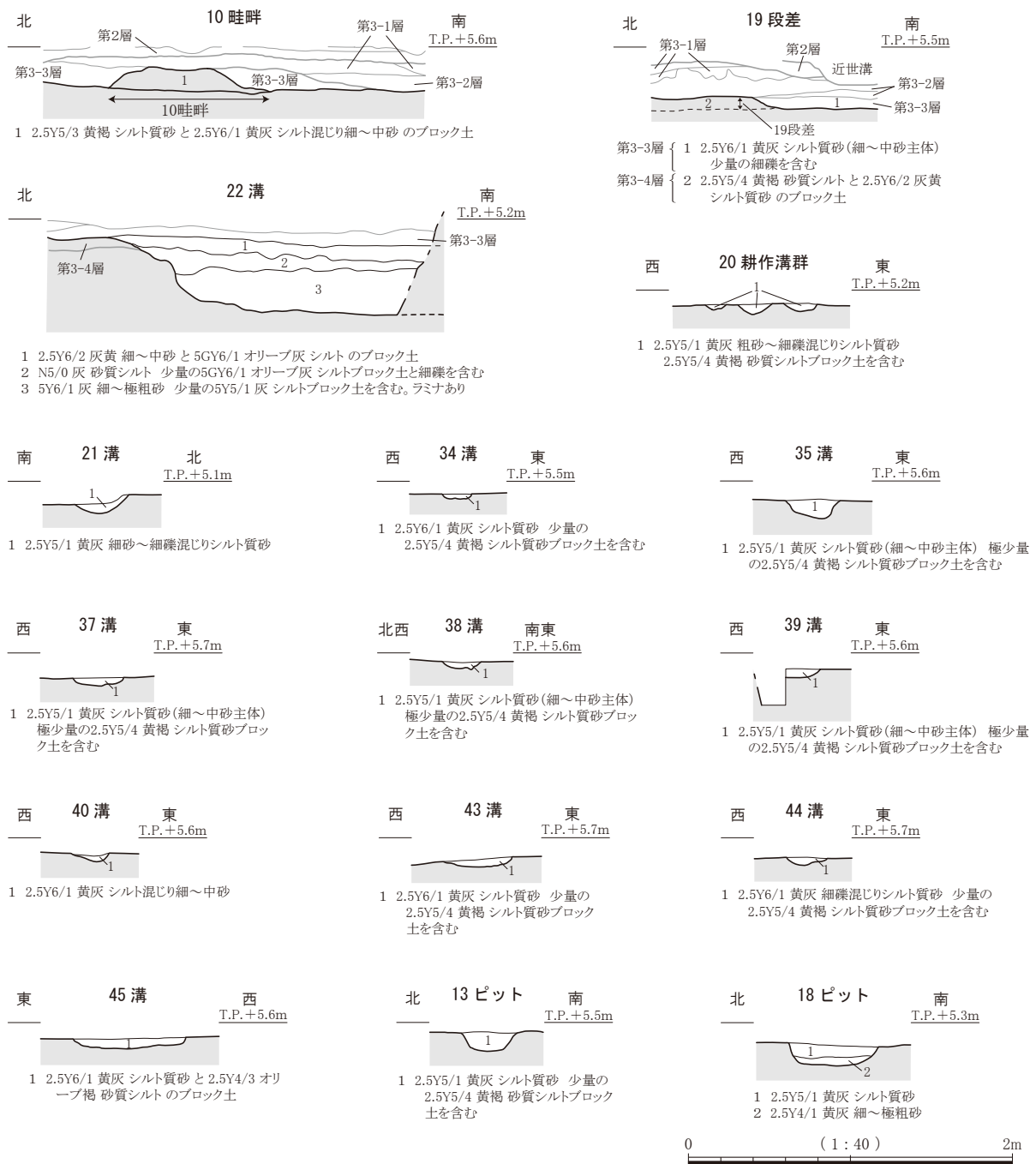


図16 2区 第3-3層下面 遺構断面図

も直径17～34cmの円形を呈し、深さ4～12cm。いずれも10畦畔を切っており、この遺構より新しい。黄灰色シルト質砂が堆積している。15ピットからは土師器の細片が出土したが、他のピットからは遺物は出土しなかった。

18ピット (図16)

2区南半部の中央、X=-132,369、Y=-33,254で検出した。直径53cmの円形を呈し、深さ13cm。埋土は上下2層に分かれ、下位に黄灰色細～極粗砂、上位に黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

【 第3-4層下面 】 (図17・18、図版7)

第3-4層は中世の耕作土層であり、2区ではその北端部を除くほぼ全域に存在している。当層を掘削した第3-4層下面の高さはT.P. +5.0~5.5mである。当面では耕作に関わると考えられる溝の他、性格不明のピット・落ち込みを検出した。

検出した溝のうち、2区南端部に存在する23溝と32溝は互いに規模が類似しており、同時に存在したとは限らないが、約2.4m間隔で並行する。他の溝と比べやや規模が大きく、埋土も異なることから、水路としての機能を有していた可能性もある。一方、耕作の際に掘り起こされた痕跡とみられる溝も、2区北半部の南側を中心に検出している。落ち込みは2区の広い範囲で検出した。多くが不定形であり、自然地形とみられる。

23溝 (図18)

2区南半部の南側、Y=-33,257付近で検出した。幅27~40cm、深さ8cm。南北方向に延びる。灰色シルト質砂が堆積している。遺物は土師器皿(図19-2)の他、須恵器・土師器の細片が出土した。

32溝 (図18)

2区南半部の南側、Y=-33,259付近で検出した。幅44cm、深さ10cm。南北方向に延びる。灰色細礫混じりシルト質砂が堆積している。遺物は瓦器・土師器の細片が出土した。

50耕作溝群 (図18)

2区北半部の南側、X=-132,342~-132,347にかけて検出した主として南北方向に延びる多数の溝については、一括して50耕作溝群とした。幅11~20cm、深さ2~5cm。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

52溝 (図18)

2区北半部の南側、Y=-33,244付近で検出した。幅16~32cm、深さ2cm。南北方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

53溝 (図18)

2区北半部の中央、Y=-33,242付近で検出した。幅16~92cm、深さ5cm。南北方向に延びる。黄灰色シルト質砂が堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

24落ち込み (図18)

2区南半部の中央、X=-132,369、Y=-33,254で検出した。長軸105cm、短軸76cmの楕円形を呈し、深さ4cm。灰色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

27落ち込み (図18)

2区南半部の中央、X=-132,363、Y=-33,253で検出した。長軸160cm、短軸63cmの不定形を呈し、深さ4cm。灰色シルト質砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

28落ち込み (図18)

2区南半部の中央、X=-132,362、Y=-33,253で検出した。長軸104cm、短軸69cmの不定形を呈し、深さ6cm。灰色シルト質砂が堆積している。遺物は黒色土器B類・須恵器・土師器の細片が出土した。

31落ち込み (図18)

2区南半部の南側、X=-132,373、Y=-33,256で検出した。長軸99cm、短軸57cmの楕円形を呈し、深さ5cm。黄灰色細礫混じりシルト質砂が堆積している。遺物は土師器甕(図19-3)の他、土師器の細片が出土した。

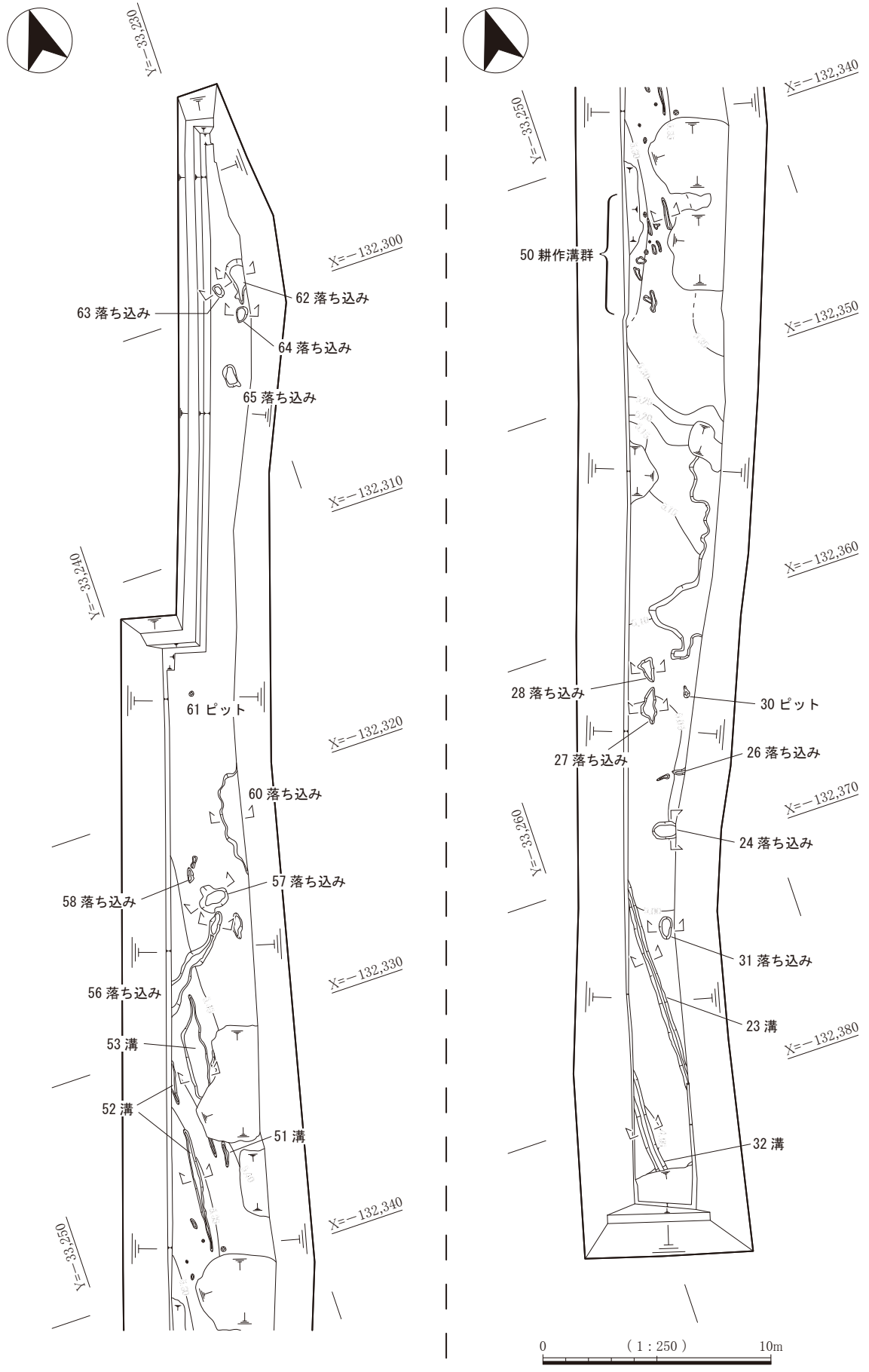


図17 2区 第3-4層下面 遺構平面図

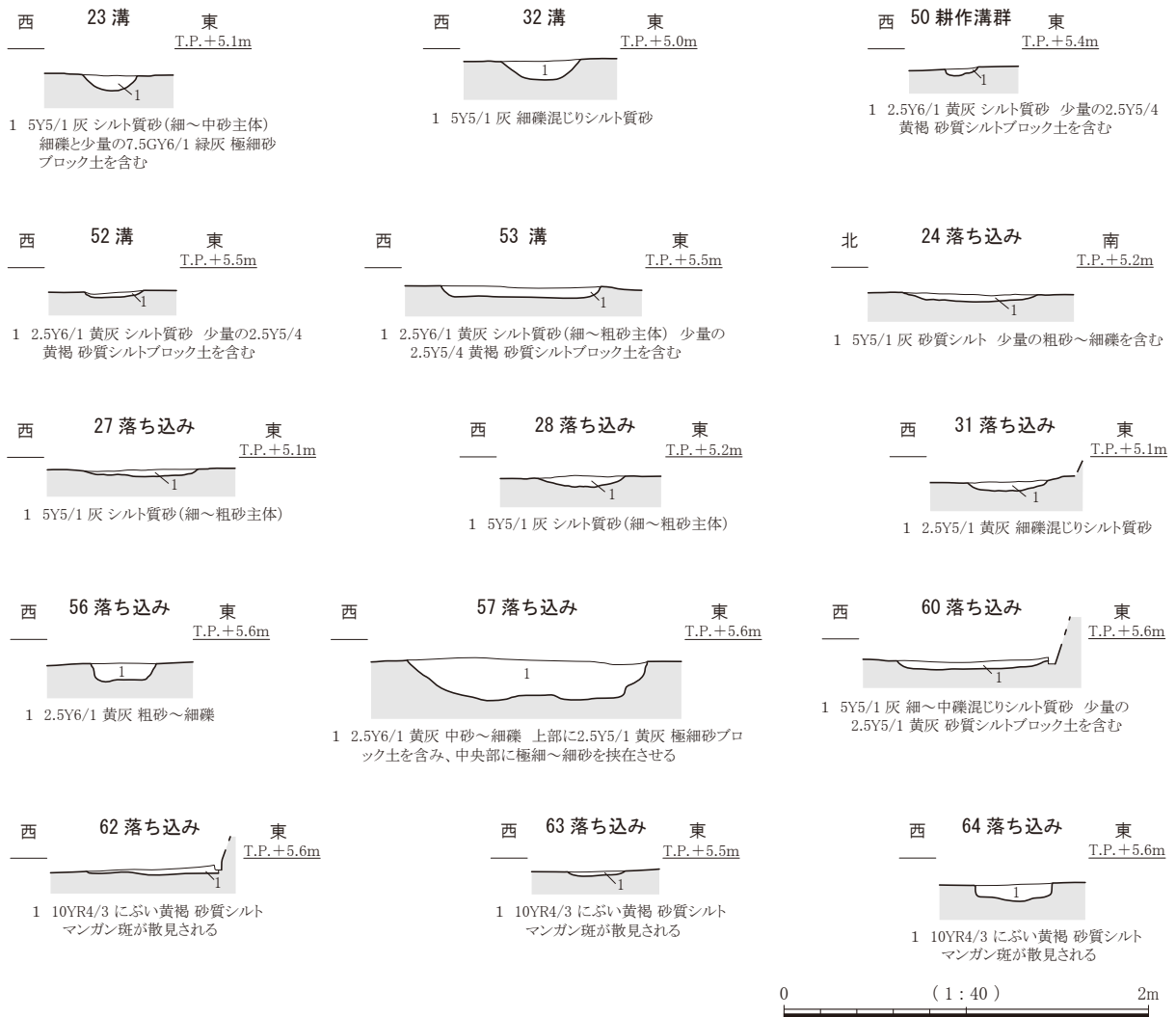


図 18 2区 第3-4層下面 遺構断面図

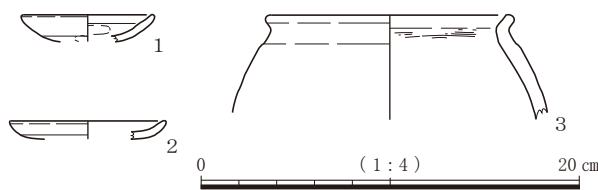


図 19 2区 23・35溝、31落ち込み 出土遺物

56落ち込み (図18)

2区北半部の中央、X = -132, 325 ~ -132, 328、Y = -33, 239 ~ -33, 243で検出した。幅35~76cmの溝状を呈し、北東-南西方向にやや蛇行しながら延びる。深さ9cm。黄灰色粗砂～細礫が堆積している。遺物は黒色土器B類・須恵器の細片が出土した。

57落ち込み (図18)

2区北半部の中央、X = -132, 324、Y = -33, 239で検出した。長軸131cm、短軸116cmの不定形を呈し、深さ23cm。黄灰色中砂～細礫が堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

60落ち込み (図18)

2区北半部の中央、X = -132, 320 ~ -132, 324、Y = -33, 237で検出した。長軸493cm、短軸96cmの不定形を呈し、深さ4cm。灰色細～中礫混じりシルト質砂が堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

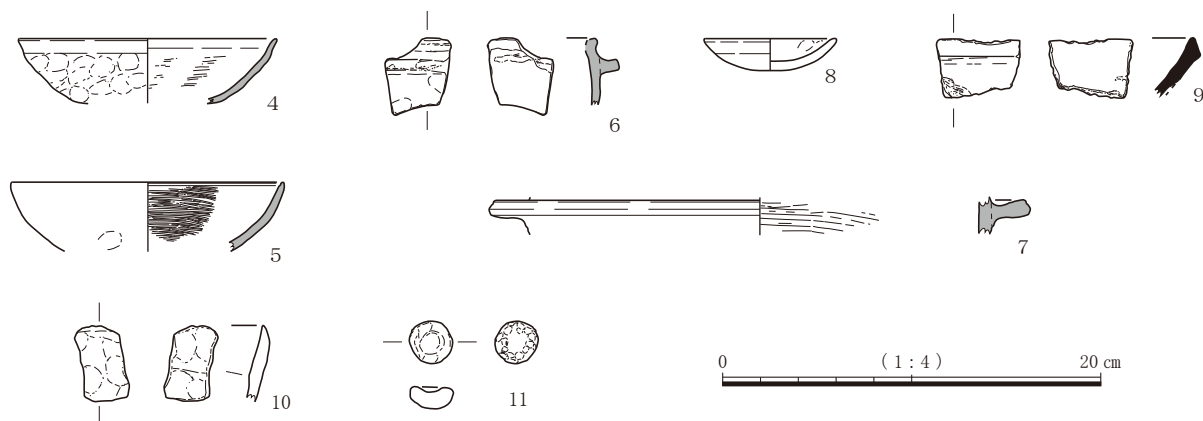


図20 2区 第2層～第3-4層 出土遺物

62落ち込み (図18)

2区北半部の北側、X=-132,299、Y=-33,230で検出した。長軸200cm、短軸76cmの不定形を呈し、深さ3～5cm。マンガン斑が散見されるにぶい黄褐色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

63落ち込み (図18)

2区北半部の北側、X=-132,299、Y=-33,231で検出した。長軸62cm、短軸38cmの楕円形を呈し、深さ2cm。マンガン斑が散見されるにぶい黄褐色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

64落ち込み (図18)

2区北半部の北側、X=-132,301、Y=-33,230で検出した。長軸76cm、短軸51cmの楕円形を呈し、深さ10cm。マンガン斑が散見されるにぶい黄褐色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器・鉄滓の細片が出土した。

(2) 遺物 (図19・20、図版21)

第3-1層～第3-4層および各層下面の遺構からは、主として瓦器・瓦質土器・須恵器・土師器が出土した。

図19は遺構出土遺物。このうち、2は23溝、1は35溝、3は31落ち込みより出土した。1～3は土師器。1・2は皿。いずれも口径が7～8cm前後と推定される。中世前期(12～13世紀)頃か。3は甕の口縁部～体部。平安時代。

図20は第2層～第3-4層出土遺物。このうち、10は第2層、6・7は第3-2層、4・8・11は第3-3層、5・9は第3-4層より出土した。

4・5は瓦器椀。5は口縁部内端に沈線が施され、内面のヘラミガキは密である。4・5ともに体部外面にはヘラミガキが施されない。中世前期(13世紀)頃か。6・7は瓦質土器羽釜。6はミニチュア。8は土師器皿。中世前期(12～13世紀)頃か。9は須恵器鉢。口縁端部の形状から中世前期(12世紀末～13世紀初頭)のものと考えられる。10は製塩土器。内外面にユビオサエがみられる。奈良時代か。11は用途不明の土製品。直径2.3cmの小さい円盤状を呈し、厚さ1.1cm。上面がわずかに凹む。

また、実測図化は行わなかったが、第3-3層より牛または馬と考えられる歯が出土している(図版21-122)。

第3項 平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構

平安時代の遺構は第4-1層下面・第4-2層下面において検出した。第4-1層下面の遺構はやや希薄であるが、ほぼ正方位に沿って延びる畦畔や溝が検出された。第3-2層下面や第3-3層下面と同様に、耕作に関わると考えられる。第4-2層下面の遺構もやや希薄である。性格不明のピットや自然地形とみられる落ち込みが主であり、明確な耕作の痕跡は認められない。第4-2層下面と第4-1層下面とでは遺構の様相が異なっており、第4-1層下面以降の時期には土地利用のあり方が生産域へと変化したものとみられる。この変化には、第4-2層を形成する洪水が契機となっている可能性がある。

なお、第1章第2節に記したように、2区については第4-1層以下の調査は北半部のみで行った。

【第4-1層下面】(図21、図版8)

第4-1層は平安時代の土壌層であり、2区の全域に存在している。当層を掘削した第4-1層下面の高さはT.P. +5.2~5.4mである。当面では耕作に関わると考えられる畦畔や溝の他、炭溜まりなどを検出した。

畦畔は2区北半部の中央で検出した。ほぼ正方位に沿って南北方向に延びており、中世の遺構面にみられた正方位に基づく地割が平安時代まで遡りうることを推測させる。また、炭溜まりを2区北端部で検出した。この遺構からは轆の羽口が出土しており、付近で鍛冶を行っていた可能性も考えられる。

66畦畔(図22、図版8)

2区北半部の中央、Y=-33,240付近で検出した。遺構の輪郭は、黄褐色砂質シルト(第4-1層)と、これと比較して灰色系の色が強く締まりの悪い灰色砂質シルト(第4-2層)との土質の違いから捉えた。幅76~137cm、高さ5~10cm。主としてほぼ正方位に沿うように南北方向に延び、X=-132,321付近では東西方向に分岐する。

67溝(図22)

2区北半部の南側、Y=-33,245付近で検出した。幅36cm、深さ6cm。南北方向に延びる。にぶい黄褐色シルトと黄灰色シルト質砂のブロック土が堆積している。遺物は出土しなかった。

68溝(図22)

2区北半部の南側、Y=-33,248付近で検出した。幅24cm、深さ8cm。南北方向に延びる。灰色砂質シルトと黄褐色砂質シルトのブロック土が堆積している。遺物は出土しなかった。

84炭溜まり(図22)

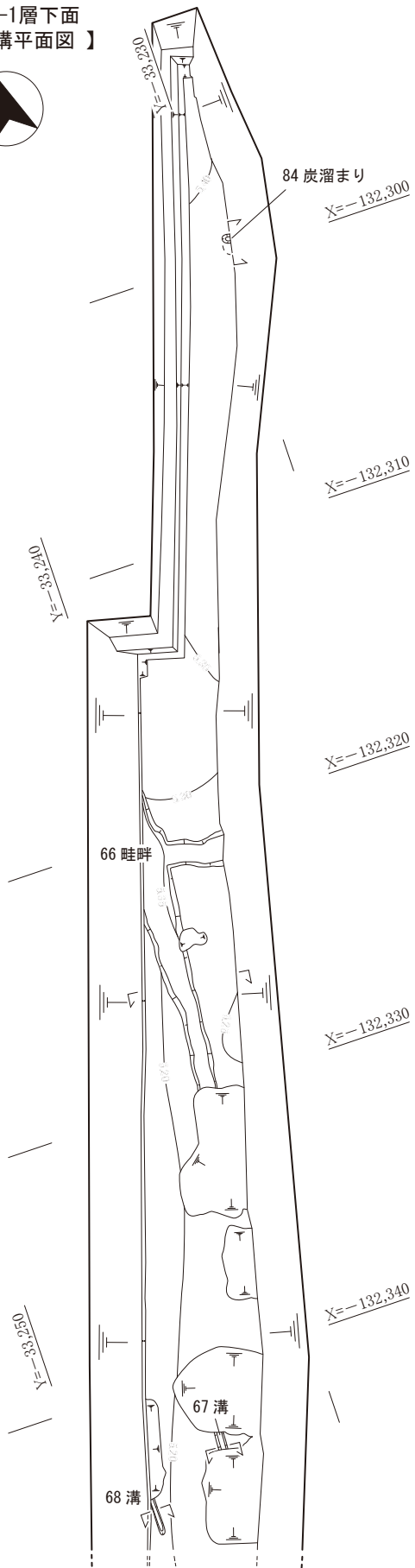
2区北半部の北側、X=-132,300、Y=-33,230で検出した。直径36cmの円形を呈し、深さ11cm。炭粒が散見される黄灰色砂質シルトが堆積している。遺物は轆の羽口(図23-12)が出土した。

【第4-2層下面】(図21)

第4-2層は平安時代の洪水堆積層であり、2区ではその北端部を除くほぼ全域に存在している。当層を掘削した第4-2層下面の高さはT.P. +5.0~5.3mである。当面の遺構はやや希薄であり、性格不明の溝やピット、自然地形とみられる落ち込みを検出した。

ピットは2区北端部で検出した。いずれも小規模で、それぞれの位置関係からも掘立柱建物や柵などを構成する可能性は低い。溝は2区北半部の北側と南側で検出した。第4-1層下面より上位の遺構面に

【 第4-1層下面
遺構平面図 】



【 第4-2層下面
遺構平面図 】

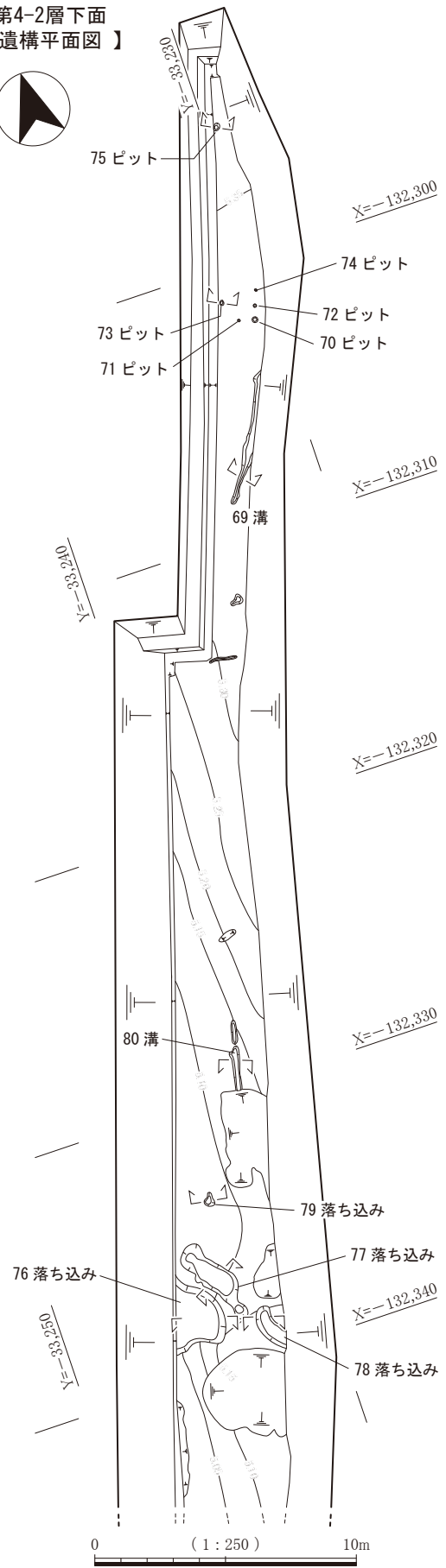
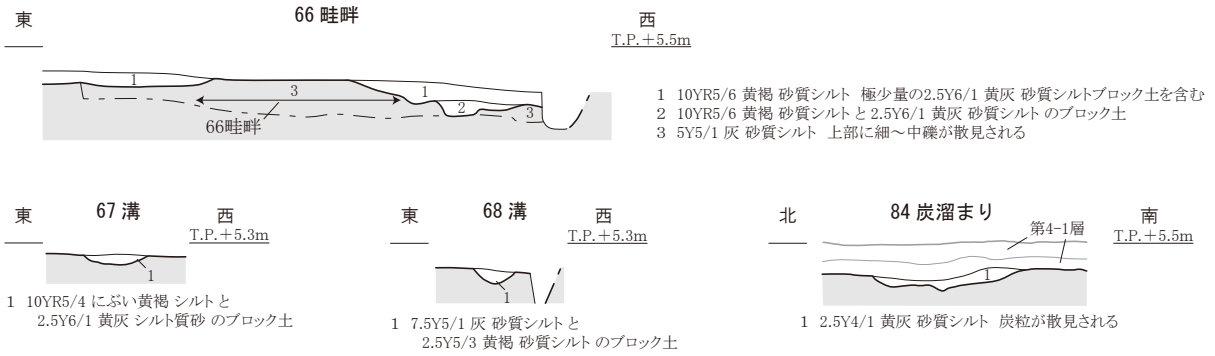


図 21 2区 第4-1層下面・第4-2層下面 遺構平面図

【 第4-1層下面遺構 】



【 第4-2層下面遺構 】

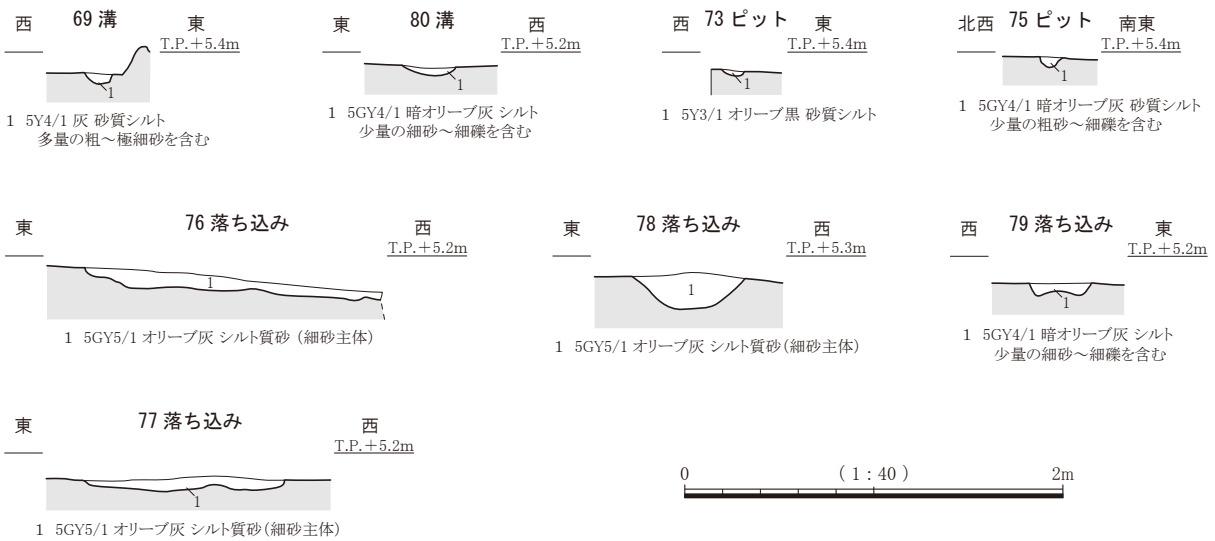


図 22 2区 第4-1層下面・第4-2層下面 遺構断面図

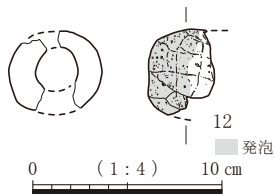


図 23 2区 84 炭溜まり 出土遺物

で検出した溝とは異なり、正方位からはやや逸れた方位に延びる。落ち込みは2区北半部の南側で検出した。不定形で自然地形とみられる。

以上のように、当面では明確な耕作の痕跡は認められなかった。

69溝 (図22)

2区北半部の北側、X = -132, 304 ~ -132, 309にかけて検出した。幅20~38cm、深さ6cm。北東-南西方向に延びる。灰色砂質シルトが堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

80溝 (図22)

2区北半部の中央、Y = -33, 240付近で検出した。幅19~38cm、深さ5cm。北北東-南南西方向に延びる。暗オリーブ灰色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

73ピット (図22)

2区北半部の北側、X = -132, 301、Y = -33, 232で検出した。直径20cmの円形を呈し、深さ3cm。オリーブ黒色砂質シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

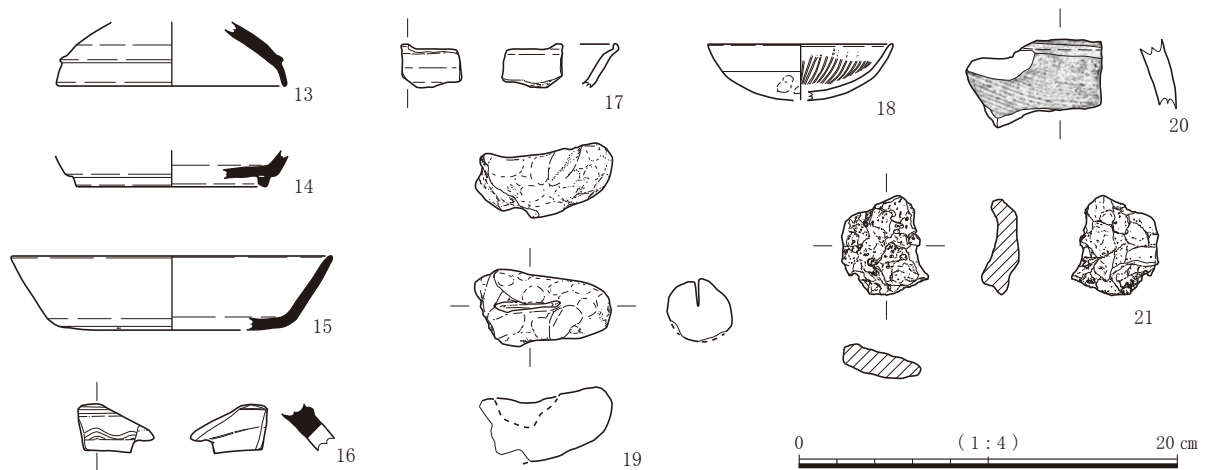


図24 2区 第4-1層・第4-2層 出土遺物

75ピット (図22)

2区北半部の北側、X=-132, 295、Y=-33, 230で検出した。長軸32cm、短軸22cmの楕円形を呈し、深さ6cm。暗オリーブ灰色砂質シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

76落ち込み (図22)

2区北半部の南側、X=-132, 339、Y=-33, 245で検出した。長軸311cm、短軸188cmの不定形を呈し、深さ8cm。オリーブ灰色シルト質砂が堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

77落ち込み (図22)

2区北半部の南側、X=-132, 337、Y=-33, 244で検出した。長軸319cm、短軸99cmの不定形を呈し、深さ7cm。オリーブ灰色シルト質砂が堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

78落ち込み (図22)

2区北半部の南側、X=-132, 339、Y=-33, 242で検出した。幅60~70cmの弧状を呈し、深さ18cm。オリーブ灰色シルト質砂が堆積している。遺物は黒色土器A類の細片が出土した。

79落ち込み (図22)

2区北半部の南側、X=-132, 334、Y=-33, 243で検出した。長軸52cm、短軸42cmの北側が狭まる瓢箪形を呈し、深さ7cm。暗オリーブ灰色シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

(2) 遺物 (図23・24、図版21)

第4-1層・第4-2層および各層下面の遺構からは、主として黒色土器・須恵器・土師器が出土した。

図23は84炭溜まり出土遺物。12は轆の羽口。体部外径4.7cm、送風孔直径2.3cm。先端部はすぼまり、被熱による発泡がみられる。

図24は第4-1層・第4-2層出土遺物。このうち、14・17・20は第4-1層、15・18・19・21は第4-2層、13・16は側溝(第4-1層・第4-2層)より出土した。13~16は須恵器。13は有蓋高杯の蓋。古墳時代中期前葉の初期須恵器。14は杯B、15は杯A。14・15ともに奈良時代。16は器台の脚部。波状文が施され、方形のスカシを有する。古墳時代。17・18は土師器。17は杯Aまたは皿A。奈良時代。18は杯C。内面に暗文が施される。飛鳥時代。19は韓式系土器。甌または鍋の把手部。上面に溝が刻まれる。20は埴輪。やや湾曲しており、朝顔形埴輪の肩部と考えられる。21は鉄滓。重量は27.6g。下面には炉床土が付着している。残りが悪いため不確かではあるが、椀形滓の可能性はある。

第4項 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

(1) 遺構

飛鳥・奈良時代の遺構は第5-1層下面・第5-2層下面において検出した。特に第5-1層下面では顕著に遺構が存在し、掘立柱建物をはじめとして溝や土坑などが検出された。第3-2層下面から第4-1層下面にかけての遺構面とは異なり、多くの遺構の方位が正方位から逸れている。また、明確に耕作に関わると考えられる遺構が検出されず、その一方で掘立柱建物が検出されたことから、この時期には集落域が形成されていたものと推測される。

伊加賀遺跡第6次調査においても奈良時代の掘立柱建物が検出されており、2区から東側の比較的標高の高い地点にかけて集落域が広がっていた可能性がある。また、今回の調査地の北東側で行われた第76次調査において、第5-1層下面で検出された掘立柱建物や溝と方位が近いとみられる溝が検出されている。それゆえ、第76次調査の行われた地点とも何らかの関係性を有する可能性も考えられる。

一方、第5-2層下面の遺構は希薄であり、落ち込みを1基検出したのみである。

【 第5-1層下面 】 (図25、図版9)

第5-1層は飛鳥・奈良時代の土壌層であり、2区のほぼ全域に存在している。当層を掘削した第5-1層下面の高さはT.P. +4.8~5.3mである。当面では掘立柱建物や溝・土坑・炭溜まり・柱穴・ピットなどの遺構を検出した。

掘立柱建物は2区北半部の南側で検出された。その南北軸方向は座標北に対し東に30°振っており、正方位からは逸れている。この掘立柱建物の南側には、その南辺に並行するような溝(95溝)が延びている。方位を同じくすることをもって時期も近いと考えるならば、この溝から飛鳥時代の土師器杯(図30-23)が出土していることから、この掘立柱建物は飛鳥時代に帰属する可能性が高い。

また2区北半部の北側で検出した117溝からは、比較的残りの良い埴輪が出土した他、韃の羽口や鉄滓・砥石など鍛冶に関連する遺物もまとめて出土した点が注目される。

掘立柱建物1 (図26、図版9・10)

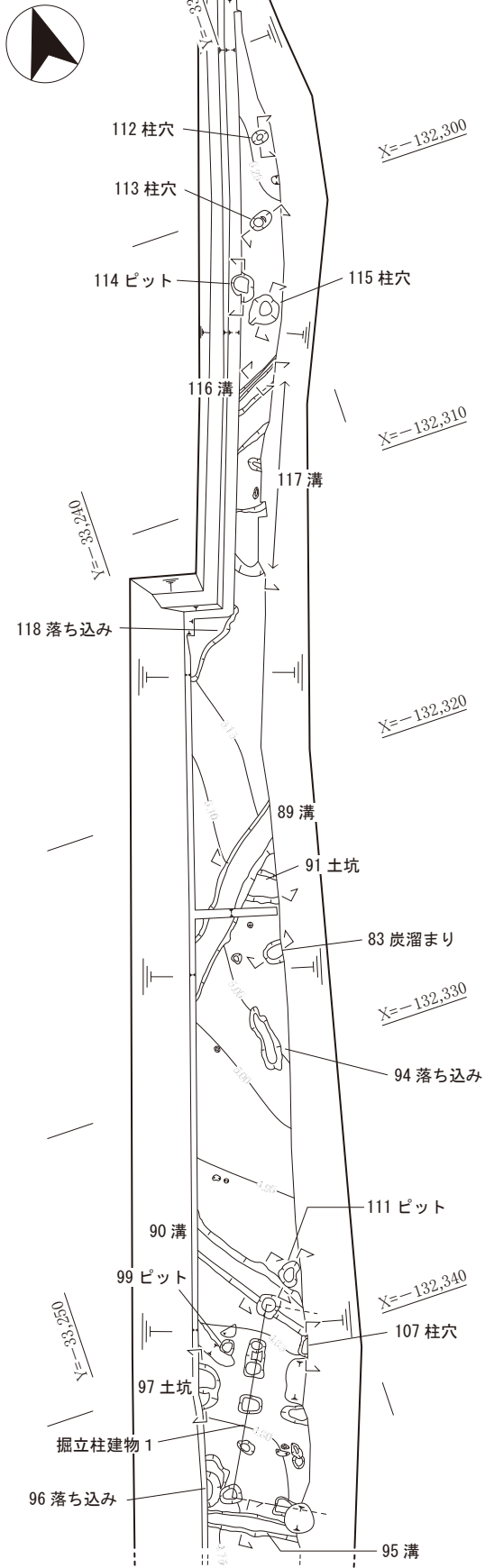
2区北半部の南側、X=-132,338~-132,346、Y=-33,242~-33,247にかけて検出した。100~104・106柱穴から構成され、108柱穴についてもこの一部となる可能性がある。南北4間(7.13m)、東西1間(2.04m)以上の側柱建物。東側は調査範囲外に及ぶ。南北軸方向は、N-30°-E。南北方向の柱間は約1.5~2.0m、東西方向の柱間は約2.0m。

柱穴の多くは一辺65~90cmのやや歪な隅丸方形を呈し、深さ40~50cm。104柱穴は他と比べ細長く、長軸141cm、短軸76cmの隅丸長方形を呈し、深さ50cm。102柱穴はやや規模が小さく、長軸68cm、短軸42cmのやや歪な楕円形を呈し、深さ46cm。108柱穴は長軸107cm、短軸66cmのやや歪な楕円形を呈し、深さ39cm。いずれの柱穴も柱痕跡がなく、柱は抜き取られたものとみられる。

100柱穴からは遺物は出土しなかったが、それ以外の柱穴からは、須恵器・土師器が出土した。いずれも細片のため、柱穴の出土遺物をもって当遺構の時期を決めるのは難しい。ただし、上述のように方位を同じくすることをもって時期も近いと考えられるならば、当遺構の南辺に並行する95溝の出土遺物より、飛鳥時代に帰属する可能性が高い。

なお遺構の新旧関係として、90溝・96落ち込みを切っており、これらの遺構より新しい。

【 第5-1層下面
遺構平面図 】



【 第5-2層下面
遺構平面図 】

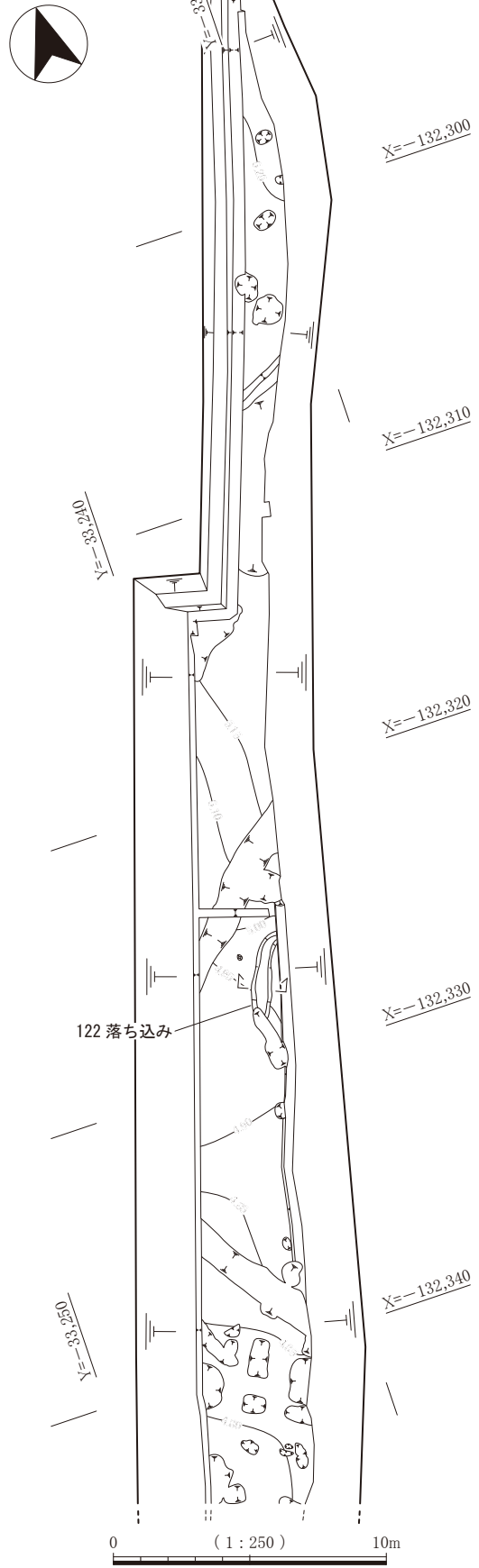
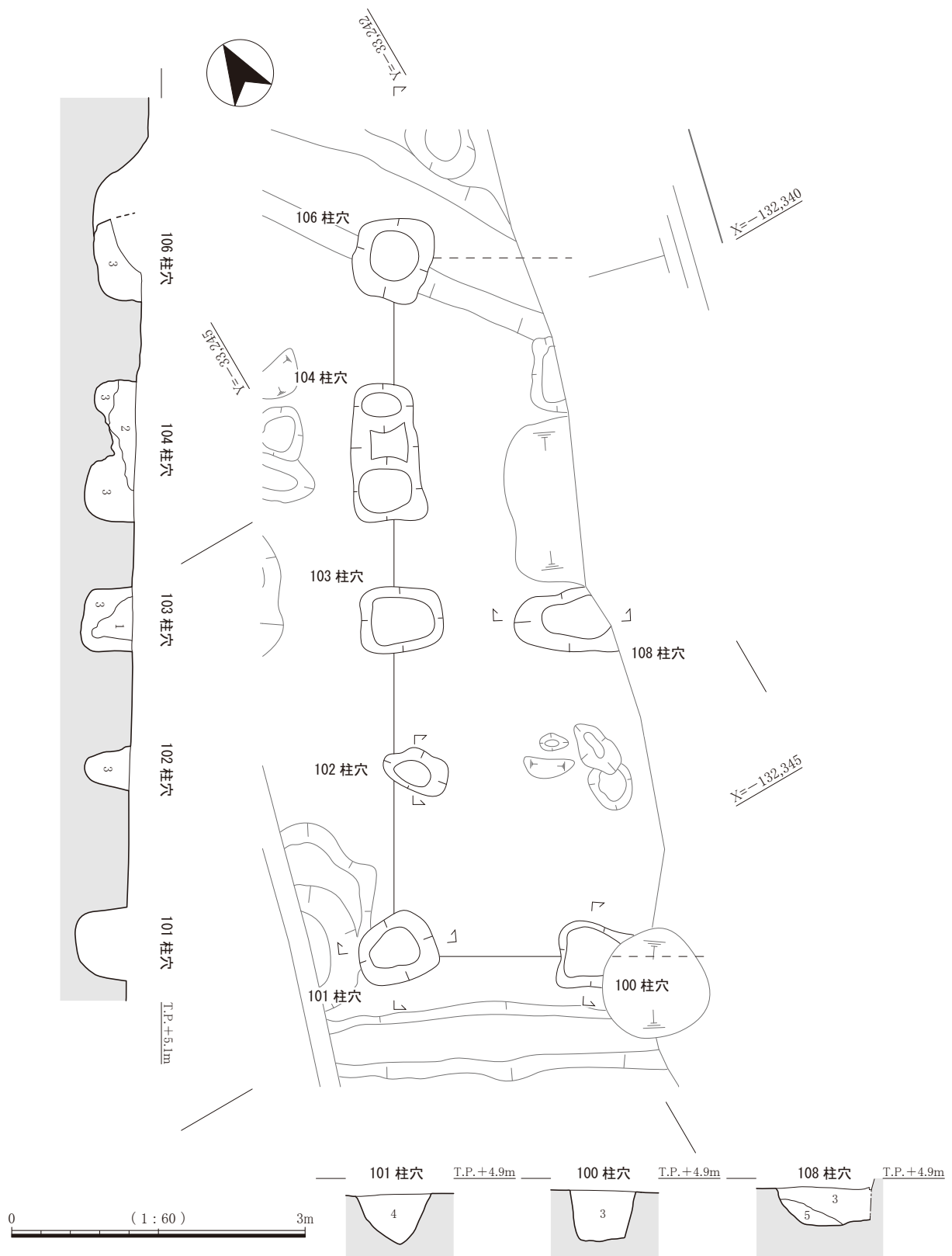


図 25 2区 第5-1層下面・第5-2層下面 遺構平面図



- | | | | | |
|-------|---|---|-----------------------------------|--------------------------|
| 抜取穴埋土 | { | 1 | 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルト | 少量の細礫を含む |
| | | 2 | 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルト | 少量の細礫と5Y5/1 灰シルトブロック土を含む |
| 掘方埋土 | { | 3 | 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルトと5Y5/1 灰シルトのブロック土 | |
| | | 4 | 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルトと5Y5/1 灰シルトのブロック土 | 極少量の炭粒を含む |
| | | 5 | 2.5Y3/1 黒褐シルト | |

図 26 2区 掘立柱建物 1 平・断面図

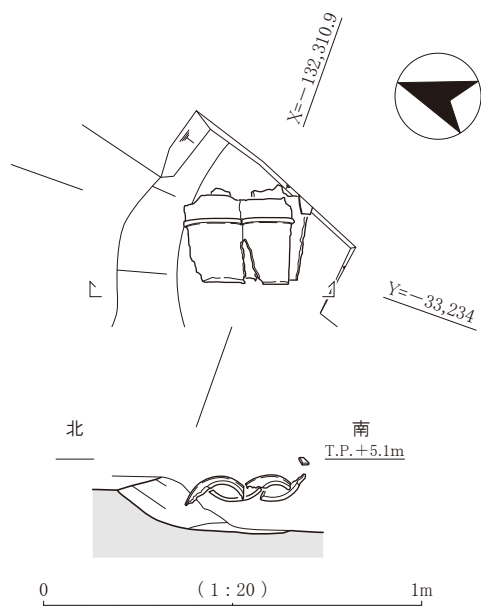


図27 2区117溝 埴輪出土状況図

89溝と90溝は、深さは異なっているものの、ほぼ同じ幅であり、埋土も砂礫が主体となる点で類似している。また、2区の西側調査範囲外の地点で直交すると予想されることから、区画の役割を持つような、ひとつながりの溝となる可能性も考えられる。

95溝 (図28)

2区北半部の南側、 $X = -132,345 \sim -132,347$ にかけて検出した。幅59～82cm、深さ4cm。北西～南東方向に延びる。灰色シルト混じり中～極粗砂と灰色砂質シルトのブロック土が堆積している。遺物は土師器杯(図30-23)の他、土師器の細片が出土した。

なお、掘立柱建物1の南辺と方位を同じくして並行することから、雨落ち溝として掘立柱建物と関係を有する可能性がある。

116溝 (図28)

2区北半部の北側、 $X = -132,306$ 付近で検出した。幅21cm、深さ3cm。東北東～西南西方向に延びる。黒褐色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

117溝 (図27・28、図版9・11)

2区北半部の北側、 $X = -132,306 \sim -132,313$ にかけて検出した。幅592cm、深さは北側が浅く21cm、南側が深く37cm。東北東～西南西方向に延びる。埋土は5層に細分されるが、概ね下位から中位に黒褐色砂質シルト、上位に黄灰色砂質シルトが堆積している。遺物は須恵器・土師器・埴輪だけでなく、轆の羽口や鉄滓・砥石など鍛冶に関連するものも出土した(図31-25～43)。

比較的残りの良い古墳時代中期の埴輪が出土していることから、古墳の周溝である可能性も考えられる。ただし、117溝は古墳時代後期の遺物を含む第6-1層の堆積後に掘削されたものであることや、埴輪が117溝埋土の中位に横倒しの状態で出土しており(図27)、本来据えられていた位置から移動していると考えられることなど、必ずしも古墳の周溝とは言い切れない。

83炭溜まり (図28、図版10)

2区北半部の中央、 $X = -132,325$ 、 $Y = -33,239$ で検出した。一辺80cmの隅丸方形を呈し、深さ6cm。黄灰色炭混じりシルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

89溝 (図28、図版10)

2区北半部の中央、 $X = -132,321 \sim -132,327$ にかけて検出した。幅100～123cm、深さ20～25cm。北東～南西方向に延びる。91土坑を切っており、この遺構より新しい。暗灰黄色砂質シルト混じり中砂～細礫が堆積している。遺物は弥生土器甕(図30-24)の他、土師器の細片が出土した。

90溝 (図28、図版10)

2区北半部の南側、 $X = -132,334 \sim -132,340$ にかけて検出した。幅102～129cm、深さ58cm。北西～南東方向に延びる。掘立柱建物1を構成する106柱穴に切られており、この遺構より古い。黄灰色粗砂～細礫が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

91土坑（図28、図版10）

2区北半部の中央、X＝－132,323、Y＝－33,238で検出した。長軸126cm、短軸120cm、深さ16cm。東側が調査範囲外に及んでいるためその全形は不明で、溝になる可能性も考えられる。89溝に切られており、この遺構より古い。黄灰色砂質シルトが堆積している。遺物は須恵器杯（図30-22）の他、土師器の細片が出土した。

97土坑（図28）

2区北半部の南側、X＝－132,340、Y＝－33,246で検出した。長軸172cm、短軸82cmの円形を呈し、深さ46～61cm。埋土は上下2層に分かれ、下位に黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土、上位に粗～極粗砂が目立つ黒褐色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

107柱穴（図28、図版11）

2区北半部の南側、X＝－132,340、Y＝－33,242で検出した。長軸77cm、短軸39cm、東側が調査範囲外に及ぶが、隅丸方形を呈するものとみられる。深さ30cm。柱を抜き取ったとみられる堆積状況であり、抜取穴埋土は黒褐色砂質シルト、掘方埋土は黒褐色シルトと灰色シルトのブロック土。遺物は出土しなかった。

112柱穴（図28、図版11）

2区北半部の北側、X＝－132,298、Y＝－33,230で検出した。長軸61cm、短軸47cmの楕円形を呈し、深さ59cm。柱を抜き取ったとみられる堆積状況であり、抜取穴埋土は黒褐色砂質シルト、掘方埋土は黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土。遺物は土師器の細片が出土した。

113柱穴（図28、図版11）

2区北半部の北側、X＝－132,301、Y＝－33,231で検出した。長軸85cm、短軸55cmの楕円形を呈し、深さ58cm。柱を抜き取ったとみられる堆積状況であり、抜取穴埋土は黒褐色シルト、掘方埋土は黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土。遺物は出土しなかった。

115柱穴（図28、図版11）

2区北半部の北側、X＝－132,304、Y＝－33,232で検出した。長軸122cm、短軸111cmのやや歪な円形を呈し、深さ77cm。黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

115柱穴には、明確な柱痕跡や柱を抜き取ったとみられる堆積状況は確認できなかったが、112・113柱穴とN－18°－Eの方向に3.1m等間で並び、規模も類似することから、柱穴として扱った。

111ピット（図28、図版11）

2区北半部の南側、X＝－132,338、Y＝－33,242で検出した。長軸95cm、短軸79cmの楕円形を呈し、深さ63cm。埋土は上下2層に分かれ、下位に黄灰色シルト、上位に黒褐色細礫混じり砂質シルトが堆積している。遺物は須恵器の細片が出土した。

114ピット（図28、図版11）

2区北半部の北側、X＝－132,303、Y＝－33,232で検出した。長軸111cm、短軸82cmの楕円形を呈し、深さ58cm。黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土が堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

111ピット・114ピットについては、明確な柱痕跡や柱を抜き取ったとみられる堆積状況を確認できなかったが、周辺に存在する柱穴と規模や埋土の質感が類似しており、柱穴の可能性も考えられる。

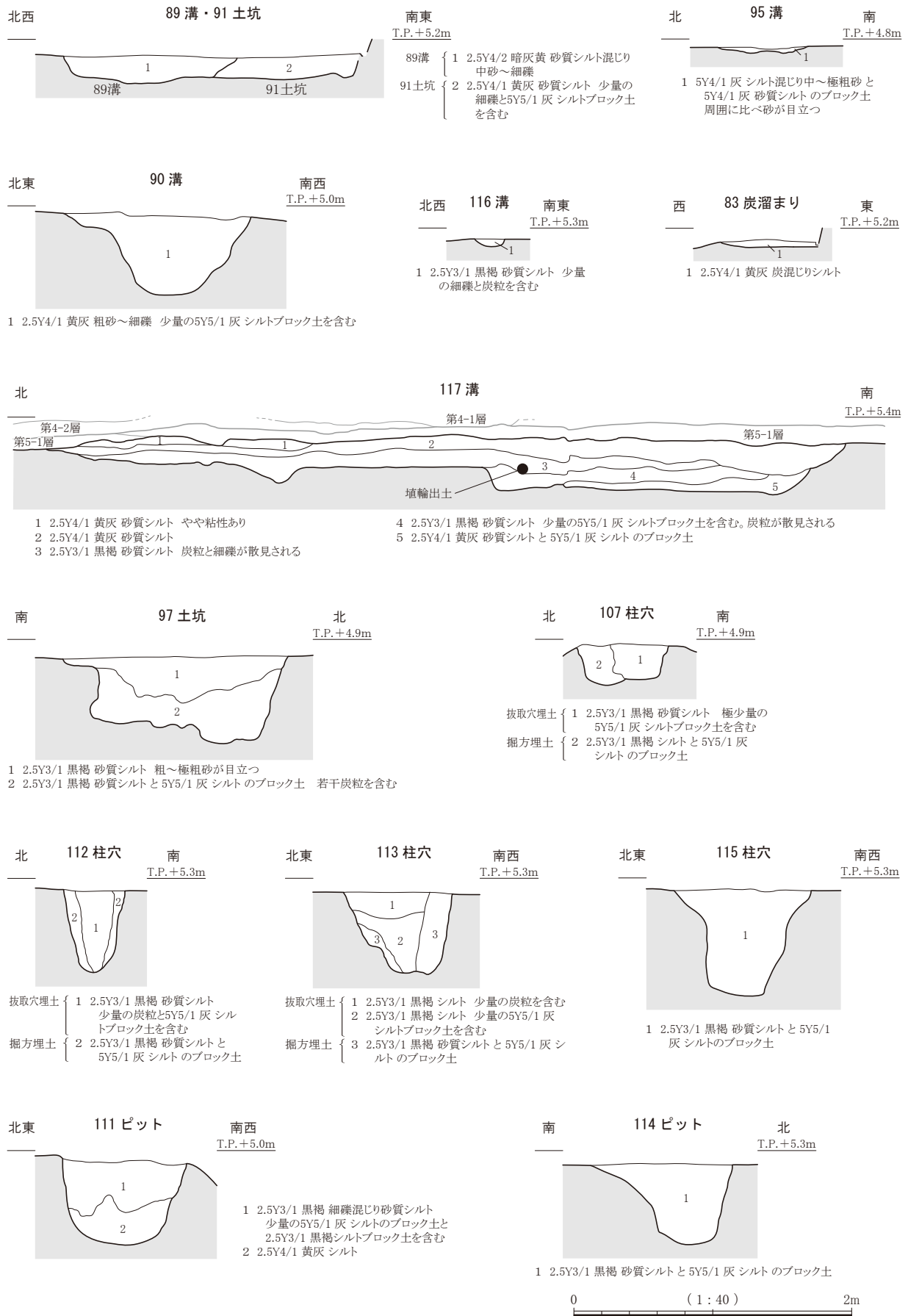


図 28 2 区 第 5-1 層下面 遺構断面図

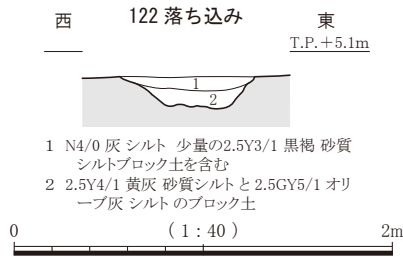


図29 2区第5-2層下面遺構断面図

【第5-2層下面】(図25)

第5-2層は飛鳥・奈良時代の土壌層であり、2区北半部の中央のみに存在している。当層を掘削した第5-2層下面の高さはT.P. +4.8~5.0mである。当面では、自然地形とみられる落ち込みを検出した。

122落ち込み(図29、図版12)

2区北半部の中央、X=-132, 327、Y=-33, 240で検出した。幅53~77cmの溝状を呈する。南北方向に延びるが、北側でやや東へ曲がる。深さ16cm。埋土は上下2層に分かれ、下位に黄灰色砂質シルトとオレンジ灰色シルトのブロック土、上位に灰色シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

(2) 遺物(図30~32、図版22・23)

第5-1層・第5-2層および各層下面の遺構からは、主として須恵器・土師器が出土した。

図30・31は第5-1層下面遺構出土遺物。図30-22は91土坑出土。須恵器杯。古墳時代中期後半。図30-23は95溝出土。土師器杯C。内面に暗文が施される。飛鳥時代。図30-24は89溝出土。弥生土器甕。外面にタタキが施される。弥生時代後期(V様式)。

図31は117溝出土遺物。25~27は須恵器。いずれも古墳時代中期前葉の初期須恵器。25・26は無蓋高杯の杯部か。27は把手付碗。体部に櫛描列点文と波状文が施されている。

28~33は土師器。28は甕。口縁部内面にナデ、体部内面にヘラケズリが施される。29~32は高杯。29は有稜高杯の杯部。口縁端部にナデによって平坦面をつくる。30~32は脚部。30は内外面にナデが施される。31は内面にシボリ痕が観察される。32は内面にヘラケズリが施される。33は甕の底部。蒸気孔は、中心部に直径5cm程度の円孔があり、その周囲に直径2cmと1cmの大小2種類の円孔を穿つ。

34・35は埴輪。34は朝顔形埴輪の口縁部。口縁端部をナデによって平坦面をつくる。内面にヨコハケ、外面にタテハケが施される。35は円筒埴輪。底部から3段目の一部までが残存する。タテハケのちB種ヨコハケが施され、突帯は台形を呈する。2段目に円形のスカシ孔を2個有する。須恵質で黒斑はみられない。古墳時代中期(5世紀前葉~中葉)のものと考えられる。

36~39は甗の羽口。36~38は体部外径6~7cm、送風孔直径3cm程度と推定される。39はやや小さく体部外径4cm、送風孔直径2cm。いずれも先端部であり、外面には被熱による発泡や黒色ガラス質物の付着がみられる。なお、39の内面には少量の鉄滓が付着している。

40・41は鉄滓。40は110.7g。下面には炉床土が付着している。41は241.9g。40・41ともに残りが悪いため不確かではあるが、椀形滓の可能性はある。

42・43は石製品。42は板状を呈する紅簾片岩。石鋸の素材となる可能性がある。43は砂岩の砥石。上面だけが使用され、平滑になっている。

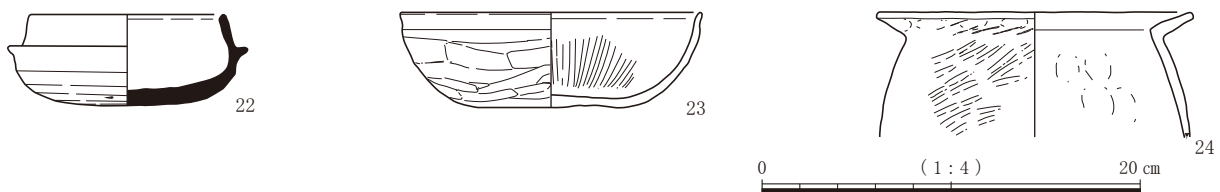


図30 2区89・95溝、91土坑出土遺物

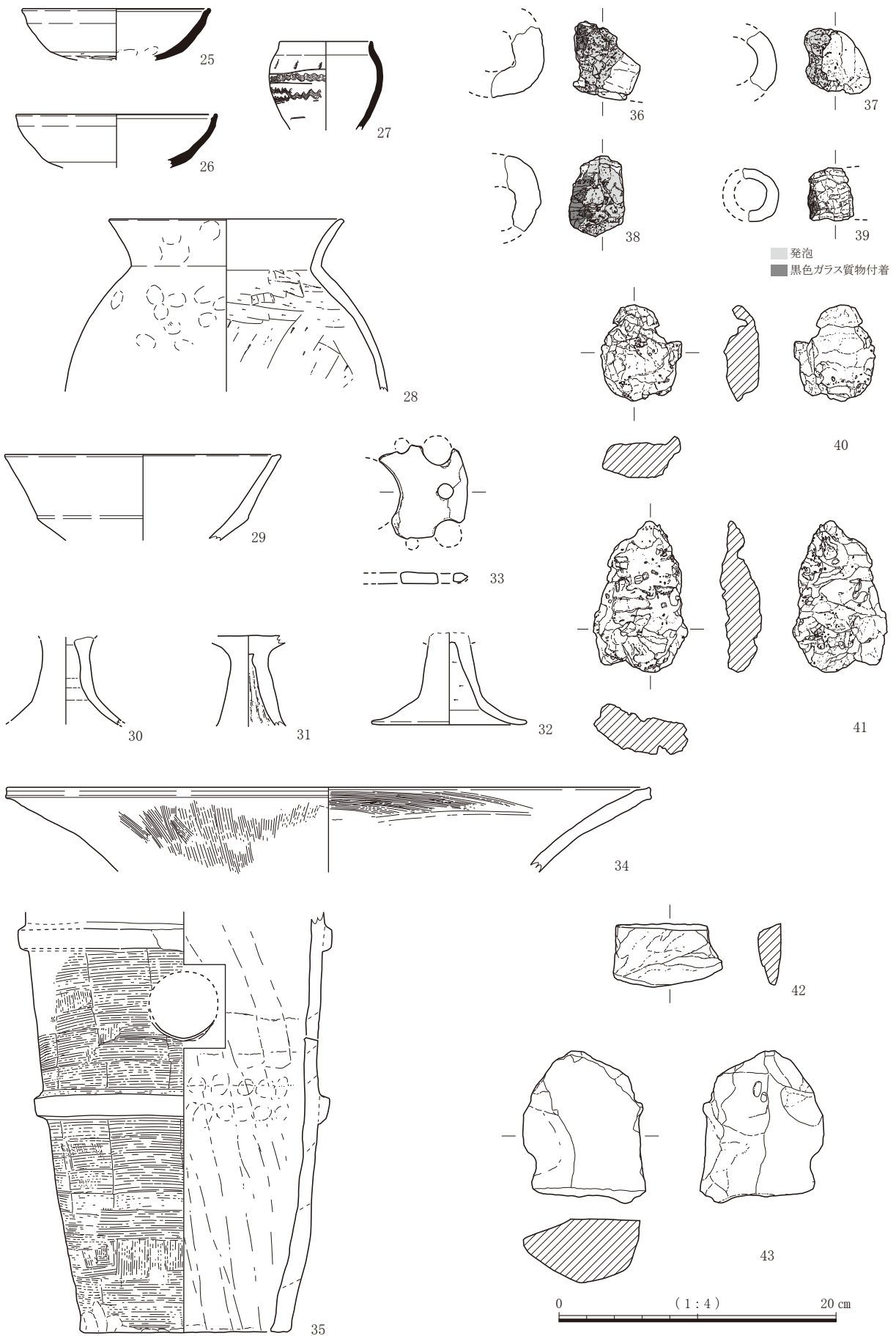


图 31 2区 117溝 出土遺物

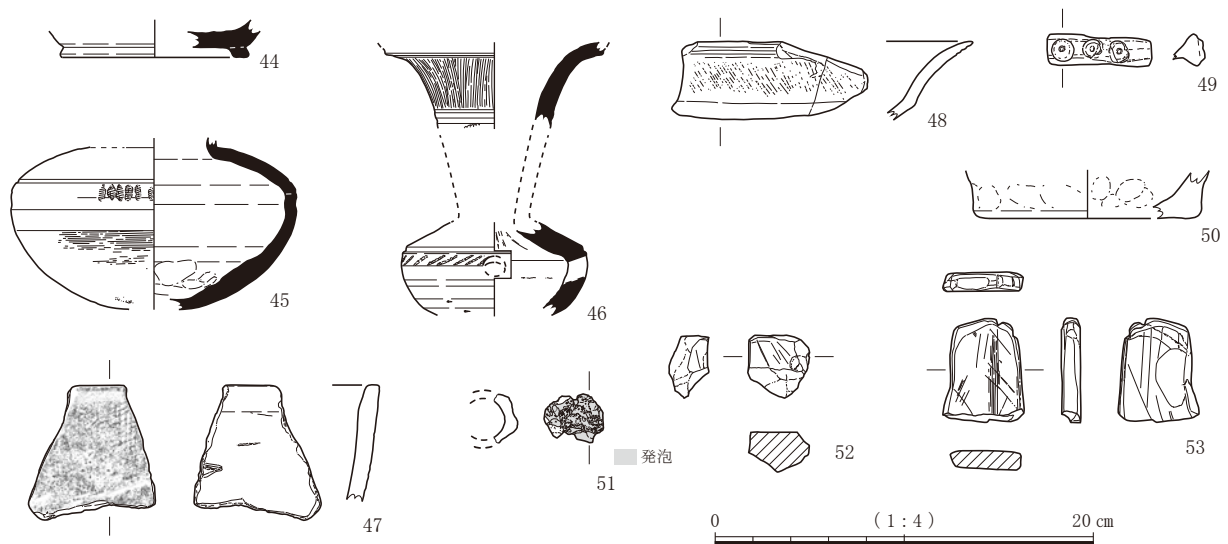


図32 2区 第5-1層 出土遺物

図32は第5-1層出土遺物。44～46は須恵器。44は杯Bもしくは壺の底部。奈良時代。45・46は甕。45は体部に2条の沈線を引き、その沈線間に櫛描列点文が施される。体部最大径は15cm程度と推定される。古墳時代中期後半。46は長い口頸部に2条の沈線を引き、その下にはわずかに櫛描列点文がみられる。肩部に段を有し、体部には櫛描列点文を施し、円孔を穿つ。体部最大径は10cm程度と推定される。古墳時代後期。

47は韓式系土器。甑の口縁部で、外面に格子目タタキが施される。48は土師器。高杯の杯部。

49は弥生土器。壺の口縁部で、円形竹管浮文により加飾されている。弥生時代後期（V様式）。50は縄文土器。深鉢の底部。平底で2～3mm大の砂粒が混和されている。縄文時代中期末か。

51は轆の羽口。体部外径3cm、送風孔直径2cm程度と推定される。外面には被熱による発泡がみられる。52・53は砥石。52は凝灰岩もしくは流紋岩。上面と側面に使用の痕跡が認められる。53はチャート。上面と下面および側面の一部に使用の痕跡が認められる。

なお、第5-2層からも土師器が出土しているが、細片のため図化しなかった。

第5項 古墳時代の遺構と遺物

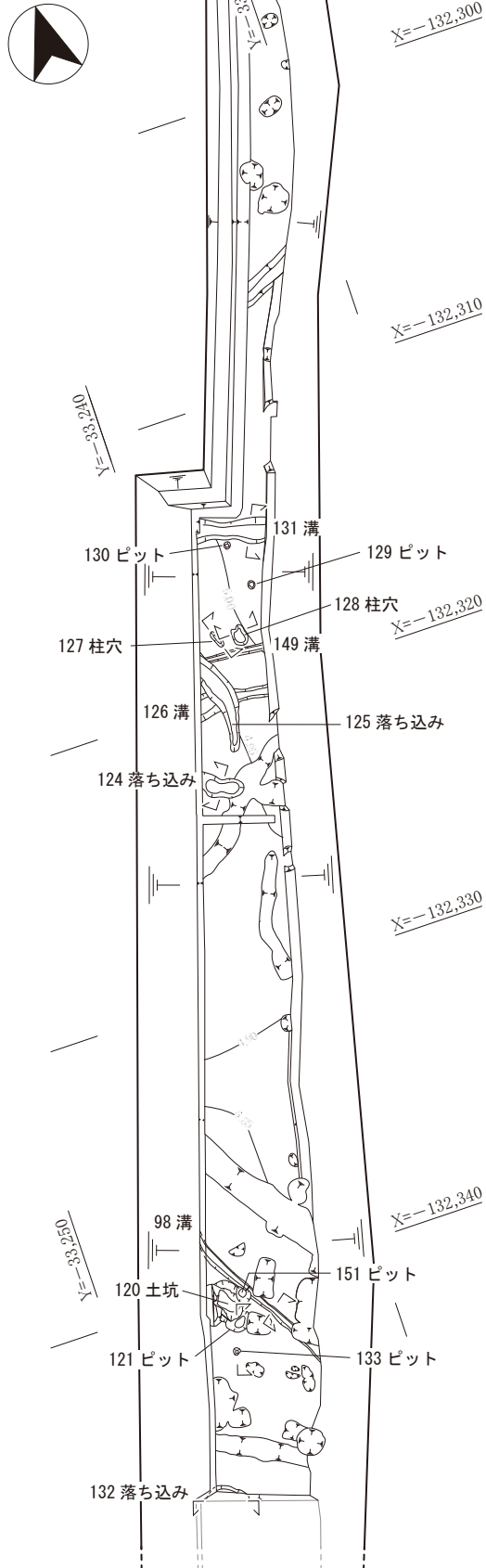
(1) 遺構

古墳時代の遺構は第6-1層下面・第6-2層下面において検出した。第6-1層下面では土坑・溝・柱穴・ピット・落ち込みが検出された。このうち2区北半部の南側で検出した120土坑からは、比較的残りの良い古墳時代前期の土師器甕が出土している。一方、第6-2層下面ではピットと自然地形とみられる落ち込みを検出したのみであり、人為的な遺構は確認できなかった。

【 第6-1層下面 】 (図33、図版13)

第6-1層は古墳時代の土壌層であり、2区北半部の北側から中央にかけて存在している。当層を掘削した第6-1層下面の高さはT.P. +4.8～5.0mである。当面では土坑・溝・柱穴・ピット・落ち込みを検出した。なお、2区北半部の南側で検出した遺構の多くは、第5-1層を掘削した時点でその存在を確認できていたが、埋土や重複関係などから、第6-1層下面に帰属するものと判断した。

【 第6-1層下面
遺構平面図 】



【 第6-2層下面
遺構平面図 】

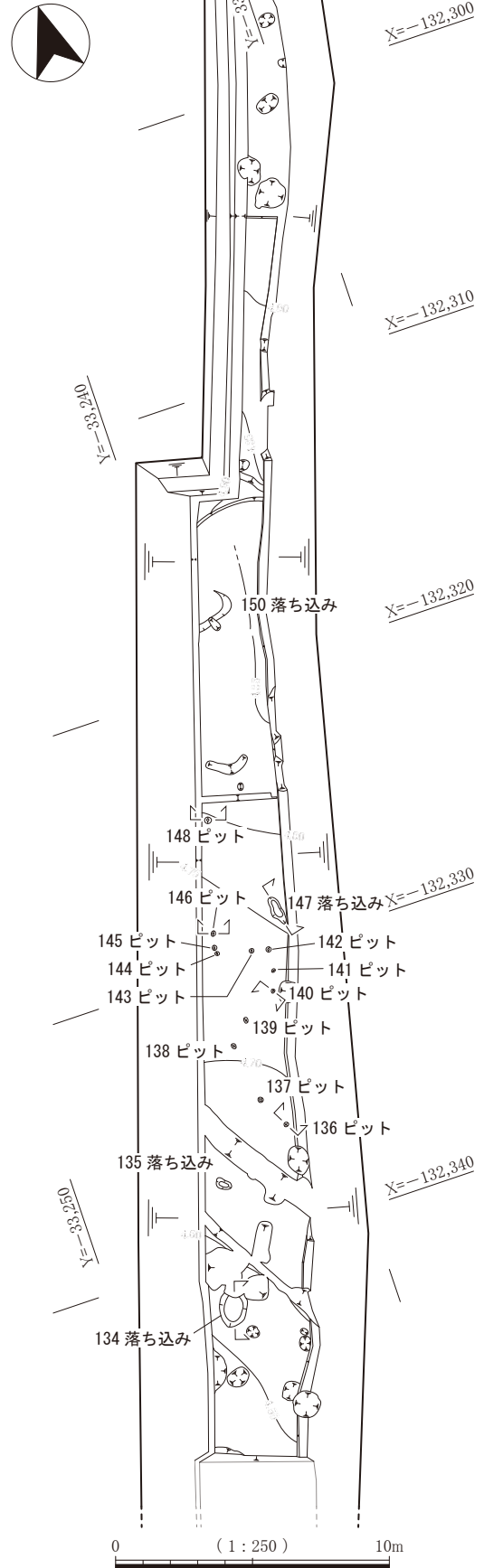


図 33 2区 第6-1層下面・第6-2層下面 遺構平面図

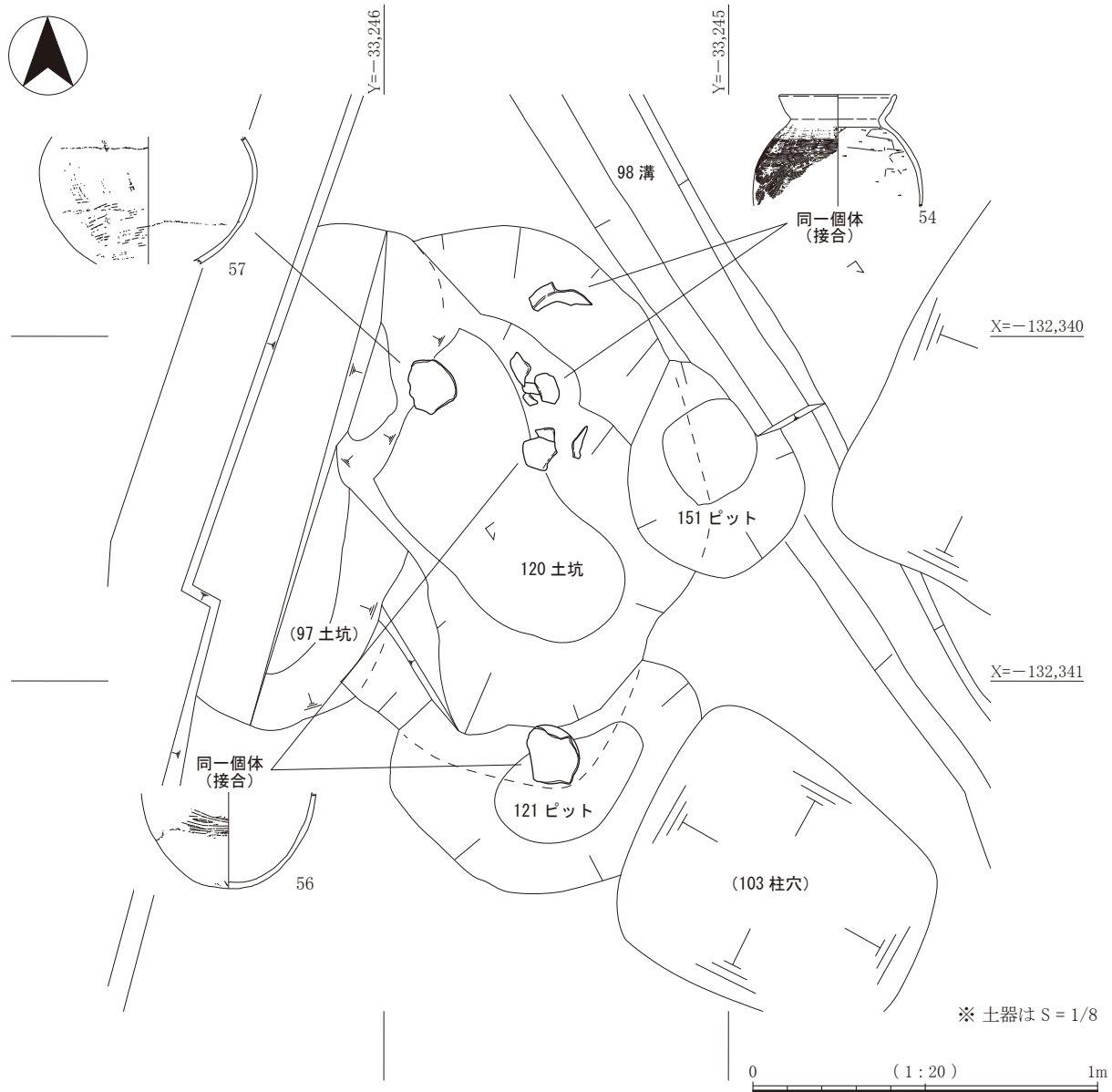


図34 2区 120土坑 遺物出土状況図

120土坑 (図34・35、図版12・13)

2区北半部の南側、 $X = -132,340$ 、 $Y = -33,246$ で検出した。長軸150cm、短軸82cmの円形を呈し、深さ49cm。97土坑に切られておりこの遺構より古く、121・151ピットを切っておりこれらの遺構より新しい。埋土は上下2層に分かれ、下位に黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土、上位に黒褐色砂質シルトが堆積している。遺物は古墳時代前期の土師器甕(図37-54~57)が出土した。

98溝 (図35、図版12)

2区北半部の南側、 $X = -132,338 \sim -132,343$ にかけて検出した。幅35cm、深さ28cm。北西-南東方向に延びる。151ピットに切られており、この遺構より古い。埋土は上下2層に分かれ、下位に黒褐色シルト、上位に灰オリーブ色シルト~極細砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

131溝 (図35、図版12)

2区北半部の北側、 $X = -132,314 \sim -132,315$ にかけて検出した。幅60~96cm、深さ10cm。東西方向に延びる。黒褐色砂質シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

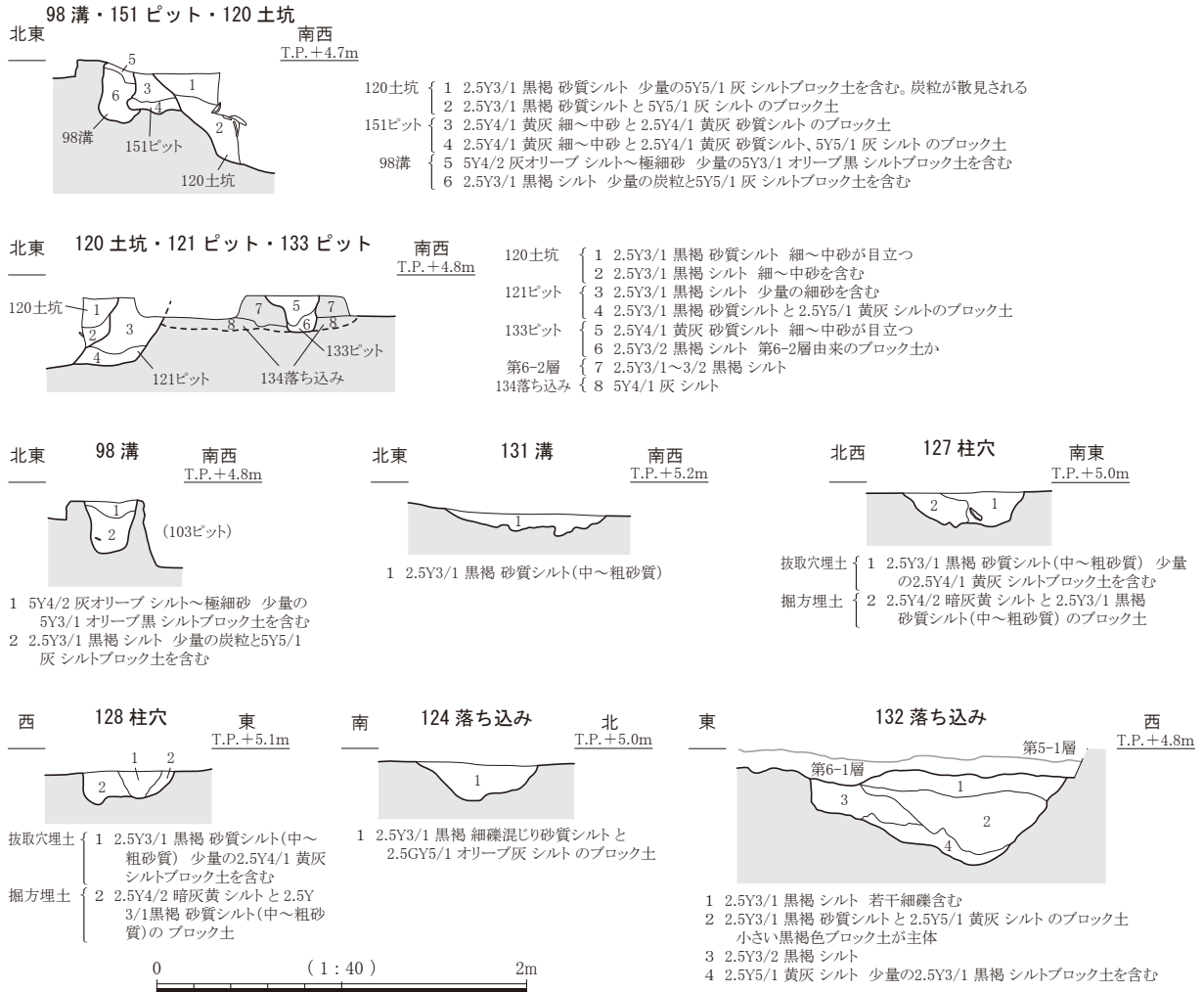


図35 2区 第6-1層下面 遺構断面図

127柱穴 (図35、図版12)

2区北半部の中央、X = -132, 318、Y = -33, 238で検出した。長軸66cm、短軸24cmの楕円形を呈し、深さ19cm。柱を抜き取ったとみられる堆積状況であり、抜取穴埋土は黒褐色砂質シルト、掘方埋土は暗灰黄色シルトと黒褐色砂質シルトのブロック土。遺物は土師器の細片が出土した。

128柱穴 (図35、図版12)

2区北半部の中央、X = -132, 318、Y = -33, 238で検出した。長軸76cm、短軸53cmのやや歪な楕円形を呈し、深さ14cm。柱を抜き取ったとみられる堆積状況であり、抜取穴埋土は黒褐色砂質シルト、掘方埋土は暗灰黄色シルトと黒褐色砂質シルトのブロック土。遺物は出土しなかった。

121ピット (図35、図版12)

2区北半部の南側、X = -132, 341、Y = -33, 245で検出した。直径85cmの円形を呈し、深さ36cm。103ピット・120土坑に切られており、これらの遺構より古い。埋土は上下2層に分かれ、下位に黒褐色砂質シルトと黄灰色シルトのブロック土、上位に黒褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

133ピット (図35、図版12)

2区北半部の南側、X = -132, 342、Y = -33, 246で検出した。直径27cmの円形を呈し、深さ20cm。埋土は上下2層に分かれ、下位に黒褐色シルト、上位に黄灰色砂質シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

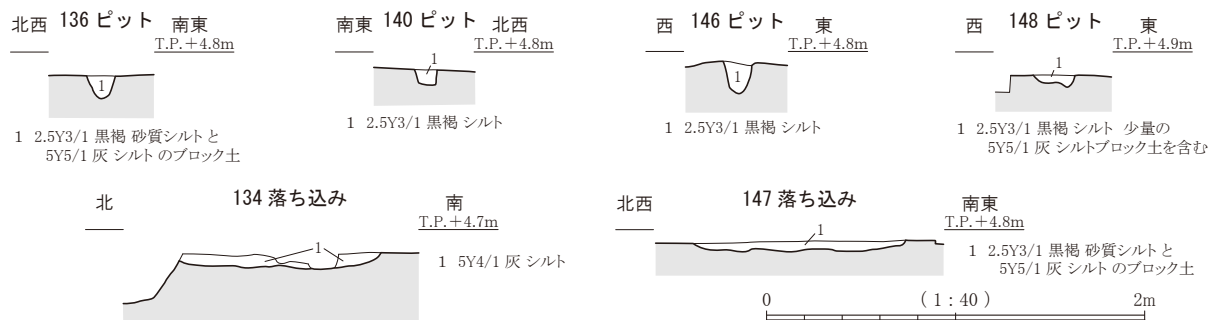


図36 2区 第6-2層下面 遺構断面図

151ピット (図35、図版12)

2区北半部の南側、 $X = -132, 342$ 、 $Y = -33, 246$ で検出した。直径50cmの円形を呈し、深さ22cm。埋土は上下2層に分かれ、下位に黄灰色細～中砂と黄灰色砂質シルト、灰色シルトのブロック土、上位に黄灰色細～中砂と黄灰色砂質シルトのブロック土が堆積している。遺物は出土しなかった。

124落ち込み (図35)

2区北半部の中央、 $X = -132, 323$ 、 $Y = -33, 240$ で検出した。幅63～87cmの東西方向に延びるやや歪な溝状を呈し、深さ20cm。黒褐色細礫混じり砂質シルトとオリーブ灰色シルトのブロック土が堆積している。遺物は製塩土器が出土した(図37-58)。

132落ち込み (図35)

2区北半部の南側、 $X = -132, 347$ 、 $Y = -33, 248$ で検出した。長軸139cm、短軸77cm。南側が調査範囲外に及んでいるため、全形は不明。深さ47cm。埋土は4層に分かれ、下位に黒褐色シルトおよび黄灰色シルト、中位に黒褐色砂質シルトと黄灰色シルトのブロック土、上位に黒褐色シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

【 第6-2層下面 】 (図33)

第6-2層は古墳時代の土壌層であり、2区のほぼ全域に存在する。当層を掘削した第6-2層下面の高さはT.P. +4.5～4.9mである。当面ではピットと自然地形とみられる落ち込みを検出した。

ピットはいずれも規模が小さく、規則的な並びもみられないことから、人為的な遺構というより、動植物による巣穴や根の痕跡である可能性が高い。

136～146・148ピット (図36)

2区北半部の中央、 $X = -132, 325 \sim -132, 336$ 、 $Y = -33, 241 \sim -33, 242$ にかけて検出した。いずれも直径12～23cmの円形を呈し、深さ2～16cm。黒褐色シルトまたは黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土が堆積している。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

134落ち込み (図36、図版12)

2区北半部の南側、 $X = -132, 342$ 、 $Y = -33, 246$ で検出した。長軸122cm、短軸103cmの楕円形を呈し、深さ8cm。灰色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

147落ち込み (図36)

2区北半部の中央、 $X = -132, 329$ 、 $Y = -33, 240$ で検出した。長軸111cm、短軸46cmのやや歪な楕円形を呈し、深さ5cm。黒褐色砂質シルトと灰色シルトのブロック土が堆積している。遺物は出土しなかった。

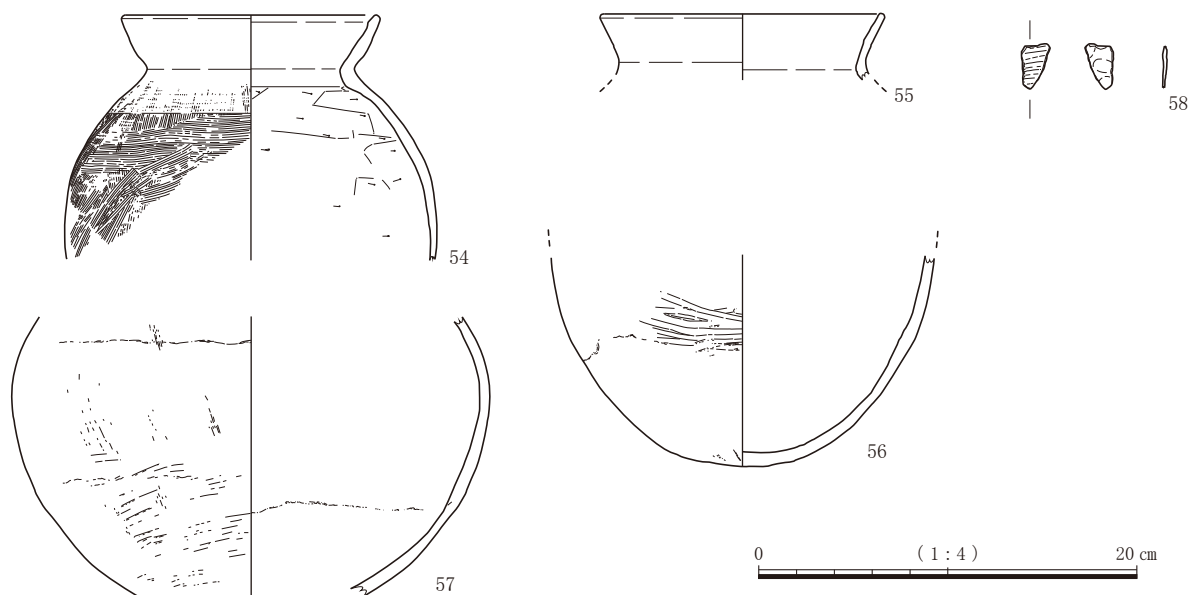


図37 2区 120土坑、124落ち込み 出土遺物

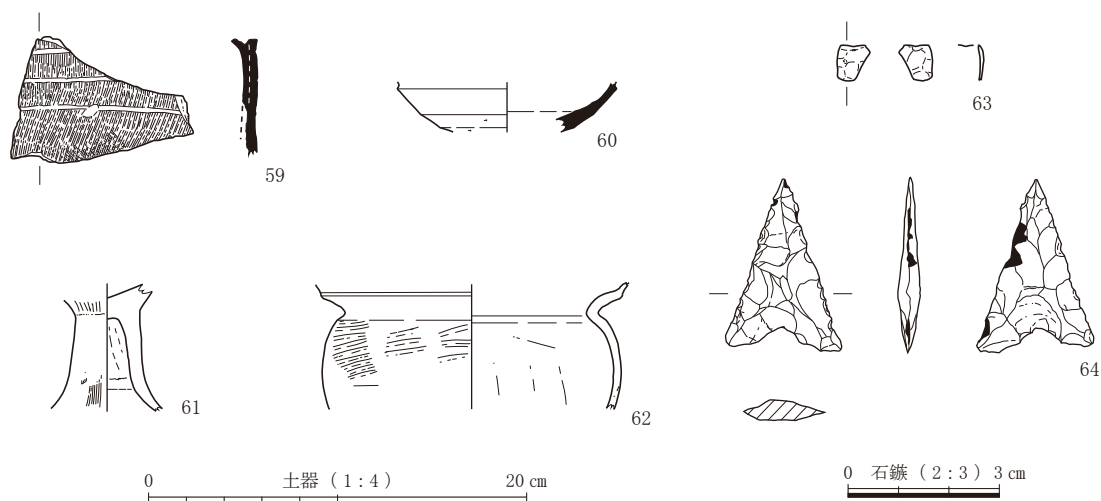


図38 2区 第6-1層・第6-2層 出土遺物

(2) 遺物 (図37・38)

第6-1層・第6-2層および第6-1層下面の遺構からは、主として須恵器・土師器が出土した。

図37は第6-1層下面遺構出土遺物。このうち、54～57は120土坑、58は124落ち込みより出土した。54～57は土師器甕。54は体部外面にハケメ、内面にヘラケズリが施される。古墳時代前期、布留式。55と56は胎土に結晶片岩や泥岩を含んでおり同一個体と考えられる。表面の摩耗が激しいが、体部外面にわずかにタタキの痕が残る。丸底。57は体部外面にタタキ、内面にナデが施される。58は製塩土器。厚さは1mmと薄く、外面にタタキが施される。

図38は第6-1層・第6-2層出土遺物。このうち、59～63は第6-1層、64は第6-2層より出土した。59・60は須恵器。59は甕の体部。外面に平行タタキと3条の沈線が施される。内面に当て具痕はみられない。60は高杯の杯部。いずれも古墳時代中期か。61・62は土師器。61は高杯の脚部。摩耗が激しいが、外面にハケメの痕が残る。62は甕の頸部から体部。体部外面にタタキ、内面にはヘラケズリの後ナデが施される。63は製塩土器。厚さ1mmと薄い。64は石鏃。サヌカイト製。基部の挟りが深く、縄文時代か。

第3節 3区の調査成果

第1項 成果の概要

3区は2区の南側に位置する。蝶矢踏切の南側から南北約43mにわたって伸びる、幅4.5～5.3mの調査区である。

調査の結果、古墳時代から中世にかけての各時期の遺構が検出された。中世の遺構面である第3-3-1層下面や第3-3-2層下面では、耕作に関わると考えられる段差や溝群が検出されており、遺構の様相は2区と類似している。平安時代の遺構面である第4-2層下面や飛鳥・奈良時代の遺構面である第5-1層下面では、溝・ピット・落ち込みなどが検出されたが、狭隘な調査地のために遺構を確認できた範囲が限られており、これらの遺構の性格については不明な部分が多い。また、古墳時代の遺構面である第6-1層下面・第6-2層下面では、人為的な遺構は検出できなかったが、第6-2層下面において地震による地層の変形を確認した。

遺物としては、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・瓦・製塩土器・埴輪・銭貨などが出土した。

第2項 中世の遺構と遺物

(1) 遺構

中世の遺構は第3-1層・第3-3-1層・第3-3-2層の各層の下面において検出した。段差や溝などの遺構が検出されたが、その多くがほぼ正方位に沿った方向に延びる。そのため、遺構を確認できた範囲が限られており不確かなところはあるが、これらの遺構も2区と同様に、耕作に関わる可能性が高い。

なお、3区では第3-2層下面・第3-4層下面において遺構は確認されなかった。

【第3-1層下面】 (図39)

第3-1層は中世の耕作土層であり、3区ではその北側のみに存在している。当層を掘削した第3-1層下面の高さはT.P. +5.0～5.1mである。当面では溝および自然地形とみられる落ち込みを検出した。

172溝 (図40、図版15)

3区の北側、X = -132,397～-132,400にかけて検出した。幅270cm、深さ26cm。東西方向に延びる。173落ち込みを切っており、この遺構より新しい。主としてオリーブ灰色シルト混じり細～極粗砂が堆積している。遺物は瓦器の細片が出土した。

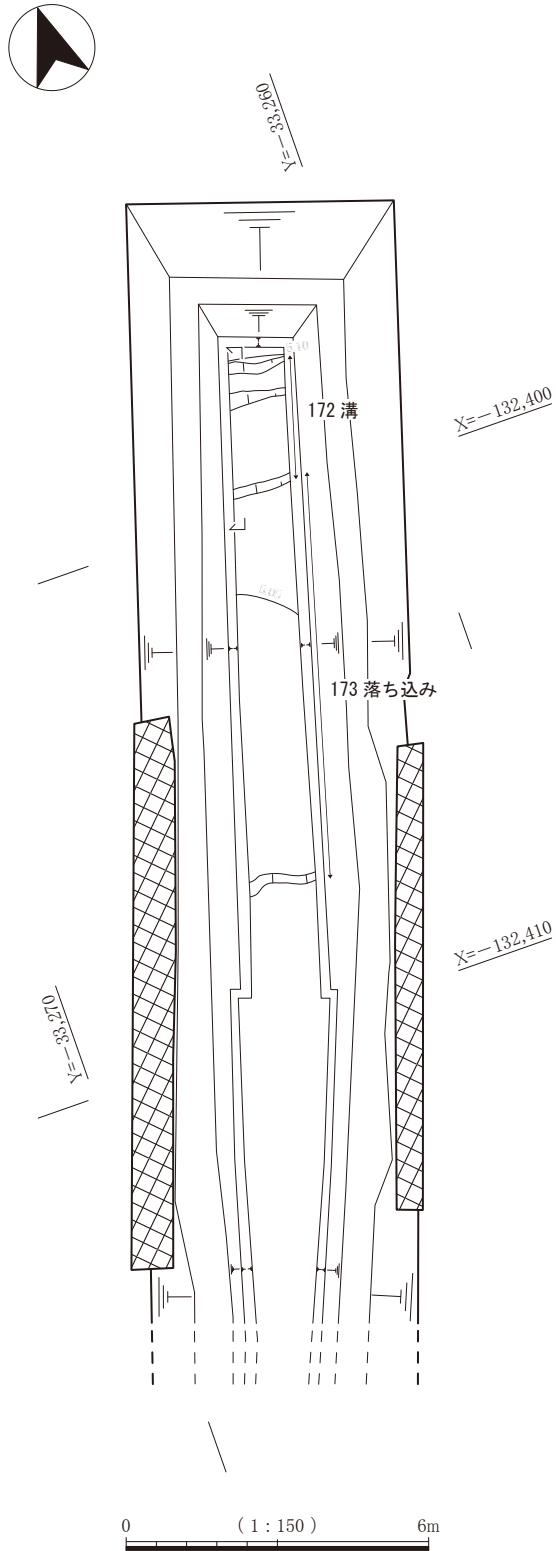
173落ち込み (図40)

3区の北側、X = -132,400～-132,407にかけて検出した。北側へ向かって緩やかに4～7cm程度下がる落ち込みであり、自然地形とみられる。172溝に切られており、この遺構より古い。緑灰色細～粗砂混じりシルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

【第3-3-1層下面】 (図39)

第3-3-1層は中世の耕作土層であり、3区の全域に存在している。当層を掘削した第3-3-1層下面の高さはT.P. +4.9～5.0mである。当面では耕作に関わると考えられる段差と足跡を検出した。なお、遺構を確認できたのは3区の北側だけである。

【 第3-1層下面 遺構平面図 】



【 第3-3-1層下面 遺構平面図 】

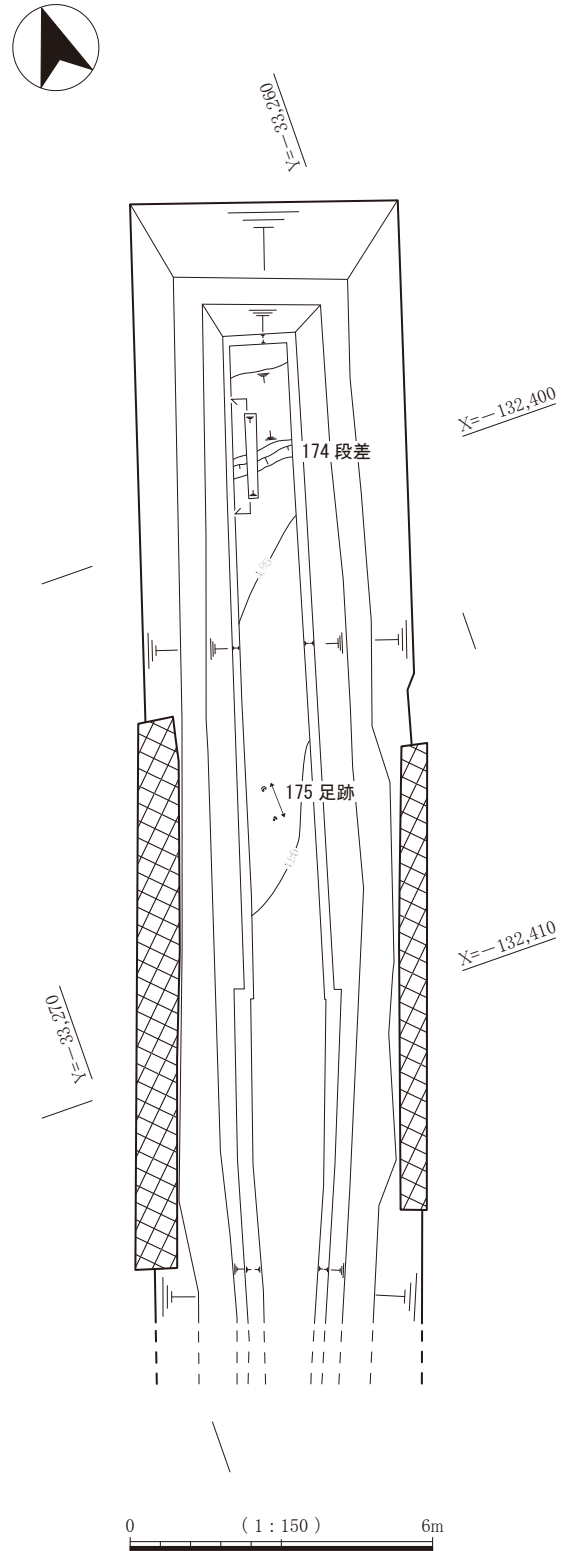


图 39 3区 第3-1層下面・第3-3-1層下面 遺構平面図

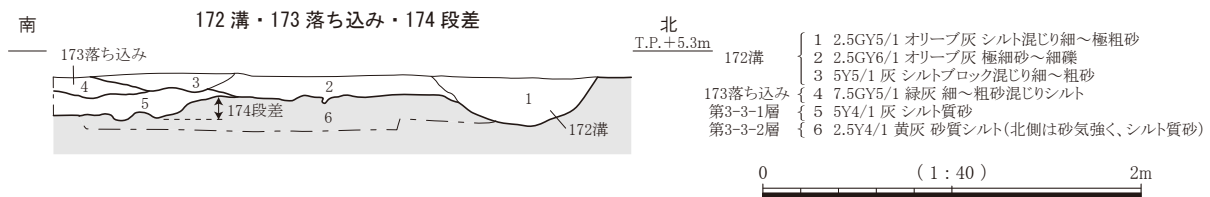


図40 3区 第3-1層下面・第3-3-1層下面 遺構断面図

174段差 (図40、図版15)

3区の北側、X=-132,399付近で検出した。遺構の輪郭は、灰色シルト質砂(第3-3-1層)と、これと比較してシルトが多い黄灰色砂質シルト(第3-3-2層)との土質の違いから捉えた。南側へ9cm程度下がる段が東西方向に延びる。

第3-3-1層を形成した耕作に伴うものと考えられる。

175足跡 (図39)

3区の北側、X=-132,405～-132,406にかけて検出した。灰色細～中砂が堆積する。牛とみられる偶蹄目の足跡である。

【第3-3-2層下面】 (図41、図版14)

第3-3-2層は中世の耕作土層であり、3区の全域に存在している。当層を掘削した第3-3-2層下面の高さはT.P.+4.7～4.8mである。当面では耕作に関わると考えられる溝群を検出した。3区の北側から中央部にかけて顕著にみられ、ほぼ正方位に沿った東西方向に延びる。

153耕作溝 (図41)

3区の南側、Y=-33,271付近で検出した。幅9～18cm、深さ4cm。南北方向に延びる。灰色シルト質砂(細砂主体)が堆積している。遺物は出土しなかった。

167耕作溝群 (図41、図版15)

3区の中央部、X=-132,412～-132,416にかけて検出した東西方向に延びる多数の溝については、一括して167耕作溝群とした。幅8～15cm、深さ1～2cm。灰色極粗砂～細礫混じり極細～細砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

176耕作溝群 (図41)

3区の北側、X=-132,399～-132,409にかけて検出した東西方向に延びる多数の溝については、一括して176耕作溝群とした。幅3～8cm、深さ1～2cm。灰色極粗砂～細礫混じり極細～細砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

(2) 遺物 (図42、図版24)

第3-1層～第3-4層からは、主として瓦器・瓦質土器・須恵器・土師器が出土した。

図42は第3-2層～第3-3-2層出土遺物。このうち、71は第3-2層、70は第3-3-1層、65・66・68・69は第3-3-2層、67は側溝(第3-2層～第3-3-1層)より出土した。

65～68は瓦器椀。65・66は口縁部。内外面にヘラミガキが施される。67・68は底部。67は内面にヘラミガキ、68は見込みに暗文が施される。いずれも中世前期(12～13世紀)。69は土師器皿。70は備前焼播鉢。内面に7条1単位の播目がみられる。中世後期(14世紀後半)頃か。71は銭貨。表裏面とも摩耗している悪銭。中世後期(14世紀)以降か。

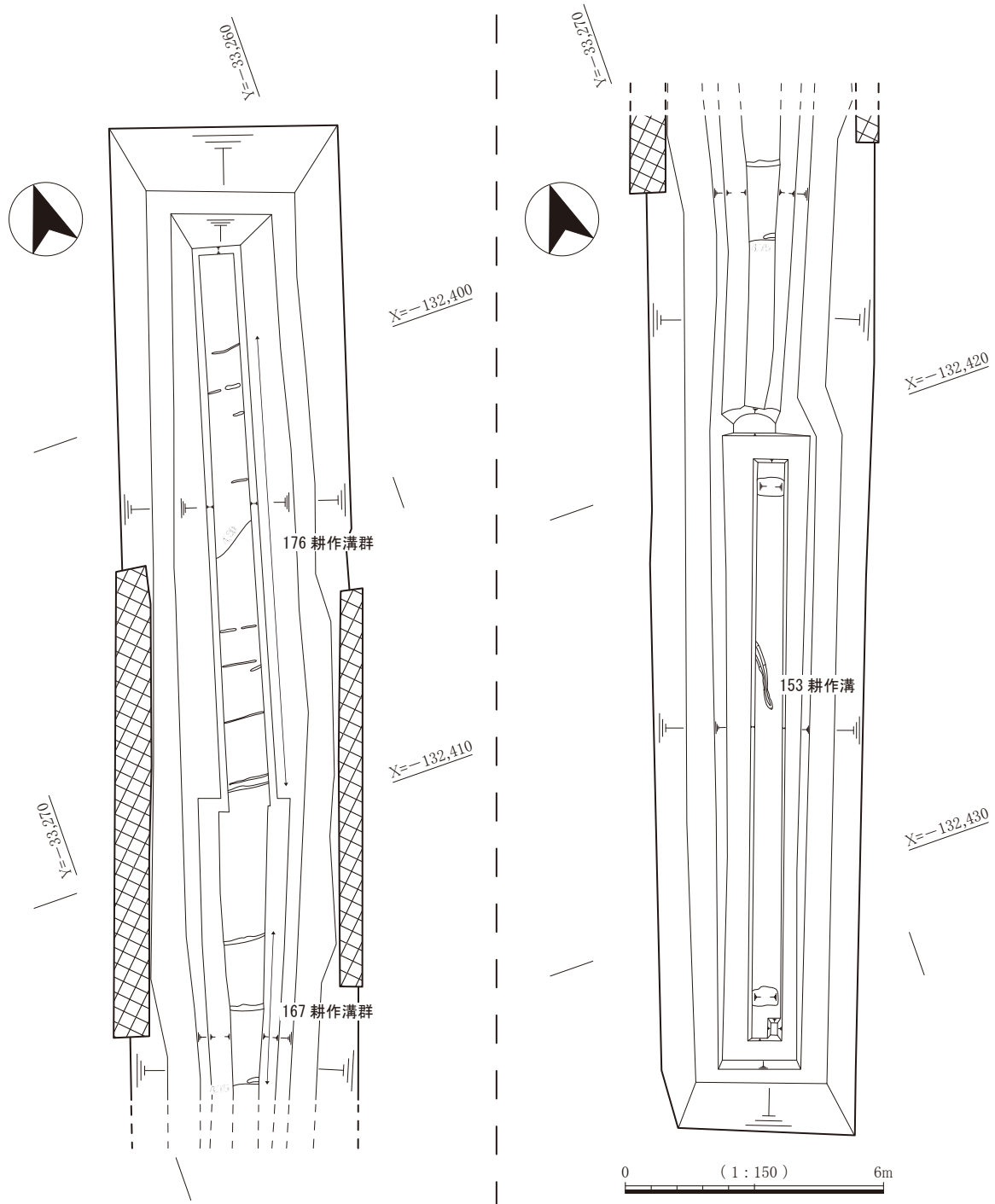


图41 3区 第3-3-2層下面 遺構平面圖

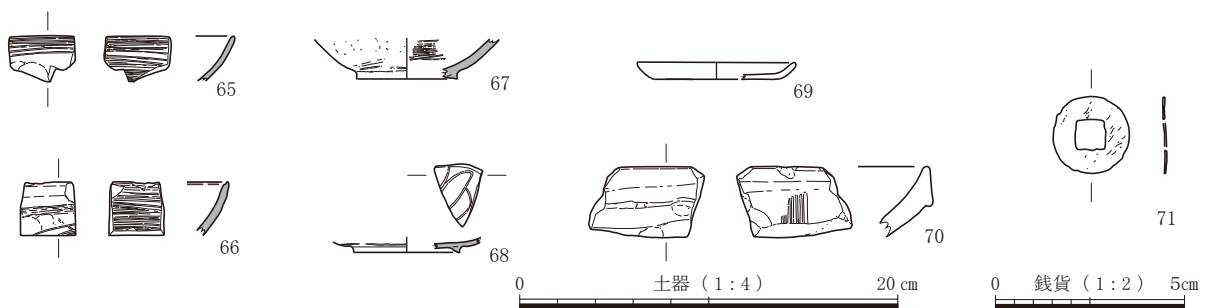


图42 3区 第3-2層~第3-3-2層 出土遺物

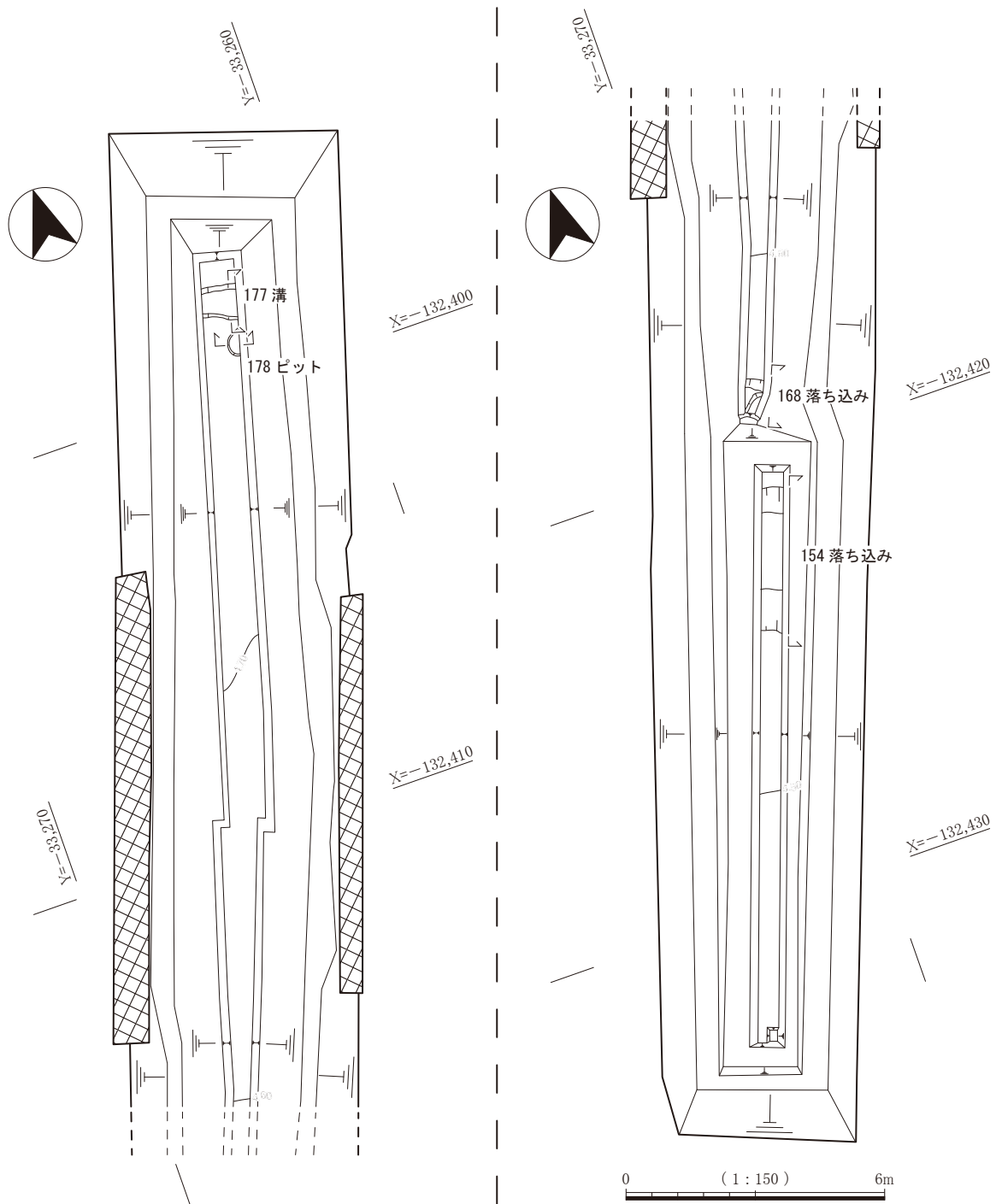


図43 3区 第4-2層下面 遺構平面図

第3項 平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構

3区には第4-1層が存在しておらず、平安時代の遺構は第4-2層下面において検出した。

【 第4-2層下面 】 (図43)

第4-2層は平安時代の洪水堆積層であり、3区のほぼ全域に存在している。当層を掘削した第4-2層下面の高さはT.P. +4.5~4.7mである。当面では性格不明の溝・ピットの外、自然地形とみられる落ち込みを検出した。

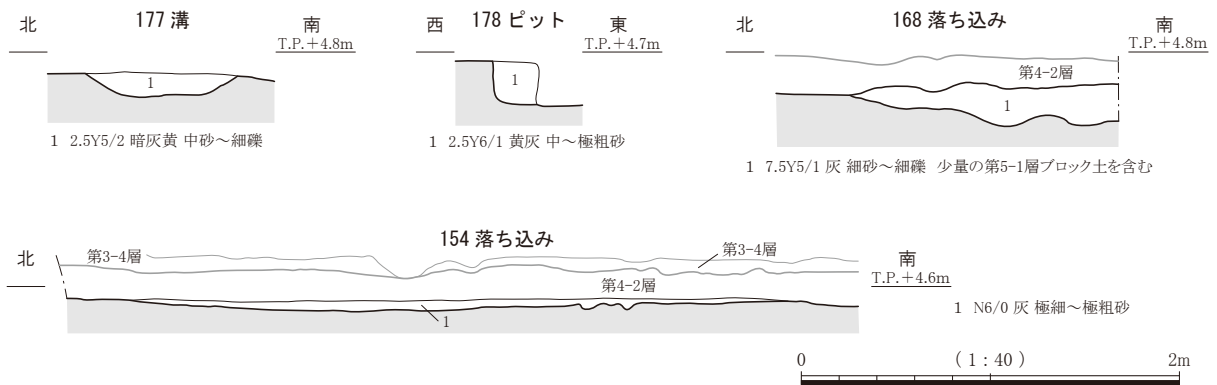


図44 3区 第4-2層下面 遺構断面図

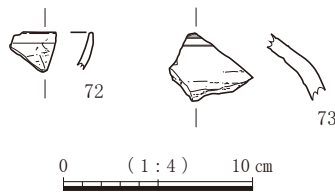


図45 3区 第4-2層 出土遺物

177溝 (図44、図版15)

3区の北側、X=-132,398付近で検出した。幅70～85cm、深さ12cm。東西方向に延びる。暗灰黄色中砂～細礫が堆積している。遺物は須恵器の細片が出土した。

第3-1層下面で検出した172溝や第3-3-1層下面で検出した174段差と位置・方位が近いことから、耕作に関わる可能性も考

えられる。ただし、遺構を確認できた範囲が限られており、定かではない。

178ピット (図44、図版15)

3区の北側、X=-132,399、Y=-33,262で検出した。直径56cmの円形を呈し、深さ23cm。黄灰色中～極粗砂が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

154落ち込み (図44)

3区の南側、X=-132,420～-132,424にかけて検出した。幅346cm、深さ6cm。灰色極細～極粗砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

168落ち込み (図44)

3区の中央部、X=-132,419付近で検出した。検出幅143cm、深さ21cm。灰色細砂～細礫が堆積している。遺物は須恵器・土師器の細片が出土した。

(2) 遺物 (図45、図版24)

第4-2層およびその下面の遺構からは、黒色土器・須恵器・土師器・灰釉陶器などが出土した。

図45-72は第4-2層より出土。黒色土器B類。碗の口縁部。73は側溝(第3-3層～第5-1層)より出土。灰釉陶器。壺の肩部。72・73ともに平安時代か。

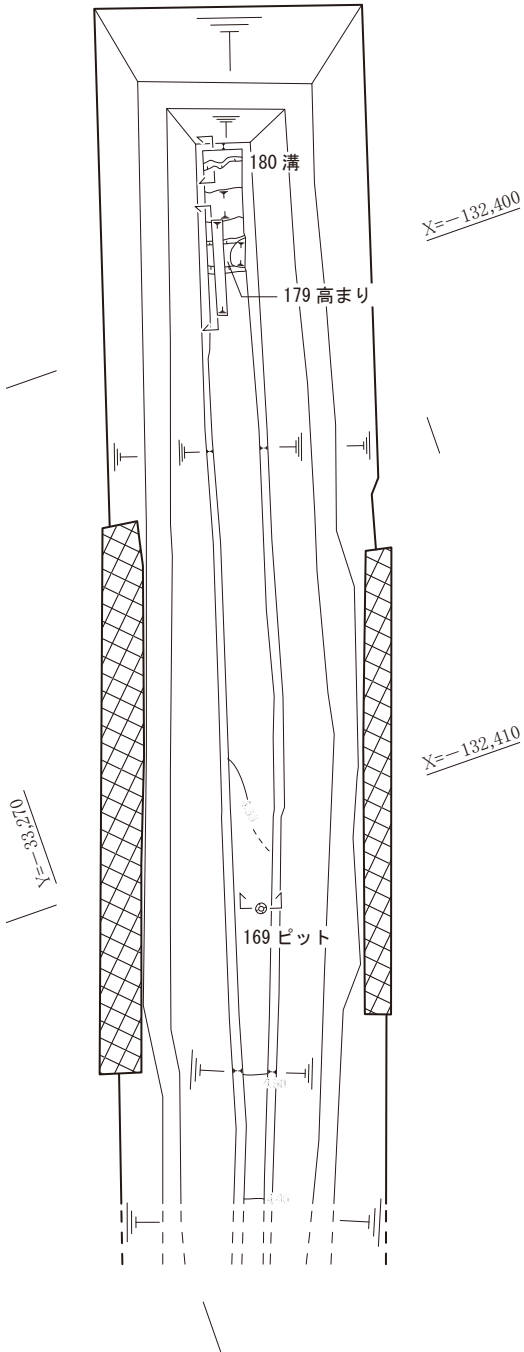
第4項 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

(1) 遺構

飛鳥・奈良時代の遺構は第5-1層下面・第5-2層下面において検出した。第5-1層下面では高まり・溝・ピット・落ち込みを検出したが、2区のような掘立柱建物などの集落に関わる遺構は確認できなかった。また、第5-2層下面の遺構は希薄であり、3区の北側において溝1条・ピット1基を検出したのみである。なお、3区では第5-3層下面において遺構は確認されなかった。



0.000/38.920=X



0.000/38.920=X

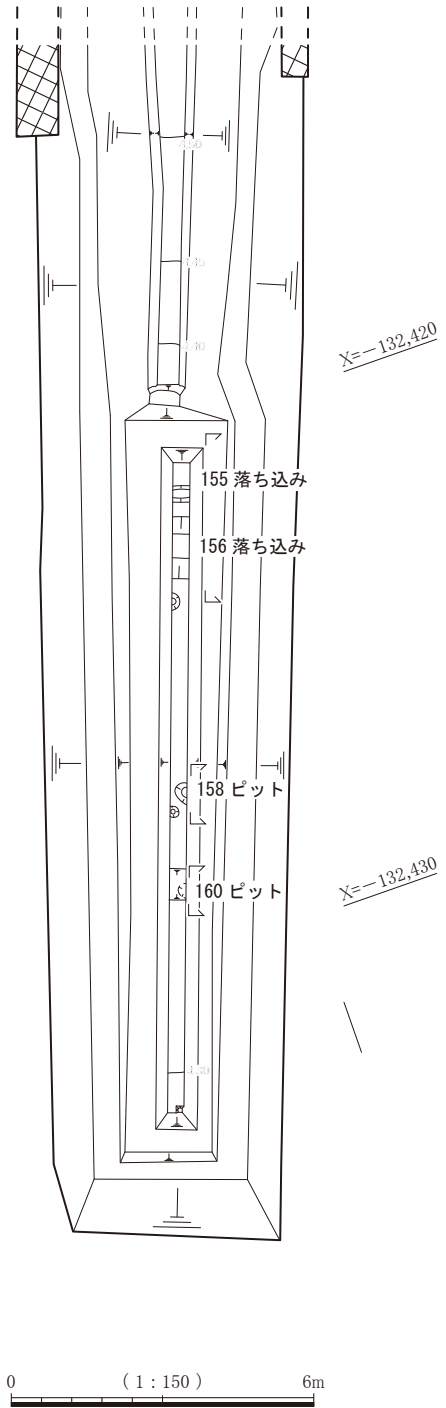


図 46 3区 第5-1層下面 遺構平面図

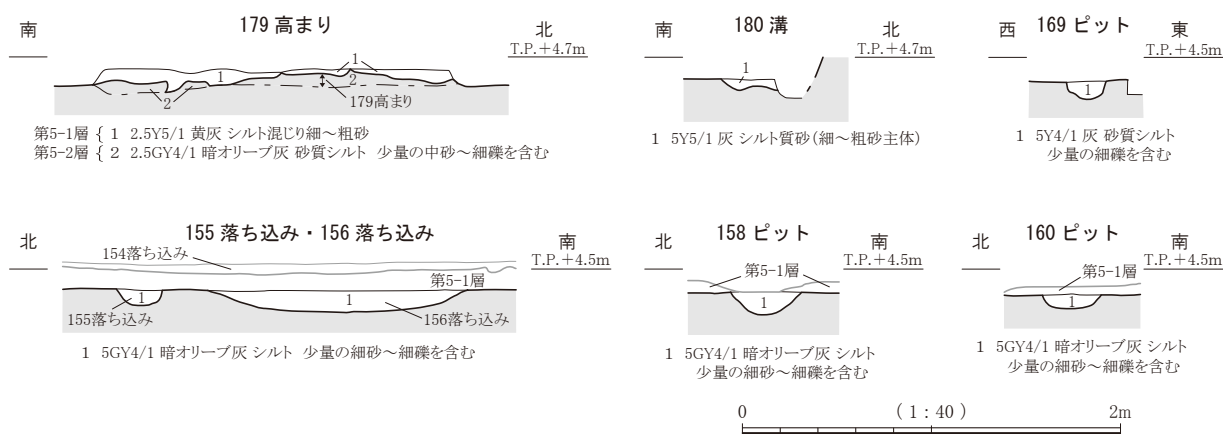


図47 3区 第5-1層下面 遺構断面図

【 第5-1層下面 】 (図46、図版14)

第5-1層は飛鳥・奈良時代の土壌層であり、3区の全域に存在している。当層を掘削した第5-1層下面の高さはT.P. +4.3~4.6mである。当面では高まりや溝・ピット、自然地形とみられる落ち込みを検出した。

高まりと溝は、3区の北側で検出した。上位の面で検出した溝や段差と位置・方位が近いことから、耕作に関わる可能性も考えられる。ただし、遺構を確認できた範囲が限られており、定かではない。ピットは3区の南側を中心に検出した。いずれも小規模で、埋土の状況からも掘立柱建物を構成する可能性は低い。

179高まり (図47、図版15)

3区の北側、X = -132, 399付近で検出した。遺構の輪郭は、黄灰色シルト混じり細～粗砂(第5-1層)と、これと比較してオリーブ色系の色が強くシルト分の多い、暗オリーブ灰色砂質シルト(第5-2層)との土質の違いから捉えた。幅64~67cm、高さ7cm。東西方向に延びる。

平面形が畦畔のような形状を呈するが、確認できた範囲が限られているため、断定はできない。

180溝 (図47、図版15)

3区の北側、X = -132, 397付近で検出した。北側の肩部は調査範囲外であり、検出幅80cm、深さ6cm。東西方向に延びる。灰色シルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

158ピット (図47、図版16)

3区の南側、X = -132, 427、Y = -33, 272で検出した。直径36cmの円形を呈し、深さ12cm。暗オリーブ灰色シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

160ピット (図47)

3区の南側、X = -132, 429、Y = -33, 272で検出した。直径31cmの円形を呈し、深さ8cm。暗オリーブ灰色シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

169ピット (図47、図版15)

3区の中央部、X = -132, 411、Y = -33, 266で検出した。直径21cmの円形を呈し、深さ10cm。灰色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

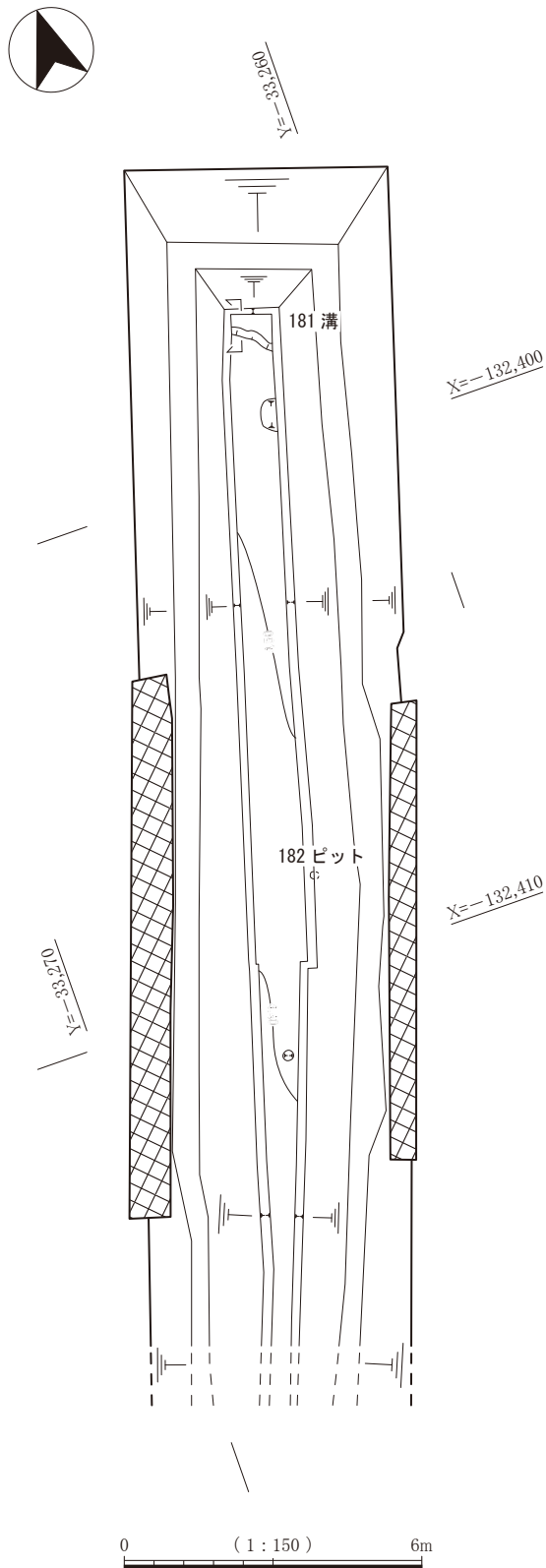


図 48 3区 第5-2層下面 遺構平面図

155落ち込み (図47)

3区の南側、 $X = -132,421$ 、 $Y = -33,270$ で検出した。幅24cm、深さ8cm。暗オリーブ灰色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

156落ち込み (図47)

3区の南側、 $X = -132,422$ 、 $Y = -33,270$ で検出した。幅137cm、深さ11cm。暗オリーブ灰色シルトが堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

【 第5-2層下面 】 (図48)

第5-2層は飛鳥・奈良時代の土壌層であり、3区の全域に存在している。当層を掘削した第5-2層下面の高さはT.P. +4.2~4.5mである。当面の遺構は希薄であり、北側において、性格不明の溝1条・ピット1基を検出したのみである。

181溝 (図49)

3区の北側、 $X = -132,397 \sim -132,398$ にかけて検出した。北側の肩部は調査範囲外であり、検出幅57cm、深さ12cm。東西方向に延びる。灰色シルト混じり細~粗砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

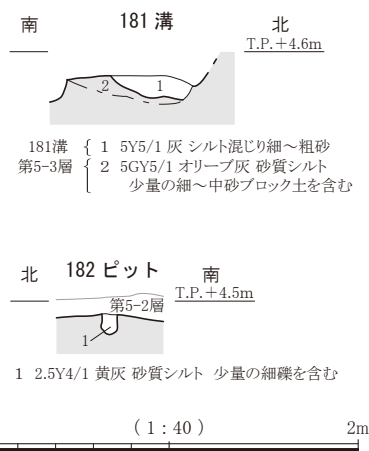


図 49 3区 第5-2層下面 遺構断面図

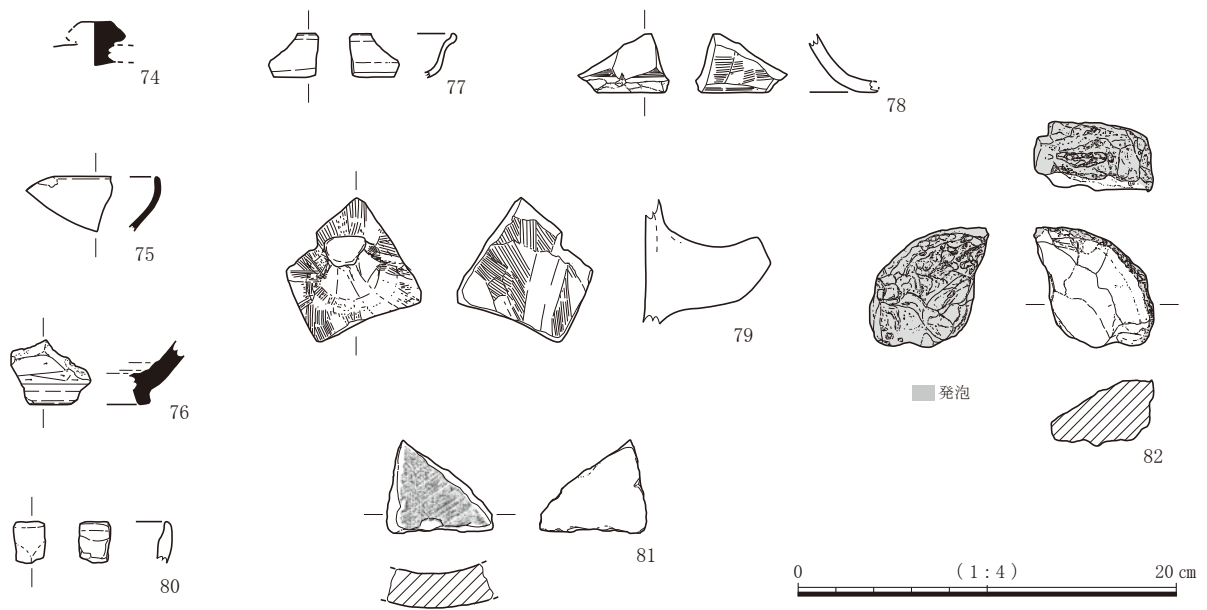


図50 3区 第5-1層～第5-3層 出土遺物

182ピット (図49)

3区の北側、X=-132,408、Y=-33,265で検出した。平面ではその輪郭を把握できなかったが、調査区東側の壁面においてその存在を確認した。直径8cmの円形を呈するものと思われる。深さ11cm。黄灰色砂質シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

(2) 遺物 (図50、図版24)

第5-1層～第5-3層および各層下面の遺構からは、須恵器・土師器・製塩土器・瓦などが出土した。

図50は第5-1層～第5-3層出土遺物。このうち、74・76・77・82は第5-1層、80・81は第5-2層、78・79は第5-3層、75は側溝(第5-1層～第5-3層)より出土した。

74～76は須恵器。74は蓋のつまみ部。75は鉢Aの口縁部。いずれも奈良時代か。76は壺の底部。

77～79は土師器。77は杯または皿の口縁部。奈良時代。78は高杯の脚部。内外面にハケメが施され、外面をヘラケズリにより面取りする。79は甕の体部。牛角状把手が付く。内外面にハケメが施される。

80は製塩土器。内外面ユビオサエ。奈良時代か。

81は瓦。凹面に布目が残る。古代。

82は不明土製品。中央部が凹み、厚手の椀のような形状を呈する。凹面はナデで平滑に仕上げる。側面と底面には被熱による発泡がみられ、金属生産に関わる遺物と考えられる。

第5項 古墳時代の遺構と遺物

(1) 遺構

3区では第6-1層下面において遺構は検出されなかった。第6-2層下面においても人為的な遺構は検出されなかったが、地震による地層の変形を確認できた。

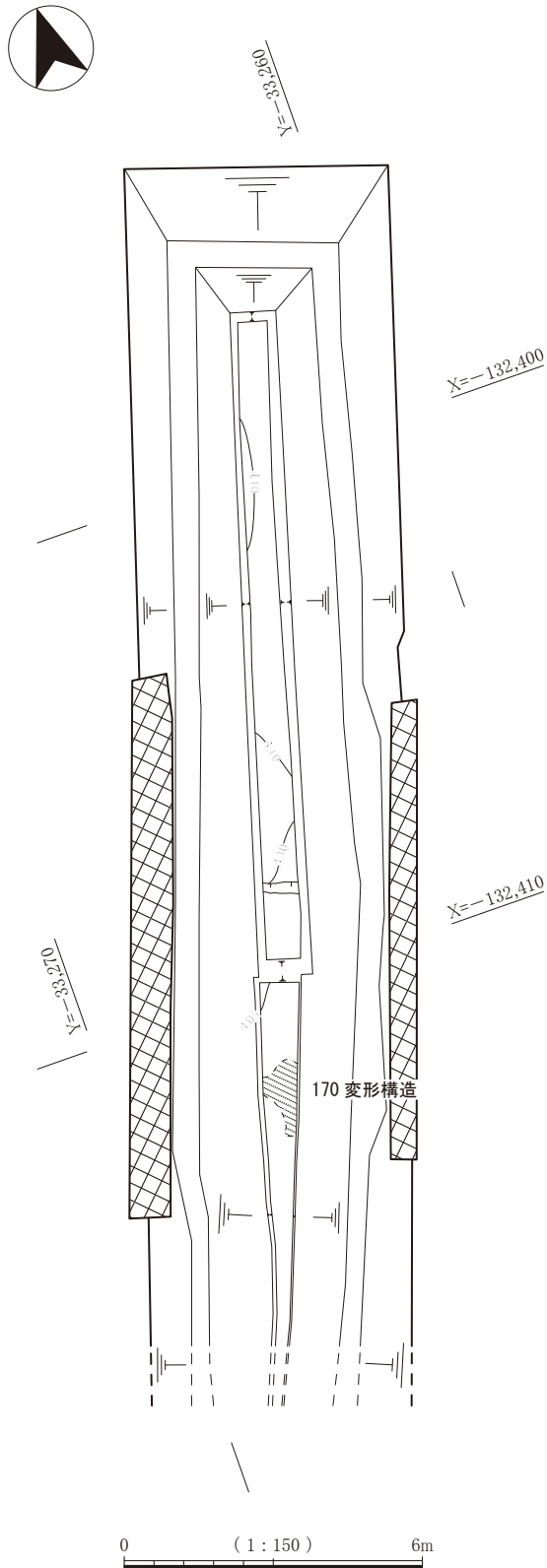


図 51 3区 第6-2層下面 遺構平面図

【 第6-2層下面 】 (図51、図版16)

第6-2層は古墳時代の土壌層であり、3区の全域に存在している。当層を掘削した第6-2層下面の高さはT.P. +3.9~4.1mである。当面では南側に向かって下がる自然の傾斜が確認されるのみで、遺構は認められなかったが、地震による地層の変形を確認した。

170変形構造 (図51、図版16)

3区の中央部、X=-132,412、Y=-33,267で検出した。基盤層(第7層)の暗オリーブ灰色シルトに、第6-2層のオリーブ黒色シルトが渦状に入り込む。

第6-2層より須恵器が出土していることから、古墳時代中期以降の地震によって形成されたものと考えられる。

(2) 遺物 (図52、図版24)

第6-1層・第6-2層からは、主として須恵器・土師器が出土した。

図52は第6-1層・第6-2層・廃土出土遺物。このうち、84は第6-1層、83は第6-2層、85は廃土より出土した。83・84は須恵器。83は杯の口縁部。84は甕または壺の体部。外面に縄蓆文タタキが施される。85は埴輪の底部。内外面にユビオサエ、底面には植物の圧痕がみられる。

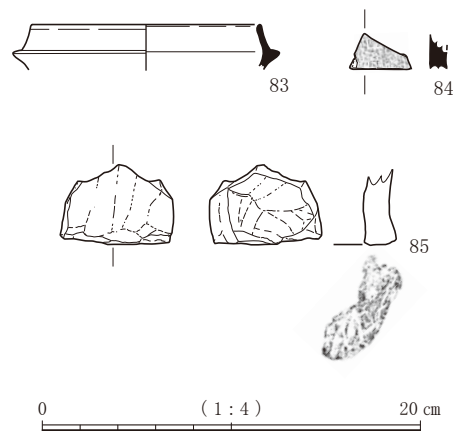


図 52 3区 第6-1層・第6-2層・廃土 出土遺物

第4節 4区の調査成果

4区は3区の南側に位置する。既設の水路が南北方向から東西方向へと向きを曲げる地点の北側に設けた、長さ2.6m、幅1.9mの調査区である。

4区は狭隘地にあり、文化財を包蔵する地層も現地表面から2.0m以上深くに存在する。矢板打設や土留めも不可能な条件下にあり、人力による平面的な調査は危険と考えられることから、当調査区については、機械掘削による層序の確認や遺物の回収を目的とした調査を実施した（図版16-5）。

地層を確認しながら掘削を進めたところ、遺構は検出できなかったが、表土から第6層まで3区や5区と同様の地層の堆積状況を確認できた。また、第1層より陶器、第4層より須恵器、第5層より土師器の細片が出土した。

現地表面から2.8m掘り下げた第6層掘削中に湧水が激しくなり、調査区壁面が崩落する危険性が生じた。そのため、当層の掘削途中で調査を終了しており（図版16-6）、基盤層は確認できなかった。

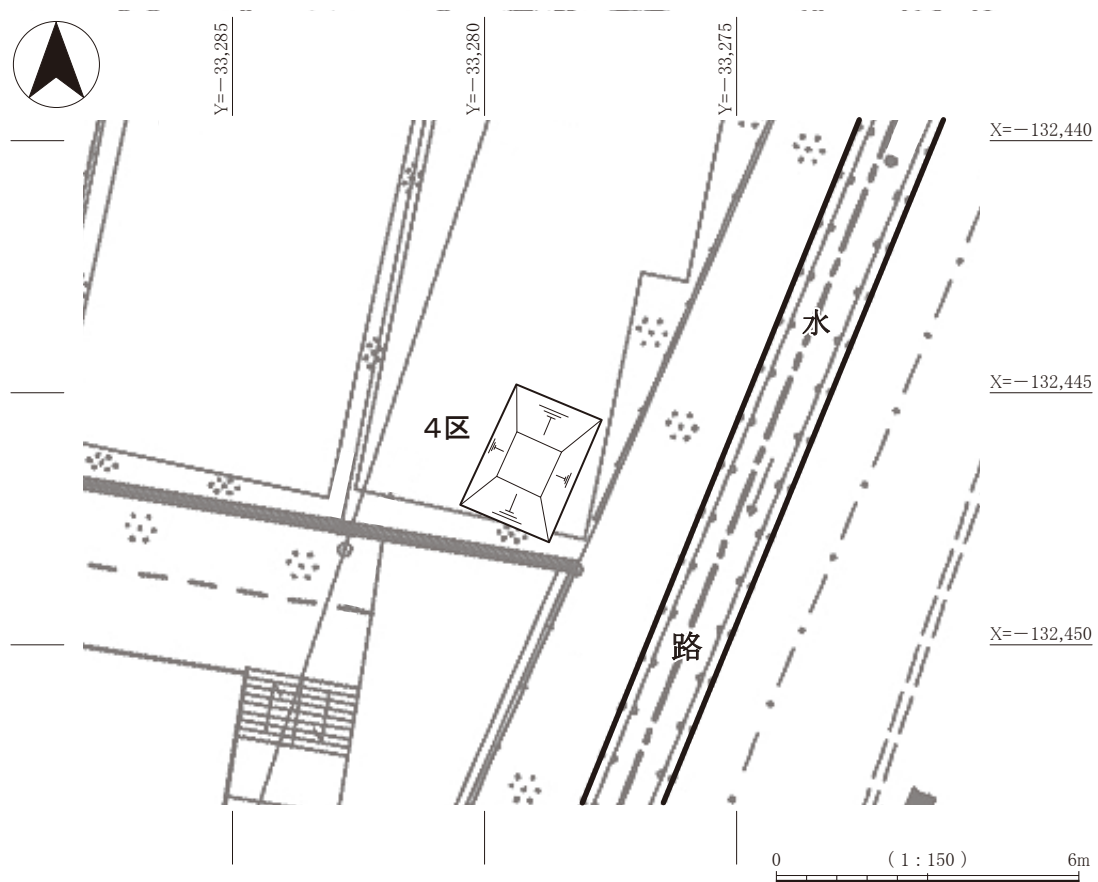


図53 4区 調査区平面図

第5節 5区の調査成果

第1項 成果の概要

5区は4区の南側に位置する。既設の水路が南北方向から東西方向へと向きを曲げる地点の南側に設けた、1辺8mの正方形の調査区である。

調査の結果、古墳時代から中世にかけての各時期の遺構が検出された。第2-1層下面では中世の溝や土坑を、第4-2層下面では平安時代の段差・落ち込みなどの遺構を検出した。これらの遺構について、確認できた範囲は限られているが、2・3区と同様に耕作に関わる可能性も考えられる。第5層下面より下位の遺構面では、遺構は確認できなかった。ただし、第5層から第6-2層にかけて遺物が出土しており、付近に古代や古墳時代に遡る遺構が存在する可能性は高い。また、3区と同様に、古墳時代の遺構面である第6-2層下面において、地震による地層の変形を確認した。

遺物としては、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・灰釉陶器・石製品・鉄製品などが出土した。

第2項 中世の遺構と遺物

(1) 遺構

中世の遺構としては、第2-1層下面において溝と土坑、第3-2層下面において落ち込みを検出した。2・3区とは異なり、畦畔や耕作溝といった明確な耕作の痕跡は認められなかったものの、5区にも2・3区と同様の耕作土層が広がっている。そのため、これら5区で検出した一部の遺構には、耕作に関わる可能性も考えられる。

なお、5区では第3-3層下面・第3-4層下面において遺構は確認されなかった。

【第2-1層下面】(図54、図版17)

近世～近代の洪水堆積層である第2-1層を掘削した、T.P. +5.1～5.2m前後の高さにおいて溝や土坑を検出した。これらの遺構から出土した遺物には近世以降のものが認められず、中世の瓦器・瓦質土器を主体としていることから、中世に帰属する遺構と考えた。本来は5区にも第3-1層が存在していたが、後世の洪水により失われ、深く掘られた遺構だけが残存して検出されたものと考えられる。

161溝(図55、図版18)

X = -132, 468付近で検出した。幅148～224cm、深さ62cm。東西方向に延びる。162土坑を切っており、この遺構より新しい。ラミナがみられる灰白色細砂～細礫が堆積している。遺物は土師器皿(図58-91)の他、瓦器・瓦質土器・灰釉陶器・須恵器・土師器の細片が出土した。

163溝(図55、図版18)

X = -132, 471付近で検出した。幅47～59cm、深さ25cm。東西方向に延びる。162土坑に切られており、この遺構より古い。黄灰色シルト混じり細～中砂と黄灰色シルト質砂のブロック土が堆積している。遺物は瓦器皿(図58-86)が出土した。

162土坑(図55、図版18)

X = -132, 470、Y = -33, 286で検出した。長軸224cm、短軸126cm、深さ47cm。南側が調査範囲外に及んでいるためその全形は不明で、溝になる可能性も考えられる。161溝に切られておりこの遺構より



Y=-33,290

Y=-33,285

Y=-33,280

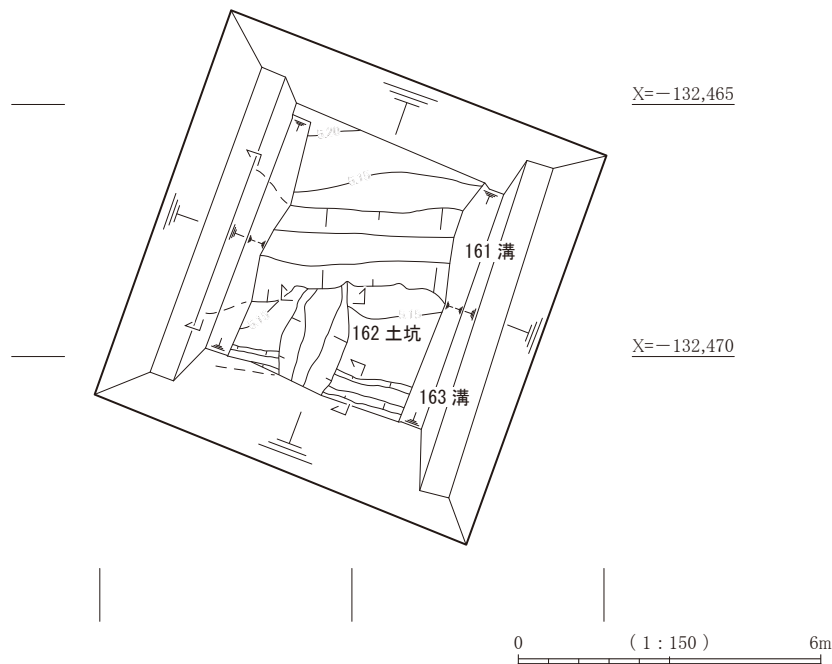


図54 5区 第2-1層下面 遺構平面図

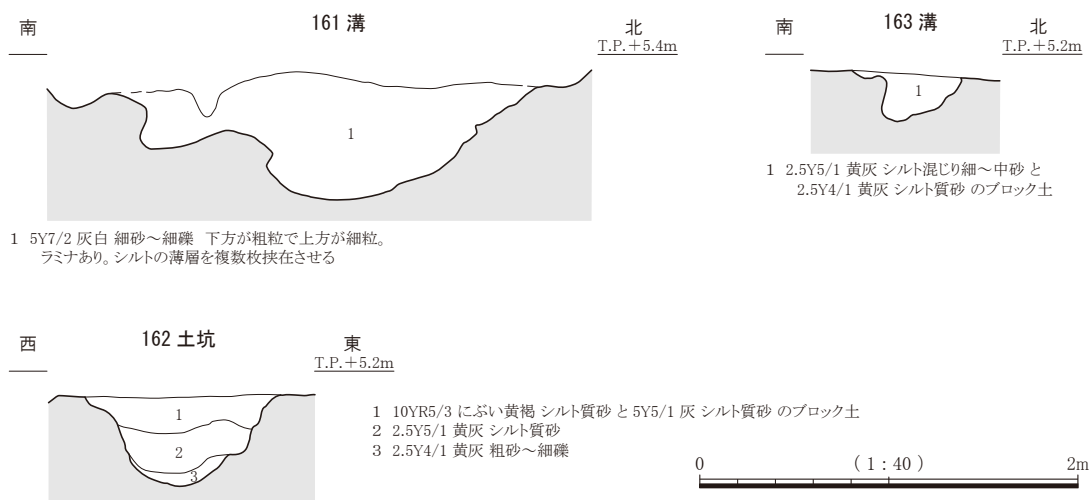


図55 5区 第2-1層下面 遺構断面図

古く、163溝を切っておりこの遺構より新しい。埋土は3層に分かれ、下位に黄灰色粗砂～細礫、中位に黄灰色シルト質砂、上位ににぶい黄褐色シルト質砂と灰色シルト質砂のブロック土が堆積している。遺物は瓦質土器甕・羽釜（図58-88～90）の他、瓦器・瓦質土器・須恵器・土師器の細片が出土した。

【 第3-2層下面 】（図56、図版18）

第3-2層は中世の耕作土層であり、当層を掘削した第3-2層下面の高さはT.P. +4.7～4.8mである。当面では自然地形とみられる落ち込みを検出した。

164落ち込み（図57、図版18）

X = -132, 467～-132, 468にかけて検出した。幅104～185cmの不定形を呈し、深さ49cm。黄灰色極細

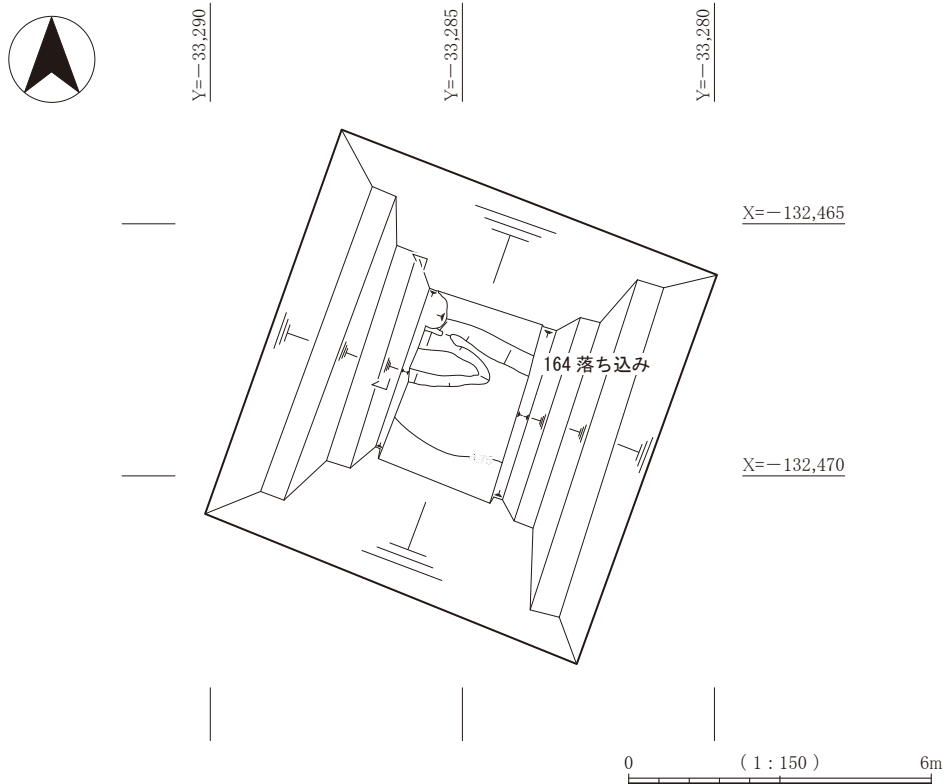


図 56 5区 第3-2層下面 遺構平面図

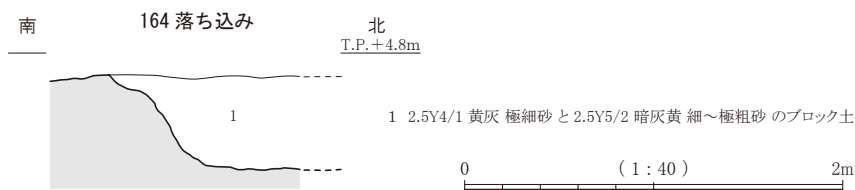


図 57 5区 第3-2層下面 遺構断面図

砂と暗灰黄色細～極粗砂のブロック土が堆積している。遺物は瓦器碗や土師器皿・瓦（図58-87・92～94）の他、瓦器・瓦質土器・陶器・須恵器・土師器の細片が出土した。

（2）遺物（図58・59、図版25）

第3-2層・第3-3層および第2-1層下面・第3-2層下面の遺構からは、瓦器・瓦質土器・須恵器・土師器・陶器・瓦・鉄製品などが出土した。

図58は遺構出土遺物。このうち、91は161溝、88～90は162土坑、86は163溝、87・92～94は164落ち込みより出土した。86・87は瓦器。86は皿の口縁部。内外面にナデが施される。87は碗。口縁部内端に沈線、体部内外面にヘラミガキ、見込みに暗文が施される。中世前期（12世紀）。88～90は瓦質土器。88は甕の口縁部。89・90は羽釜。89は口縁部、90は鏝部。91～93は土師器。いずれも皿。92は完形で口径7.6cm、器高1.3cm。94は丸瓦。凹面に布目が残る。

図59は第3-2層・第3-3層出土遺物。このうち、95～97・100は第3-2層、98・99は第3-3層より出土した。95・96は瓦器。95は碗。高台が無く、見込みに鋸歯状の暗文が施される。中世後期（14世紀）。96は皿。内面に細く疎らなヘラミガキが施される。97は瓦質土器。羽釜の脚部。98・99は土師器。いずれも皿。99は内面にハケメが施される。100は鉄鏝。残存長9.9cm、重さ12.1g。

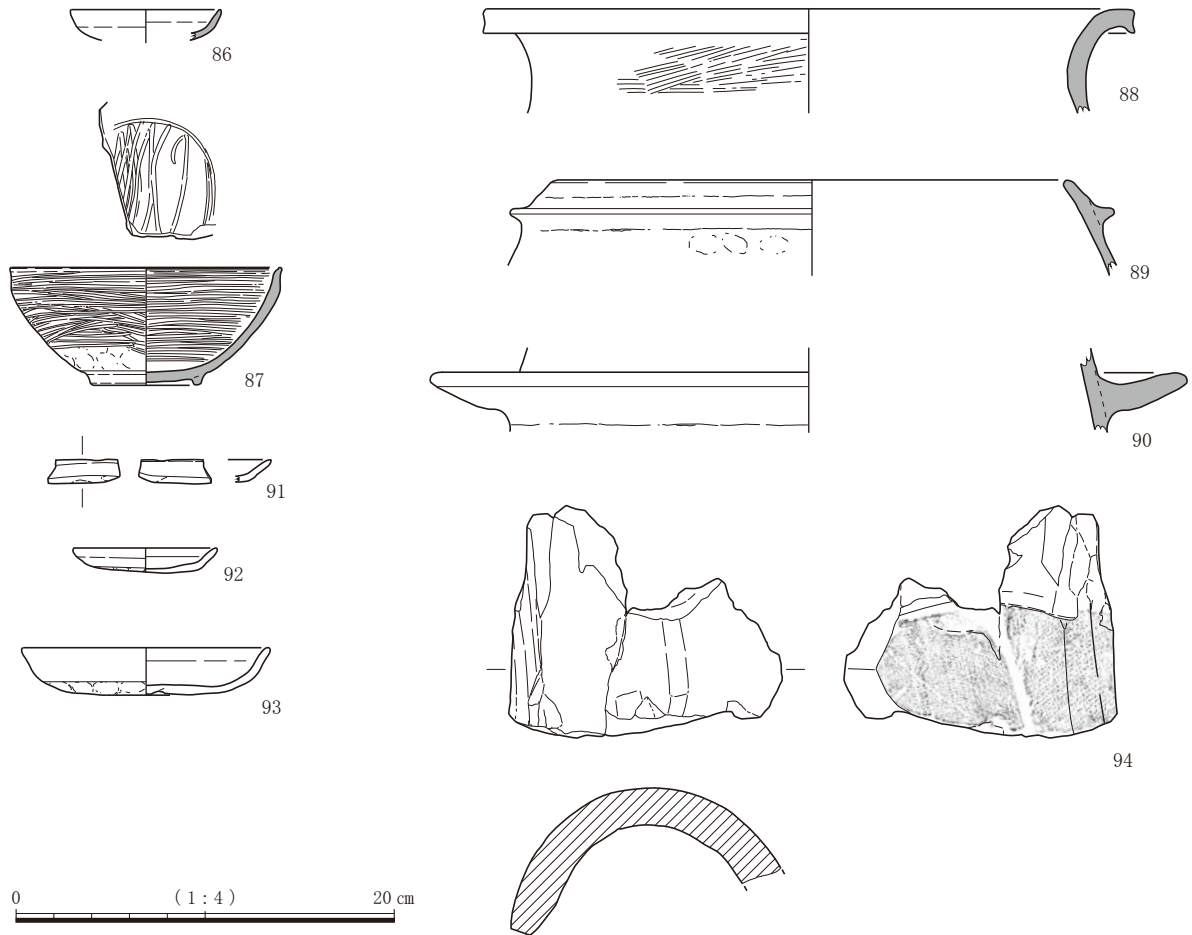


図 58 5区 161・163 溝、162 土坑、164 落ち込み 出土遺物

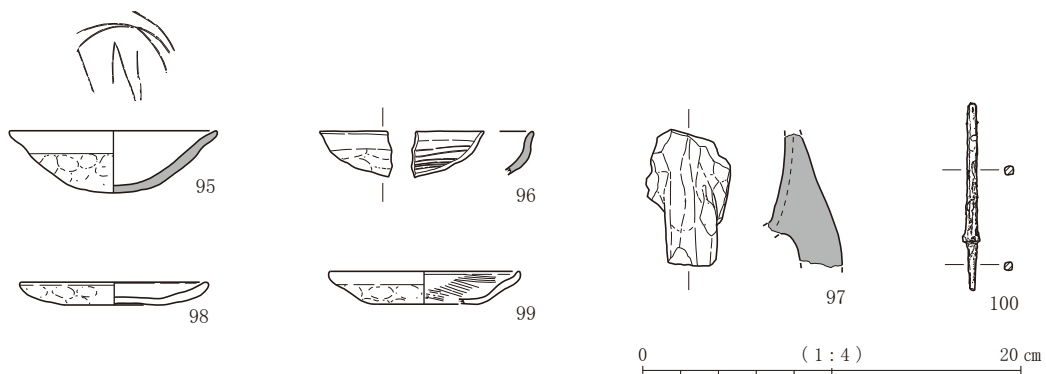


図 59 5区 第3-2層・第3-3層 出土遺物

第3項 古代の遺構と遺物

(1) 遺構

古代の遺構は平安時代と考えられる第4-2層下面にて検出した。なお、第4-1層下面・第5層下面では遺構は検出できなかった。

【 第4-2層下面 】 (図60、図版17)

第4-2層は平安時代の洪水堆積層であり、当層を掘削した第4-2層下面の高さはT.P. +4.0~4.2mである。当面では段差・落ち込みを検出した。これらの遺構について、耕作に関わる可能性も考えられるが、確認できた範囲が限られており、その機能・性格の判断は難しい。

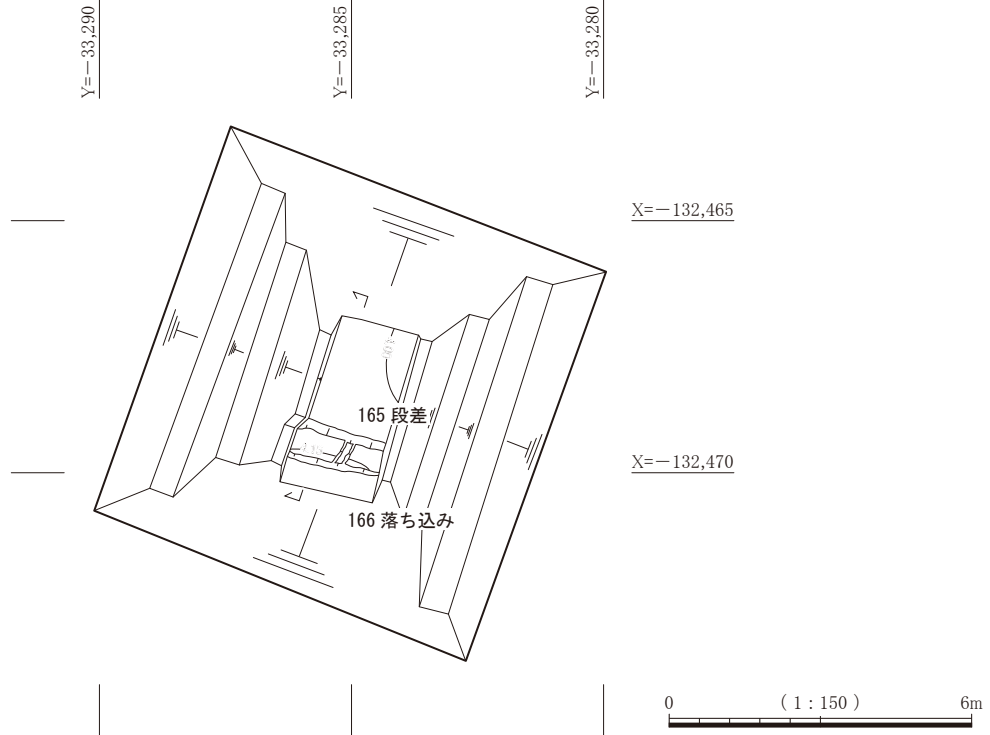


図 60 5区 第4-2層下面 遺構平面図

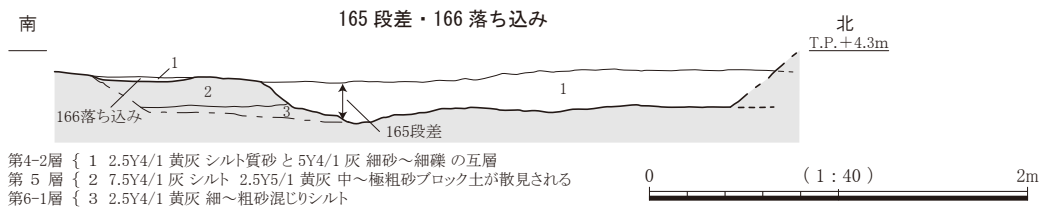


図 61 5区 第4-2層下面 遺構断面図

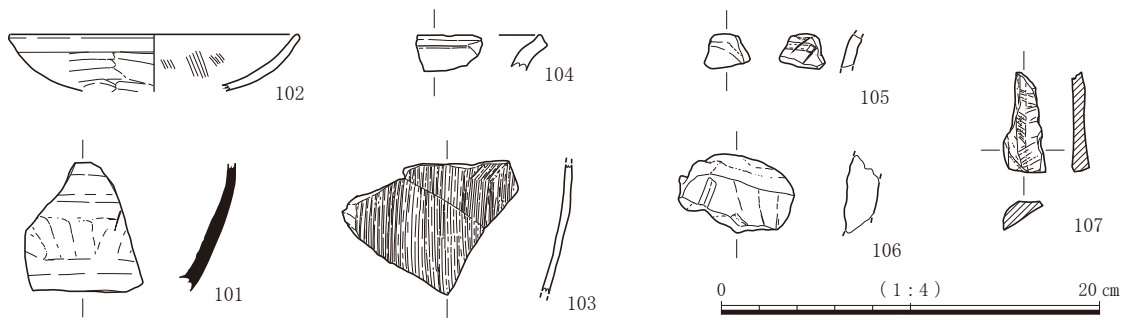


図 62 5区 第4-2層・第5層 出土遺物

165段差 (図61、図版18)

X=-132,469付近で検出した。遺構の輪郭は、灰色細砂～細礫(第4-2層)と、これと比較してシルトが多い灰色シルト(第5層)との土質の違いから捉えた。北側へ18cm程度下がる段がおよそ東西方向に延びる。この段差を覆う第4-2層からは、灰釉陶器・須恵器・土師器・製塩土器などが出土した(図62-101・103~106)。

166落ち込み (図61)

X=-132,470付近で検出した。幅60cm、深さ2cm。黄灰色シルト質砂および灰色細砂～細礫が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

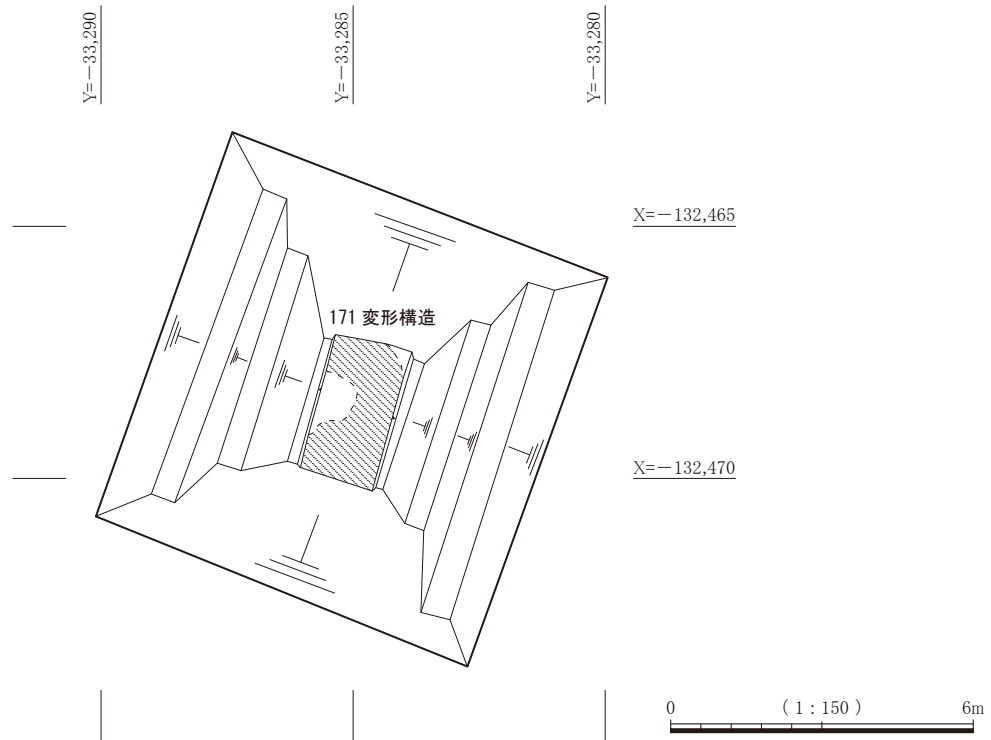


図63 5区 第6-2層下面 遺構平面図

(2) 遺物 (図62、図版25)

第4-2層・第5層からは、主として須恵器・土師器が出土した。

図62は第4-2層・第5層出土遺物。このうち、101・103～106は第4-2層、102は第5層より出土した。107は出土層位不明であるが、当項にまとめて記す。101は須恵器。鉢もしくは壺の体部。102・103は土師器。102は杯。103は甕の体部。外面に粗いハケメが施される。104は灰釉陶器。壺の口縁部か。平安時代。105・106は製塩土器か。105は内面に布目が残る。107は砥石。凝灰岩もしくは流紋岩。上面に使用の痕跡が認められる。

第4項 古墳時代の遺構と遺物

(1) 遺構

5区では第6-1層下面にて遺構は検出できず、第6-2層下面にて地震による地層の変形を確認した。

【 第6-2層下面 】 (図63、図版17)

第6-2層は古墳時代の土壌層であり、当層を掘削した第6-2層下面の高さはT.P. +3.9mである。当面では人為的な遺構は認められなかったが、地震による地層の変形を確認した。

171変形構造 (図63、図版18)

5区のほぼ全域で検出した。基盤層(第7層)の黄灰色粘土～シルトに、第6-2層の黒褐色シルトが渦状に入り込む。3区で検出した変形構造と同様に、古墳時代中期以降の地震により形成されたものと考えられる。

(2) 遺物

第6-1層・第6-2層からは土師器が出土しているが、細片のため実測図化は行わなかった。

第6節 6区の調査成果

第1項 成果の概要

6区は今回着手した調査区のうち、最も南側に位置する。蝶矢踏切より約130m南側に設けた、南北16.3m、東西6.5～7.4mの調査区である。

調査の結果、中世の遺構が検出された。足跡群や段差・溝など、耕作に関わると考えられるものである。第3-4層下面より下位の遺構面では、遺構は確認できなかった。ただし、第4-1層から第6-1層にかけて遺物が出土しており、付近に古代や古墳時代に遡る遺構が存在する可能性は高い。

遺物としては、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・白磁の他、緑釉陶器や埴輪も出土した。

第2項 中世の遺構と遺物

(1) 遺構

中世の遺構としては、第3-1層から第3-3-2層の各層の下面において段差や足跡群・溝などを検出した。2・3区とは異なり、6区では第3-1層に相当する地層として、砂礫の顕著な洪水堆積層が広がる。第3-2層以下については、2・3区と同様の耕作土層が広がっている。また、検出された遺構には、およそ正方位に延びるものもみられ、耕作に関わる可能性がある。

なお、6区では第3-4層下面において遺構は確認されなかった。

【 第3-1層下面 】 (図64、図版19)

第3-1層は中世の洪水堆積層であり、当層を掘削した第3-1層下面の高さはT.P. +5.2～5.6mである。当面では耕作に関わる可能性がある段差および足跡群を検出した。

186段差 (図65)

5区の南側、X = -132, 522付近で検出した。遺構の輪郭は、浅黄色細砂～細礫(第3-1層)と、これと比較してシルトが多い褐灰色砂質シルト(第3-2層)との土質の違いから捉えた。北側へ37cm程度下がる段が東西方向に延びる。

187足跡群・188足跡群 (図64、図版20)

186段差より北側、T.P. +5.2m前後の高さにおいて、長軸20～30cm程度の人の足跡を多数検出した。5区の南側X = -132, 519～-132, 521にかけて検出したものを187足跡群、5区の北側X = -132, 511～-132, 514にかけて検出したものを188足跡群とした。灰色細～極粗砂が堆積する。足跡の方向性は一貫せず、不規則につけられている。

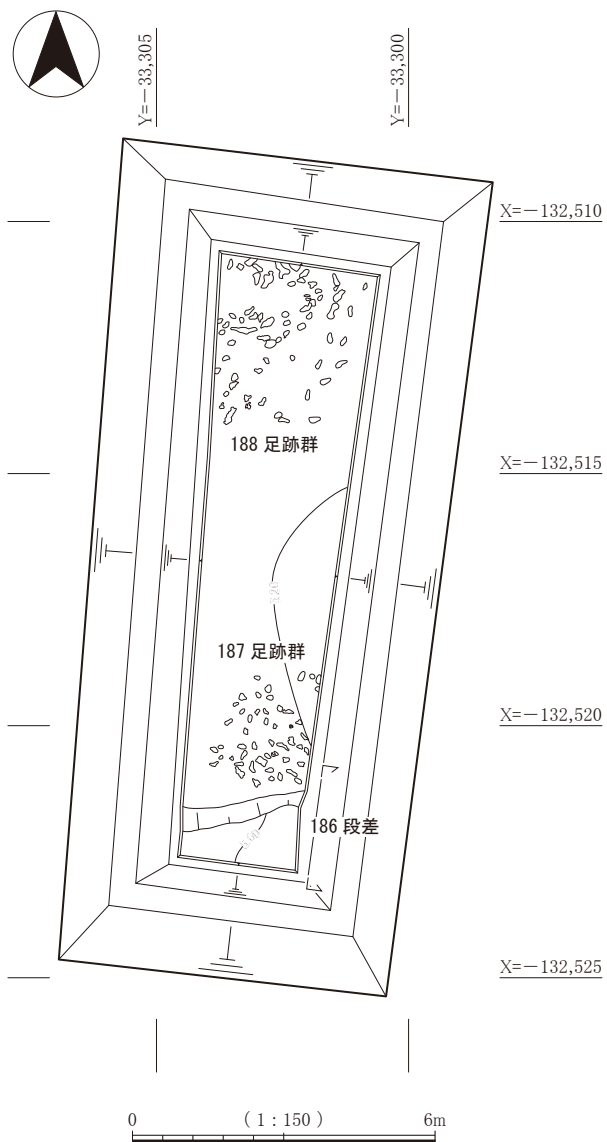
【 第3-2層下面 】 (図64、図版20)

第3-2層は中世の耕作土層であり、当層を掘削した第3-2層下面の高さはT.P. +5.1～5.3mである。当面では段差を検出した。

193段差 (図65)

5区の南側、X = -132, 522付近で検出した。第3-1層下面で検出した186段差の痕跡であり、北側へ33cm程度下がる段が東西方向に延びる。

【 第3-1層下面 遺構平面図 】



【 第3-2層下面 遺構平面図 】

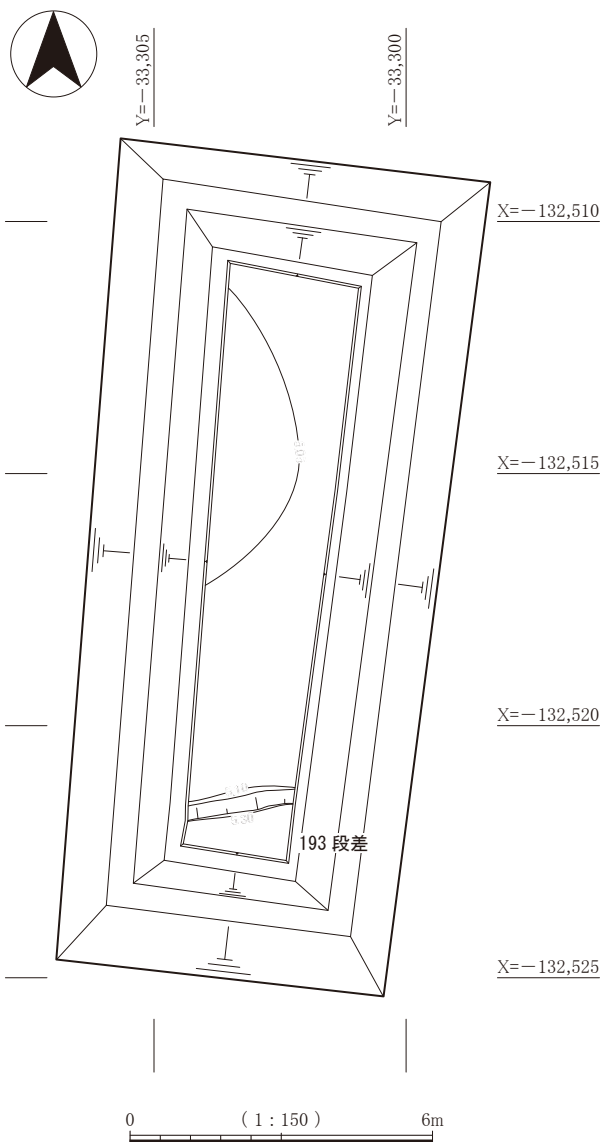


図 64 6区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構平面図

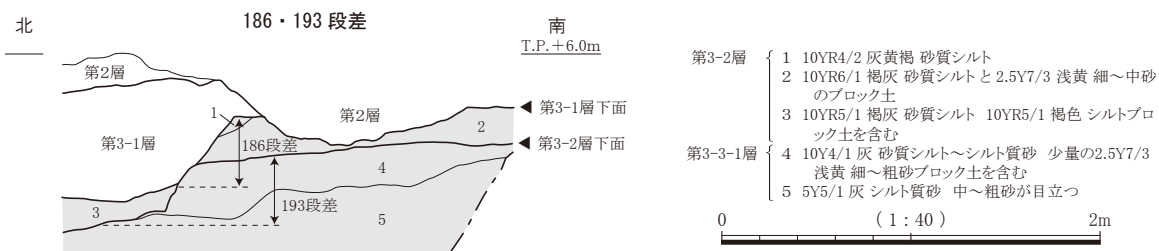


図 65 6区 第3-1層下面・第3-2層下面 遺構断面図

【 第3-3-1層下面 】 (図66、図版19)

第3-3-1層は中世の耕作土層であり、当層を掘削した第3-3-1層下面の高さはT.P. +4.8~5.1mである。当面では耕作に関わる段差と溝群を検出した。

189段差 (図67、図版20)

5区の南側、X=-132,522付近で検出した。遺構の輪郭は、灰色シルト質砂(第3-3-1層)と、これと比較してシルトの多い灰色砂質シルト(第3-3-2層)との土質の違いから捉えた。北側へ16cm程度下がる段が東西方向に延びる。

第3-3-1層を形成した耕作に伴うものと考えられる。上位の第3-1層下面で検出した186段差と位置・方位をほぼ同じくしており、地割として後世に踏襲された可能性がある。

190耕作溝群 (図66)

189段差の北側、X=-132,512~-132,522にかけて検出した南北方向および東西方向に延びる多数の溝については、一括して190耕作溝群とした。幅13~26cm、深さ2~3cm。主として灰色細~粗砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

【 第3-3-2層下面 】 (図66)

第3-3-2層は中世の耕作土層であり、6区ではその南端部のみに存在する。当層を掘削した第3-3-2層下面の高さはT.P. +4.9mである。当面では自然地形とみられる落ち込みを検出した。

192落ち込み (図67、図版20)

5区の南側、X=-132,522、Y=-33,303で検出した。長軸76cm、短軸39cmの楕円形を呈し、深さ10cm。黄灰色砂質シルトおよび黄灰色細砂~細礫が堆積している。遺物は土師器の細片が出土した。

(2) 遺物 (図68、図版26)

第3-1層~第3-4層および各層下面の遺構からは、主として瓦器・瓦質土器・須恵器・土師器が出土した。

図68は第3-1層~第3-4層出土遺物。このうち、108・111は第3-1層、113は第3-2層、109・115は第3-3-2層、114は第3-4層、110・112・116~120は側溝(第3-2層~第3-4層)より出土した。

108・109は瓦器。いずれも椀で口縁部内端に沈線、内面および口縁部外面にヘラミガキが施される。中世前期(12~13世紀)。110は黒色土器A類。椀の口縁部で内面にはヘラミガキが施される。平安時代(9世紀)。

111・112は土師器。いずれも皿の口縁部。中世に帰属するものと思われる。

113・114は須恵器。113は鉢の口縁部。口縁端部が丸く肥厚する。中世後期(14世紀後半以降)。114は壺の口縁部。外面に波状文が施される。古墳時代。

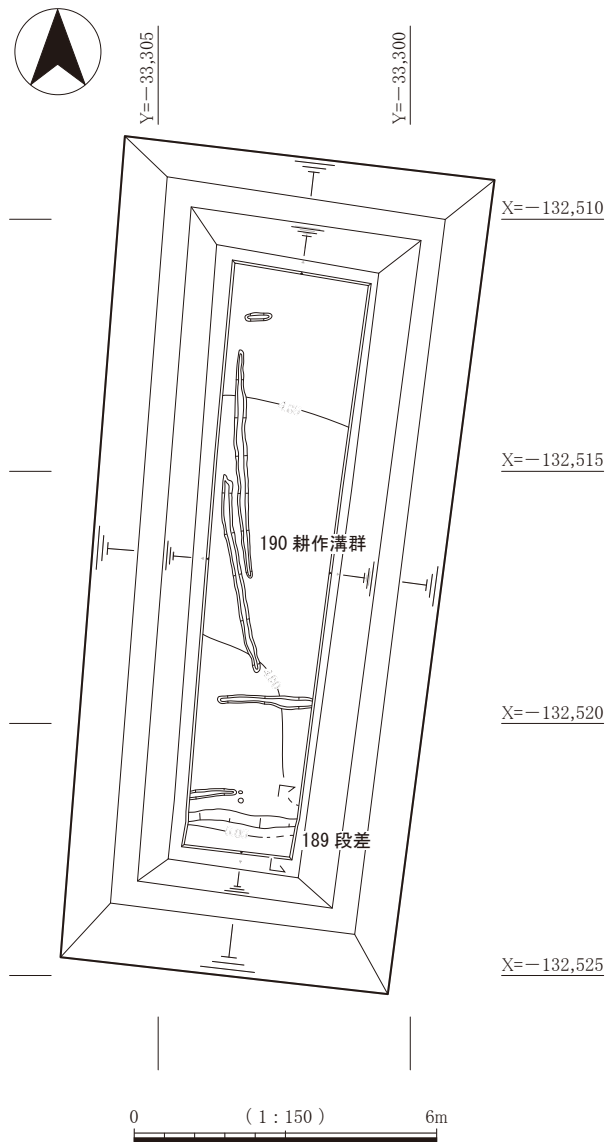
115は緑釉陶器。椀の底部。硬陶で削り出しによって高台をつくる。底部外面には一部施釉されていない範囲がみられる。平安時代(9世紀後半以降)のものと考えられる。

116は灰釉陶器。椀の底部か。断面方形の付高台。内面のみ施釉されている。平安時代。

117・118は白磁。いずれも碗または皿の口縁部。117は全面施釉されているが、118は口縁端部に施釉されていない口禿である。

119は埴輪。A種ヨコハケが施される。古墳時代前期(4世紀中葉)。

【 第3-3-1層下面 遺構平面図 】



【 第3-3-2層下面 遺構平面図 】

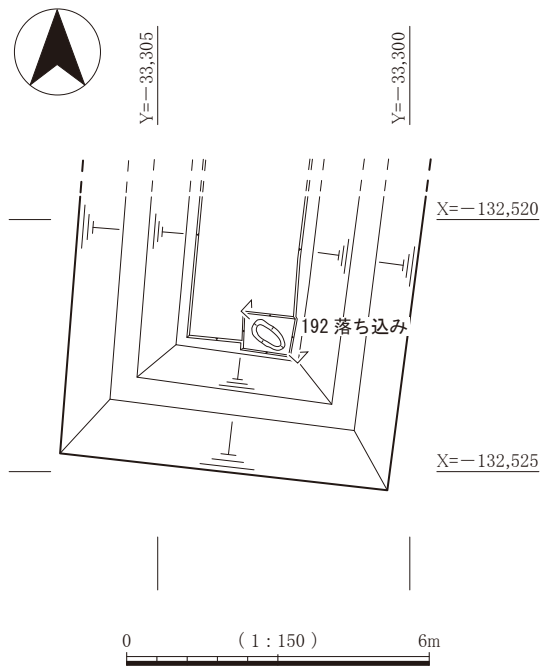
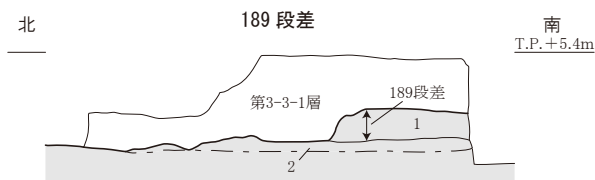


図 66 6区 第3-3-1層下面・第3-3-2層下面 遺構平面図

【 第3-3-1層下面遺構 】



第3-3-2層 { 1 5Y4/1 灰 砂質シルト(細～粗砂質) 下方は粗～極粗砂が目立つ
 第3-4層 { 2 5Y4/1 灰 砂質シルト(細砂質) 少量の細～中砂ブロック土が散見される

【 第3-3-2層下面遺構 】

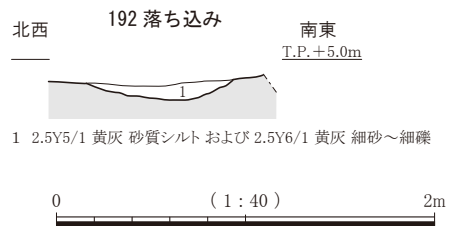


図 67 6区 第3-3-1層下面・第3-3-2層下面 遺構断面図

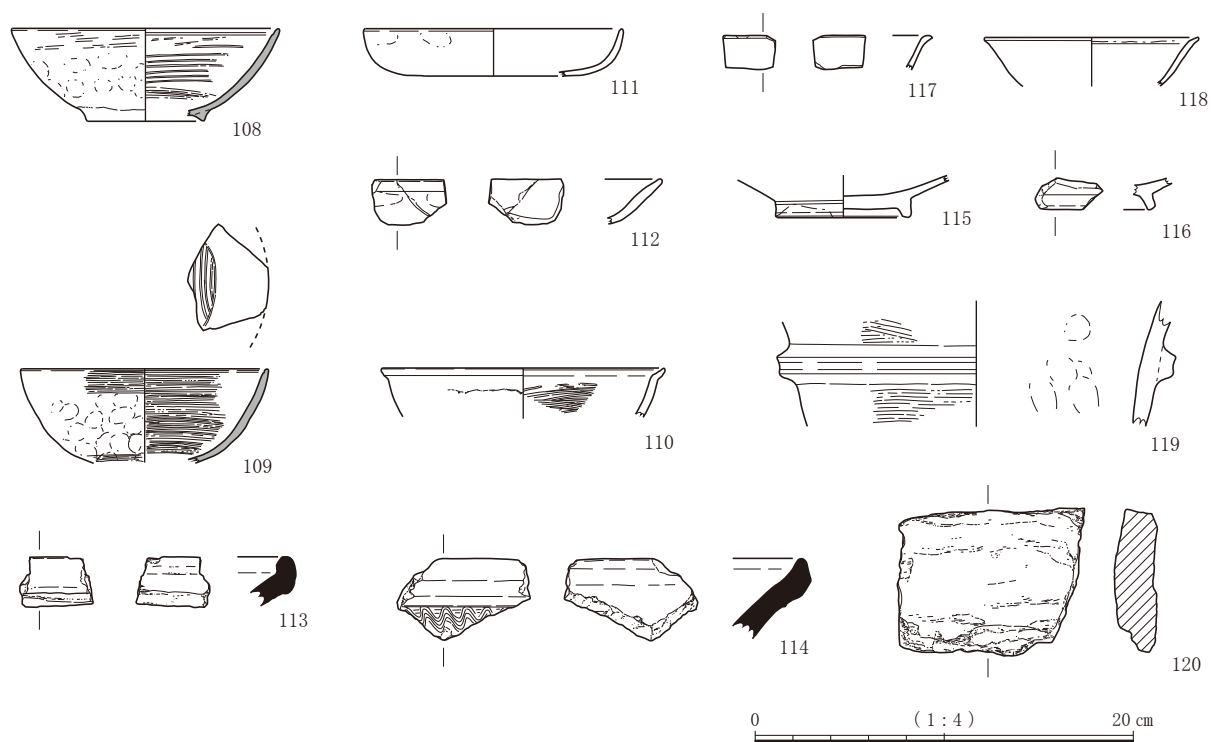


図 68 6区 第3-1層～第3-4層等 出土遺物

120 は石製品。板状を呈する紅簾片岩。石鋸の素材となる可能性がある。

第3項 古墳時代～平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構 (図 69、図版 19・20)

第3-4層から第6-1層まで地層ごとに掘り分けて、それぞれの下面で遺構の検出に努めたが、北側に向かって下がる自然の傾斜が確認されるのみで、遺構は確認できなかった。ただし、第4-1層から第6-1層にかけて須恵器や土師器などの遺物が出土しており、付近に古代や古墳時代に遡る遺構が存在する可能性は高い。

(2) 遺物 (図 70、図版 26)

第4-1層～第6-1層からは、須恵器・土師器が出土した。

図 70-121 は第6-1層より出土した須恵器甕。肩部外面にはタタキが施され、内面には当て具痕が観察される。古墳時代後期のものとみられる。

【 第5層下面 遺構平面圖 】

【 第6-1層下面 遺構平面圖 】

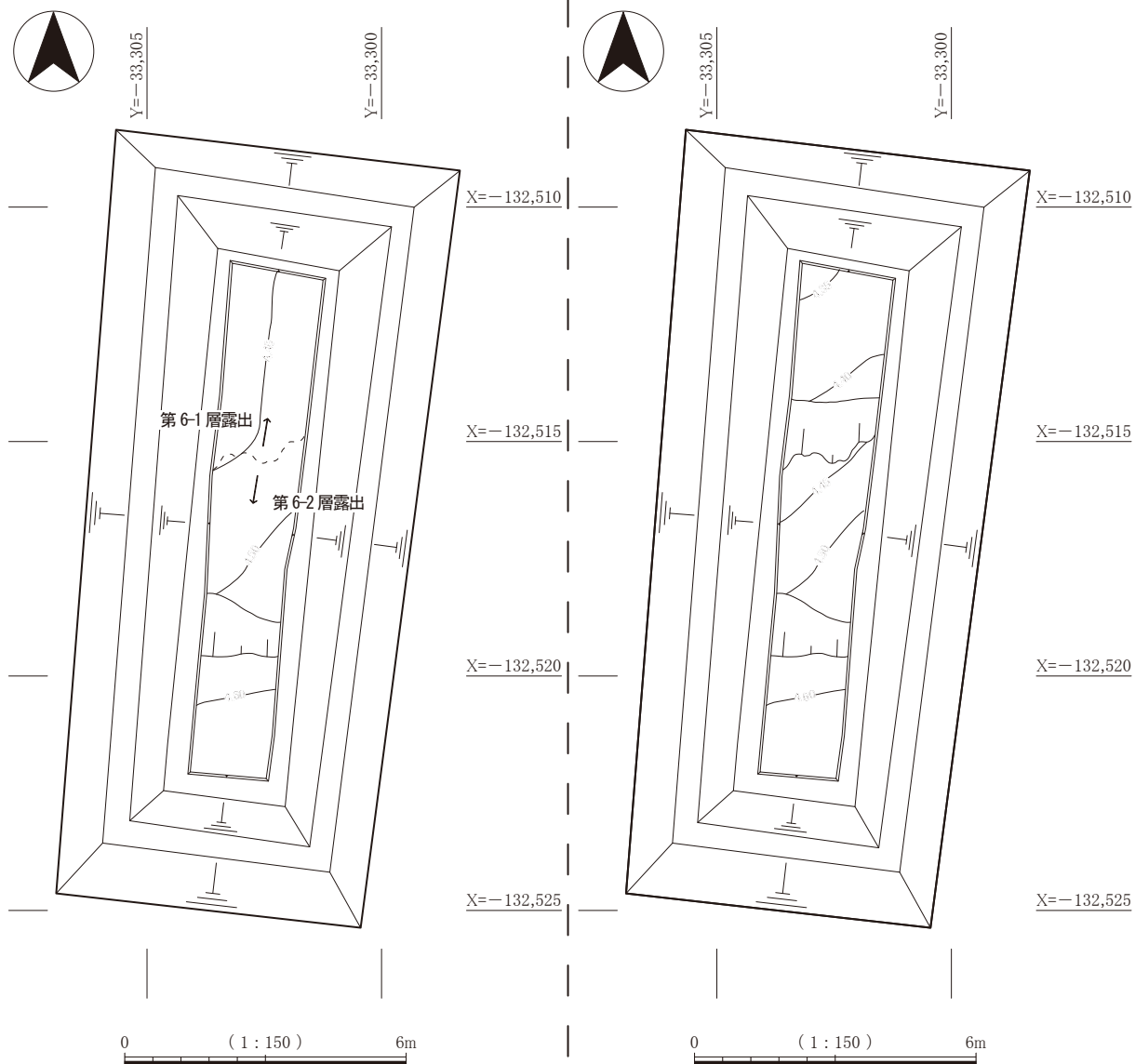


图 69 6区 第5層下面·第6-1層下面 遺構平面圖

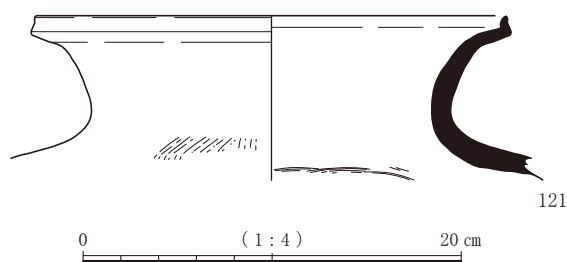


图 70 6区 第6-1層 出土遺物

第5章 総括

第1節 遺構の変遷

今回の伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の調査では、古墳時代から中世にかけての各時期の遺構が検出された。遺物には縄文時代まで遡るものも出土しており、この地において人々が連綿と活動を営んできた様子が窺える。そこで、まず当節では調査のまとめとして、今回の調査地における各時期の遺構・遺物の様相について記す。

弥生時代以前

縄文土器や弥生土器・石鏃など弥生時代以前に遡る遺物がわずかながら出土した。今回の調査範囲内では弥生時代以前の遺構は検出されなかったが、これらの遺物が出土していることから、付近に当時の遺構が存在する可能性がある。

古墳時代 (図71)

古墳時代の遺構としては、2区北半部において土坑や溝などを検出した。このうち、120土坑からは比較的残りの良い古墳時代前期の土師器甕が出土している。117溝は、飛鳥・奈良時代の遺構面とした第5-1層下面で検出した遺構ではあるが、古墳時代中期の遺物がまとまって出土した。この溝からは比較的残りの良い埴輪が出土しており、古墳の周溝となる可能性もある。ただし、117溝は第6-1層の堆積後、遡ったとしても古墳時代後期以降に掘削されたとみられ、主たる出土遺物の時期と遺構が形成された時期は整合的でなく、その判断には慎重を要する。なお、この溝からは鉄滓や轆の羽口・砥石などの遺物も出土しており、付近に鍛冶関連の遺構が存在する可能性は高い。

2区北半部より南の調査区では、明確な遺構は検出されなかったが、3区と5区において地震による地層の変形を確認した。地震の発生時期は、第6-2層の堆積後であることから、古墳時代中期以降と考えられる。また、3区と6区では埴輪が出土しており、付近に古墳の存在が予想される。

飛鳥・奈良時代 (図71)

飛鳥・奈良時代の遺構は、2区北半部と3区で検出した。2区北半部では溝や土坑だけでなく、掘立柱建物も確認され、集落域が形成されていたものと推定される。また89溝と90溝は、西側調査範囲外の地点で直交すると予想され、区画としての役割を持つ可能性もある。検出した遺構の多くは、その方位を座標北に対して東に18~42°振っている。次節にて検討するが、伊加賀遺跡第6次調査で検出されている奈良時代の掘立柱建物や第76次調査で検出されている遺構などとの関連が考えられる。

3区では遺構がやや少なくなるが、ピットや高まりなどを検出した。ピットはその規模や埋土から、2区のような掘立柱建物になる可能性は低い。そのため、3区においても集落が営まれていたと積極的に評価することは難しい。高まりは3区の北端部にて検出した。畦畔のような形状を呈するが、検出できた範囲が限られており、現時点ではこれをもって耕作が行われていたと評価することは難しい。

5区と6区では遺構は検出されなかった。ただし、須恵器や土師器などの遺物が出土しており、付近

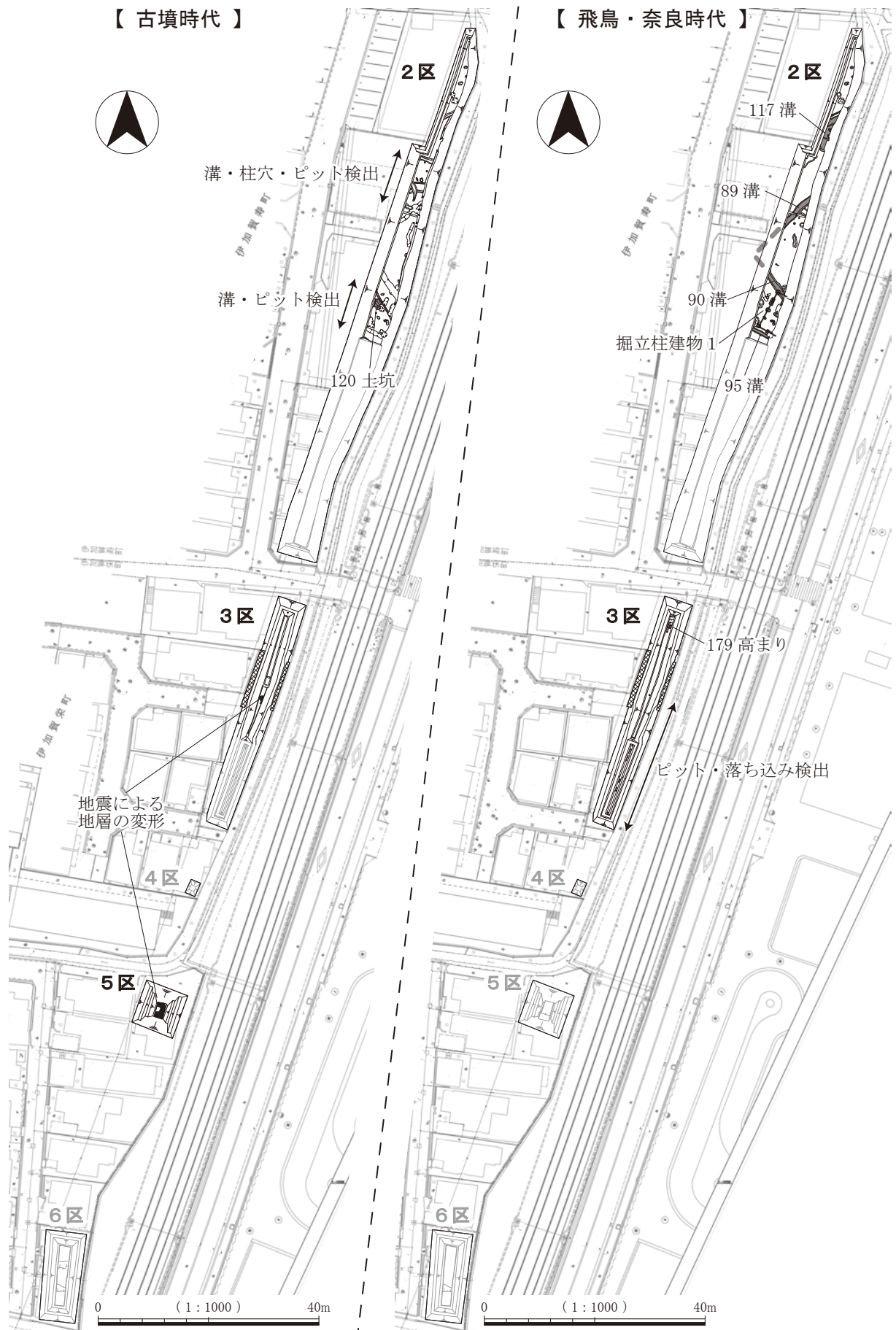


図 71 古墳～奈良時代の遺構の変遷

に遺構が存在する可能性は高い。

遺構の分布状況は総じて北側が密であり、南側へ行くほど希薄になる傾向がみられ、集落域は2区を中心に広がっているものと考えられる。

平安時代 (図72)

平安時代の遺構としては、2区北半部で畦畔・溝・炭溜まり、3区で溝・ピット・落ち込み、5区で段差・落ち込みを検出した。3区と5区で検出した遺構については、調査区が狭隘で確認できた遺構の範囲が限られているために不確かなところはあるが、畦畔・溝・段差はおよそ正方位に沿って延びている。飛鳥・奈良時代の遺構は座標北に対し30°前後東に振るものが多かったのに対し、平安時代以降はこのような正方位に延びる遺構が目立つようになる。

平安時代の遺構には、下位の飛鳥・奈良時代の遺構面で検出した掘立柱建物のような、集落に関わるものは確認できなかった。一方で、上位の中世の遺構面で検出された遺構とはその種類・方位が類似している。平安時代以後に、土地利用のあり方が集落域から生産域へと変化したようにみられるが、これには第4-2層を形成する洪水が契機となった可能性もある。

正方位に延びる遺構が目立つことから、茨田郡条里遺跡や讚良郡条里遺跡と同様に、伊加賀遺跡においても条里型地割の出現が古代にまで遡ることも考えられるが、今回の限られた調査範囲内ではその判断は難しい。

中世 (図72)

中世の遺構は4区を除く全ての調査区で確認され、畦畔や段差・溝など耕作に関わると考えられる遺構を検出した。広範囲にわたって耕作が行われた様子が窺える。

特に遺構が顕著であった2区の第3-3層下面や3区の第3-3-2層下面の様相をみると、大半の遺構がほぼ正方位に沿って延びており、中世にはこの方位に基づく地割の存在が明確となる。畦畔および耕作に伴うと考えられる段差、規模が大きく水路とみられる溝(22溝)については東西方向に延びる。一方、犁などによって掘り起こされた痕跡とみられる耕作溝群については、2区では主として南北方向に延びるが、3区では東西方向に延びるものが目立ち、2区と3区とで方向を違えている。

なお、第3-3層から第3-4層にかけての出土遺物は、中世後期(14世紀)以降の遺物も若干含まれているが、中世前期(13世紀)までの遺物が主体となっている。一方、第3-2層からの出土遺物には、中世後期の遺物が少なからず含まれている。出土遺物の大半が細片で耕作による攪拌の影響も考慮に入れると、今回の調査で出土した遺物によって遺構面の時期を推定するのは若干心許ないが、第3-1層下面から第3-2層下面までの遺構面が中世後期、第3-3層下面から第3-4層下面までの遺構面が中世前期に帰属するものと考えられる。

以上、今回の調査地における各時期の遺構・遺物の様相を概括した。古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけては、北側の比較的標高の高い2区を中心に、集落域が広がるようである。一方、標高が低い3区から6区にかけては、遺構は希薄で集落が営まれた様子はなく、耕作などの痕跡も明確ではない。その後、平安時代に生じた洪水を契機に土地利用のあり方が変化するようであり、中世以降には広範囲にわたって耕作に関わる遺構が認められ、現代まで続く生産域となっている。

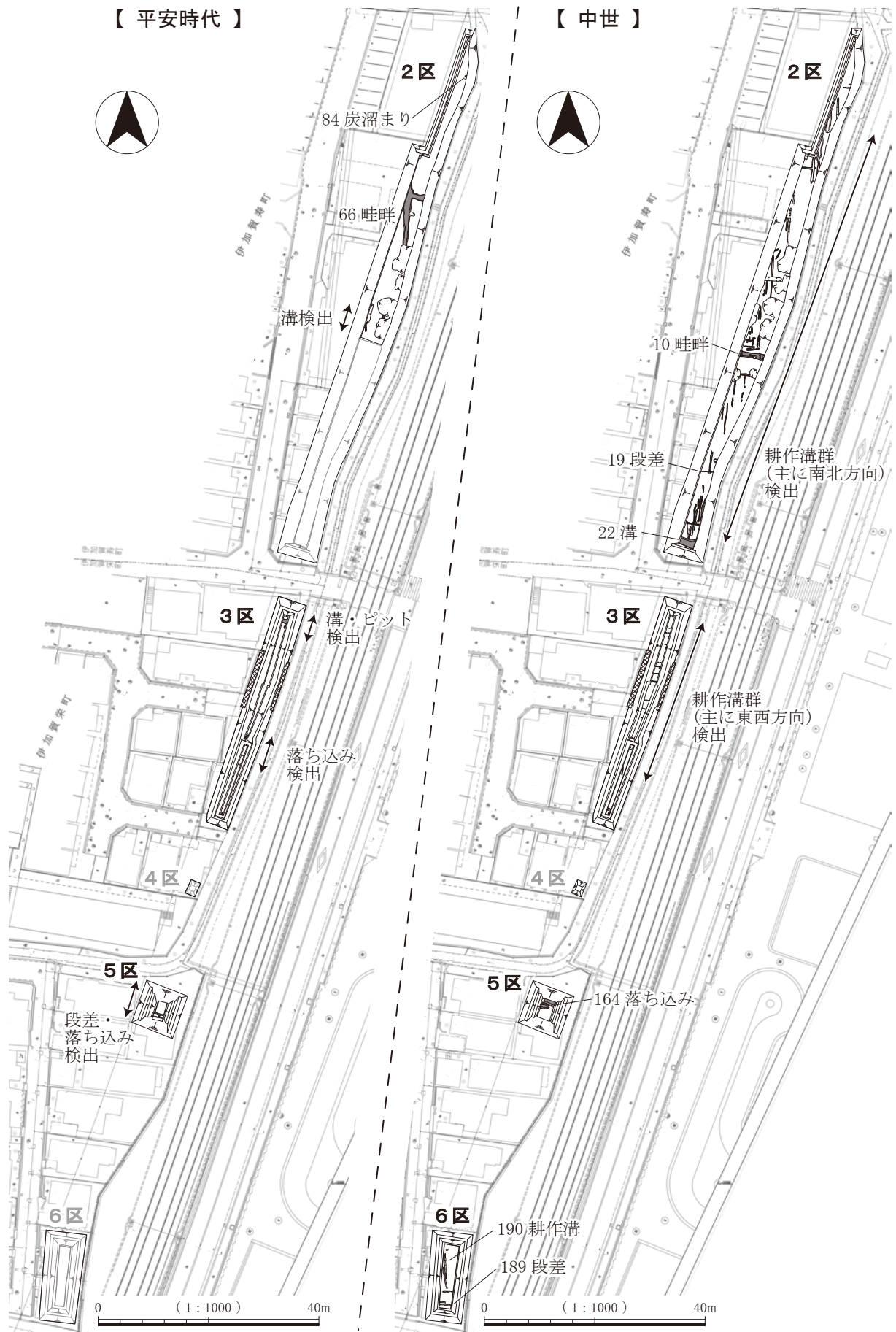


図 72 平安時代～中世の遺構の変遷

第2節 伊加賀遺跡・伊加賀古墳群 各時期の様相

前節にて、今回の調査地における各時期の遺構・遺物の様相について記した。そこで次に当節では、これまでの伊加賀遺跡・伊加賀古墳群における調査成果も踏まえて、当遺跡の様相を概括する。

弥生時代以前

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群における縄文時代以前に遡る遺物は、管見の限り今回の調査地で出土した縄文土器と石鏃だけであり、極めて少ない。以後、弥生時代中期まで遺構・遺物がほとんど確認されない状況が続く。遺構が確認されるのは、弥生時代後期になってからであり、伊加賀遺跡の第6次調査A地区で落ち込み、E地区で大溝、姫塚古墳の第3次調査で土坑が検出されている。以上のように、弥生時代までは後の時代と比べて遺構・遺物は少ない。

古墳時代 (図73)

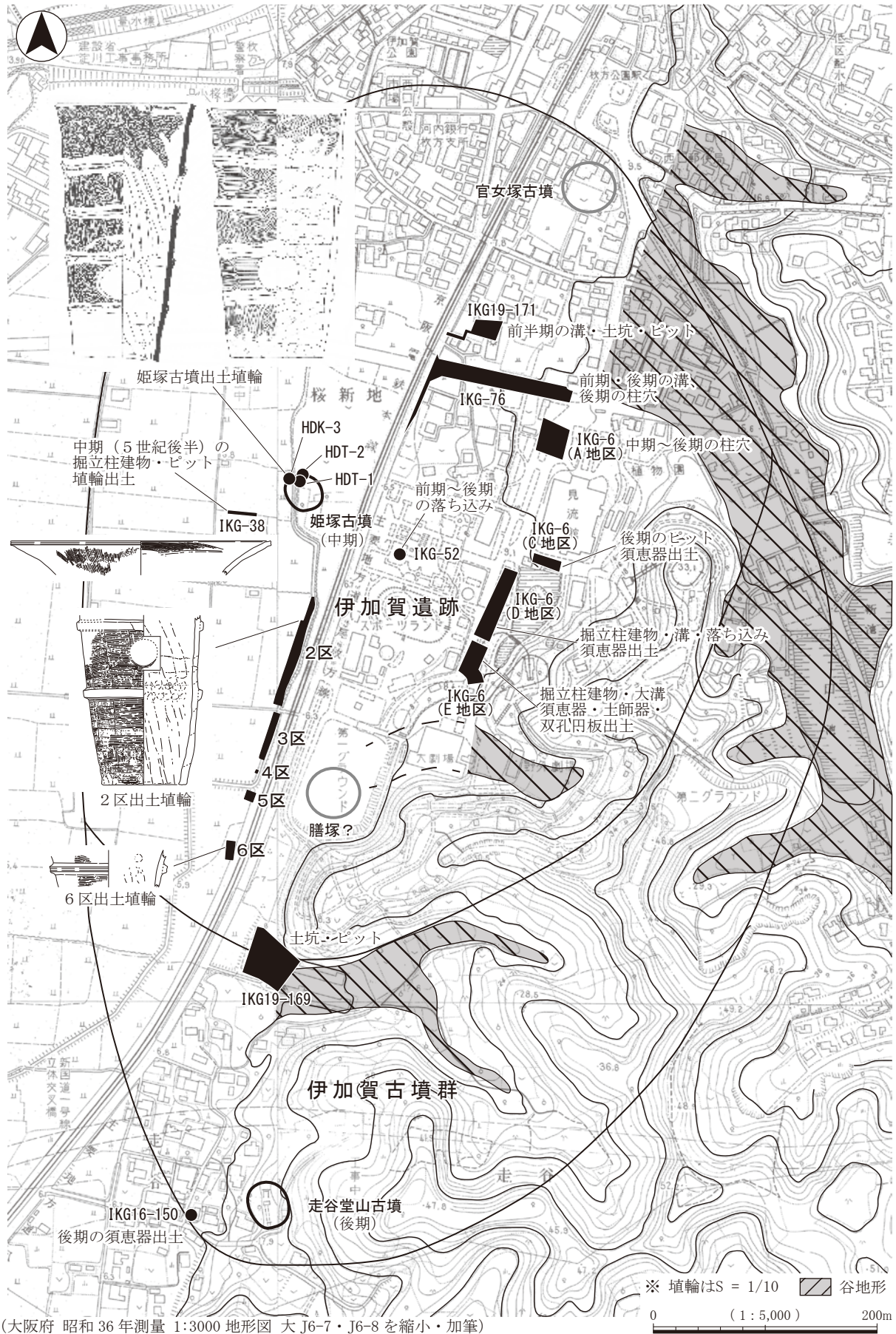
古墳時代の遺構・遺物はこれまでに多く報告されているが、前期に帰属するものは少なく、中期・後期のものが多い。前期の遺構は少なく、伊加賀遺跡第52次調査で落ち込み、第76次調査で溝が検出された程度である。今回の調査地では2区北半部で検出した120土坑から、比較的残りの良い土師器甕が出土したほか、6区からは埴輪が出土している。前期に帰属する主な遺構・遺物は以上のとおりであり、弥生時代後期から大きくは変わらず、遺構・遺物は比較的少ない。

中期と後期の遺構・遺物は、現在ひらかたパークが位置する地点で行われた第6次調査において、多く確認された。掘立柱建物をはじめとして、溝・柱穴・ピットなどが検出されている。また、第76次調査でも後期の溝が検出されている。遺跡範囲の南側で行われた、第169次調査でも土坑・ピットが検出されており、第150次調査では後期の須恵器が出土している。今回の調査地でも2区北半部で検出した117溝からは、中期に帰属する須恵器や埴輪とともに、鉄滓や羽口・砥石など鍛冶関連の遺物が出土した。このほか、姫塚古墳の西側で実施された第38次調査でも、中期の掘立柱建物となりうるピットなどが検出されている。

以上のように、遺跡範囲の東側、丘陵地に近く比較的標高の高い地点を中心に集落域が営まれているようだが、今回の調査地や第38次調査地においても遺構・遺物が確認されており、遺跡範囲の西側、標高の低い地点にも集落域が広がっている可能性も考えられる。

中期の古墳とされる姫塚古墳は、集落の中心と推定される丘陵地付近からはやや標高の下がった、遺跡範囲西側の地点に造られている。およそ同様の立地とみられる今回の調査地の2区北半部で検出した117溝からは、比較的残りの良い埴輪が出土した。姫塚古墳から約120m離れていることから、117溝自体が古墳の周溝ではないとしても、付近に未発見の古墳の存在が推定される。なお、今回の調査地において、3区と6区からも埴輪が出土している。6区で出土した埴輪はやや時期が遡り、古墳時代前期と考えられる。この1点の埴輪だけで判断するのは早計に過ぎるが、付近に存在が推定される膳塚が、この時期となる可能性も考えられる。

以上の古墳に加え、走谷堂山古墳が後期の古墳と推定されていることから、伊加賀遺跡・伊加賀古墳群においては、小規模ながらも古墳時代前期から後期まで継続して古墳が造られるようである。



(大阪府 昭和 36 年測量 1:3000 地形図 大 J6-7・J6-8 を縮小・加筆)

図 73 古墳時代の様相

飛鳥～平安時代（図 74）

古代の遺構・遺物もこれまでに多く報告されているが、飛鳥時代と平安時代に帰属するものは少なく、奈良時代のもものが中心である。既往の調査で飛鳥時代の遺構と報告されているものは、第 76 次調査で検出された溝だけである。この溝は南東－北西方向に延びているが、今回の調査地の 2 区北半部で検出した飛鳥時代と推定される溝（95 溝）もおおよそ近い方向に延びている。どちらの溝も後述する中世の遺構とは異なり、その方向が正方位から逸れている。また、2 区北半部で検出された掘立柱建物も 95 溝と同じ方位であることから、飛鳥時代に帰属する可能性が高い。

奈良時代の遺構は、古墳時代中期・後期と同様に、伊加賀遺跡第 6 次調査において多く確認されている。掘立柱建物のほか、井戸・焼土坑などが検出された。第 6 次調査 A 地区では、須恵器・土師器だけでなく瓦や埴も出土しており、付近に寺院の存在も予想される。このほか、第 76 次調査でも井戸が検出されている。

平安時代の遺構・遺物として報告されているものは少ない。第 52 次調査で 10 世紀の柱穴と土坑が検出されたほかは、第 150 次調査で平安時代の黒色土器と土師器が出土した程度である。今回の調査地においても同様に、飛鳥・奈良時代に比べると、平安時代の遺構・遺物は少なくなる傾向がみられる。伊加賀遺跡・伊加賀古墳群一帯で人々の活動が一時的に低調になった可能性もある。もしくは、今回の調査地の 6 区において緑釉陶器や灰釉陶器が出土していることから、集落の中心がやや南側へ移った可能性も考えられる。

なお、飛鳥時代から平安時代のいずれの時期かは不明だが、第 76 次調査において溝が検出された。この溝からは須恵器や瓦のほか、鞆の羽口といった鍛冶関連の遺物も確認されている。

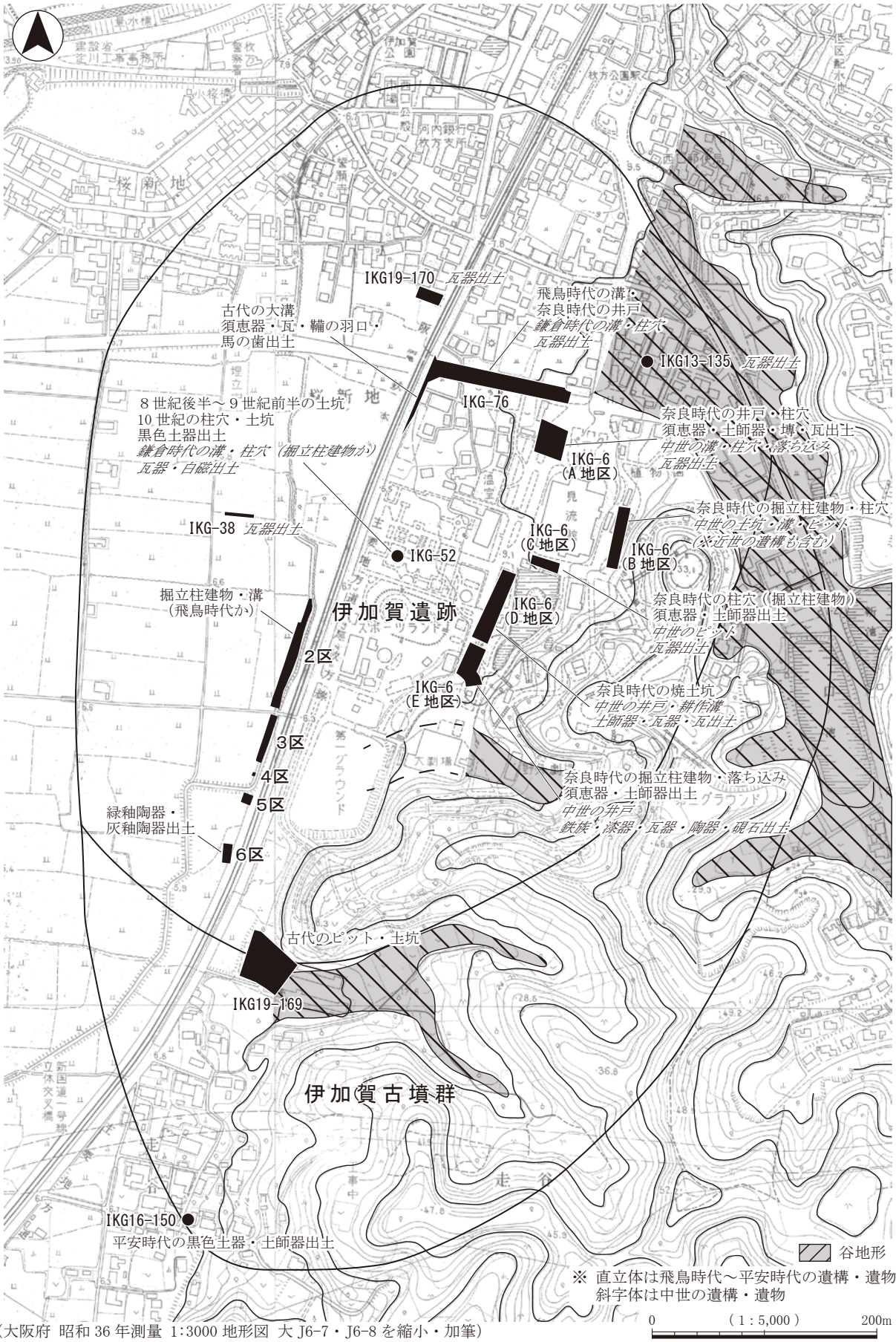
以上のように、古代の遺構・遺物については奈良時代のもものが中心である。遺構は古墳時代と同様に、遺跡範囲の東側、丘陵地に近く比較的標高の高い地点に集中しており、この周辺に集落が営まれているようである。平安時代には遺構・遺物が希薄となっており、集落が一時的に廃れたか、もしくはその中心が移動した可能性が考えられる。第 4-2 層の形成に関わるであろう洪水などの災害が、その原因とも考えられる。ただし、奈良時代までの集落が比較的標高の高い位置に立地しており、必ずしも洪水の被害が及んだとは言い切れないため、集落の消長にはまた別の理由を検討する必要もあるだろう。

中世（図 74、写真 2）

中世の遺構・遺物も第 6 次調査において多く確認されている。掘立柱建物を構成するとみられる柱穴のほか、井戸や土坑・ピットなどが検出された。遺物としては、瓦器だけでなく白磁や漆器碗・鉄鏃・硯石なども出土している。第 6 次調査 D 地区には耕作溝が検出されているが、遺跡範囲の東側、丘陵地に近い地点では、主として集落域が形成されていた様子が窺える。

一方、今回の調査地点では、4 区を除く全ての調査区で、畦畔や段差・溝など耕作に関わると考えられる遺構を検出した。検出した遺構の大半がほぼ正方位に沿って延びており、この方位の地割に基づいて、広範囲にわたって耕作が行われていたとみられる。奈良時代までは集落域であったが、中世には生産域へと明らかに変化している。

以上のように、遺跡範囲の東側、丘陵地に近く標高の高い地点では集落域が形成され、西側の沖積平野上となる標高の低い地点では生産域が形成されている。中世には、標高の高い地点と低い地点とで土地利用のあり方が明確に違っているようである。



(大阪府 昭和 36 年測量 1:3000 地形図 大 J6-7・J6-8 を縮小・加筆)

図 74 飛鳥時代～中世の様相



写真2 調査地周辺の地割

地層の堆積状況を見ると、今回の調査地点については、中世以降、現代まで耕作地として利用され続けるようである。1948年に米軍が撮影した空中写真によれば、2区は南北方向に延びる耕地区画、3区は東西方向に延びる耕地区画に位置している。このことは、2区で検出された耕作溝群が南北方向に延びるものが多く、3区では東西方向に延びるものが多いという、中世の遺構面のあり方と一致している。6区の位置する耕地区画は、空中写真をみると主として南北方向に延び、南側は東西方向に広がっている。中世の遺構面で検出された6区の耕作溝群も、北側では南北方向、南側では東西方向に延びており、現代の耕地区画と中世の遺構面のあり方が一致している。

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の位置する枚方市南西部の沖積平野は、幾度となく淀川の洪水を被ってきた地域である。その被害からの復旧のたびに多少なりとも地割に変化が生じることが予想される。それゆえ、上記の事象は単なる偶然の一致の可能性もあるが、中世からの地割が大きく変更されることなく現代まで踏襲された結果であるとも考えられる。

以上、伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の各時期の様相について記した。当遺跡の実態を正確に捉えるには、現時点ではその検討材料が十分とは言えないものの、この地において人々が連綿と様々な活動を営んできた様子が窺える。今回の調査は、これまで遺構・遺物のあり方に不明な部分が多かった、伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の西側の低地部にて行われた。調査の結果、古墳時代と推定される鍛冶関連遺物の出土や、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物、中世の耕作関連遺構の検出といった、各時代における人々の様々な営みを確認できた。貴重な成果を上げることができたものと言えよう。

表5 掲載遺物一覧表(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	出土層位/ 遺構	種類	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	長さ (cm)	外面の色調	調整・文様・備考
1	19	21	2	35溝	土師器	皿	(6.8)	—	(1.4)	—	2.5Y8/2灰白	内外:ヨコナデ
2	19	21	2	23溝	土師器	皿	(8.2)	—	(1.0)	—	5YR7/6橙	内外:ヨコナデ
3	19	21	2	31落ち込み	土師器	甕	(12.6)	—	(5.5)	—	7.5YR7/4にぶい橙	内外:ナデ
4	20	21	2	第3-3層	瓦器	椀	(13.6)	—	(3.4)	—	10YR8/2灰白	外:ユビオサエ 内:ヘラミガキ
5	20	21	2	第3-4層	瓦器	椀	(14.4)	—	(3.7)	—	N5/0灰	外:ユビオサエ 内:ヘラミガキ
6	20	21	2	第3-2層	瓦質土器	羽釜	—	—	(3.6)	—	N4/0灰	内外:ナデ
7	20	21	2	第3-2層	瓦質土器	羽釜	(28.6)	—	(2.0)	—	2.5Y8/1灰白	内:ハケメ 外:ナデ
8	20	21	2	第3-3層	土師器	皿	(6.8)	—	1.7	—	2.5YR6/4にぶい橙	内外:ヨコナデ
9	20	21	2	第3-4層	須恵器	鉢	—	—	(3.1)	—	N7/0灰白	内外:回転ナデ
10	20	21	2	第2層	製塩土器	—	—	—	(4.0)	—	5Y7/1灰白	内外:ユビオサエ
11	20	21	2	第3-3層	土製品	—	2.3	—	1.1	—	7.5YR8/4浅黄橙	
12	23	21	2	84炭溜まり	羽口	—	—	—	—	(3.5)		外:発泡
13	24	21	2	側溝 (第4-1層~第4-2層)	須恵器	蓋	(11.9)	—	(3.4)	—	N5/0灰	内外:回転ナデ
14	24	21	2	第4-1層	須恵器	杯	—	(10.0)	(2.0)	—	N7/0灰白	内外:回転ナデ
15	24	21	2	第4-2層	須恵器	杯	(17.9)	—	(3.9)	—	N6/0灰	内外:回転ナデ
16	24	21	2	側溝 (第4-1層~第4-2層)	須恵器	器台	—	—	(2.4)	—	N7/0灰白	内:ナデ 外:波状文
17	24	21	2	第4-1層	土師器	杯か皿	—	—	(2.3)	—	5YR8/6橙	内外:ナデ? (摩耗)
18	24	21	2	第4-2層	土師器	杯	(9.8)	—	(3.0)	—	7.5YR7/4にぶい橙	内:暗文 外:ナデ
19	24	21	2	第4-2層	韓式系土器	甌か鍋	—	—	—	(7.3)	7.5YR7/4にぶい橙	外:ユビオサエ 把手部
20	24	21	2	第4-1層	埴輪	—	—	—	(3.7)	—	5YR7/6橙	朝顔形埴輪か
21	24	21	2	第4-2層	鉄滓	—	—	—	—	(5.3)		椀形滓か 最大厚1.8 重27.6g
22	30	23	2	91土坑	須恵器	杯	10.2	—	4.8	—	N6/0灰	内:回転ナデ 外:回転ヘラケズリ
23	30	23	2	95溝	土師器	杯	(15.8)	—	5.0	—	2.5Y7/4浅黄	内:暗文 外:ヘラケズリ
24	30	23	2	89溝	弥生土器	甕	(16.6)	—	(6.6)	—	7.5YR8/3浅黄橙	内:ユビオサエ 外:タタキ
25	31	22	2	117落ち込み	須恵器	杯	(13.3)	—	(3.7)	—	N4/0灰	内外:回転ナデ
26	31	—	2	117落ち込み	須恵器	杯	(14.4)	—	(3.9)	—	N6/0灰	内外:回転ナデ
27	31	22	2	117落ち込み	須恵器	把手付椀	(6.6)	—	(6.4)	—	10R6/1赤灰	外:櫛描列点文、波状文
28	31	22	2	117落ち込み	土師器	甕	(16.7)	—	(12.5)	—	10R6/2灰黄褐	内:ヘラケズリ 外:ユビオサエ
29	31	—	2	117落ち込み	土師器	高杯	(19.6)	—	(6.2)	—	7.5YR8/3浅黄橙	内外:ナデ
30	31	—	2	117落ち込み	土師器	高杯	—	—	(6.3)	—	2.5Y7/2灰黄	内外:ナデ
31	31	—	2	117落ち込み	土師器	高杯	—	—	(6.6)	—	5YR7/6橙	内:シボリ痕
32	31	—	2	117落ち込み	土師器	高杯	—	(11.2)	(6.7)	—	10YR8/2灰白	内:ヘラケズリ
33	31	22	2	117落ち込み	土師器	甌	—	—	(0.9)	—	10YR8/2灰白	内外:ナデ? (摩耗)
34	31	22	2	117落ち込み	埴輪	—	(46.2)	—	(6.1)	—	5YR7/6橙	内:ヨコハケ 外:タテハケ 朝顔形埴輪
35	31	22	2	117落ち込み	埴輪	—	—	14.7	(30.3)	—	5Y6/1灰	外:B種ヨコハケ、円形スカシ孔
36	31	22	2	117落ち込み	羽口	—	—	—	—	(4.8)		外:発泡、黒色ガラス質物付着
37	31	22	2	117落ち込み	羽口	—	—	—	—	(4.6)		外:発泡
38	31	22	2	117落ち込み	羽口	—	—	—	—	(4.0)		外:発泡、黒色ガラス質物付着
39	31	22	2	117落ち込み	羽口	—	—	—	—	(3.3)		外:黒色ガラス質物付着 内:鉄滓付着
40	31	22	2	117落ち込み	鉄滓	—	—	—	—	(6.9)		椀形滓か 最大厚2.5 重110.7g
41	31	22	2	117落ち込み	鉄滓	—	—	—	—	(10.9)		椀形滓か 最大厚2.6 重241.9g
42	31	22	2	117落ち込み	石製品	石鋸?	—	—	—	(4.6)		紅簾片岩
43	31	22	2	117落ち込み	石製品	砥石	—	—	—	(11.0)		砂岩
44	32	23	2	第5-1層	須恵器	杯	—	(9.8)	(2.0)	—	N6/0灰	内外:回転ナデ
45	32	23	2	第5-1層	須恵器	甕	—	—	(9.1)	—	N7/0灰白	外:沈線、櫛描列点文
46	32	23	2	第5-1層	須恵器	甕	—	—	(14.4)	—	N6/0灰	外:沈線、櫛描列点文
47	32	23	2	第5-1層	韓式系土器	甌	—	—	(6.2)	—	10YR5/1褐灰	内:ナデ 外:格子目タタキ
48	32	23	2	第5-1層	土師器	高杯	—	—	(4.1)	—	7.5YR7/4にぶい橙	外:ヘラミガキ
49	32	23	2	第5-1層	弥生土器	壺	—	—	(1.7)	—	10YR8/2灰白	外:円形竹管浮文
50	32	23	2	第5-1層	縄文土器	深鉢	—	(11.6)	(2.5)	—	2.5Y6/2灰黄	内外:ユビオサエ
51	32	23	2	第5-1層	羽口	—	—	—	—	(3.1)		外:発泡
52	32	23	2	第5-1層	石製品	砥石	—	—	—	(3.4)		凝灰岩または流紋岩
53	32	23	2	第5-1層	石製品	砥石	—	—	—	(6.5)		チャート
54	37	23	2	120土坑	土師器	甕	(13.3)	—	(13.0)	—	2.5Y7/2灰黄	内:ヘラケズリ 外:ハケメ
55	37	24	2	120土坑	土師器	甕	(14.5)	—	(3.5)	—	7.5YR7/3にぶい橙	内外:ナデ? (摩耗)
56	37	23	2	120土坑	土師器	甕	—	—	(11.2)	—	10YR5/1褐灰	内:ナデ 外:タタキ
57	37	23	2	120土坑	土師器	甕	—	—	(14.8)	—	2.5Y7/2灰黄	内:ナデ 外:タタキ
58	37	24	2	124落ち込み	製塩土器	—	—	—	(2.2)	—	7.5YR7/2明褐灰	内:ユビオサエ 外:タタキ
59	38	24	2	第6-1層	須恵器	甕	—	—	(6.7)	—	5Y7/1灰白	外:沈線、平行タタキ
60	38	24	2	第6-1層	須恵器	高杯	—	—	(2.7)	—	N5/0灰	内外:回転ナデ
61	38	24	2	第6-1層	土師器	高杯	—	—	(6.8)	—	2.5Y7/3浅黄	内:シボリ痕 外:ハケ
62	38	24	2	第6-1層	土師器	甕	(13.4)	—	(6.7)	—	2.5Y7/3浅黄	内:ヘラケズリ後ナデ 外:タタキ

表6 掲載遺物一覧表(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	出土層位/遺構	種類	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	長さ(cm)	外面の色調	調整・文様・備考
63	38	24	2	第6-1層	製塩土器	—	—	—	(1.9)	—	10YR7/2にぶい黄橙	
64	38	24	2	第6-2層	石器	石鎌	—	—	—	3.4		サスカイト 重1.8g
65	42	24	3	第3-3-2層	瓦器	椀	—	—	(2.4)	—	N4/0灰	内外:ヘラミガキ
66	42	24	3	第3-3-2層	瓦器	椀	—	—	(2.8)	—	N4/0灰	内外:ヘラミガキ
67	42	24	3	側溝 (第3-2層~第3-1層)	瓦器	椀	—	(5.4)	(2.2)	—	N4/0灰	内:ヘラミガキ 外:ユビオサエ
68	42	24	3	第3-3-2層	瓦器	椀	—	(5.6)	(0.8)	—	N5/0灰	内外:ヘラミガキ
69	42	24	3	第3-3-2層	土師器	皿	(8.4)	—	0.9	—	10YR7/2にぶい黄橙	内外:ナデ
70	42	24	3	第3-3-1層	陶器	播鉢	—	—	(3.7)	—	5YR5/4にぶい赤褐	備前焼 内:播目
71	42	24	3	第3-2層	銭貨	—	—	—	—	2.0		悪銭 重1.1g
72	45	24	3	第4-2層	黒色土器	椀	—	—	(2.1)	—	10YR3/1黒褐	内外:ナデ
73	45	24	3	側溝 (第3-3層~第3-1層)	灰釉陶器	壺	—	—	(3.5)	—	2.5Y6/3にぶい黄	内:回転ナデ 外:施釉
74	50	24	3	第5-1層	須恵器	蓋	—	—	(2.3)	—	N5/0灰	内外:回転ナデ
75	50	24	3	側溝 (第5-1層~第5-3層)	須恵器	鉢	—	—	(3.0)	—	N6/0灰	内外:回転ナデ
76	50	24	3	第5-1層	須恵器	壺	—	—	(3.4)	—	N6/0灰	内外:回転ナデ
77	50	24	3	第5-1層	土師器	杯	—	—	(2.3)	—	10YR6/4にぶい黄橙	内外:ナデ
78	50	24	3	第5-3層	土師器	高杯	—	—	(3.1)	—	7.5YR4/6褐	内:ハケメ 外:ハケメ、ヘラケズリ
79	50	24	3	第5-3層	土師器	甕	—	—	(6.7)	—	10YR7/2にぶい黄橙	内外:ハケメ 把手部
80	50	24	3	第5-2層	製塩土器	—	—	—	(2.2)	—	N6/0灰	内外:ユビオサエ
81	50	24	3	第5-1層	瓦	—	—	—	—	(4.9)	10YR4/1褐灰	凹:布目
82	50	24	3	第5-1層	土製品	—	—	—	(6.4)	—	N4/0灰	外:発泡 重99.1g
83	52	24	3	第6-2層	須恵器	杯	(11.9)	—	(2.4)	—	N6/0灰	内外:回転ナデ
84	52	24	3	第6-1層	須恵器	甕か壺	—	—	(0.9)	—	7.5YR5/2灰褐	外:縄蓆文タタキ
85	52	24	3	廃土	埴輪	—	—	—	(4.0)	—	5Y5/1灰	底:植物圧痕
86	58	25	5	163溝	瓦器	皿	(7.9)	—	(1.7)	—	N3/0暗灰	内外:ナデ
87	58	25	5	164落ち込み	瓦器	椀	(14.2)	(5.6)	6.2	—	N3/0暗灰	内:ヘラミガキ、暗文 外:ヘラミガキ
88	58	25	5	162土坑	瓦質土器	甕	(34.2)	—	(5.5)	—	N4/0灰	内外:ナデ
89	58	25	5	162土坑	瓦質土器	羽釜	(26.8)	—	(5.1)	—	N3/0暗灰	内外:ナデ
90	58	25	5	162土坑	瓦質土器	羽釜	—	—	(4.5)	—	N4/0灰	内外:ナデ
91	58	25	5	161溝	土師器	皿	—	—	1.2	—	10YR7/2にぶい黄橙	内外:ヨコナデ
92	58	25	5	164落ち込み	土師器	皿	7.6	—	1.3	—	7.5YR8/3浅黄橙	内外:ヨコナデ
93	58	25	5	164落ち込み	土師器	皿	(13.0)	—	2.5	—	2.5Y7/2灰黄	内外:ヨコナデ
94	58	25	5	164落ち込み	瓦	丸瓦	—	—	—	(12.4)	2.5Y6/1黄灰	凹:布目
95	59	25	5	第3-2層	瓦器	椀	(11.0)	—	3.3	—	7.5Y8/1灰白	内:暗文 外:ユビオサエ
96	59	25	5	第3-2層	瓦器	皿	—	—	(2.3)	—	N4/0灰	内外:ヘラミガキ
97	59	25	5	第3-2層	瓦質土器	羽釜	—	—	(7.0)	—	N3/0暗灰	内外:ナデ
98	59	25	5	第3-3層	土師器	皿	(9.9)	—	1.2	—	2.5Y8/2灰白	内外:ヨコナデ
99	59	25	5	第3-3層	土師器	皿	(10.0)	—	1.7	—	10YR7/2にぶい黄橙	内:ヨコナデ、ハケメ 外:ヨコナデ
100	59	25	5	第3-2層	鉄器	鉄鎌	—	—	—	9.9		重12.1g
101	59	25	5	第4-2層	須恵器	鉢	—	—	(6.9)	—	5Y7/1灰白	内外:ナデ
102	62	25	5	第5層	土師器	杯	(15.4)	—	(3.0)	—	2.5Y7/2灰黄	内:ハケメ 外:ヘラケズリ
103	62	25	5	第4-2層	土師器	甕	—	—	(7.0)	—	7.5YR8/4浅黄橙	外:ハケメ 内:ナデ
104	62	25	5	第4-2層	灰釉陶器	壺	—	—	(1.8)	—	5Y6/2灰オリーブ	内外:施釉
105	62	25	5	第4-2層	製塩土器	—	—	—	(1.8)	—	7.5YR7/4にぶい橙	内:布目 外:ナデ
106	62	25	5	第4-2層	製塩土器	—	—	—	(4.1)	—	2.5Y6/1黄灰	内外:ナデ
107	62	25	5	不明	石製品	砥石	—	—	—	(5.3)		凝灰岩または流紋岩
108	68	26	6	第3-1層	瓦器	椀	(14.1)	—	4.9	—	N4/0灰	内:ヘラミガキ 外:ユビオサエ
109	68	26	6	第3-3-2層	瓦器	椀	(13.0)	—	(5.0)	—	N3/0暗灰	内:ヘラミガキ、暗文 外:ヘラミガキ
110	68	26	6	側溝 (第3-2層~第3-1層)	黒色土器	椀	(14.8)	—	(2.7)	—	2.5Y8/1灰白	内:ヘラミガキ 外:ナデ
111	68	26	6	第3-1層	土師器	皿	(13.6)	—	2.5	—	5Y7/1灰白	内外:ナデ? (摩耗)
112	68	26	6	側溝 (第3-2層~第3-1層)	土師器	皿	—	—	(2.4)	—	2.5Y8/1灰白	内外:ヨコナデ
113	68	26	6	第3-2層	須恵器	鉢	—	—	(2.6)	—	N6/0灰	内外:回転ナデ
114	68	26	6	第3-4層	須恵器	壺	—	—	(4.3)	—	N6/0灰	外:波状文
115	68	26	6	第3-3-2層	緑釉陶器	椀	—	6.9	(2.3)	—	2.5GY4/1暗オリーブ灰	内外:施釉 硬陶
116	68	26	6	側溝 (第3-2層~第3-1層)	灰釉陶器	椀	—	—	(1.7)	—	N8/0灰白	内:施釉 外:回転ヘラケズリ
117	68	26	6	側溝 (第3-2層~第3-1層)	白磁	碗	—	—	(1.7)	—	10Y8/1灰白	内外:施釉
118	68	26	6	側溝 (第3-2層~第3-1層)	白磁	碗	(11.3)	—	(2.6)	—	7.5Y7/1灰白	内外:施釉(口禿)
119	68	26	6	側溝 (第3-2層~第3-1層)	埴輪	—	—	—	(6.6)	—	10YR8/3浅黄橙	外:A種ヨコハケ
120	68	26	6	側溝 (第3-2層~第3-1層)	石製品	石鏡?	—	—	(7.8)	—		紅簾片岩
121	70	26	6	第6-1層	須恵器	甕	(24.8)	—	(8.7)	—	N5/0灰	内外:回転ナデ
122	—	21	2	第3-3層	骨	—	—	—	(3.6)	—		牛か馬の歯

法量の()は復元または残存数値

写真図版



伊加賀遺跡・伊加賀古墳群 発掘調査 作業風景（北西から）

1. 2区 調査区
調査前遠景
(南西から)



2. 3・4区 調査区
調査前遠景
(北東から)



3. 5・6区 調査区
調査前遠景
(南西から)



図版 2

2区
調査区地層断面



1. 東壁 北端部
地層断面（北西から）



2. 東壁 北半部
地層断面（北西から）



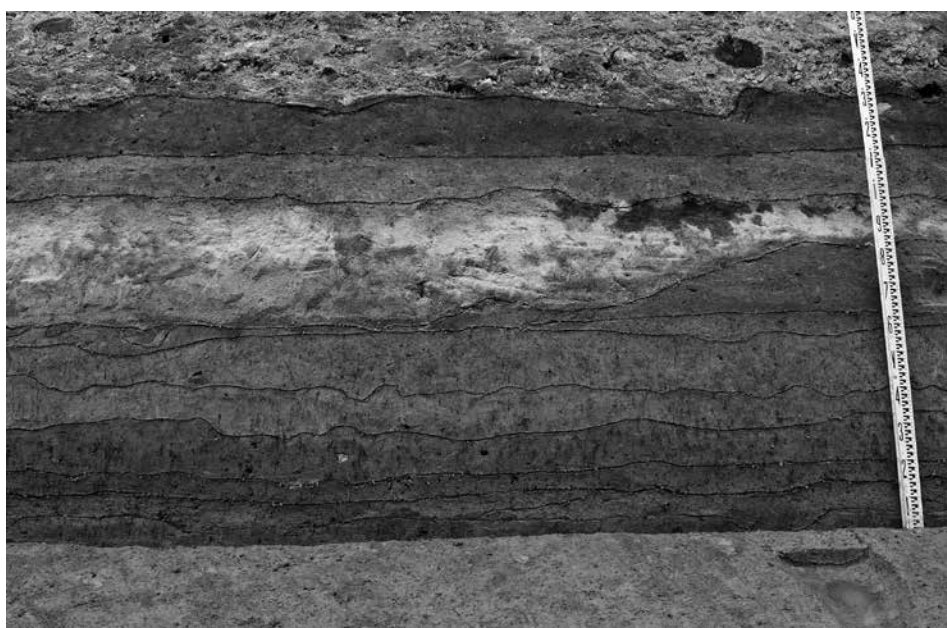
3. 東壁 北半部
地層断面（西から）



1. 東壁 南半部
地層断面 (南西から)



2. 東壁 南端部
地層断面 (北西から)



3. 東壁 南半部
地層断面 (西から)

図版4

3区
調査区地層断面



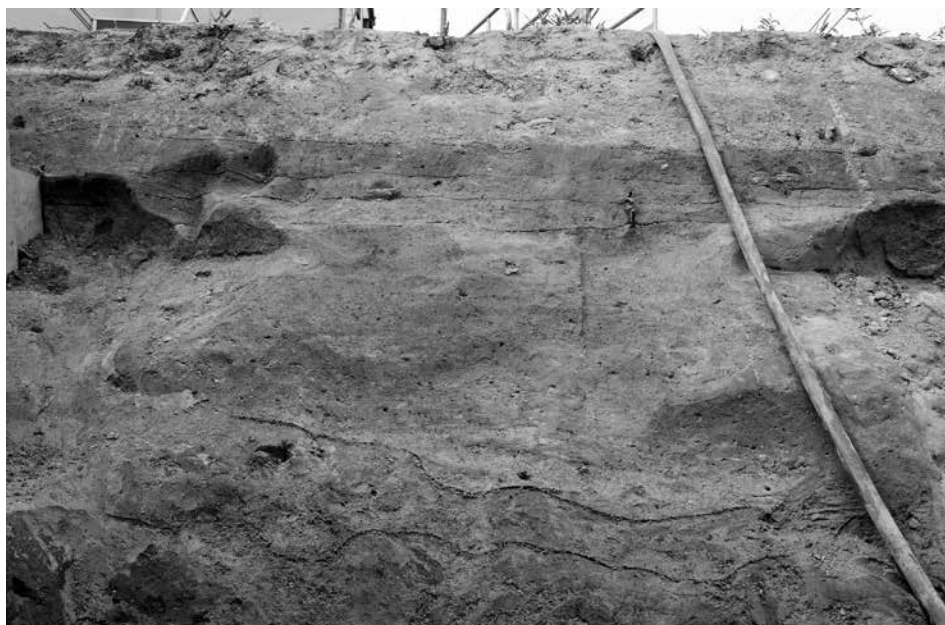
1. 東壁 北側
地層断面 (北西から)



2. 東壁 中央部
地層断面 (北西から)



3. 東壁 南側
地層断面 (北西から)



1. 北壁 地層断面
第1層～第3層
(南から)



2. 北壁 地層断面
第3層～第6層
(南から)



3. 西壁 地層断面
(東から)

図版6

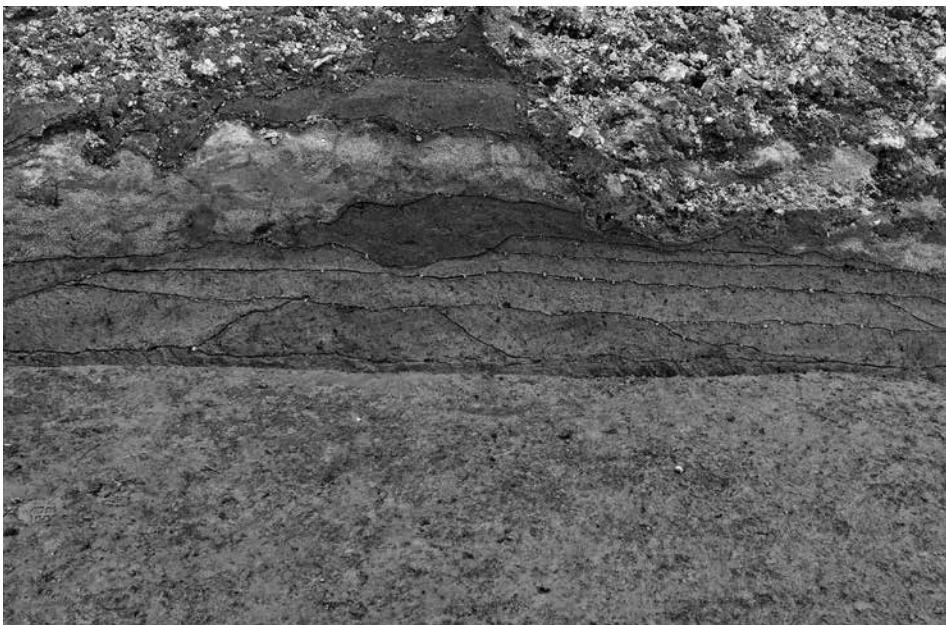
2区
第3-3層下面遺構



1. 第3-3層下面 北半部
全景（南から）



2. 第3-3層下面 南半部
全景（北から）



3. 10階畔 断面
（西から）



1. 22溝 断面 (西から)



2. 第3-4層下面 北半部
全景 (南から)



3. 第3-4層下面 南半部
全景 (南から)

図版8

2区
第4-1層下面遺構



1. 第4-1層下面 北半部
全景 (南西から)



2. 66畦畔 検出状況
(西から)



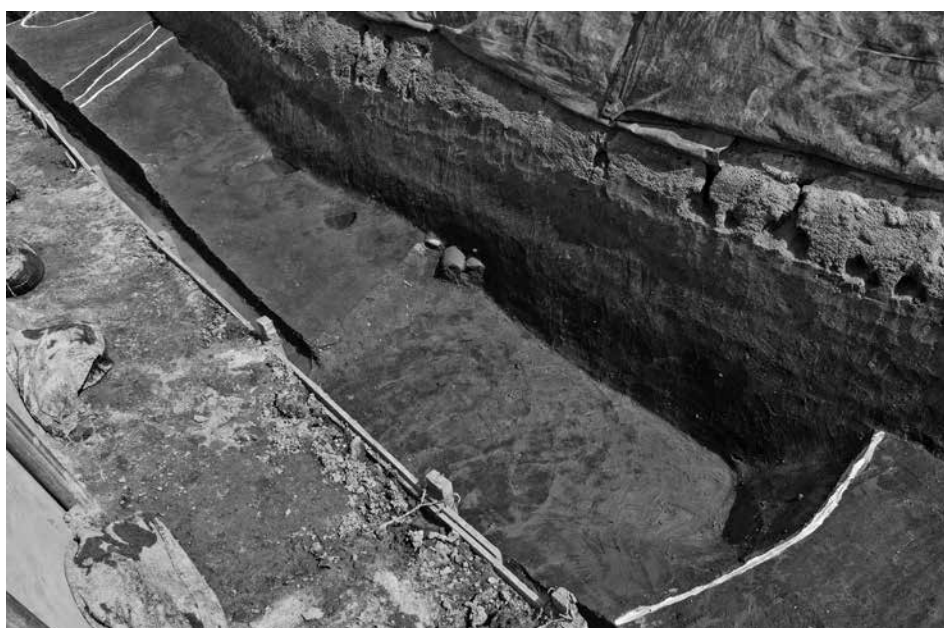
3. 66畦畔 断面
(北から)



1. 第5-1層下面 北半部
全景 (南西から)



2. 掘立柱建物1 全景
(西から)



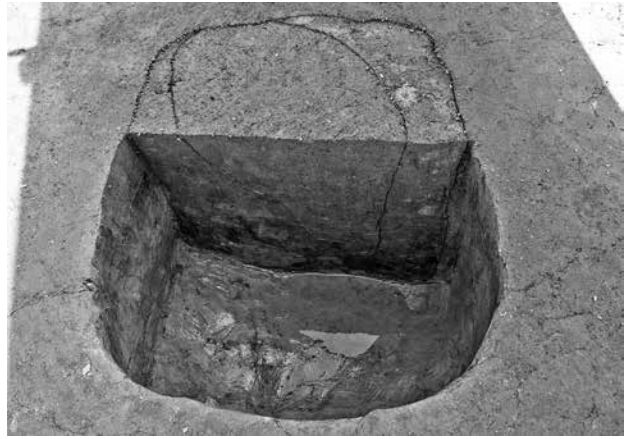
3. 117溝 全景
(南西から)

図版 10

2区
第5-1層下面遺構



1. 掘立柱建物1 101柱穴 断面 (南西から)



2. 掘立柱建物1 103柱穴 断面 (北西から)



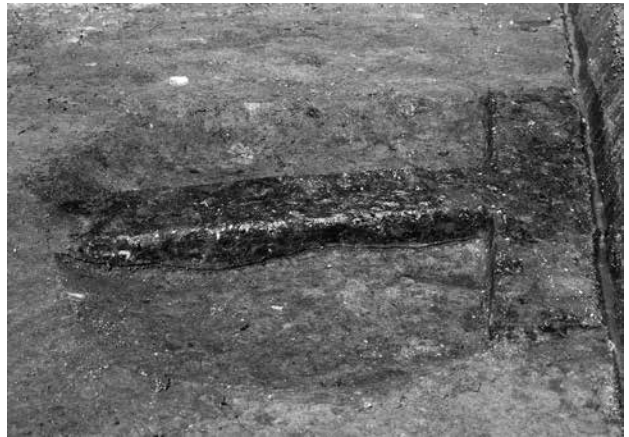
3. 掘立柱建物1 104柱穴 断面 (北西から)



4. 掘立柱建物1 106柱穴 断面 (北西から)



5. 掘立柱建物1 108柱穴 断面 (南西から)



6. 83炭溜まり 断面 (南から)



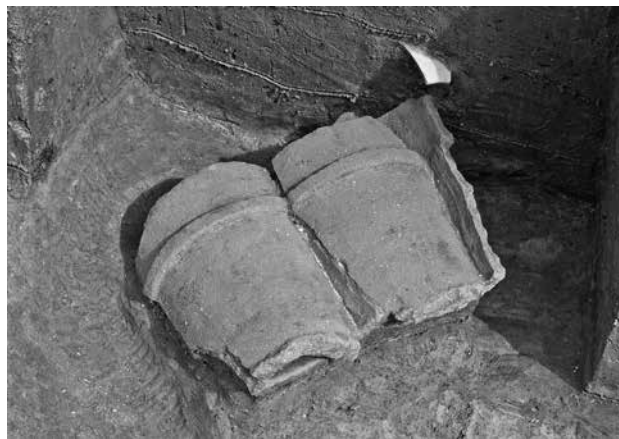
7. 89溝(左)、91土坑(右) 断面 (南西から)



8. 90溝 断面 (北西から)



1. 117溝 断面 (北西から)



2. 117溝 埴輪 出土状況 (西から)



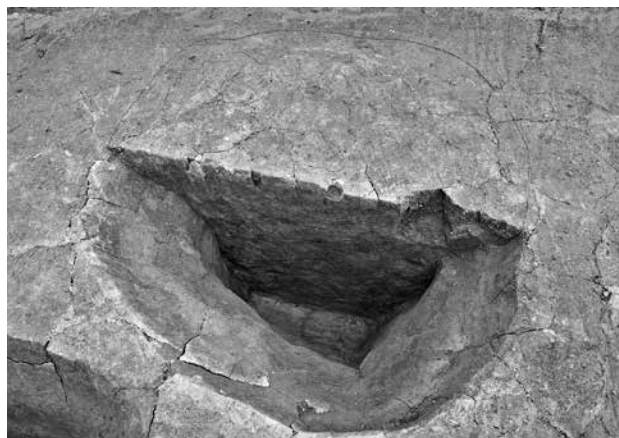
3. 107柱穴 断面 (北西から)



4. 112柱穴 断面 (西から)



5. 113柱穴 断面 (北西から)



6. 115柱穴 断面 (北西から)



7. 111ピット 断面 (北西から)



8. 114ピット 断面 (東から)

図版 12

2区
第5-2層下面
第6-2層下面遺構



1. 122落ち込み 断面 (南から)



2. 98溝 断面 (北西から)



3. 98溝、120土坑、151ピット 断面 (北西から)



4. 120土坑、121・133ピット、134落ち込み 断面 (西から)



5. 120土坑 土器出土状況 (南から)



6. 131溝 断面 (北西から)



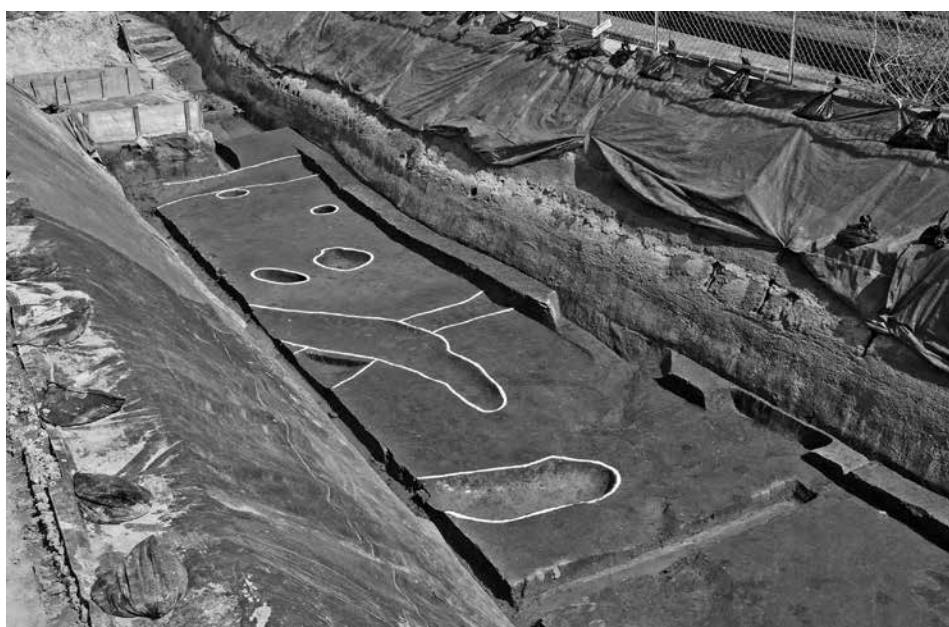
7. 127柱穴 断面 (南西から)



8. 128柱穴 断面 (南から)



1. 120土坑 全景
(南西から)



2. 第6-1層下面 北半部
全景 (南西から)



3. 第6-2層下面 北半部
全景 (南西から)

図版 14

3区
第3-3-2層下面・第5-1層下面遺構



1. 第3-3-2層下面 北側
全景 (南西から)



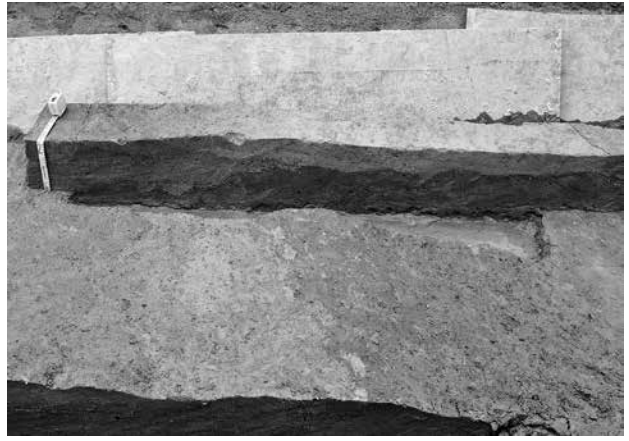
2. 第3-3-2層下面
中央部 全景
(南西から)



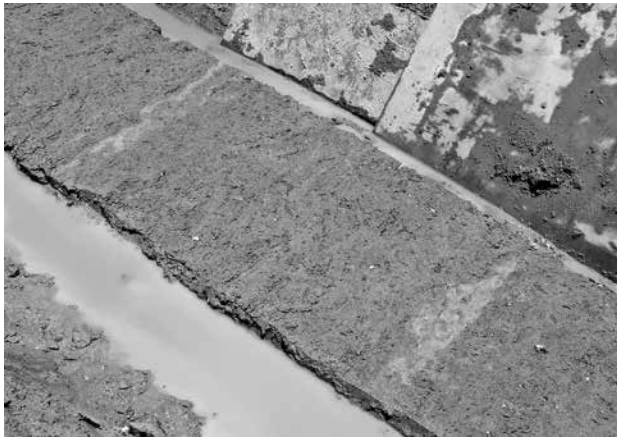
3. 第5-1層下面 南側
全景 (南西から)



1. 172溝 断面 (東から)



2. 174段差 断面 (東から)



3. 167耕作溝群 検出状況 (南西から)



4. 177溝 断面 (西から)



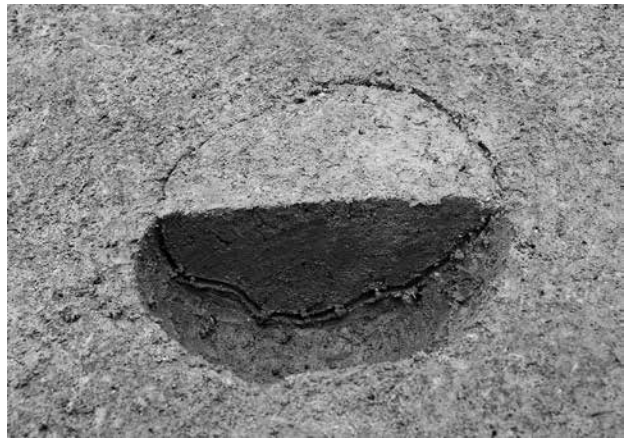
5. 178ピット 断面 (南から)



6. 179高まり 断面 (南東から)



7. 180溝 断面 (南東から)



8. 169ピット 断面 (南西から)

図版 16

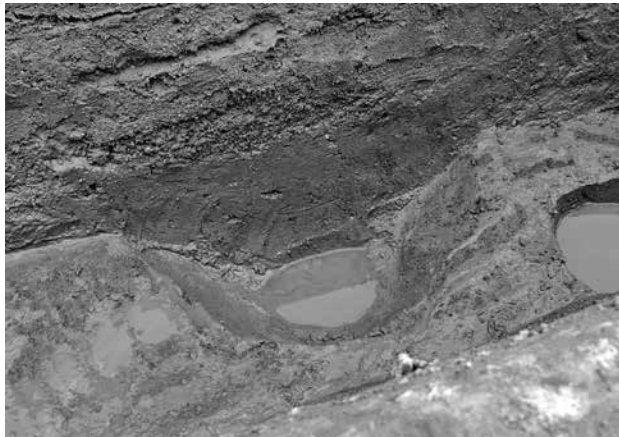
3区
第5-1層下面(第6-2層下面遺構(1-6)・4区
調査状況(7・8)



1. 第6-2層下面 北側 全景 (北東から)



2. 第6-2層下面 中央部 全景 (南西から)



3. 158ピット 断面 (北西から)



4. 170変形構造 検出状況 (北東から)



5. 4区 作業風景 (南西から)



6. 4区 最終掘削状況 (南西から)

1. 第2-1層下面 全景
(東から)



2. 第4-2層下面 全景
(北東から)



3. 第6-2層下面 全景
(東から)



図版 18

5区
第2-1層下面
第6-2層下面
遺構



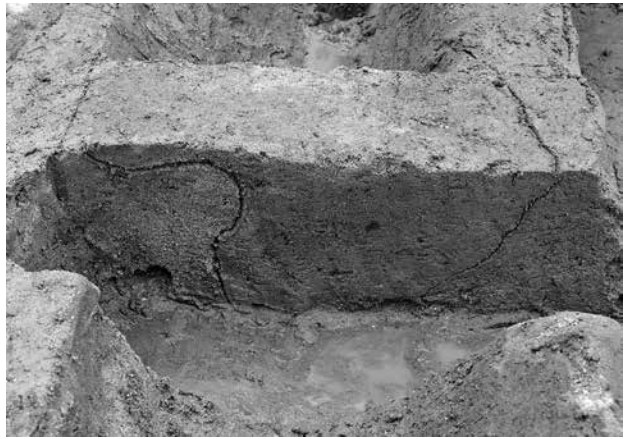
1. 161溝 検出状況 (北東から)



2. 161溝 断面 (東から)



3. 162土坑 断面 (南から)



4. 163溝 断面 (東から)



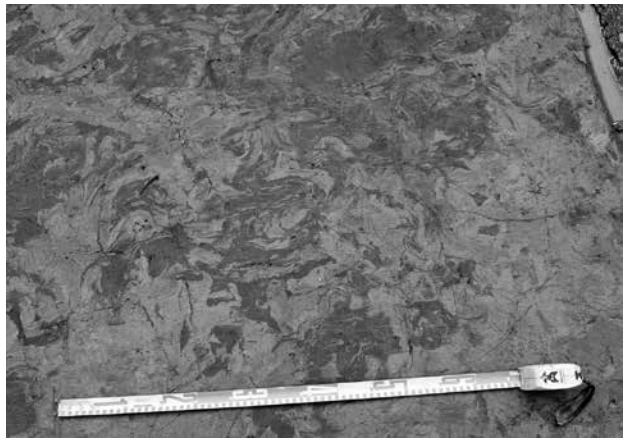
5. 164落ち込み 断面 (南東から)



6. 第3-2層下面 全景 (北東から)



7. 165段差 断面 (北東から)



8. 171変形構造 検出状況 (東から)



1. 第3-1層下面 全景
(南西から)



2. 第3-3-1層下面 全景
(南西から)



3. 第5層下面 全景
(南西から)

図版 20

6区
第3-1層下面
第6-1層下面遺構



1. 187足跡群 検出状況 (西から)



2. 188足跡群 検出状況 (南東から)



3. 188足跡群 細部拡大 (南から)



4. 第3-2層下面 全景 (南西から)



5. 189段差 断面 (西から)



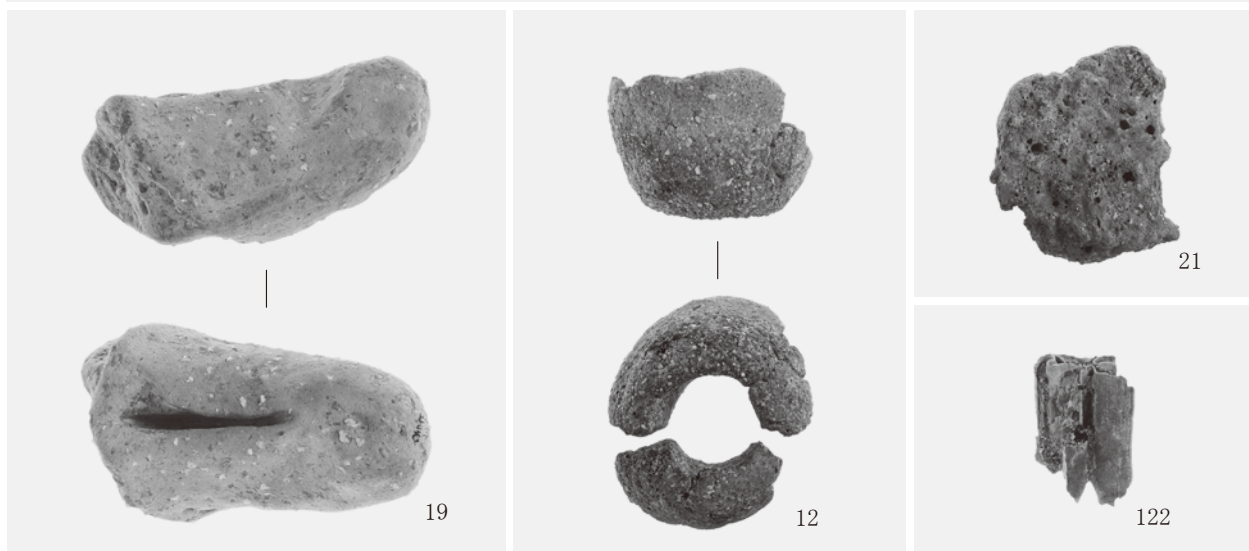
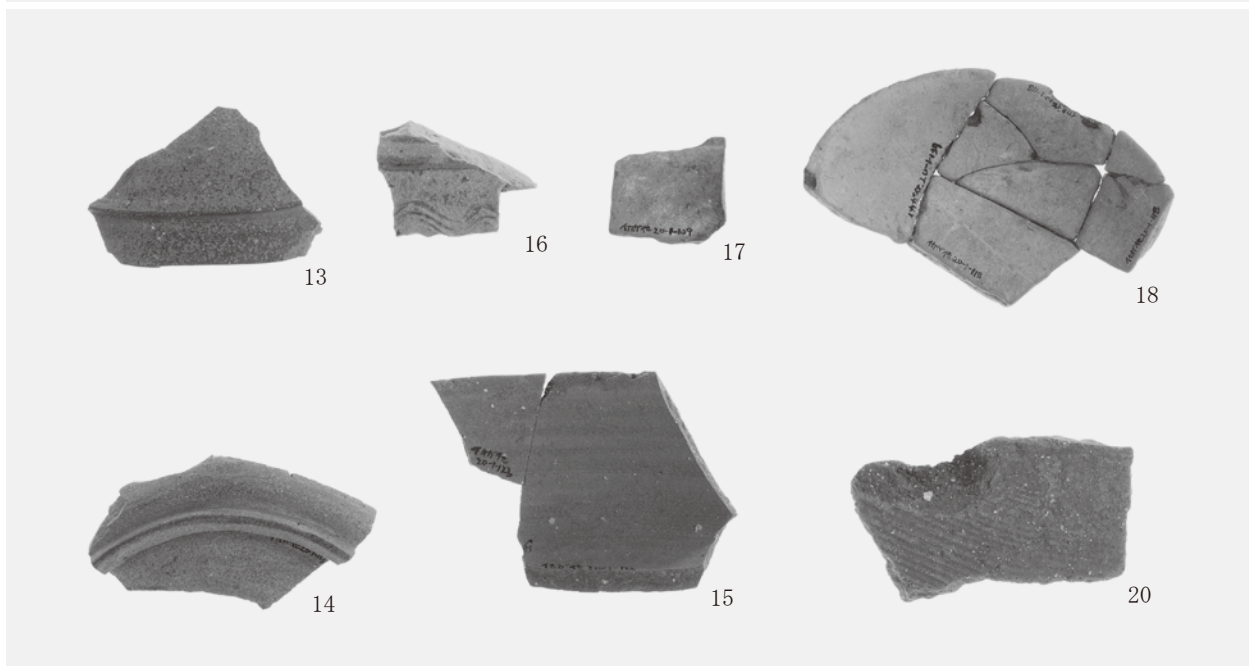
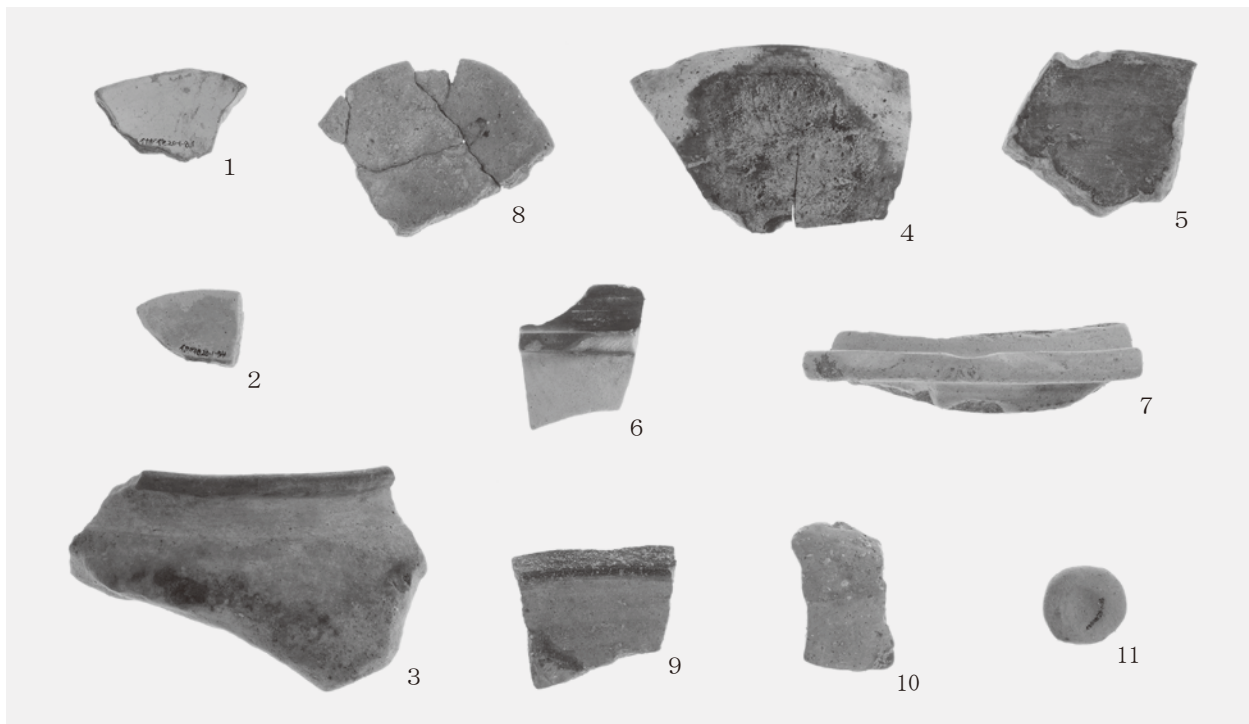
6. 192落ち込み 断面 (南西から)



7. 第4-1層下面 全景 (南東から)

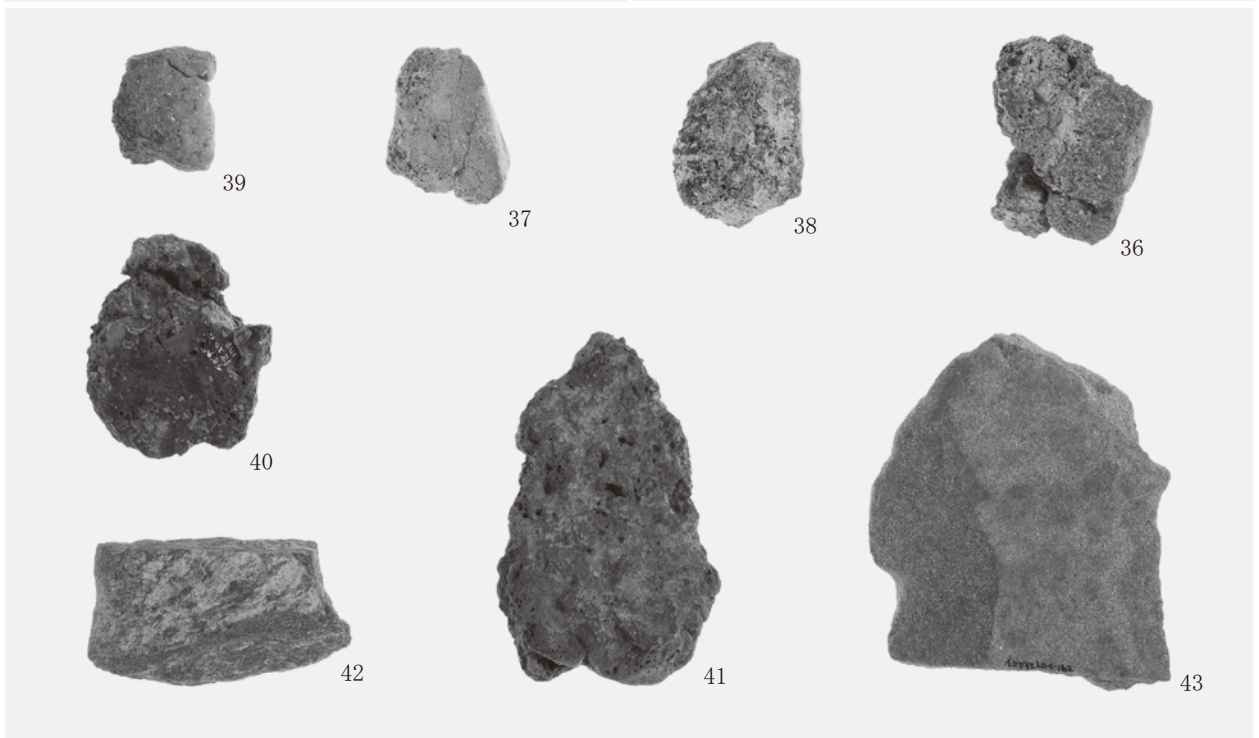
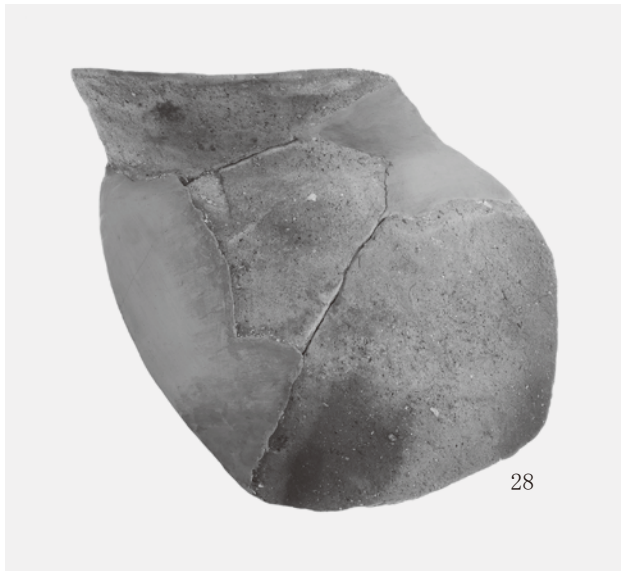
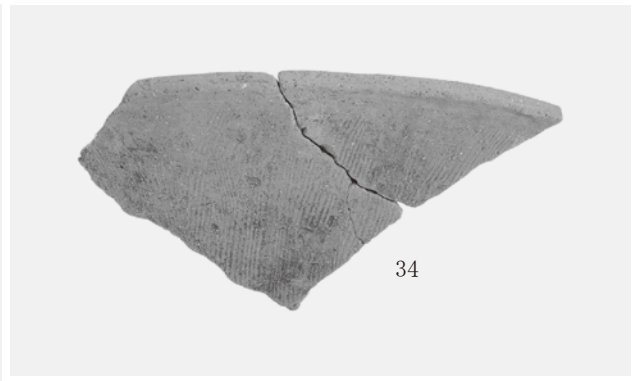
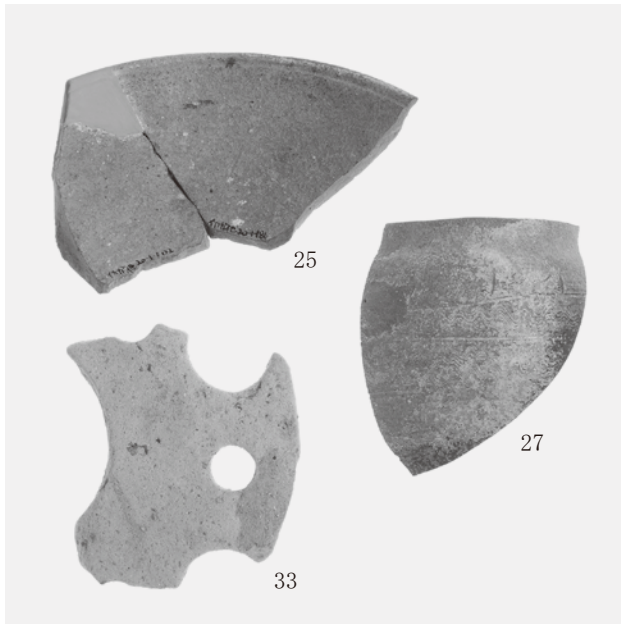


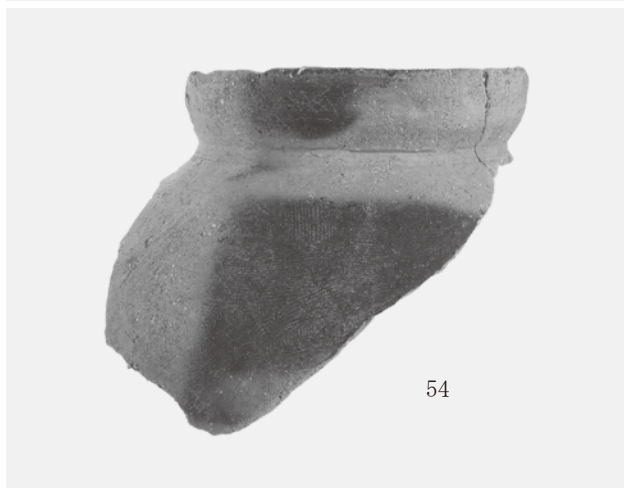
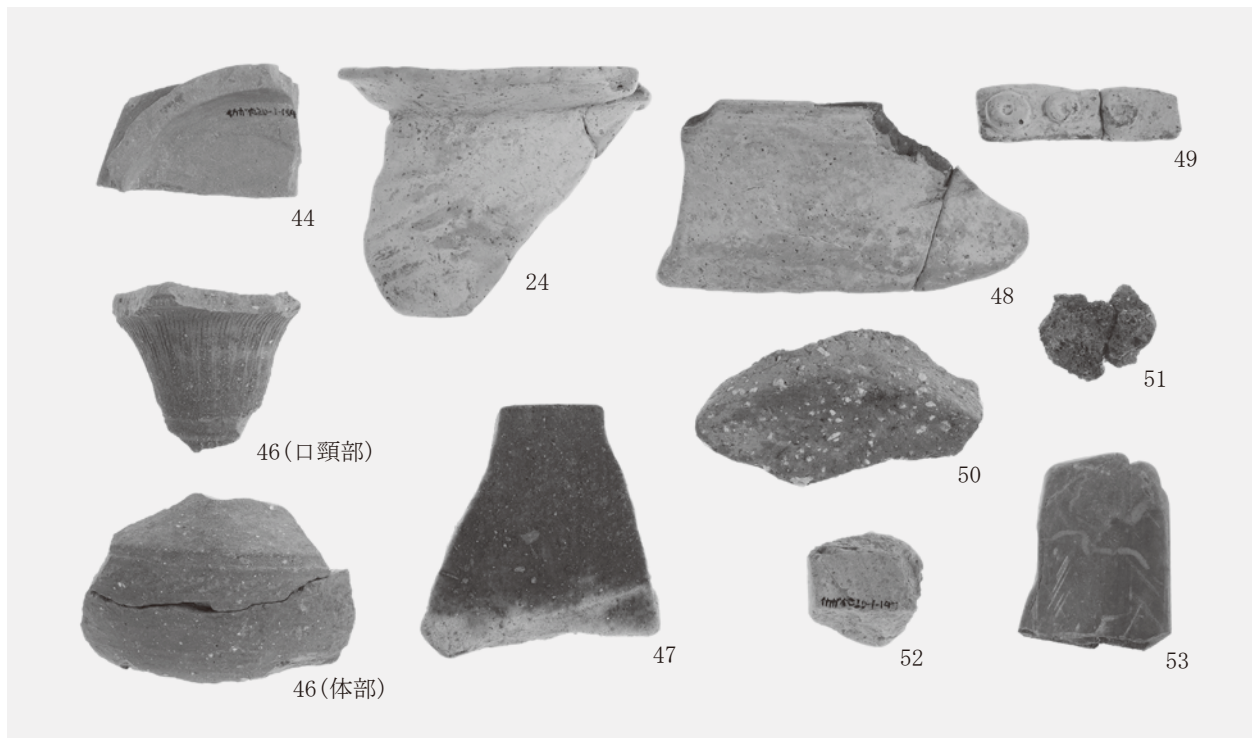
8. 第6-1層下面 全景 (南西から)



图版 22

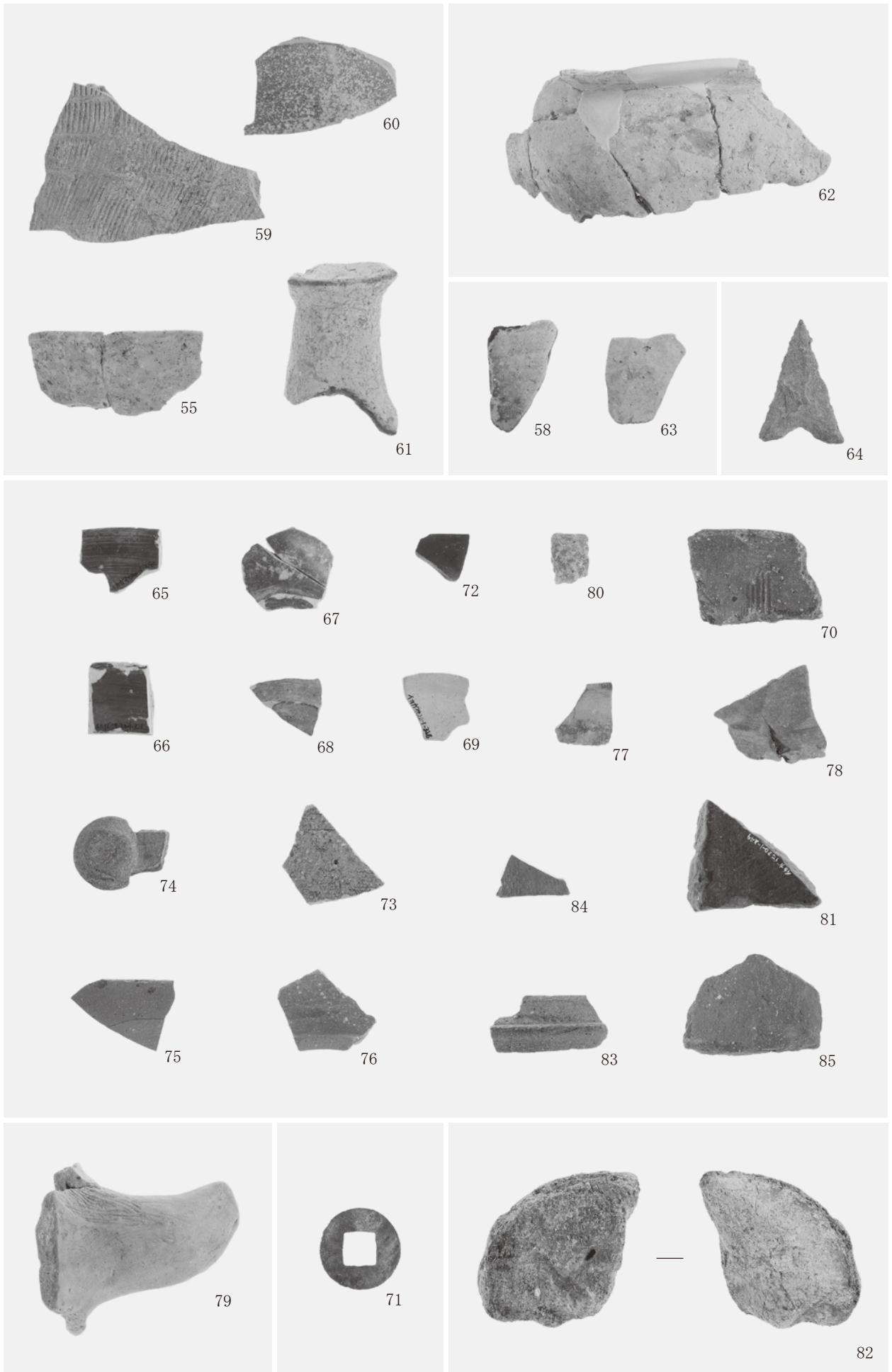
2区出土遺物(2)

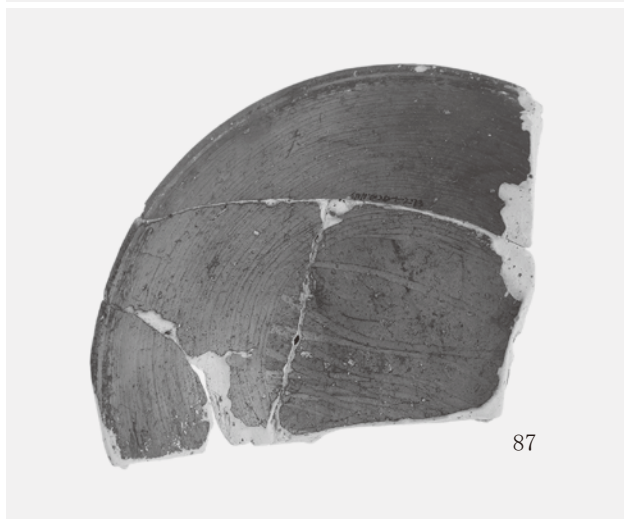
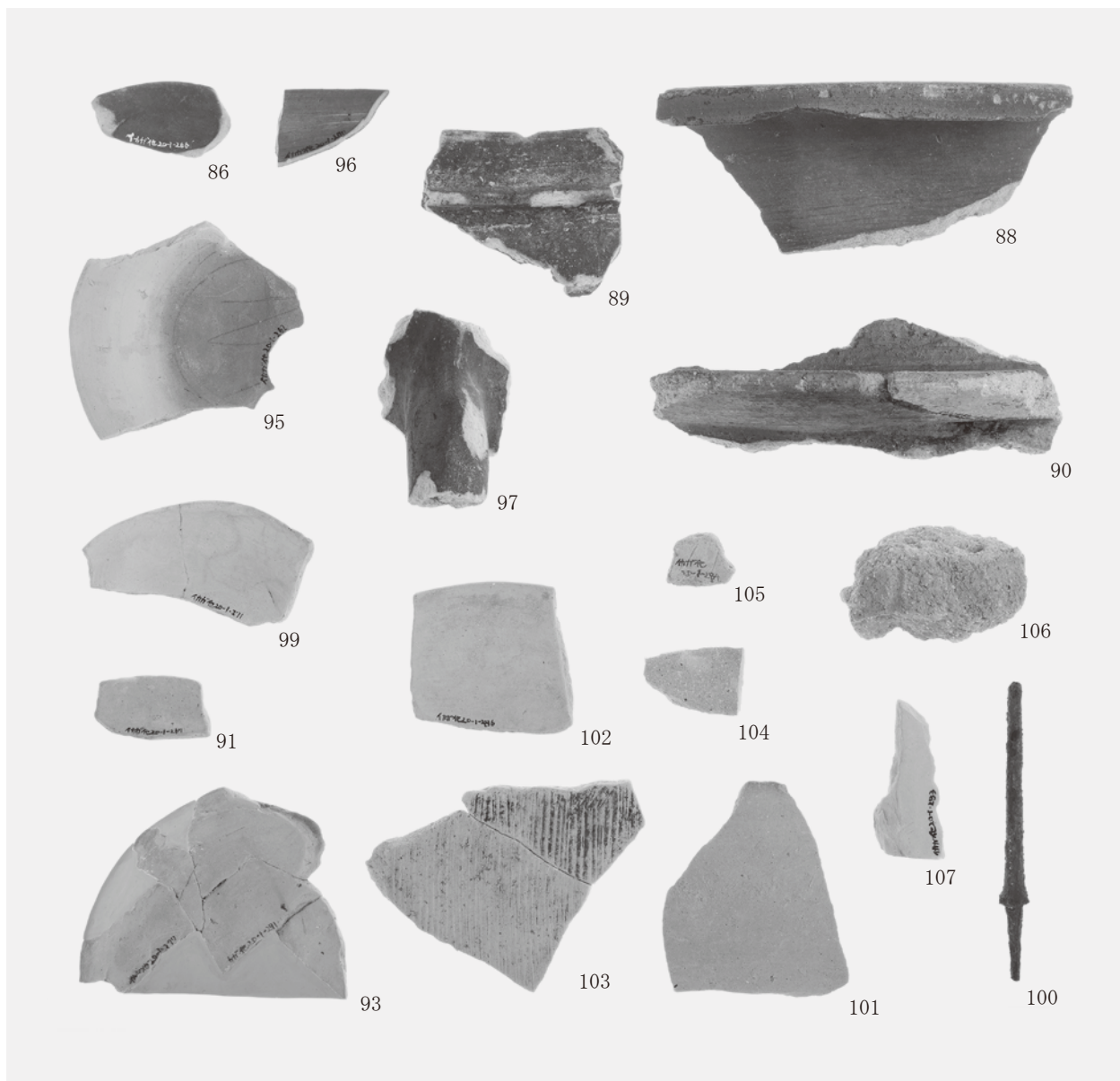




图版 24

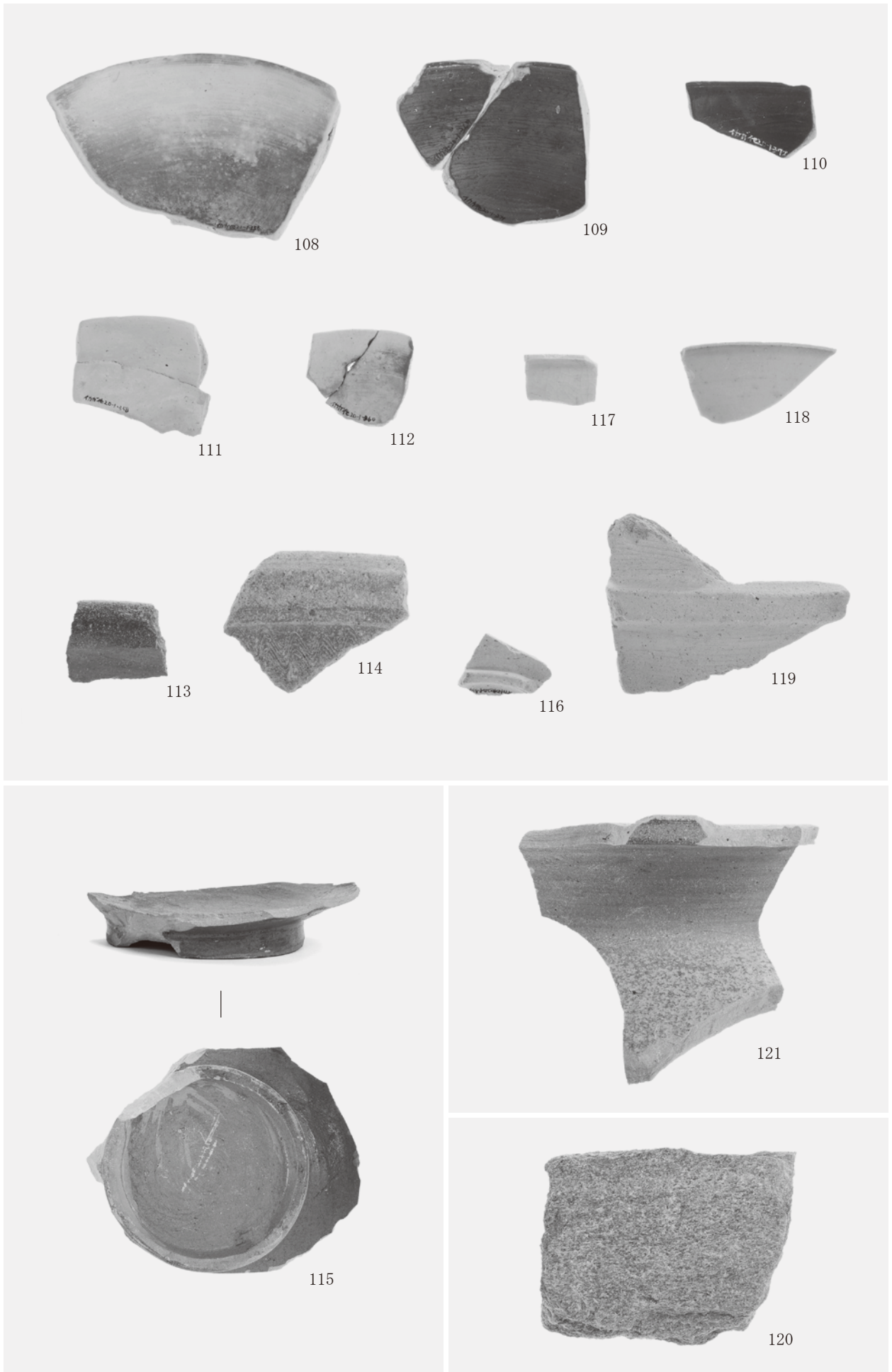
2区出土遺物(4)・3区出土遺物





图版 26

6
区
出
土
遗
物



報告書抄録

ふりがな	いかがいせき・いかがこふんぐん						
書名	伊加賀遺跡・伊加賀古墳群						
副書名	京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第 318 集						
編著者名	河本純一						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072 - 299 - 8791						
発行年月日	2022 年 6 月 30 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
いかがいせき 伊加賀遺跡・ いかがこふんぐん 伊加賀古墳群	ひらかたし 枚方市 いかがこぶきちょう 伊加賀寿町・ いかがさかえまち 伊加賀栄町	27210	86	北緯 34° 48' 22" 東経 135° 38' 17"	20201102 ～ 20210831	948 m ²	京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
伊加賀遺跡・ 伊加賀古墳群	集落 生産	古墳時代	溝・土坑・柱穴・ピット・落ち込み・地震による変形構造		須恵器・土師器・製塩土器・埴輪・羽口・鉄滓・砥石		
		飛鳥・奈良時代	掘立柱建物・溝・土坑・炭溜まり・柱穴・ピット・落ち込み		須恵器・土師器・製塩土器		
		平安時代	畦畔・段差・溝・炭溜まり・ピット・落ち込み		黒色土器・須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器		
		中世	畦畔・段差・足跡群・耕作溝・溝・土坑・ピット・落ち込み		瓦器・瓦質土器・須恵器・土師器・陶器・白磁・瓦		
要約	古墳時代に遡りうる鉄滓や鞆の羽口などの鍛冶に関連する遺物が出土したほか、飛鳥時代と考えられる掘立柱建物、中世の耕作に伴う畦畔や溝などの遺構を検出した。伊加賀遺跡・伊加賀古墳群の遺跡範囲の西側、比較的標高の低い地点においても、以上のような各時代における人々の様々な営みを確認することができた。						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第318集

伊加賀遺跡・伊加賀古墳群

京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2022年6月30日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地